

小松市
園町遺跡

小松市
園町遺跡

2025

石川県
（公財）石川県埋蔵文化財センター

2025

石川県教育委員会
（公財）石川県埋蔵文化財センター

その 町 遺 跡
園 まち

2 0 2 5

石 川 県 教 育 委 員 会
(公財)石川県埋蔵文化財センター



I 区完掘状況（上段：第 1 面 下段：第 2 面・南東から）



例 言

- 1 本書は園町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は小松市園町地内である
- 3 調査原因は北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）で、同事業を所管する独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成29（2017）年度から令和6（2024）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部大阪支社が負担した。
- 6 現地調査は平成29（2017）年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者（当時）は下記のとおりである。

期 間 平成29年4月12日～同年7月31日
面 積 1,280㎡
担当課 調査部 県関係調査グループ
担当者 白田義彦（課長補佐）、増永祐介（嘱託調査員）
- 7 現地発掘調査作業および空中写真測量図化作業等に係る関連作業の支援を、平成29年度に株式会社利水社に委託し、県埋文センターの監理のもと実施した。担当者は以下のとおりである。

現場代理人 望月麻佑
- 8 出土品整理は令和元年度～令和2年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 9 自然科学分析は令和3年度にパリオ・サーヴェイ（株）に委託して実施し、その成果を第4章に記した。
- 10 報告書の作成・編集・刊行は令和4年度～令和6年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。原稿執筆は和田龍介（県関係調査グループ主幹）、久田正弘（県関係調査グループ主幹）、藤田邦雄（県関係調査グループ嘱託調査員）、増永祐介（県関係調査グループ嘱託調査員・当時）が担当した。執筆分担は下記のとおりであり、編集は和田が行った。

第1章・2章 増永・和田、第3章 和田・藤田、第4章 パリオ・サーヴェイ（株）
第5章 和田・久田・藤田
- 11 調査には下記の機関・個人の協力を得た（五十音順、敬称略）。

株式会社アルカ、株式会社太陽測地社、株式会社文化財サービス、株式会社吉田建設、小松市教育委員会、小松市埋蔵文化財センター、小岩直人、下濱貴子、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、中塚武夫、能代修一、橋本技術株式会社、山本直人
- 12 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 遺構実測図その他の方位は座標北であり、座標は平成14年度国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。なお、実測番号との対応については、出土遺物観察表に記載している。
 - (4) 遺構の名称は、下記の略記号に番号（算用数字）を付し表記した。

SB：掘立柱建物、SI：竪穴建物、SE：井戸、SK：土坑、SD：溝、P：柱穴・小穴、
SX：その他、SZ：方形周溝墓
 - (5) 引用・参考文献は巻末に一括して記載した。なお、第4章のみ章末に付した。

目 次

第1章 経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	3
第3節 出土品整理の経過	6
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 第1面の概要	22
第3節 I区第1面の調査成果	22
第4節 II区第1面の調査成果	60
第5節 III区第1面の調査成果	74
第6節 IV区第1面の調査成果	117
第7節 第2面の概要	143
第8節 I区第2面の遺構・遺物	143
第9節 II区第2面の遺構・遺物	168
第10節 III区第2面の遺構・遺物	195
第11節 IV区第2面の遺構・遺物	232
第4章 自然科学的分析	289
第1節 分析の概要	289
第2節 自然科学的分析の結果	289
第5章 総 括	306
第1節 遺構の変遷（第1面：中世～近世）	306
第2節 遺構の変遷（第2面：弥生時代）	309

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	北陸新幹線（金沢・福井間）概略図	1	第47図	第1面出土遺物（26）（ $S=1/1 \cdot 1/2 \cdot 1/3$ ）	57
第2図	分布調査箇所と柱状断面図	2	第48図	第1面出土遺物（27）（ $S=1/1 \cdot 1/2 \cdot 1/3$ ）	58
第3図	調査地位置図	4	第49図	第1面出土遺物（28）（ $S=1/1 \cdot 1/2$ ）	59
第4図	遺跡の位置	7	第50図	Ⅱ区第1面 掘立柱建物（ $S=1/60 \cdot 1/80$ ）	61
第5図	周辺の遺跡	8	第51図	Ⅱ区第1面 井戸・土坑・溝（ $S=1/60$ ）	62
第6図	第1面遺構平面図①（ $S=1/100$ ）	12	第52図	Ⅱ区第1面 溝（ $S=1/60 \cdot 1/80$ ）	63
第7図	第1面遺構平面図②（ $S=1/100$ ）	13	第53図	Ⅱ区第1面 溝（2）（ $S=1/60 \cdot 1/80$ ）	64
第8図	第1面遺構平面図③（ $S=1/100$ ）	14	第54図	第1面出土遺物（29）（ $S=1/2 \cdot 1/3 \cdot 1/10$ ）	65
第9図	第1面遺構平面図④（ $S=1/100$ ）	15	第55図	第1面出土遺物（30）（ $S=1/6 \cdot 1/8$ ）	66
第10図	第1面遺構平面図⑤（ $S=1/100$ ）	16	第56図	第1面出土遺物（31）（ $S=1/2 \cdot 1/3$ ）	67
第11図	第2面遺構平面図①（ $S=1/100$ ）	17	第57図	第1面出土遺物（32）（ $S=1/3$ ）	68
第12図	第2面遺構平面図②（ $S=1/100$ ）	18	第58図	第1面出土遺物（33）（ $S=1/3$ ）	69
第13図	第2面遺構平面図③（ $S=1/100$ ）	19	第59図	第1面出土遺物（34）（ $S=1/3$ ）	70
第14図	第2面遺構平面図④（ $S=1/100$ ）	20	第60図	第1面出土遺物（35）（ $S=1/3$ ）	71
第15図	第2面遺構平面図⑤（ $S=1/100$ ）	21	第61図	第1面出土遺物（36）（ $S=1/3$ ）	72
第16図	Ⅰ区第1面 掘立柱建物（1）（ $S=1/60 \cdot 1/80$ ）	26	第62図	第1面出土遺物（37）（ $S=1/1 \cdot 1/3$ ）	73
第17図	Ⅰ区第1面 掘立柱建物（2）（ $S=1/60 \cdot 1/80$ ）	27	第63図	Ⅲ区第1面 竪穴建物・井戸（ $S=1/60$ ）	76
第18図	Ⅰ区第1面 竪穴建物・井戸（ $S=1/60$ ）	28	第64図	Ⅲ区第1面 井戸・土坑（ $S=1/60$ ）	77
第19図	Ⅰ区第1面 井戸・土坑（ $S=1/60$ ）	29	第65図	Ⅲ区第1面 土坑・溝（ $S=1/60$ ）	78
第20図	第1面出土遺物（1）（ $S=1/2 \cdot 1/3$ ）	30	第66図	Ⅲ区第1面 溝（ $S=1/60 \cdot 1/80$ ）	79
第21図	第1面出土遺物（2）（ $S=1/2 \cdot 1/3$ ）	31	第67図	第1面出土遺物（38）（ $S=1/2 \cdot 1/3$ ）	80
第22図	Ⅰ区第1面出土遺物（3）（ $S=1/6$ ）	32	第68図	第1面出土遺物（39）（ $S=1/3 \cdot 1/8$ ）	81
第23図	第1面出土遺物（4）（ $S=1/6$ ）	33	第69図	第1面出土遺物（40）（ $S=1/6$ ）	82
第24図	第1面出土遺物（5）（ $S=1/6$ ）	34	第70図	第1面出土遺物（41）（ $S=1/3$ ）	83
第25図	第1面出土遺物（6）（ $S=1/3 \cdot 1/6$ ）	35	第71図	第1面出土遺物（42）（ $S=1/6$ ）	84
第26図	第1面出土遺物（7）（ $S=1/6$ ）	36	第72図	第1面出土遺物（43）（ $S=1/6$ ）	85
第27図	第1面出土遺物（8）（ $S=1/6$ ）	37	第73図	第1面出土遺物（44）（ $S=1/6$ ）	86
第28図	第1面出土遺物（9）（ $S=1/6$ ）	38	第74図	第1面出土遺物（45）（ $S=1/6$ ）	87
第29図	第1面出土遺物（10）（ $S=1/3$ ）	39	第75図	第1面出土遺物（46）（ $S=1/6$ ）	88
第30図	第1面出土遺物（11）（ $S=1/6$ ）	40	第76図	第1面出土遺物（47）（ $S=1/6$ ）	89
第31図	第1面出土遺物（12）（ $S=1/6$ ）	41	第77図	第1面出土遺物（48）（ $S=1/6$ ）	90
第32図	第1面出土遺物（13）（ $S=1/6$ ）	42	第78図	第1面出土遺物（49）（ $S=1/6$ ）	91
第33図	第1面出土遺物（14）（ $S=1/6$ ）	43	第79図	第1面出土遺物（50）（ $S=1/6$ ）	92
第34図	第1面出土遺物（15）（ $S=1/6$ ）	44	第80図	第1面出土遺物（51）（ $S=1/6$ ）	93
第35図	第1面出土遺物（16）（ $S=1/6$ ）	45	第81図	第1面出土遺物（52）（ $S=1/6$ ）	94
第36図	第1面出土遺物（17）（ $S=1/2 \cdot 1/3$ ）	46	第82図	第1面出土遺物（53）（ $S=1/6$ ）	95
第37図	第1面出土遺物（18）（ $S=1/3$ ）	47	第83図	第1面出土遺物（54）（ $S=1/6$ ）	96
第38図	Ⅰ区第1面 SD36（ $S=1/80$ ）	48	第84図	第1面出土遺物（55）（ $S=1/6$ ）	97
第39図	Ⅰ区第1面 SD36土層注記	49	第85図	第1面出土遺物（56）（ $S=1/6$ ）	98
第40図	第1面出土遺物（19）（ $S=1/3$ ）	50	第86図	第1面出土遺物（57）（ $S=1/6$ ）	99
第41図	第1面出土遺物（20）（ $S=1/2 \cdot 1/3$ ）	51	第87図	第1面出土遺物（58）（ $S=1/6$ ）	100
第42図	第1面出土遺物（21）（ $S=1/3 \cdot 1/6$ ）	52	第88図	第1面出土遺物（59）（ $S=1/3$ ）	101
第43図	第1面出土遺物（22）（ $S=1/3$ ）	53	第89図	第1面出土遺物（60）（ $S=1/6$ ）	102
第44図	第1面出土遺物（23）（ $S=1/3$ ）	54	第90図	第1面出土遺物（61）（ $S=1/3 \cdot 1/6$ ）	103
第45図	第1面出土遺物（24）（ $S=1/3$ ）	55	第91図	第1面出土遺物（62）（ $S=1/3$ ）	104
第46図	第1面出土遺物（25）（ $S=1/3$ ）	56	第92図	第1面出土遺物（63）（ $S=1/3$ ）	105

第93図	第1面出土遺物 (64) (S=1/3)	106	第140図	第2面出土遺物 (11) (S=1/3)	157
第94図	第1面出土遺物 (65) (S=1/3)	107	第141図	第2面出土遺物 (12) (S=1/3)	158
第95図	第1面出土遺物 (66) (S=1/3)	108	第142図	第2面出土遺物 (13) (S=1/3)	159
第96図	第1面出土遺物 (67) (S=1/3)	109	第143図	第2面出土遺物 (14) (S=1/3)	160
第97図	第1面出土遺物 (68) (S=1/3)	110	第144図	第2面出土遺物 (15) (S=1/3)	161
第98図	第1面出土遺物 (69) (S=1/3)	111	第145図	第2面出土遺物 (16) (S=1/3)	162
第99図	第1面出土遺物 (70) (S=1/2・1/3)	112	第146図	第2面出土遺物 (17) (S=1/1・1/3)	163
第100図	第1面出土遺物 (71) (S=1/1・1/2)	113	第147図	第2面出土遺物 (18) (S=1/1・1/2・1/3)	164
第101図	第1面出土遺物 (72) (S=1/1)	114	第148図	第2面出土遺物 (19) (S=1/3)	165
第102図	第1面出土遺物 (73) (S=1/1)	115	第149図	第2面出土遺物 (20) (S=1/3)	166
第103図	第1面出土遺物 (74) (S=1/3)	116	第150図	第2面出土遺物 (21) (S=1/3)	167
第104図	Ⅳ区第1面 掘立柱建物 (1) (S=1/60・1/80)	120	第151図	Ⅱ区第2面 SD2・旧河道 (S=1/60・1/80) ..	169
第105図	Ⅳ区第1面 掘立柱建物 (2) (S=1/60・1/80)	121	第152図	Ⅱ区第2面 SD2遺物出土状況 (S=1/6・1/30)	170
第106図	Ⅳ区第1面 竪穴建物・井戸 (S=1/60)	122	第153図	第2面出土遺物 (22) (S=1/3)	171
第107図	Ⅳ区第1面 土坑 (S=1/60)	123	第154図	第2面出土遺物 (23) (S=1/3)	172
第108図	Ⅳ区第1面 土坑・溝 (S=1/60)	124	第155図	第2面出土遺物 (24) (S=1/3)	173
第109図	第1面出土遺物 (75) (S=1/3)	125	第156図	第2面出土遺物 (25) (S=1/3)	174
第110図	第1面出土遺物 (76) (S=1/2・1/3)	126	第157図	第2面出土遺物 (26) (S=1/3)	175
第111図	第1面出土遺物 (77) (S=1/3・1/6)	127	第158図	第2面出土遺物 (27) (S=1/3)	176
第112図	第1面出土遺物 (78) (S=1/6)	128	第159図	第2面出土遺物 (28) (S=1/3)	177
第113図	第1面出土遺物 (79) (S=1/3)	129	第160図	第2面出土遺物 (29) (S=1/3)	178
第114図	第1面出土遺物 (80) (S=1/6)	130	第161図	第2面出土遺物 (30) (S=1/3)	179
第115図	第1面出土遺物 (81) (S=1/6)	131	第162図	第2面出土遺物 (31) (S=1/3)	180
第116図	第1面出土遺物 (82) (S=1/3・1/8)	132	第163図	第2面出土遺物 (32) (S=1/3)	181
第117図	第1面出土遺物 (83) (S=1/6)	133	第164図	第2面出土遺物 (33) (S=1/3)	182
第118図	第1面出土遺物 (84) (S=1/2・1/3)	134	第165図	第2面出土遺物 (34) (S=1/3)	183
第119図	第1面出土遺物 (85) (S=1/2・1/3)	135	第166図	第2面出土遺物 (35) (S=1/3)	184
第120図	第1面出土遺物 (86) (S=1/2・1/3)	136	第167図	第2面出土遺物 (36) (S=1/3)	185
第121図	第1面出土遺物 (87) (S=1/3)	137	第168図	第2面出土遺物 (37) (S=1/3)	186
第122図	第1面出土遺物 (88) (S=1/3)	138	第169図	第2面出土遺物 (38) (S=1/3)	187
第123図	第1面出土遺物 (89) (S=1/3)	139	第170図	第2面出土遺物 (39) (S=1/3)	188
第124図	第1面出土遺物 (90) (S=1/2・1/3)	140	第171図	第2面出土遺物 (40) (S=1/3)	189
第125図	第1面出土遺物 (91) (S=1/1・1/2)	141	第172図	第2面出土遺物 (41) (S=1/3)	190
第126図	第1面出土遺物 (92) (S=1/1・1/2・1/3)	142	第173図	第2面出土遺物 (42) (S=1/1)	191
第127図	石川県の弥生時代編年	143	第174図	第2面出土遺物 (43) (S=1/1)	192
第128図	Ⅰ区第2面 環濠・溝 (S=1/60)	145	第175図	第2面出土遺物 (44) (S=1/1・1/3)	193
第129図	Ⅰ区第2面 環濠・溝 (2) (S=1/60)	146	第176図	第2面出土遺物 (45) (S=1/3)	194
第130図	第2面出土遺物 (1) (S=1/3)	147	第177図	Ⅲ区第2面 旧河道・溝 (S=1/80)	197
第131図	第2面出土遺物 (2) (S=1/3)	148	第178図	Ⅲ区第2面 旧河道・溝・土坑 (S=1/60)	198
第132図	第2面出土遺物 (3) (S=1/3)	149	第179図	第2面出土遺物 (46) (S=1/3)	199
第133図	第2面出土遺物 (4) (S=1/3)	150	第180図	第2面出土遺物 (47) (S=1/3)	200
第134図	第2面出土遺物 (5) (S=1/3)	151	第181図	第2面出土遺物 (48) (S=1/3)	201
第135図	第2面出土遺物 (6) (S=1/3)	152	第182図	第2面出土遺物 (49) (S=1/3)	202
第136図	第2面出土遺物 (7) (S=1/3)	153	第183図	第2面出土遺物 (50) (S=1/3)	203
第137図	第2面出土遺物 (8) (S=1/3)	154	第184図	第2面出土遺物 (51) (S=1/1・1/3)	204
第138図	第2面出土遺物 (9) (S=1/3)	155	第185図	第2面出土遺物 (52) (S=1/1・1/2)	205
第139図	第2面出土遺物 (10) (S=1/3)	156	第186図	第2面出土遺物 (53) (S=1/2・1/3)	206
			第187図	第2面出土遺物 (54) (S=1/1)	207

第188図	第2面出土遺物 (55) (S=1/1)	208	第222図	第2面出土遺物 (83) (S=1/3)	244
第189図	第2面出土遺物 (56) (S=1/1・1/3)	209	第223図	第2面出土遺物 (84) (S=1/3)	245
第190図	第2面出土遺物 (57) (S=1/3)	210	第224図	第2面出土遺物 (85) (S=1/3)	246
第191図	第2面出土遺物 (58) (S=1/3)	211	第225図	第2面出土遺物 (86) (S=1/1・1/2・1/3)	247
第192図	第2面出土遺物 (59) (S=1/3・1/6)	212	第226図	第2面出土遺物 (87) (S=1/1・1/2・1/3)	248
第193図	第2面出土遺物 (60) (S=1/3)	213	第227図	第2面出土遺物 (88) (S=1/1)	249
第194図	第2面出土遺物 (61) (S=1/3)	214	第228図	第2面出土遺物 (89) (S=1/1・1/3・1/6)	250
第195図	第2面出土遺物 (62) (S=1/3)	215	第229図	第2面出土遺物 (90) (S=1/3)	251
第196図	第2面出土遺物 (63) (S=1/3)	216	第230図	第2面出土遺物 (91) (S=1/3)	252
第197図	第2面出土遺物 (64) (S=1/3)	217	第231図	第2面出土遺物 (92) (S=1/3)	253
第198図	第2面出土遺物 (65) (S=1/3)	218	第232図	第2面出土遺物 (93) (S=1/3)	254
第199図	第2面出土遺物 (66) (S=1/3)	219	第233図	第2面出土遺物 (94) (S=1/3)	255
第200図	第2面出土遺物 (67) (S=1/3)	220	第234図	第2面出土遺物 (95) (S=1/3)	256
第201図	第2面出土遺物 (68) (S=1/3)	221	第235図	第2面出土遺物 (96) (S=1/3)	257
第202図	第2面出土遺物 (69) (S=1/3)	222	第236図	第2面出土遺物 (97) (S=1/3)	258
第203図	第2面出土遺物 (70) (S=1/3)	223	第237図	第2面出土遺物 (98) (S=1/3)	259
第204図	第2面出土遺物 (71) (S=1/3)	224	第238図	第2面出土遺物 (99) (S=1/3)	260
第205図	第2面出土遺物 (72) (S=1/3)	225	第239図	第2面出土遺物 (100) (S=1/1・1/2・1/3)	261
第206図	第2面出土遺物 (73) (S=1/3)	226	第240図	第2面出土遺物 (101) (S=1/3)	262
第207図	第2面出土遺物 (74) (S=1/3)	227	第241図	第2面出土遺物 (102) (S=1/1・1/3)	263
第208図	第2面出土遺物 (75) (S=1/1・1/2)	228	第242図	第2面出土遺物 (103) (S=1/3)	264
第209図	第2面出土遺物 (76) (S=1/1・1/3)	229	第243図	第2面出土遺物 (104) (S=1/1・1/3)	265
第210図	第2面出土遺物 (77) (S=1/1・1/2)	230	第244図	第2面出土遺物 (105) (S=1/1・1/3・1/6)	266
第211図	第2面出土遺物 (78) (S=1/1・1/3)	231	第245図	花粉化石群集	294
第212図	Ⅳ区第2面 SD39 (S=1/60・1/80)	234	第246図	木材	295
第213図	Ⅳ区第2面 SD39・SD42 (S=1/60・1/80)	235	第247図	種実遺体	296
第214図	Ⅳ区第2面 SZ1 (S=1/60・1/80)	236	第248図	花粉化石	297
第215図	Ⅳ区第2面 SZ1・SZ2 (S=1/60・1/80)	237	第249図	岩石・鉱物	302
第216図	Ⅳ区第2面 SZ3他 (S=1/60・1/80)	238	第250図	ウイグルマッチング結果	304
第217図	Ⅳ区第2面 溝 (S=1/60・1/80)	239	第251図	土師器皿の分類・変遷案	307
第218図	第2面出土遺物 (79) (S=1/3)	240	第252図	第1面遺構変遷案 (S=1/500)	308
第219図	第2面出土遺物 (80) (S=1/3)	241	第253図	第2面環濠等の変遷図 (S=1/500)	310
第220図	第2面出土遺物 (81) (S=1/3)	242	第254図	弥生中期の土器1	312
第221図	第2面出土遺物 (82) (S=1/3)	243	第255図	弥生中期の土器2	313

表 目 次

第1表	調査の体制	6	第8表	時期別・器種別の種類構成	290
第2表	周辺遺跡一覧	9	第9表	種実同定結果	292
第3表	第1面土器観察表	267	第10表	花粉分析結果	293
第4表	第2面土器観察表	274	第11表	石質同定（肉眼鑑定）結果	298
第5表	石製品観察表	285	第12表	放射性炭素年代測定結果	303
第6表	木製品観察表	287	第13表	ウイグルマッチング結果	303
第7表	樹種同定結果	290			

図 版 目 次

巻頭図版	I 区完掘状況 (上段：第1面 下段：第2面・南東から)	Ⅲ区第2面	SD39土層断面
図版1	I 区第1面 SB1全景 (東から)	Ⅲ区第2面	旧河道
	I 区第1面 SI3	Ⅲ区第2面	SK18土層断面
	I 区第1面 SE3曲物出土状況	Ⅲ区南～Ⅳ区第2面	完掘状況 (北から)
	I 区第1面 SE5井戸側検出状況	図版9	Ⅳ区第2面 SD39土層断面
	I 区第1面 SK19土器出土状況	Ⅳ区第2面	SK44
図版2	I 区第1面 SD36全景 (南西から)	Ⅳ区第2面	完掘状況
	I 区第1面 SD36土層断面	Ⅳ区第2面	SD21土層断面
図版3	Ⅱ区第1面 SD1・9土層断面	Ⅳ区第2面	SD42土層断面
	Ⅱ区第1面 SD3・4	図版10	Ⅳ区第2面 SD46・SK44土筒断面
	Ⅲ区第1・2面 完掘状況 (南東から)	Ⅳ区第2面	SD51土層断面
	Ⅲ区第1面 SI2	Ⅳ区第2面	SD54土層断面
	Ⅲ区第1面 井戸 SE1・SK9	Ⅳ区第2面	SD55土層断面
図版4	Ⅲ区第1面 SE1	Ⅳ区第2面	方形周溝墓群 (東から)
	Ⅲ区第1面 SK5遺物出土状況	Ⅳ区第2面	方形周溝墓群 (西から)
	Ⅲ区第1面 SD5遺物出土状況	図版11	I 区 第1面出土遺物 (1)
	Ⅲ区第1面 SD5土層断面	図版12	I 区 第1面出土遺物 (2)
	Ⅳ区第1面 完掘状況 (北から)	図版13	I 区 第1面出土遺物 (3)
図版5	Ⅳ区第1面 SB6・7	図版14	I 区・Ⅱ区 第1面出土遺物
	Ⅳ区第1面 SI4土層断面	図版15	Ⅱ区・Ⅲ区 第1面出土遺物
	Ⅳ区第1面 SI4	図版16	Ⅲ区 第1面出土遺物 (2)
	Ⅳ区第1面 SE8土層断面	図版17	Ⅲ区 第1面出土遺物 (3)
	Ⅳ区第1面 SE8曲物出土状況	図版18	Ⅲ区・Ⅳ区 第1面出土遺物
	Ⅳ区第1面 SK30土層断面	図版19	Ⅳ区 第1面出土遺物 (2)
	Ⅳ区第1面 SD32・SK37土層断面	図版20	Ⅳ区 第1面出土遺物 (3)
	Ⅳ区第1面 SD38土層断面	図版21	I 区 第2面出土遺物 (1)
図版6	I 区第2面 SD35・37・44土層断面	図版22	I 区 第2面出土遺物 (2)
	Ⅱ区第2面 SD2土層断面	図版23	I 区・Ⅱ区 第2面出土遺物
	Ⅱ区第2面 完掘状況 (北から)	図版24	Ⅱ区 第2面出土遺物 (2)
	Ⅱ区第2面 旧河道土層断面	図版25	Ⅱ区・Ⅲ区 第2面出土遺物
	Ⅱ区第2面 SK3土層断面	図版26	Ⅲ区 第2面出土遺物 (2)
図版7	Ⅱ区第2面 SD2遺物出土状況	図版27	Ⅲ区 第2面出土遺物 (3)
	Ⅲ区第2面 SD11	図版28	Ⅲ区 第2面出土遺物 (4)
	Ⅲ区第2面 SD11土層断面	図版29	Ⅲ区・Ⅳ区 第2面出土遺物
図版8	Ⅲ区第2面 SD11土層断面	図版30	Ⅳ区 第2面出土遺物 (2)
		図版31	Ⅳ区 第2面出土遺物 (3)

第1章 経緯と経過

第1節 調査の経緯

園町遺跡の発掘調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）が所管する北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）の工事に係るもので、石川県教育委員会および公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）が実施した。

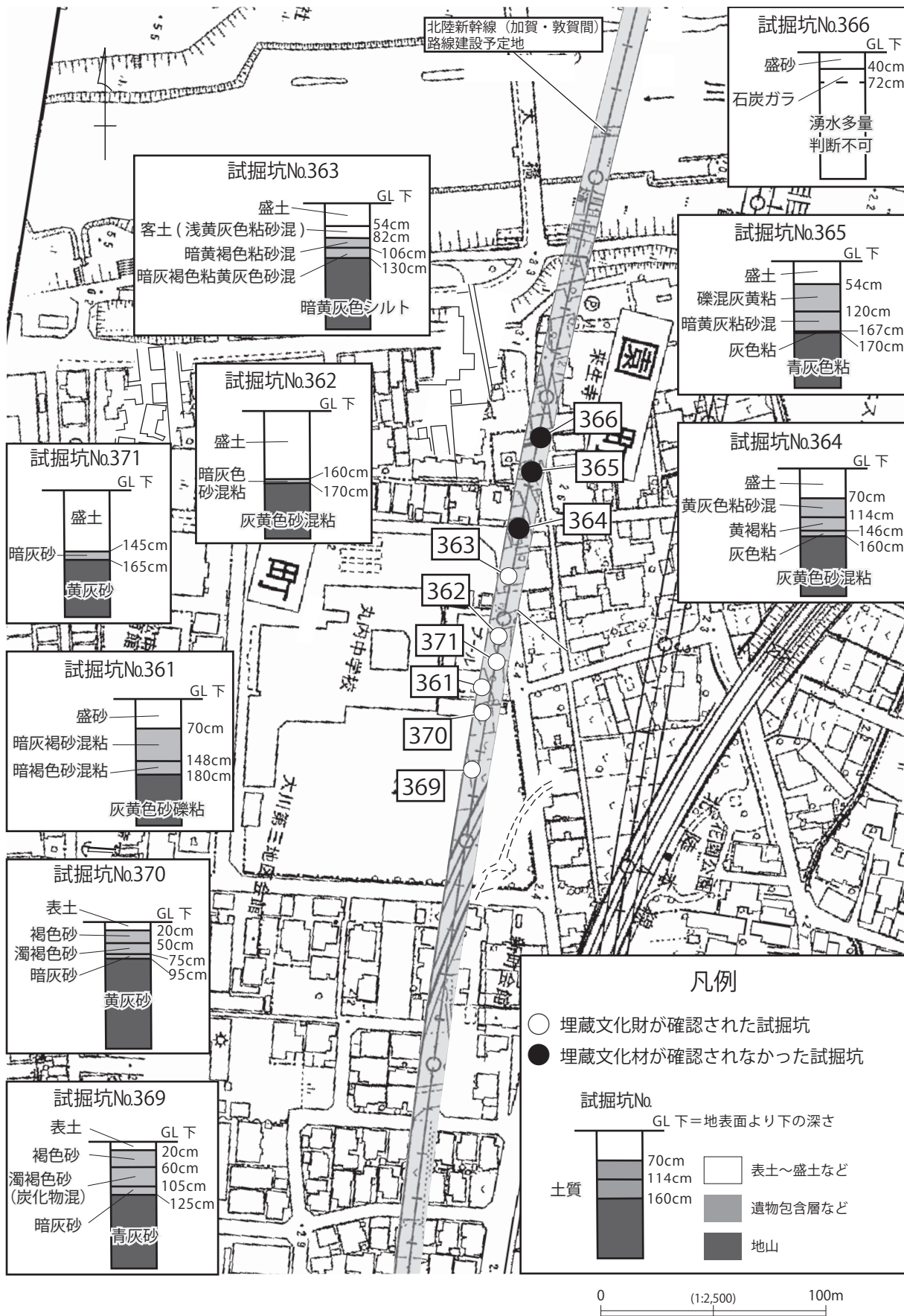
北陸新幹線は「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道」である。平成9（1997）年に東京駅から長野駅までが長野新幹線として部分開業しており、平成27（2015）年3月には長野駅から金沢駅までの区間が開業された。これに伴い、石川県内では平成10（1998）～22（2010）年度にかけて、津幡町地内から白山総合車両所までの区間において発掘調査が実施された。

さらに平成24（2012）年6月に国土交通省による認可を受け福井県敦賀までの延伸が決定され、金沢駅から敦賀駅間の事業が開始されることとなった。同年8月北陸新幹線（金沢・敦賀間）建設工事に着工し、同月には起工式が行われている。また、平成27年1月、政府は完成・開業時期を3年前倒しにして、令和4（2022）年度の開業を目指すことを決定した。令和3（2021）年3月、工事実施計画の変更が国土交通省により認可され、令和6（2024）年3月に開業となった。

白山総合車両所から福井県境までの工事計画範囲における埋蔵文化財の取り扱いについては、鉄道・運輸機構鉄道建設本部大阪支社（以下、事業者）から石川県教育委員会文化財課（以下、県文化財課）に照会があり、平成26（2014）年からは事業者の依頼に基づき、用地買収が済んで試掘を実施する環境が整った範囲から順に、県文化財課が平成29（2017）年度にかけて埋蔵文化財分布調査等を



第1図 北陸新幹線（金沢・福井間）概略図



第2図 分布調査箇所と柱状断面図

実施した。その結果、県文化財課は計画範囲内に22箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを回答した。

園町遺跡が位置する小松市園町周辺の北陸新幹線建設事業に伴う試掘状況については、調査担当の県文化財課からの提出資料に基づき報告する。園町周辺の試掘調査は平成28年9月21日に実施した(第2図)。園町域においては試掘坑 No. 361～362間の基本層序は盛砂、灰褐色粘質土、暗褐色系粘質土、灰黄色砂の地山層となる。地山層は、現地表下170cmから180cmで確認したが、湧き水もあり地盤は緩い。試掘坑 No. 361の暗褐色粘質土からは弥生土器がまとまって出土しており、南に向かって地山が下がっているため、川である可能性が想定される。試掘坑 No. 362の灰色系粘質土は旧表土である可能性が高い。また、暗褐色粘質土は確認できず、削平されたと考えられる。旧表土からは弥生土器が1点出土している。試掘坑 No. 363の基本層序は盛り土、暗黄褐色土、暗灰褐色土、暗黄灰色シルトの地山層となる。この暗灰褐色土からは弥生土器が出土している。現地表下130cmで地山の安定したシルトの地山となり、遺構も検出していることから、新規の埋蔵文化財包蔵地であると考えられる。試掘坑 No. 364～365間は現地表下160cmから170cmと地形が低くなる。また、遺構・遺物も確認できず、遺物を包含する暗灰褐色系の土も確認できなかった。これにより事業地周辺では周知の埋蔵文化財包蔵地はこれまで知られていなかったが、試掘坑 No. 363～369の間を新発見の埋蔵文化財包蔵地と判断し、「埋蔵文化財包蔵地、園町遺跡を確認した。」と事業者へ回答し、平成29(2017)年度に発掘調査を行うことで調整された。

県埋文センターは、試掘の結果埋蔵文化財調査が膨大な調査面積となることから、調査の効率化と期間短縮を目的に、平成28・29年度に民間会社による調査支援を導入した。主な委託内容は、仮設建物等の整備、現場の保守・管理、基準杭の設定、発掘機材の準備、作業員への指示・安全管理、図面等の作成、台帳等の作成、空中写真測量などである。

第2節 調査の経過

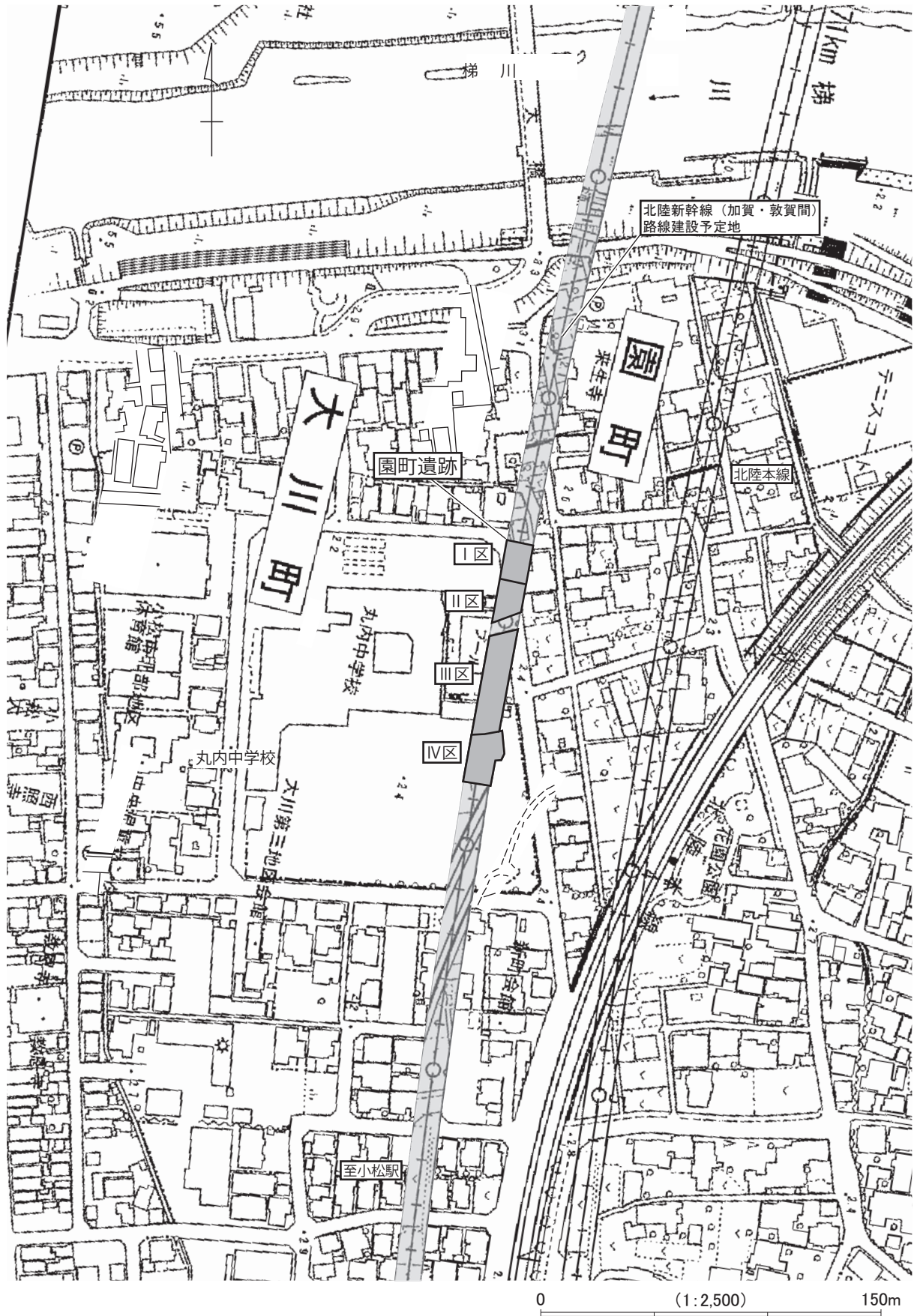
現地調査は、事業者からの依頼を受けた石川県教育委員会の委託事業として、平成29年4月1日付で発掘調査等業務委託契約を締結、それを受け文化財保護法第92条1項の規定に基づく発掘調査届(4月10日付け財埋第6号)を県教育委員会あて届出、教育長から「発掘調査届に対する通知について」(4月11日付け教文第232号)を受けた。依頼面積は1,240㎡である。また、現地発掘調査作業および空中写真測量図化作業等に係る関連作業の支援を株式会社利水社(以下、支援業者と略)に委託し、県埋文センター監理のもと実施した。担当者は下記のとおりである。

現場代理人 望月麻佑、情報連絡等補佐 宮田満

調査は、県埋文センター調査部県関係調査グループの白田義彦(同課長補佐)と増永佑介(同嘱託)が担当し、4月12日から7月31日に実施した。調査面積は、当初1,240㎡であったが、調査中の5月24日付で工事用ヤード使用箇所の面積増加に伴い調査面積が増加し、1,280㎡となった。

なお、4月5日に事前の打合せを、県文化財課、事業者、鉄建・りんかい日産・北都・高田北陸新幹線、梯川橋りょう他特定建設工事共同体、利水社で行った。そこで、Ⅰ区は個人宅の駐車場と通路として使われており、地下にガス管等の埋設管がある状況であったため、Ⅱ区を先行して調査を行うとした。Ⅱ区終了後、ガス管等の新管をⅡ区に設置し、Ⅰ区の旧管を撤去後、Ⅰ区の調査を行うとした。また、安全管理や表土除去作業に伴う廃土などについても話し合った。

重機による表土除去作業の開始は、Ⅱ区、Ⅲ区から着手し、平成29年4月12日から4月24日まで行っ



第3図 調査地位置図

た。その後、Ⅱ区、Ⅲ区を同時に調査したため、調査区ごとに調査の経過を述べる。

Ⅱ区の遺構検出作業は、4月24日から始め4月25日まで行った。遺構掘削作業は4月27日から5月16日まで行い、同16日に空中写真測量作業を利水社に委託し行った。補足調査は5月17日から5月18日まで行い、同18日にⅡ区の現地作業を完了したため事業者に引渡しを行った。

Ⅲ区の遺構検出作業は、4月24日から4月27日まで行った。遺構掘削作業は、4月28日から5月30日まで行った。6月1日に空中写真測量作業を利水社に委託し行った。補足調査は、6月2日から6月5日まで行った。なお、調査区の隣が個人宅や一般道であり、安全管理のために重機で廃土を使ってⅢ区の一部を埋め戻し、6月6日から6月9日まで行った。

Ⅲ区の調査の完了に伴い、重機による表土除去作業を開始し、Ⅰ区で6月5日から6月6日まで、Ⅳ区で6月7日から6月9日まで行った。その後、Ⅰ区、Ⅳ区を同時に調査したため、調査区ごとに調査の経過を述べる。

Ⅰ区は中世の面（弥生時代遺物包含層）が部分的に確認できる状況であり、まず中世の面の調査から行った。Ⅰ区の遺構検出作業は、6月7日と6月9日に行った。遺構掘削作業は、6月12日から6月15日まで行った。6月19日に空中写真測量作業を利水社に委託し行った。そして、中世の面の掘削を6月20日と6月26日に行い、同26日に弥生時代の面の遺構検出作業を行った。遺構掘削作業は、6月27日から7月11日まで行った。なお、弥生時代の面の遺構平面図などの実測作業は、遺構掘削作業と同時に行った。補足調査は、7月12日から7月13日まで行った。

Ⅳ区は中世の面（弥生時代遺物包含層）がある程度面的に確認できる状況であり、まず中世の面の調査から行った。Ⅳ区の遺構検出作業は、6月12日から6月13日まで行った。遺構掘削作業は、6月14日から6月22日まで行い、6月23日に空中写真測量作業を利水社に委託し行った。そして、中世の面の掘削を6月27日から6月28日に行い、6月29日に弥生時代の面の遺構検出作業を行った。遺構掘削作業は、6月30日から7月20日まで行った。7月21日に空中写真測量作業を利水社に委託し行った。補足調査は、7月24日から7月28日まで行った。

同28日に県文化財課と事業者の立会いの下、事業者に現地の引渡しを行い、7月31日に機材撤収し、園町遺跡の埋蔵文化財発掘調査現地作業を完了した。

また、調査期間中に近隣住民に向けた現地見学や現地説明会を行っており、5月31日には園町老人会の要望により現地見学を、7月2日には現地説明会を行った。

第3節 出土品整理の経過

事業者から依頼を受けた県教育委員会の委託事業として、出土品整理作業のうち出土遺物の洗浄、記名・分類・接合作業を平成30年度に実施した。遺物の実測・トレース作業については、北陸新幹線建設事業に係る多数の発掘調査により短期間で膨大な量の遺物が出土したことから直営での作業遂行が困難となり、令和元・2年度に外部に委託して実施した。自然科学的分析については、令和3年度に木製品の樹種同定、微細物分析、花粉分析、石器・石製品の石質同定を、令和4年度に木製品の C14 分析をそれぞれパリオ・サーヴェイ株式会社へ委託して実施し、その成果を第4章に収めた。

報告書刊行については、令和4～6年度に報告書作成作業を実施し、編集・校正作業を経て6年度に刊行となった。

調査体制 調査主体 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

	平成29年度	平成30・令和元年度	令和2年度	令和3年度
調査期間	平成29年4月12日～7月31日	平成30年4月1日～令和2年3月31日	令和2年4月1日～令和3年3月31日	令和3年4月1日～令和4年3月31日
内容	発掘調査 1,280㎡	出土遺物の記名・分類・接合、復元、遺物の実測及びトレース等	出土遺物の実測及びトレース	自然科学分析（委託）
代表	田中新太郎（理事長）	田中新太郎（理事長）	徳田 博（理事長）	徳田 博（理事長）
総括	柴田政秋（専務理事）	紺野欽一（専務理事）	田村彰英（専務理事）	田村彰英（専務理事）
事務	釜親利雄（事務局長）	釜親利雄（事務局長）	北谷俊彦（事務局長）	北谷俊彦（事務局長）
	横山謙一（総務 G グループリーダー）	伊藤 直（総務 G グループリーダー）	伊藤 直（総務 G グループリーダー）	北谷祥子（総務 G グループリーダー）
調査・整理	藤田邦雄（所長）	垣内光次郎（所長）	伊藤雅文（所長）	伊藤雅文（所長）
	垣内光次郎（調査部長）	伊藤雅文（調査部長）	川畑 誠（調査部長）	川畑 誠（調査部長）
	久田正弘（県関係調査 G グループリーダー）	澤辺利明（特定事業調査 G グループリーダー）	澤辺利明（特定事業調査 G グループリーダー）	中屋克彦（特定事業調査 G グループリーダー）
（担当）	白田義彦（県関係調査 G 課長補佐）	特定事業調査グループ	特定事業調査グループ	特定事業調査グループ
	増永祐介（県関係調査 G 嘱託調査員）			

	令和4年度	令和5年度	令和6年度
調査期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日	令和5年4月1日～令和6年3月31日	令和6年4月1日～7年3月31日
内容	報告書作成、自然科学分析（委託）	報告書作成	報告書作成・刊行
代表	北野喜樹（理事長）	北野喜樹（理事長）	北野喜樹（理事長）
総括	田村彰英（専務理事）	加美弘行（専務理事）	加美弘行（専務理事）
事務	北谷俊彦（事務局長）	北谷俊彦（事務局長）	寺沢昌士（事務局長）
	杉林賢明（総務 G グループリーダー）	谷 鋪 繁（総務 G グループリーダー）	谷 鋪 繁（総務 G グループリーダー）
調査・整理	川畑 誠（所長）	川畑 誠（所長）	土屋宣雄（所長）
	土屋宣雄（調査部長）	土屋宣雄（調査部長）	中屋克彦（調査部長）
	中屋克彦（特定事業調査 G グループリーダー）	端 猛（特定事業調査 G グループリーダー）	金山哲哉（特定事業調査 G グループリーダー）
（担当）	特定事業調査グループ	特定事業調査グループ	特定事業調査グループ

第1表 調査の体制

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

園町遺跡は、石川県小松市園町地内に所在する。小松市の地形を概観すると、北西側が日本海に面し、南東側が能美山地と能美・江沼丘陵地に囲まれ、梯川などの河川によって形成された沖積平野が大きく占める地形である。また、かつては小松市の南西側に加賀三湖である木場潟、今江潟、柴山潟が存在していたが、これらは昭和27年（1952）から実施された加賀三湖干拓事業により規模が縮小ないし消滅した。

本遺跡は、その沖積平野内の標高約1.2～1.4mの砂層に位置し、北側に梯川が流れ、南西側に今江潟が存在する。その地形の成り立ちは複雑であり、この砂層が何により形成されたのかが不明であり、梯川の堆積作用によるものなのか、または縄文海進により形成された浜堤列の伸びの一部なのか、はっきりしない。少なくとも、今回の調査で砂層の上に遺構が確認できるため、おそらく周囲よりやや小高い標高の砂でできた地形に本遺跡が立地していたと推定される。



第4図 遺跡の位置

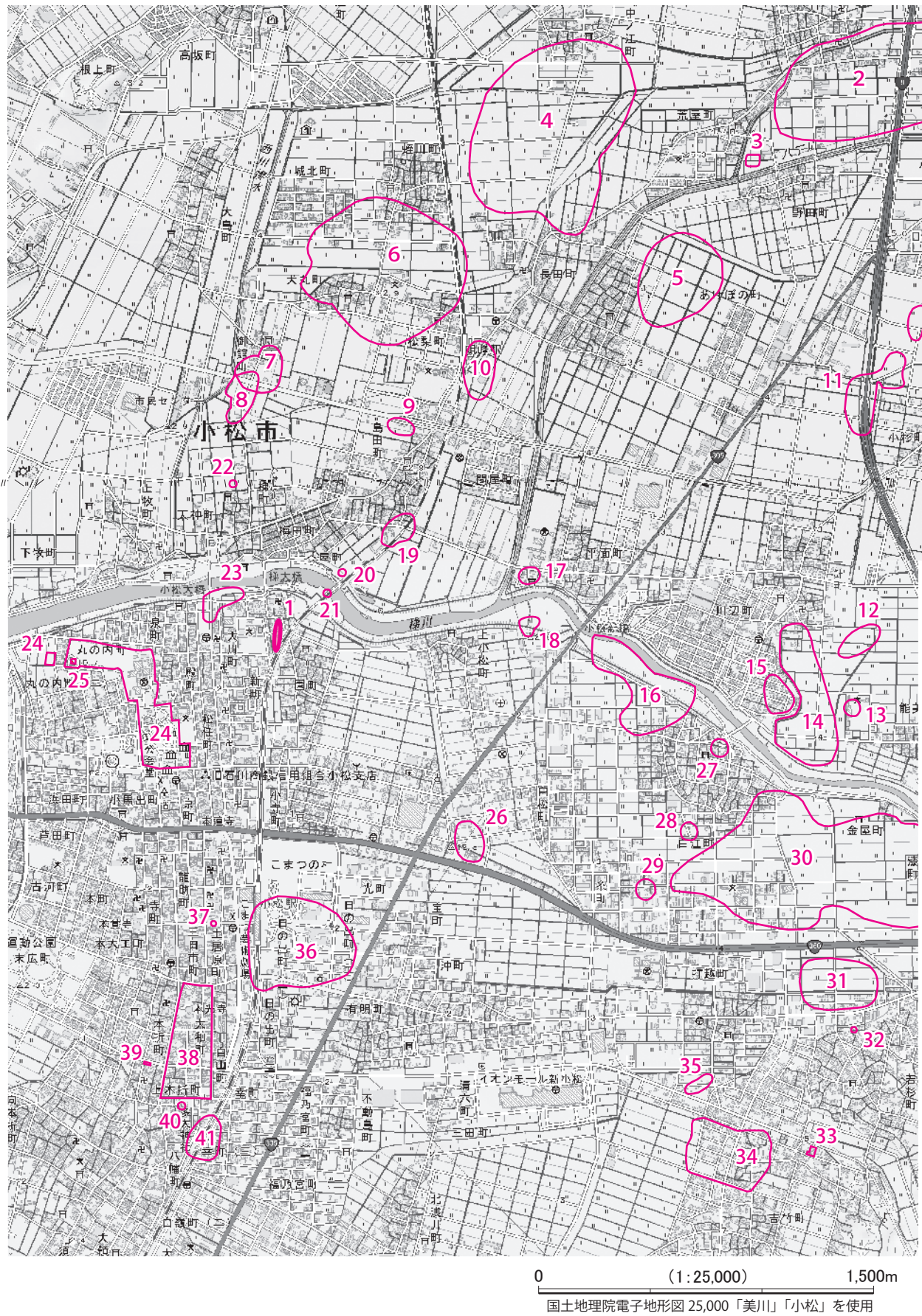
第2節 歴史的環境

園町遺跡周辺の遺跡を時代ごとにふれることで、周辺の歴史的環境を概観する。なお、本節の遺構名（番号）は、第2表と第5図の番号が対応するため、参照して頂きたい。

旧石器時代、縄文時代は、遺構が散発的に確認されるものの、周辺で遺構がまとまって確認された遺跡は少なく、丘陵上に位置する遺跡が多い。八里向山遺跡群や八幡遺跡では、落とし穴が確認され、大長野 A 遺跡（11）では縄文時代後期中葉から晩期中葉の土器、石器が出土し、縄文時代後期中葉と推定される貯蔵穴群が確認された。

弥生時代は、前期では大川遺跡（23）や松梨遺跡（6）で前期土器が出土しているものの、周辺で遺構がまとまって確認された遺跡は少ない。中期では八日市地方遺跡（36）や、園町遺跡（1）、梯川鉄橋遺跡（21）、大長野 A 遺跡（11）などがみられる。八日市地方遺跡が、多様な遺物が豊富に出土することや遺構の内容から、この地域における拠点集落として存在し、その周囲に衛星的に集落が展開していた様子が伺える。後期では、八日市地方遺跡は衰退し、一針 B 遺跡（12）や一針 C 遺跡（14）、白江梯川遺跡（16）、平面梯川遺跡（18）などがみられ、梯川中・下流域に集落が増加していく。

古墳時代は、前期では弥生時代後期から引き続き梯川流域を中心に遺跡が増加し、後期になると減少していく。中ノ江遺跡（4）では弥生時代後期から古墳時代にかけての集落が確認され、平行に走る2条の溝が区画として機能し、遺跡の東側に居住域が広がったとされる。千代・能美遺跡では古墳



第5図 周辺の遺跡

時代前期の首長居館が確認され、松梨遺跡では古墳時代中期から後期の掘立柱建物や井戸が確認された。

古代では、佐々木遺跡で8世紀前半から10世紀中頃にかけての集落で、「野身」や「野身郷」と墨書した須恵器が出土した。松梨遺跡（6）では8世紀から9世紀前半に溝で区画されたエリアが確認され、墨書土器や漆器、金属器が出土した。また、漆町遺跡（30）は弥生時代中期から近世にかけての複合遺跡で、それぞれの調査地区ごとに主体となる時期が異なる。とりわけ、金屋・サンバワリ地区、金屋・ヤシキダ地区、白江・チョウジャワリ地区では、9世紀後半から13世紀代の集落が確認された。

中世では、白江梯川遺跡（16）で在地領主の居宅と推定される館跡や職人の居住、村堂が確認された。御館遺跡（7）と銭畑遺跡（8）はともに12世紀から16世紀の集落であり、御館遺跡では大溝や土坑、井戸が、銭畑遺跡では結い桶の井戸、溝が確認された。長田南遺跡（10）では13世紀から14世紀の集落で、掘立柱建物、井戸、土坑が確認され、井戸から呪符木簡が1点出土した。大川遺跡（23）では、12世紀後半から14世紀の溝、井戸、土坑が確認された。幸町遺跡（41）では、15世紀前半から15世紀中頃の廃棄土坑が確認され、鍛錬鍛冶滓や羽口、砥石が出土した。遺跡周囲に鍛冶工房の存在が推定される。また、先に述べた漆町遺跡では、16世紀から17世紀前半の溶解炉の一部、羽口、鋳型片、多量の鉄滓が出土し、梯川の水運を利用した鋳物生産の様子が伺える。

近世では、江戸時代前期に前田利常の隠居城として小松城（24）の整備が進められた。絵図からは梯川を小松城の堀に引き込れており、現小松市街周囲の地形が改変された様子が伺える。小松城下内の大川遺跡（23）では、北国街道に面した町屋敷や泥川と呼ばれた堀などが確認された。この堀は階段状遺構が3箇所みられ、小船による物資の運搬通路と区画溝と防御をかねており、後に廃棄場として利用された。

よって、園町遺跡の周辺の歴史的環境を概観すると、旧石器時代から弥生時代前期まで、遺跡が丘陵などの小高い地形に散発的に展開する。その後、弥生時代中期から今江潟や木場潟の周囲や梯川中・下流域で集落が展開と衰退を繰り返しながら開発を続けていく様子が伺える。

（石川県教育委員会：教委、小松市教育委員会：市）

番号	遺跡名称	所在地	出土品	立地	種別	時代	備考
1	園町遺跡	園町	弥生土器、土師質皿、陶磁器、石製品	沖積平野	集落	弥生中世	本報告の遺跡。
2	高堂遺跡	高堂町	弥生土器、土師器、須恵器（墨書多数）、木簡、木製品、砥石、皇朝銭68枚、土師質皿、陶磁器、瓦質土器	扇状地	集落	弥生古墳古代中世	皇朝銭の埋納3ヶ所。
3	野田フルヤシキ遺跡	野田町		沖積平野	集落	中世	
4	中ノ江遺跡	中ノ江町・小松市蛭川町・小松市長田町	土師器、須恵器	沖積平野	散布地	古墳	
5	長田遺跡	長田町	弥生土器、土師器、石鏃	沖積平野	散布地	弥生古墳	
6	松梨遺跡	松梨町・犬丸町・蛭川町	縄文土器、弥生土器、石鏃・石錐等石器、土師器、須恵器、灰釉陶器、砥石、井戸側転用丸木舟、土鍾、砥石、木製食器、漆器、瓦、金属器、製鉄関連遺物、皇朝銭、土師質皿、珠洲焼、加賀焼、瀬戸美濃、青磁、白磁	沖積平野	散布地集落	縄文弥生古墳古代中世	縄文時代後期中葉、弥生時代前期・後期、中世は散布地。2009年度県（教委）が県営ほ場整備事業に係り分布調査。
7	御館遺跡	御館町	土師器皿	沖積平野	城館	中世	大溝（堀）3条、溝3条、土坑3基、井戸跡1基を検出。
8	銭畑遺跡	御館町	弥生土器、土師器、須恵器、土師質皿、瓦質土器、中世陶磁器、土鍾、石臼、行火、硯、鉄製品（槍先か）、漆器、木製品（網杵・簪・曲物底板、木針か）、五輪塔・宝篋印塔残欠	沖積平野	散布地集落	弥生古墳古代中世	一向一揆蛭川新七郎重親の居館跡とされる。弥生時代～古代は散布地。2010年度県（教委）が県営ほ場整備事業に係り分布調査。
9	島田B遺跡	島田町	土師器	沖積平野	集落	古墳	2004年度県（教委）が県営ほ場整備事業に係り分布調査。
10	長田南遺跡	長田町	弥生土器、土玉、磨製石斧、打製石斧、石鏃、石包丁、須恵器、土師器、土鍾、土師器皿、瓦質土器、中世陶磁器、鉄錐、小刀、銭貨、筭、杓子、曲物、簪、漆器、呪符木簡、杭、板材、石製品	沖積平野	散布地集落	弥生古代中世	中世の掘立柱建物跡9棟、土坑92基、井戸跡6基、溝45条を確認。

第2表 周辺遺跡一覧（1）

第2節 歴 史 の 環 境

(石川県教育委員会：教委、小松市教育委員会：市)

番号	遺跡名称	所在地	出土品	立地	種別	時代	備考
11	大長野A遺跡	一針町・能美市小杉町	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶質硯、珠洲焼、土師質皿、石刻等石器、土製品、漆器、木製品	沖積平野	散布地 集落	縄文 弥生 古墳 古代 中世	
12	一針B遺跡	一針町	弥生土器、土師器、須恵器、木製品、石製品、玉類、金属器生産関連土製品、鉄滓	沖積平野	散布地 集落	弥生 古墳 古代	弥生時代後期前半から古墳時代前期に金属器生産（土製鋳型外枠、焼粘土塊、鉄滓、フイゴ羽口出土）。
13	定地坊跡	能美町		沖積平野	社寺	中世	
14	一針C遺跡	一針町	弥生土器、土師器、須恵器、土師質皿、陶磁器、木製品、石器、玉類、鉄滓	沖積平野	散布地 集落	弥生 古墳 古代 中世	
15	一針遺跡	白江町	磨製石斧	沖積平野	散布地	縄文	
16	白江梯川遺跡	白江町	弥生土器、石器、管玉、土師器、須恵器、銅鏃、土師質皿、陶磁器、懸仏3点、木製品、漆器、石臼等石製品、石造物、金属製品、銭貨、炭化米	沖積平野	散布地 集落 生産遺跡 その他 (祠跡)	弥生 古墳 古代 中世	弥生時代末～古文時代前期の旧河道から木製品多数出土。中世の祠跡を確認。
17	平面梯川B遺跡	平面町へ		沖積平野	散布地	弥生	1991年、宅地造成に係る分調で発見、盛土保存。
18	平面梯川遺跡	白江町	弥生土器、石器、製玉材片、軽石、勾玉、ガラス小玉、木柱根、楯等木製品	沖積平野	集落	弥生	
19	島田A遺跡	島田町		沖積平野	散布地	古墳 古代	
20	梯川鉄橋B遺跡	島田町	弥生土器	沖積平野	散布地	弥生	梯川河川改修に係る分調で発見。
21	梯川鉄橋遺跡	園町	弥生土器	沖積平野	散布地	弥生	1962年、国鉄北陸線複線化に伴う鉄橋工事中、左岸より3番目の下り線橋脚地点、河床より4mの地中より土器出土。
22	梯遺跡	犬丸町	弥生土器、土師質皿、陶磁器、土製品、石臼、石鉢、砥石	沖積平野	集落	弥生 中世	2010年度県（教委）が県営ほ場整備事業に係り分布調査。
23	大川遺跡	大川町	土師質土器、陶磁器、銅銭、漆器、木製品、石製品	沖積平野	集落	中世	近世遺構（道路遺構を含む）は、泥町の一部か。
24	小松城跡	丸の内町・丸の内公園町	須恵器、陶磁器、土師質皿、瓦、木製品、石製品、銭貨	沖積平野	散布地	古墳 中世 近世	
25	小松城本丸櫓台石垣	丸の内町		沖積平野	城館	近世	市指定史跡。
26	上小松遺跡	上小松町	須恵器	沖積平野	散布地	古代	
27	白江堡跡	白江町		沖積平野	城館	中世	白江新介景平の居館と伝承、第2～3次調査地点に比定か。
28	漆町遺跡	漆町・金屋町・白江町・若杉町		沖積平野	散布地 集落	弥生 古墳 古代 中世	2ヶ所に分かれる。白江念仏堂遺跡（H4 遺跡地図No 03178）を統合。
29	白江遺跡	漆町・金屋町・白江町・若杉町	土師器、須恵器、珠洲焼、砥石	沖積平野	散布地 集落	古墳 古代 中世	
30	漆町遺跡	漆町・金屋町・白江町・若杉町		扇状地	散布地 集落	弥生 古墳 古代 中世	2ヶ所に分かれる。白江念仏堂遺跡（H4 遺跡地図No 03178）を統合。
31	打越遺跡	若杉町	土師器、須恵器、白磁	沖積平野	散布地	古代	遺跡ではない可能性高い。
32	若杉古窯跡	若杉町	陶磁器、窯道具	台地	生産遺跡	近世	1824年開窯の再興九谷窯（連房式登窯）。
33	吉竹C遺跡	吉竹町	須恵器、土師器	沖積平野	集落	古代 中世	
34	吉竹遺跡	吉竹町	弥生土器、土師器、須恵器、管玉、土製品、陶磁器、土師質皿、銭貨、鍛冶滓、石製品、木製品	台地 沖積平野	散布地 集落	弥生 古墳 古代 中世	市調査で竪穴建物跡9棟、掘立柱建物跡29棟、土坑19基、溝3条を確認。
35	吉竹B遺跡	吉竹町3丁目	土師器、泥除	沖積平野	散布地	古墳	「吉竹遺跡（19地区）」の名称で市発掘調査。古墳時代前期の雇跡、旧河道を確認。
36	八日市地方遺跡	日の出町1・2丁目、八日市町地方	縄文土器、弥生土器、磨製石斧、紡錘車、勾玉、管玉、鐔形土製品、土玉、土鏃、ミニチュア土器、焼成粘土塊、磨石類、石皿、砥石類、環石類、磨製石斧、石鉈、石包丁類、石鏃、石鏃、石鏃、磨製石剣、銅鏃、木製工具、木製農耕具、木製漁労具、木製祭祀具、木製武器・武具、木製服飾具、木製紡織具、木製容器・食事具、須恵器、土師器皿、珠洲焼、陶磁器、銭貨	沖積平野	散布地 集落 その他の 墓 生産遺跡	縄文 弥生 古代 中世 近世	埋積浅谷両岸に形成された弥生時代中期の環壕集落跡。出土品の一部は国重要文化財。縄文時代中期後葉～晩期前葉、古代、中世は散布地。
37	東町遺跡	土居原町・龍助町		沖積平野	その他 (町屋跡)	近世	
38	本折城跡	本折町・上本折町・旭町・大和町・白山町	陶磁器、埴塼	沖積平野	城館	中世	本折氏居館の伝承地。
39	上本折遺跡	上本折町・向本折町	弥生土器、土師器、須恵器、土師器皿、陶磁器、木製品	沖積平野	散布地	弥生 古墳 古代 中世	
40	多太神社境内遺跡	上本折町	埋納渡来銭	沖積平野	散布地	中世	社殿建設中に発見。
41	幸町遺跡	幸町・八幡町・三日市町地方	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器皿、瓦器、陶磁器、銭貨、行火、石鉢、石臼、砥石、鍛冶滓、羽口、木製品	沖積平野	散布地 集落	縄文 弥生 古代 中世	本折氏関連遺跡。縄文、弥生時代後期、古代は散布地。中世後期の鍛冶炉関連遺構を確認。

第2表 周辺遺跡一覧（2）

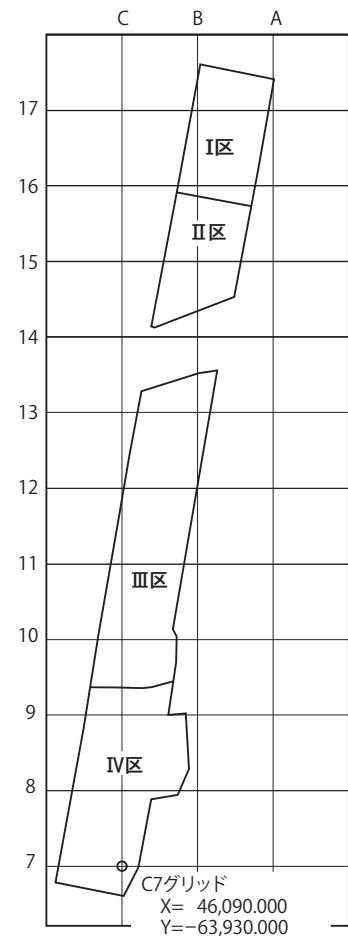
第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

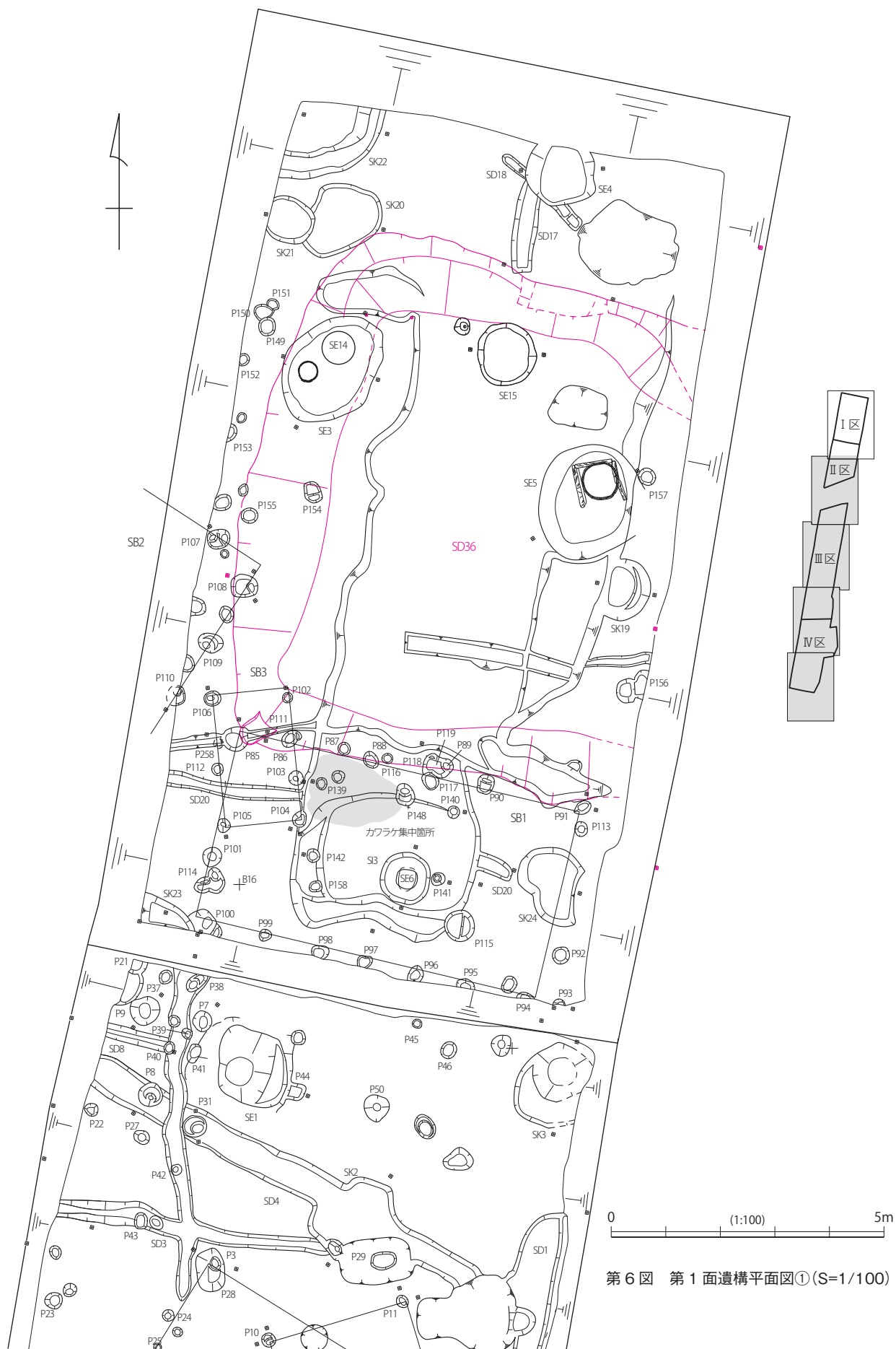
園町遺跡の発掘調査は、平成28年に県文化財課によって実施された分布調査の成果に基づき事業地内に範囲が設定された。調査着手に当たっては、農道等を区画として調査区の設定を行い、北から南にⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区と設定し（第2図）、公共座標（世界測地系）に基づく調査範囲を包括する10m間隔のグリッドを設定した。グリッドラインの名称は、X軸を南から北にアラビア数字、Y軸を東から西にアルファベットの大文字とし、グリッドの名称は、グリッドに対し西側と南側のグリッドラインから「Y軸名 X軸名」とした。C7グリッドの座標値は、X=46,090.000、Y=-63,930.000である。

調査は重機による表土除去後、人力による遺構検出面の精査および遺構面の精査・遺構検出作業を行った。遺構番号は、各調査区毎に現地調査時に推定した遺構の性格を反映した略記号SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑）、SD（溝）、P（ピット）等を検出順に1番から連続する通し番号を付与している。この遺構番号は、各遺構の固有番号として、出土遺物の取り上げ、土層等の記録、遺物整理作業、出土遺物の管理に使用している。検出した各遺構は、各区・各層で遺構概略図（縮尺1/100）を作成し、位置や遺構番号、遺構覆土などに関する所見を記録しながら、その主軸を基準に半裁または土層観察用の畔を残して作業員による人力での掘り下げ作業を行った。その後、各遺構について土層を観察（土色観察・表記は農林水産省2003『新版 標準土色帖』に準拠した）のうえ、必要に応じて断面・立面図の作成と写真撮影（白黒フィルム、フルサイズデジタル一眼レフカメラ）で記録作業を実施した。遺構図面は縮尺1/20を基本とし、遺物の出土状況等の微細な表現が必要な場合は縮尺1/10の図化作業で行った。また、各調査層の遺構完掘後、遺構平面図（縮尺1/20）を効率的に作成するため、ラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量図化作業を実施している。

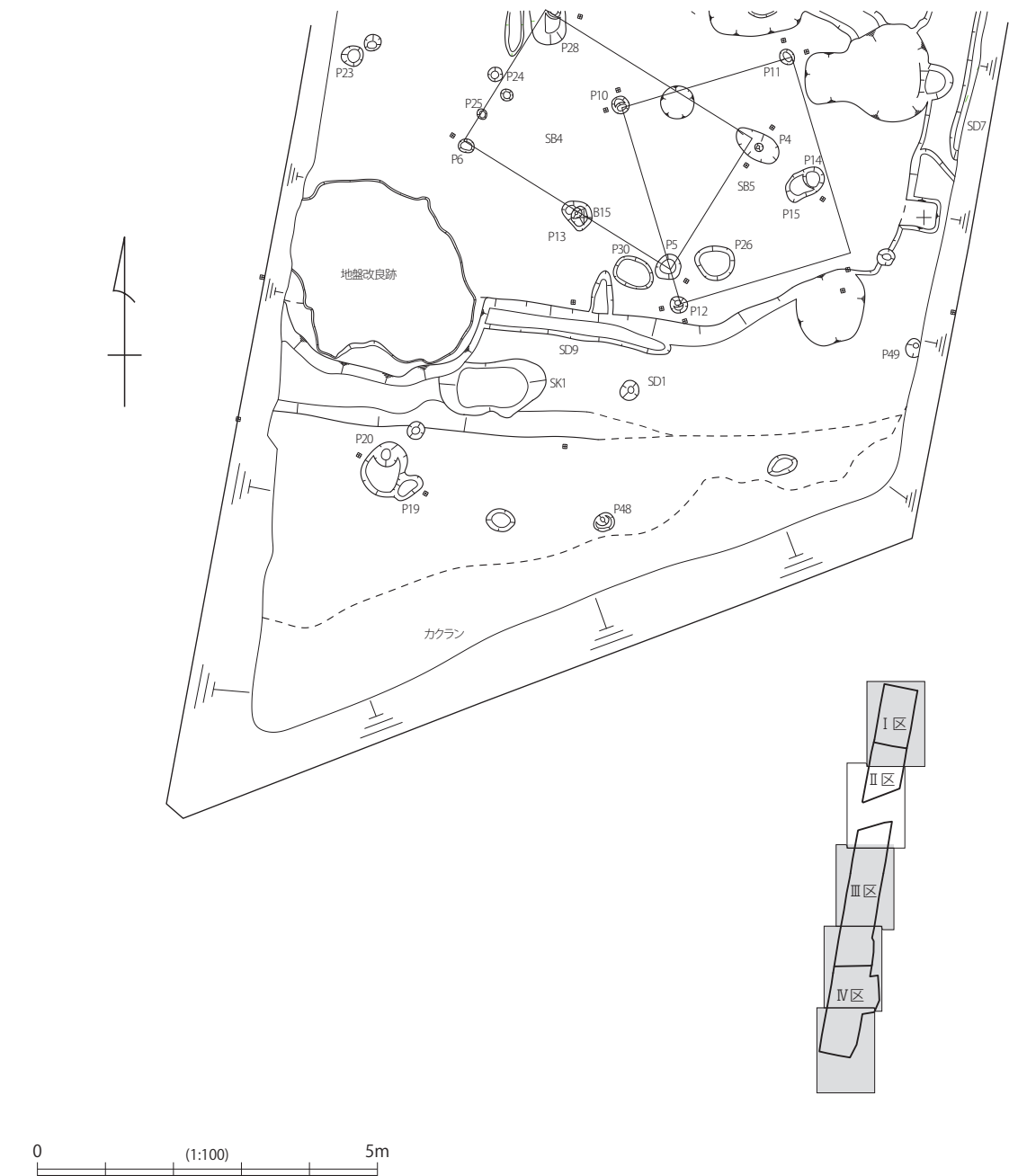
調査成果は、調査区ごとに掘立柱建物・竪穴建物→井戸・土坑→溝→ピット→包含層等、の順で記述する。遺構番号は調査時に準じて調査区ごとに1から開始し、異なる調査区のものや並記するときは「Ⅰ区SB」「Ⅲ区SK」のように略記号前に調査区名を付すものとする。遺構の規模（平面・断面）は10cm単位で示し、数値の次に+とある場合は、残存数値を示している。掘立柱建物跡の主軸方位は座標北からの東（E）・西（W）の傾きを数値で示し、東西棟も便宜上90°読み替えて提示する。



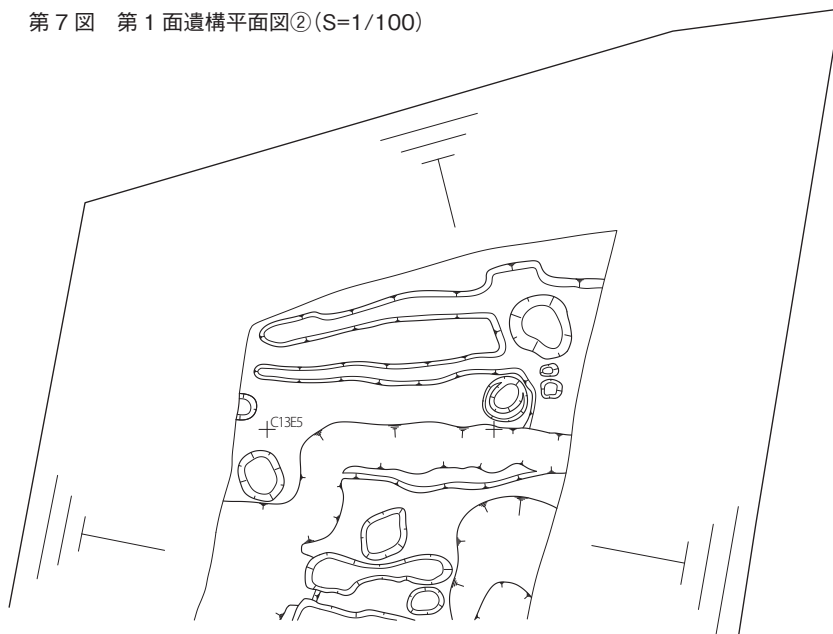
園町遺跡グリッド配置図(S=1/1,000)

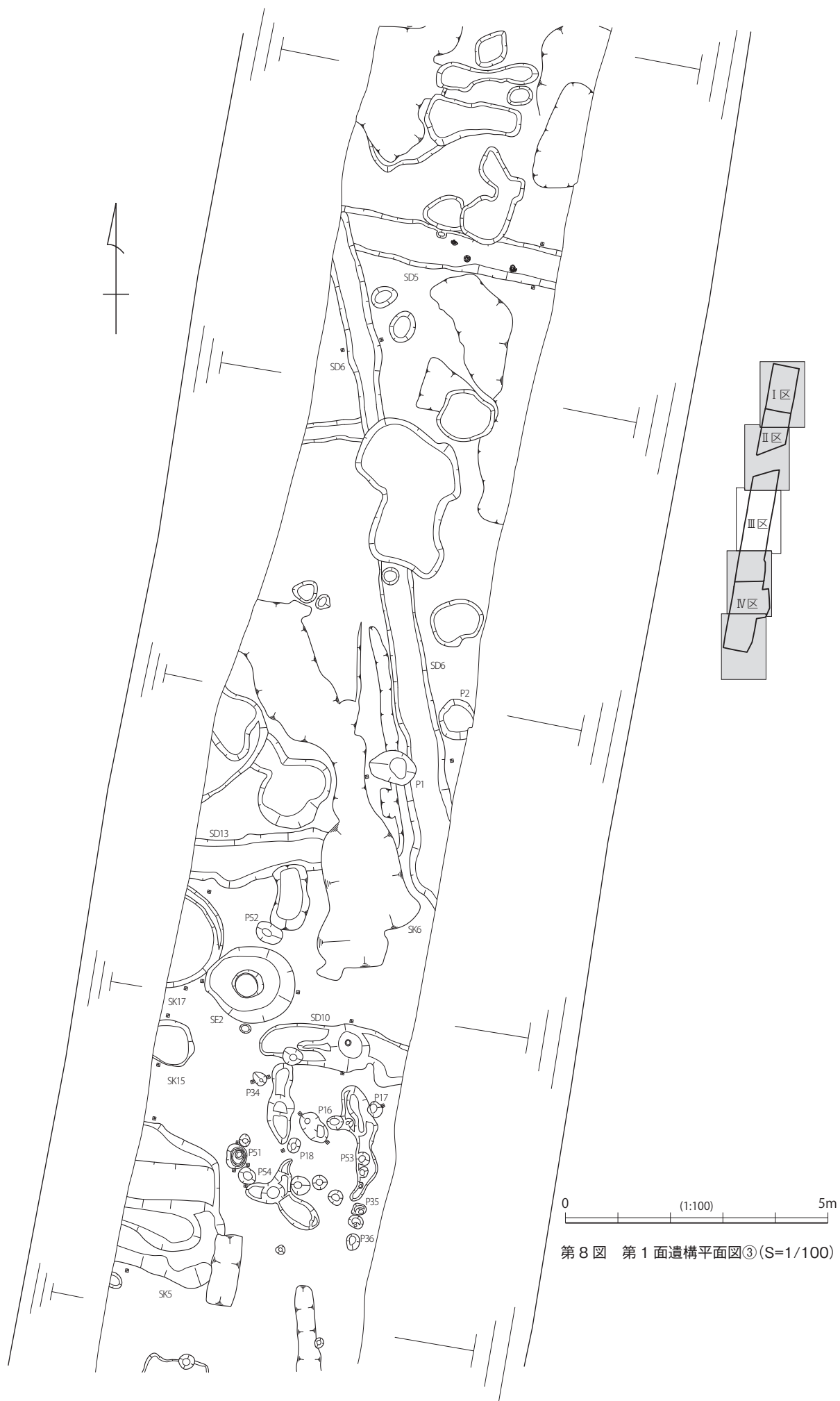


第6図 第1面遺構平面図①(S=1/100)

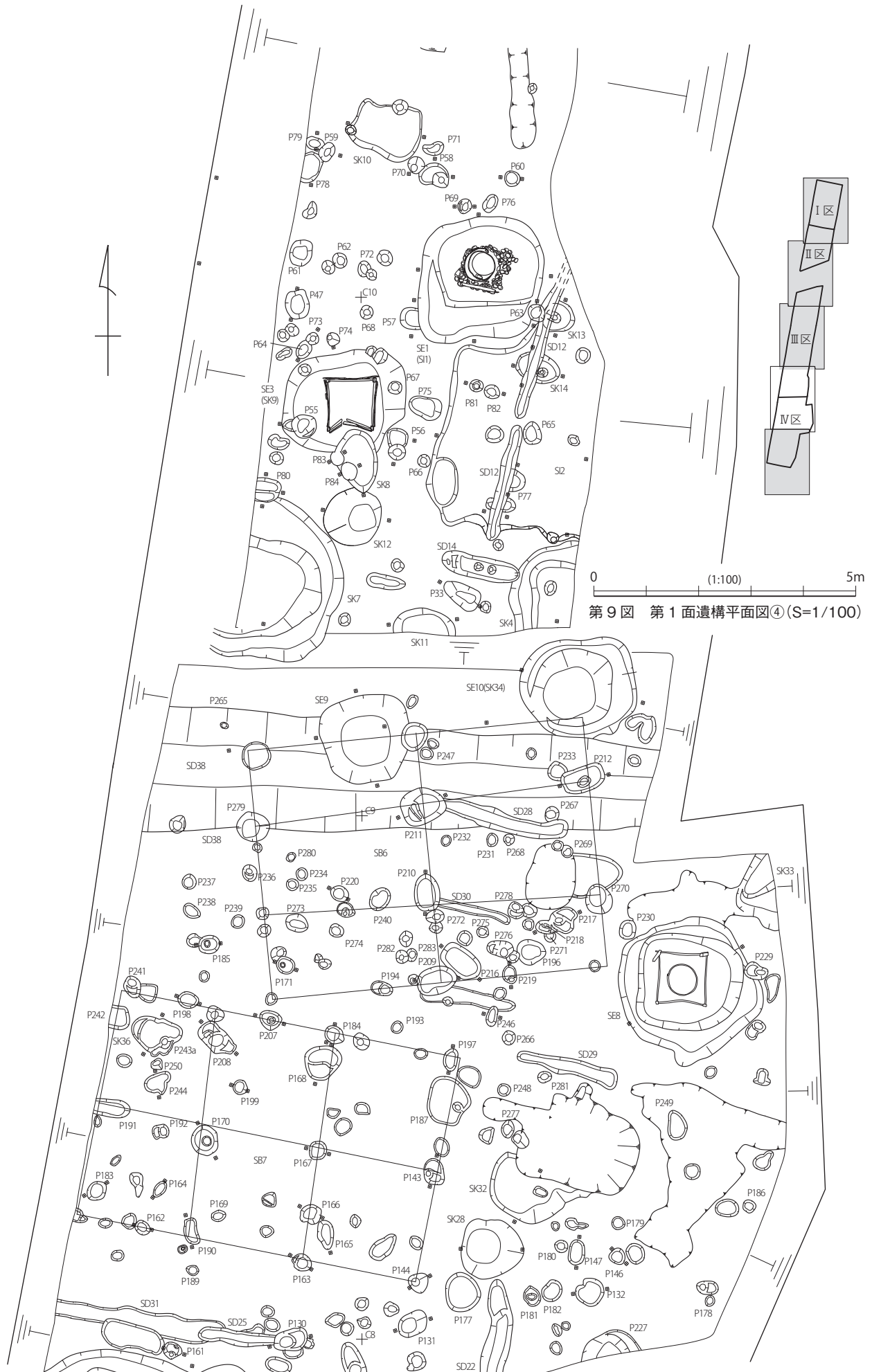


第7図 第1面遺構平面図②(S=1/100)



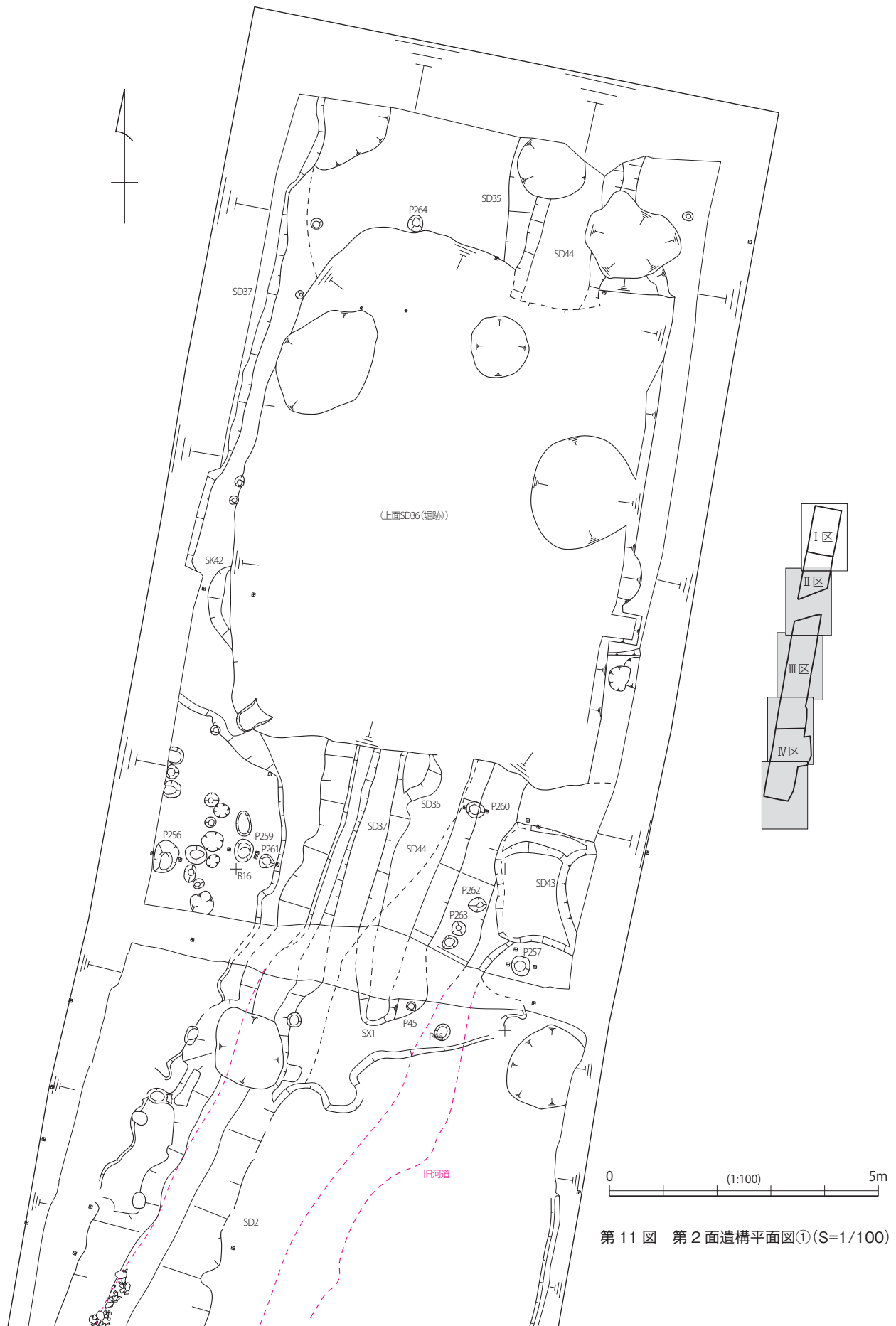


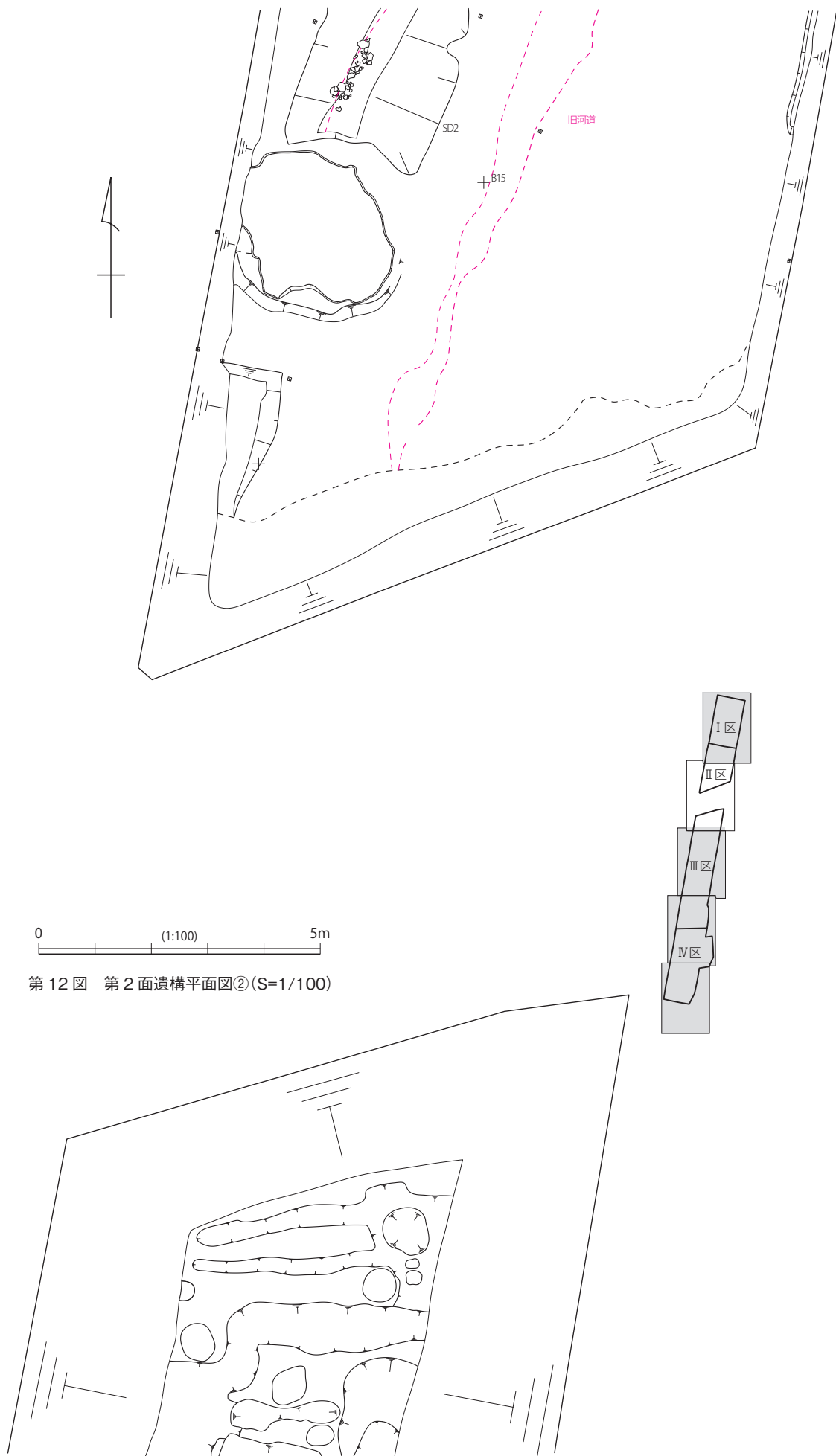
第8図 第1面遺構平面図③(S=1/100)





第 10 図 第 1 面遺構平面図⑤(S=1/100)

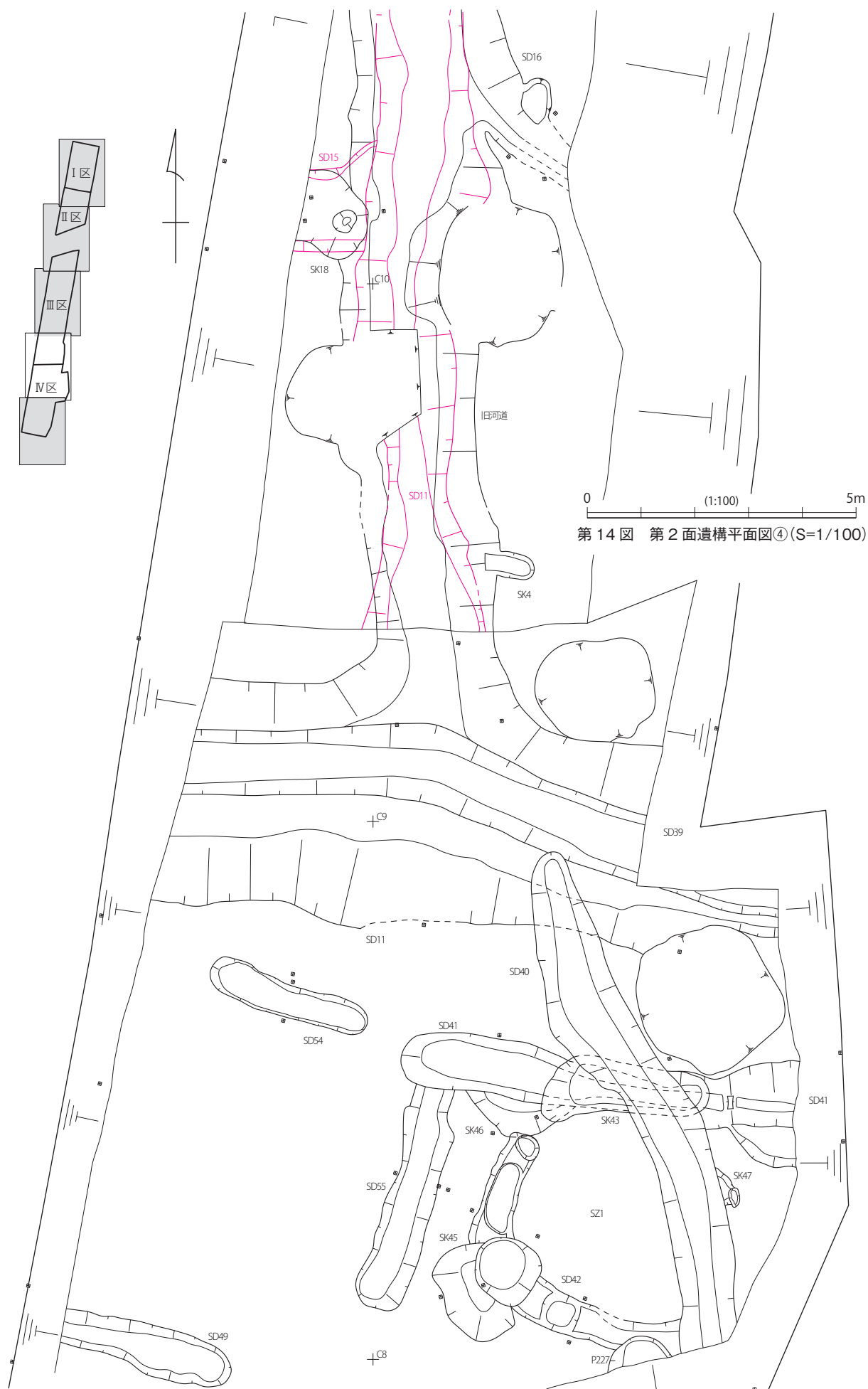


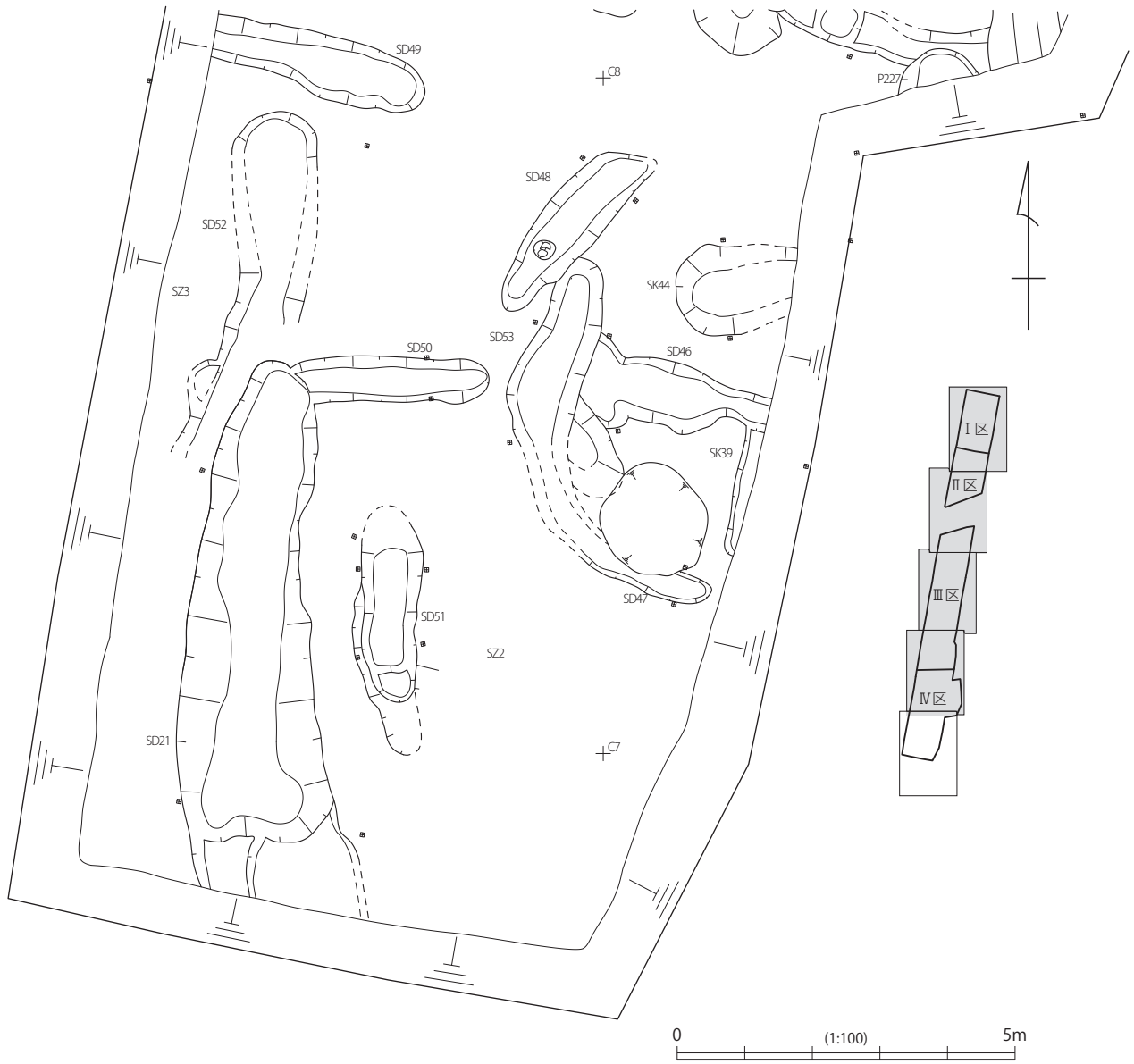


第12図 第2面遺構平面図②(S=1/100)



第13図 第2面遺構平面図③ (S=1/100)





第15図 第2面遺構平面図⑤ (S=1/100)

第2節 第1面の概要

第1面は、13世紀代～17世紀代の遺構・遺物を確認している遺構面である。ほぼ旧耕作土直下で検出されており、大部分の遺構が上面の削平・攪乱を受けている。遺構面の標高は1.03m（Ⅰ区最北端）～1.30m（Ⅳ区最南端）で、Ⅱ・Ⅲ区は第2面と同レベルでの検出状態である。遺構の分布はⅠ・Ⅳ区に偏りを見せ、Ⅱ～Ⅲ区が深い遺構を除いて削平を受けている状況が看取できる。遺構は掘立柱建物跡・堅穴状遺構・井戸・溝等の一般的な集落で見られる状況を呈しているが、Ⅰ区で検出された大型の溝状遺構（調査時からの呼称を踏襲して堀状遺構とする）が特徴的である。

遺物は、中世を中心として339点の土器・陶磁器類が実測されている。内訳は須恵器2点（ⅠⅠ・ⅢⅠ）、土師器皿247点（Ⅰ57・Ⅱ8・Ⅲ48・Ⅳ134）、土師器鍋2点（ⅢⅠ・ⅣⅠ）、瓦質土器6点（ⅠⅠ・ⅡⅠ・ⅢⅠ・ⅣⅢ）、加賀焼9点（Ⅰ5・ⅡⅠ・ⅢⅠ・ⅣⅡ）、珠洲焼6点（Ⅰ3・ⅢⅡ・ⅣⅠ）、越前焼22点（Ⅰ5・ⅢⅠ0・Ⅳ7）、瀬戸・美濃焼10点（Ⅰ4・ⅢⅡ・Ⅳ4）、青磁5点（Ⅰ3・ⅢⅠ・ⅣⅠ）、白磁3点（ⅣⅢ）、近世土師器皿4点（ⅠⅡ・ⅡⅠ・ⅢⅠ）、肥前陶磁器15点（ⅠⅡ・ⅢⅡ・ⅣⅠⅠ）、越中瀬戸焼2点（ⅣⅡ）、その他6点（ⅡⅠ・ⅢⅡ・ⅣⅢ）であり、中でも土師器皿が全体の70%台と突出する。貯蔵・調理器具の甕・壺・播鉢類では越前焼の量比が22点と多く、加賀焼・珠洲焼といった地元在地窯と競合する中での安定した供給がうかがえる。また、高級食膳具とされる施釉陶磁器類の出土は少なく、16世紀代を主体とする青花は実測されていない。近世以降では土師器皿・肥前陶磁器・越中瀬戸焼などの主要遺物がいずれも17世紀代を示すなど、検出された遺構の下限については前田利常によって小松城および小松町の整備が進められた寛永16年（1639）以降の間もない時期と想定しておきたい。

最も量比を占める土師器皿は幾つかの遺構でまとまった出土をみせており、主に器形・成形を基準にA～F類に分類した（第5章総括第251図）。なお、個々の製品における分類・年代観等については観察表及び本文中に示したとおりであり、時期的にはほぼ13世紀後半～17世紀代に収まるものと思われる。

第3節 Ⅰ区第1面の調査成果

SB1（第16図、第20図1・2） B～C15～16グリッドに位置する2×7間東西棟の側柱建物である。規模は桁行6.4m・梁間3.5mで、建物主軸はN-14°Eである。桁行柱間は比較的整っている南桁で0.9～1.1mを測り、梁間は柱間を考慮すると3間が想定されるが東西ともに2間の検出に止まっている。柱穴埋土は上層が黄灰～褐灰砂質土、下層が黒褐色砂質土を基調とする。遺構の切り合いは、堀状遺構SD36に切り込まれ、カワラケ集中箇所を内包しSI3と切り合うが先後関係は不明である。出土遺物は1・2を図示した。1はP87出土の瀬戸・美濃灰釉卸皿。内側面には細い格子目状の線描き文様がいり、口縁端部は肥厚せずにやや丸味をもつ。編年的には古瀬戸前期様式Ⅲ期（1250～）に近く（藤澤2007）、14世紀後半以降に当地への瀬戸・美濃食器類の搬入が一般化する以前の古手の製品とみられる。2はP118出土の土師器皿A類。摩耗のため調整等是不明。体部は斜め上方に直線気味に立ち上がる。

SB2（第17図、第20図3） C16グリッドに位置する2+×3+間の側柱建物である。建物の大半が調査区外に伸び、残存規模は桁行2.3m・梁間1.0mで、建物主軸はN-33°Eである。桁行柱間は1.0～1.2mを測る。柱穴埋土は上層が褐灰砂質土、下層が黒褐色砂質土を基調とする。遺構の切り合いは、

堀状遺構 SD36に切り込まれる。3は P107出土の土師器皿 A 類。口縁部外面の横ナデ幅は狭くナデの下方には弱い稜が巡る。外底面に残るスノコ状の痕跡は乾燥時の下敷きの痕か。

SB3 (第17図) B~C16グリッドに位置する1×3間の小型の側柱建物である。規模は桁行2.4m・梁間1.4mで、建物主軸は N-5° W である。桁行柱間は0.7~0.8mを測る。柱穴埋土は褐灰砂質土を基調とする。遺構の切り合いは、堀状遺構 SD36に切り込まれる。遺物は出土せず詳細不明。

SI3 (第18図、第20図4~15) B15~16グリッドに位置する略長方形の堅穴建物で、規模は長軸3.7+m・短軸3.3m・深さ0.4mを測る。内部の柱穴は1×1間の長方形で2.3m×1.3mを測り、建物主軸は N-14° E である。埋土は堅穴が黄灰砂質土、柱穴が褐灰砂質土を基調とする。遺構の切り合いは、堀状遺構 SD36に切り込まれ、SB1及びカワラケ集中箇所と重複するが先後関係は不明である。実測された土師器皿は、口径10.8~11.4cmの大皿 A 類 (4~7) と口径7.4~8.4cmの小皿 A・C 類 (8~13) に大別される。大皿外面の横ナデは弱く不明瞭で器高の約1/2程度に施される。体部はやや内湾気味に立ち上がり口縁端部は変化に乏しい。また、深めの7の見込にはハケ状工具の痕跡が部分的に残る。小皿は全体に器形が歪み、器高は1.0~1.4cmと立ち上がりが浅く扁平となる。口縁部を緩やかに立ち上げる8~11 (A 類) と屈曲の強い12・13 (C 類) がみられる。鉄製品14は刀子の茎か。15は凝灰岩製の砥石。

カワラケ集中 (第18図、第20図16~44) B16グリッドの、SB1及び SI3内に位置する浅い不整形な土坑状遺構で、覆土上層には大量のカワラケ (土師器皿) 片を含む。16~44を図示した。大皿 A 類 (16~27) の口径は10.1~12.4cmと幅をもつが、10cm台5点、11cm台5点と両法量が一定量を占める。体部は内湾気味に緩やかに立ち上がり、横ナデは弱く境目は不明瞭である。26の外側面には刀子の茎の一部が錆びて付着するが、共伴する43と関連するか。29~41は口径6.6~8.2cmの小皿 A・C 類である。器形は歪み扁平気味で細片が多いが、中でも37~39は口径6cm台と小振りとなる。42は口縁部下に径約2.5mmの孔があく。目的は不明であるが、孔の周囲が僅かにくぼんでおり焼成前にあけられた可能性もある。刀子43は刃先及び茎後が破断しており、SI3-14とは接合しない。44は凝灰岩製の砥石。なお、出土した土師器皿の組成、成形・色調等は SI3に近いが、新しい指標とみられる口径10cm台及び6cm台の小振りの一群が一定量含まれており、SI3の終焉後に意図的に当地に一括廃棄された可能性も考えられる。そのため、周辺域の重複する遺構の年代観としては、SB1 (13世紀後・末) → SD20 (14世紀前) → SI3 (14世紀中) → カワラケ集中 (14世紀中・後) を想定しておきたい。

SE3 (第18図、第21~24図46・48~64) SD36の西側立ち上がり部分に掘られた結桶積みの井戸で、上方は SE14に切られる。掘り方は長軸2.2m・短軸1.7mの略楕円形を呈し、中心西寄りに直径・高さ約0.4mの結桶が残存していた。結桶は桶板48~64を未図化であるが竹製の箍で留められた状態で、底板が抜かれた状態で検出した。結桶外面には「安」が墨書されていた。桶材はすべてスギである。出土遺物は少なく、46は越前焼甕の肩部分である。押印等はみられず時期等の詳細は不明である。

SE4 (第19図、第21図47・65・66) 調査区北端の B17グリッドに位置する深さ約1mの土坑状遺構で、直径1.4mの略円形を呈する。47は口径10.3cmの土師器皿 A 類。口縁部の横ナデ幅は狭く器高の1/3程度に施す。色調は白色味が強い。口径が10cm台と小さく、時期的にはカワラケ集中に近い。65は折敷を転用した組でアスナ口材、両面に刃物痕が残る。端部には一対の丸孔が2カ所に穿たれる。

SE5 (第19図、第25~35図67~99) B16グリッド、SD36内で検出した井戸で、掘り方は2m前後の略楕円形を呈するが東・南側を攪乱されており規模は不明。縦板を円形に組んだ直径65cm前後の円形縦板組の集水施設に、上方は内法60cmの方形状の切石積みとする。縦板78~99は長さ77cm前後・幅6~14cmのスギの板材で、箍の痕跡が認められず、底方向 (実測図上方) の形状が不整であること

から結桶ではなく円形縦板組と判断した。切石は北・東・西の3方一段のみを確認した。切石73～75は灰白色の凝灰岩製で、長辺69～81cm・短辺42～47cm・厚さ8～10cmの長方形材で、複数幅（6～7mm・17mm）の鑿を使い分けて整形している。東・西材の端部には切り欠きが施されており、4辺一体の材として整形されたものである。遺物は67～99を図示した。67は完形品の土師器皿A類である。平面形は口径10.5×9.8cmの楕円形で大きく歪み、器壁は厚く底部は丸底気味となる。口縁部の横ナデ外反は顕著で、ナデの下端には稜が巡る。また、口縁の一部に油煤痕、内面全域に白濁した薄い塗膜状の付着物が認められ、灯明皿を何かの用途として転用した後にそのまま廃棄されたものと思われる。厚手・丸底等を特徴とする15世紀以降の製品である。68は青磁盤の底部片である。釉調・釉色の均一な優品で、端正な三角高台の畳付部を釉剥ぎする。69は越前焼播鉢。よく使われており、内面には摩滅した播目の痕跡が僅かに残る。平底で播目が見込にも及ぶことからIV3期（1450～90）以降とした。70は口径68.2cm、現高84.8cmの越前焼大甕である。SE5掘り方、SE5に南接するSK19、SI3内のP117から出土しており、ほぼ完形に復元できる。口縁部は大きく外反し、内面に弱い段、外面には2段の稜がみられる。また、肩部には「本」と「格子目」を組み合わせた押印がほぼ等間隔に巡る。口縁帯がなくなり、口縁部が明確に肥厚する以前のIV2・3期（1410～90）頃の製品か。なお、SD36に切られる井戸の時期については、SI3やカワラケ集中よりも一段階新しい15世紀以降と想定されよう。76は掘り方から出土した箱等の組み合わせ材でスギ材。

SE6（第19図、第29図100～102） B16グリッドに位置する素掘りの井戸で、SI3に切り込まれる。直径0.9mの略円形を呈し、深さは1.2mを測る。100は口径11.4cmの土師器皿A類片。口縁部の横ナデは狭く不明瞭である。SI3出土品に近い。101は凝灰岩製の砥石、102はスギ材の曲物底板である。

SE14（第18図、第36・37図103～110） B16～17グリッドに位置し、SE3を切り込む。井戸側は抜かれており構造は不明。遺物は103～110を図示した。103・104は近世の土師器皿である。油煤痕が口縁部周縁を巡る灯明皿で、焼きは硬く砂粒の含みは少ない。平底で口縁部上端を僅かにつまみ上げ、見込には弱いハケ状具の痕跡が残る。同タイプの製品は金沢城下では17世紀半ば頃に位置づけられており（滝川2019）、搬入品の可能性もあるか。105は口縁部を欠く肥前の仏飯器で、高台裾には2条の染付圏線がはいる。脚部内を深く削り込む古手のタイプで17世紀中葉前後とした。なお、加賀藩3代藩主前田利常が隠居城として小松城に入城するのが寛永16年（1639）のことであり、これら井戸についてもその最初期の城下整備に伴う遺構群であると考えられよう。106は竿秤の皿で、口径約8cm・重さ9.4gの銅製。2方に紐通しの円孔が穿たれる。107は凝灰岩製の石製鉢、108～110は凝灰岩製の切石ないし石材で埋め戻し時に投入されたものである。

SD36（第38・39図、第40・41図117～135、137～143） B16～17グリッドに位置する大型遺構で、東側は調査区外へ延び北・西・南は立ち上がる。断面形状や堆積状況などから、東西方向に流れる大型の溝と推定した。調査当初の所見では、小松城下町形成に伴う堀割（大型堀状遺構）と推定したが、時期はそこまで下がらず、その性格については再考を要する（第5章参照）。溝幅約9.6m、埋土は最下層が黒色粘土の他は褐灰色粘質土を基調とし、深さ1mを測る。遺構の切り合いはSB1・SB2・SI3・SE3・SE5・SK19を切り込み、SE14・15に切られる。出土遺物は117～135・137～143を図示した。117～122は口径6～8cm台の土師器皿A類。117～120は器高が0.8～1.4cmと浅めとなる。121・122は丸底タイプで122の口縁部には灯明の油煤が付着する。浅めタイプよりも新しい15世紀代の小皿類である。口径10cm台の123・125は口縁部を幅広に横ナデ外反させ下端には稜が巡るD類で14世紀代。126は口径が13.0cmと大きく口縁端部には弱い面取りを施すB類で古手の様相をもつ13世紀後半代の大皿とした。また、127は作りが滑らかで口縁部を先細りに引き出す16世紀代の京都系土師器皿E類

である。128は外面に綾杉状のタタキ調整を施す珠洲焼甕の胴部片。129は炭素が吸着し淡黒色となる瓦質擂鉢である。外面と底部には粗いハケ調整が施され、擂目は縦方向にはいるが条数等に規則性はみられない。130は加賀焼擂鉢の胴部片。擂目は間隔があく。131は瀬戸・美濃の灰釉卸皿である。口縁部は水平に肥厚し端部を内側に僅かにつまみ出す。内面下部は無釉とし断面には漆継ぎの痕跡がみられる。古瀬戸後期様式Ⅱ期（1400前後）とした。132は瀬戸・美濃灰釉花瓶。口縁部は外反し端部は僅かに肥厚、内面口縁部以下は無釉とする。131と時期的に近い製品か。133は口縁端部を僅かに外反肥厚させる青磁碗である。外面は無文、内面には浅い型押し文様がはいる。134は青磁碗底部。見込には花文状の印花文が押され、高台内は釉を輪状に掻き取る。135は径2cm前後の円盤状陶製品で、越前焼の加工品である。137は鋳鉄材で、鍋等の容器の底であろうか。143はヒノキ材の舟形木製品か。長方形箱形の船体に舳先を三角形に作り出す。141・142は先端を尖らせた竹材で、杭として用いられたものか。

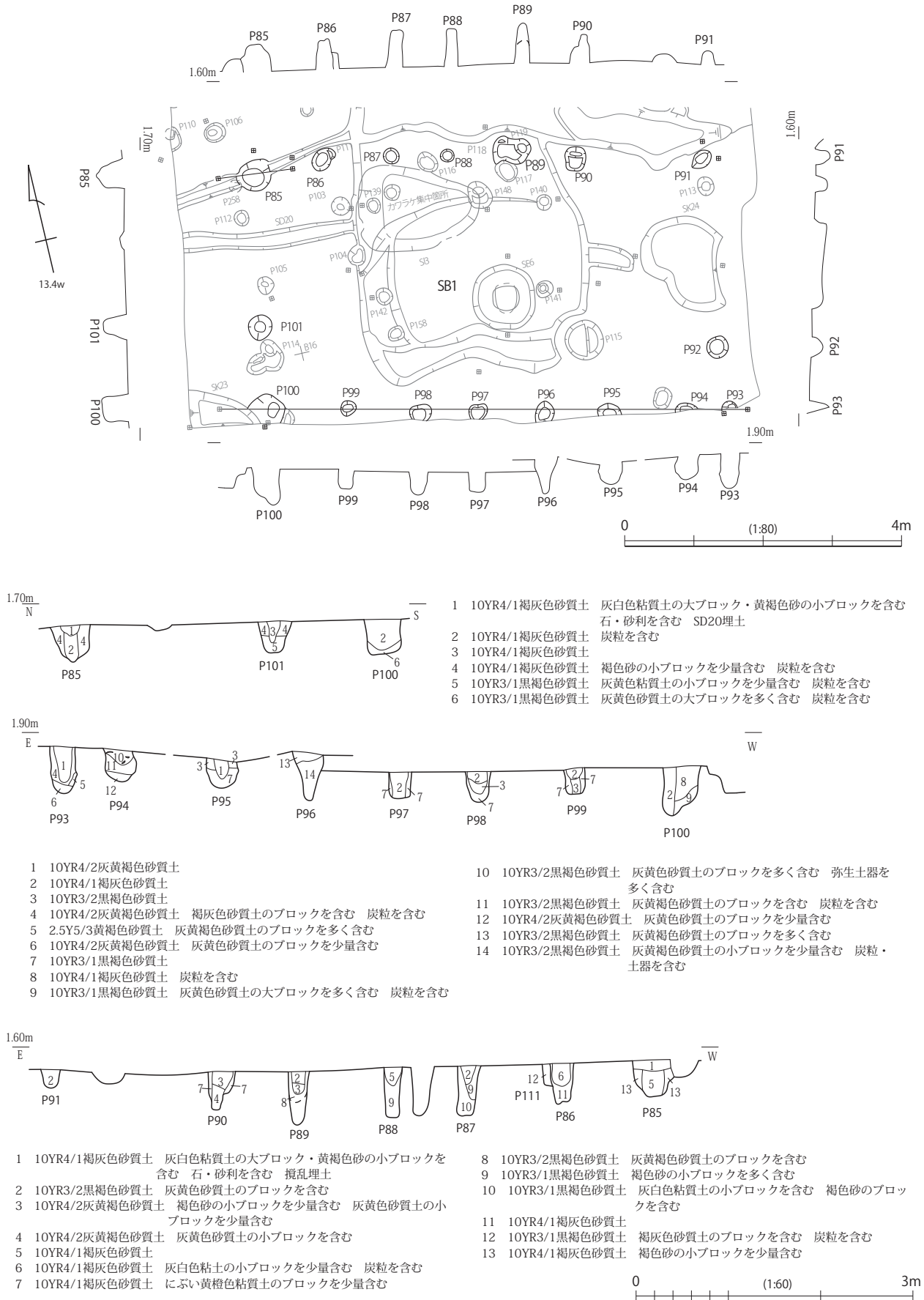
SD36からの出土遺物については13世紀後半代～16世紀代と時期的なまとまりを欠くが、15世紀代としたSE5が堀底で検出され、その上方の堆積土から京都系土師器皿（127）が出土するなど、堀状遺構の下限に関しては16世紀代の年代観を想定しておきたい。

SD20（第41図144・145） SI3・カワラケ集中に切られる東西方向の溝状遺構である。144・145は2点共に A 類土師器皿で、144は器形全体が歪み接地点は安定しない。145は細片のため口径がもう少し大きくなる可能性がある。体部の立ち上がりは丸みを帯び、器高の約1/2を横ナデ外反させる。SI3等より古い東西に軸をもつ区画溝となるか。

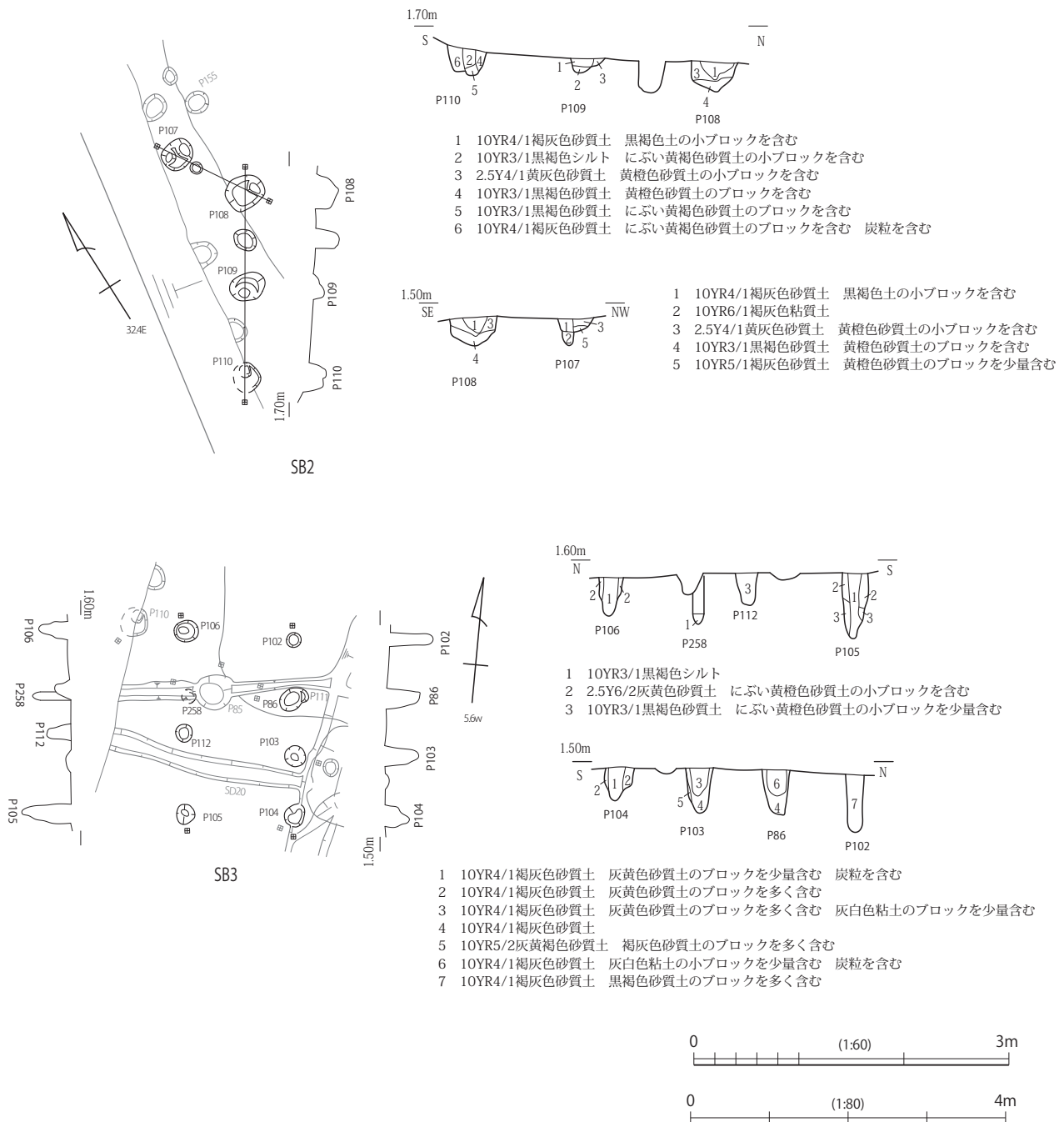
I 区その他の遺物 111は珠洲焼擂鉢の底部片である。擂目は見込にも施され、底部外面には静止糸切り痕がみられる。使用痕は顕著ではなく、擂目はよく残る。V期（1380～）以降か（珠洲市教委2006）。なお、当遺構からはそれ以外にも SE5出土の越前焼甕（70）と同一個体とみられる甕片が大量に出土しており、関連がうかがわれる。114は加賀焼の甕胴部片。降灰等はなく無釉で落雁質の胎土をもつ。14世紀代に盛期をもつ湯上ユノカミダニ窯の製品か。115は珠洲焼擂鉢片。内面には使用痕があり、1本の条線が横断するが明確な擂目はみられない。Ⅲ期（1250～）以降か。116は須恵器甕片。内外面共に摩耗する。136は加賀焼の擂鉢胴部片である。外面には縦方向のケズリナデ調整、内面には間隔をあけて単線2本の擂目状条線がみられる。顕著な使用痕は認められない。147・148はP148出土。共に口径7cm台の土師器皿 A 類小片で、器高は1.2、1.3cmと浅く扁平気味となる。150は加賀焼擂鉢の片口部分である。口縁端部はやや丸味をもつ。胎土は落雁質で焼成は良好である。湯上ユノカミダニ窯の製品か。152は加賀焼の肩部分で押印が施される。正格子で上2段は正方形、下2段は長方形で構成されるか。14世紀代を中心に操業する湯上ユノカミダニ窯に類例がみられる（宮下1997）。153は肥前染付碗。外面には雲気文が描かれ、高台豊付は釉剥ぎされる。17世紀中頃の初期伊万里の製品である。154は瀬戸・美濃の灰釉皿底部片で折縁皿とした。外面は無釉で回転糸切り痕を残す。

155～226は第1面遺構に混入した、第2面由来の弥生土器と石製品である。中期中葉の小松式が主体であるが、「く」の字甕や後期法仏式の甕等も見られる。

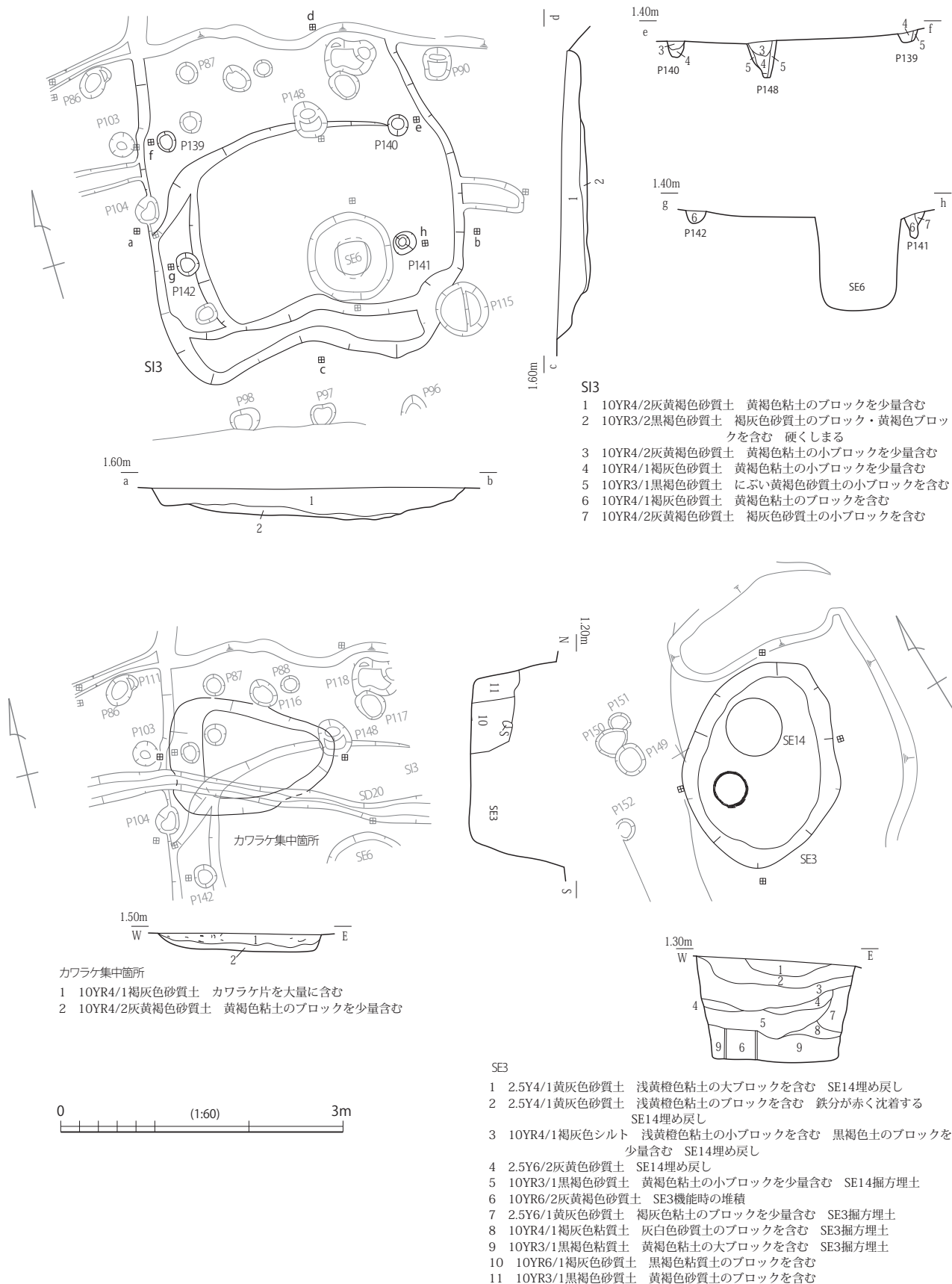
第3節 I区第1面の調査成果



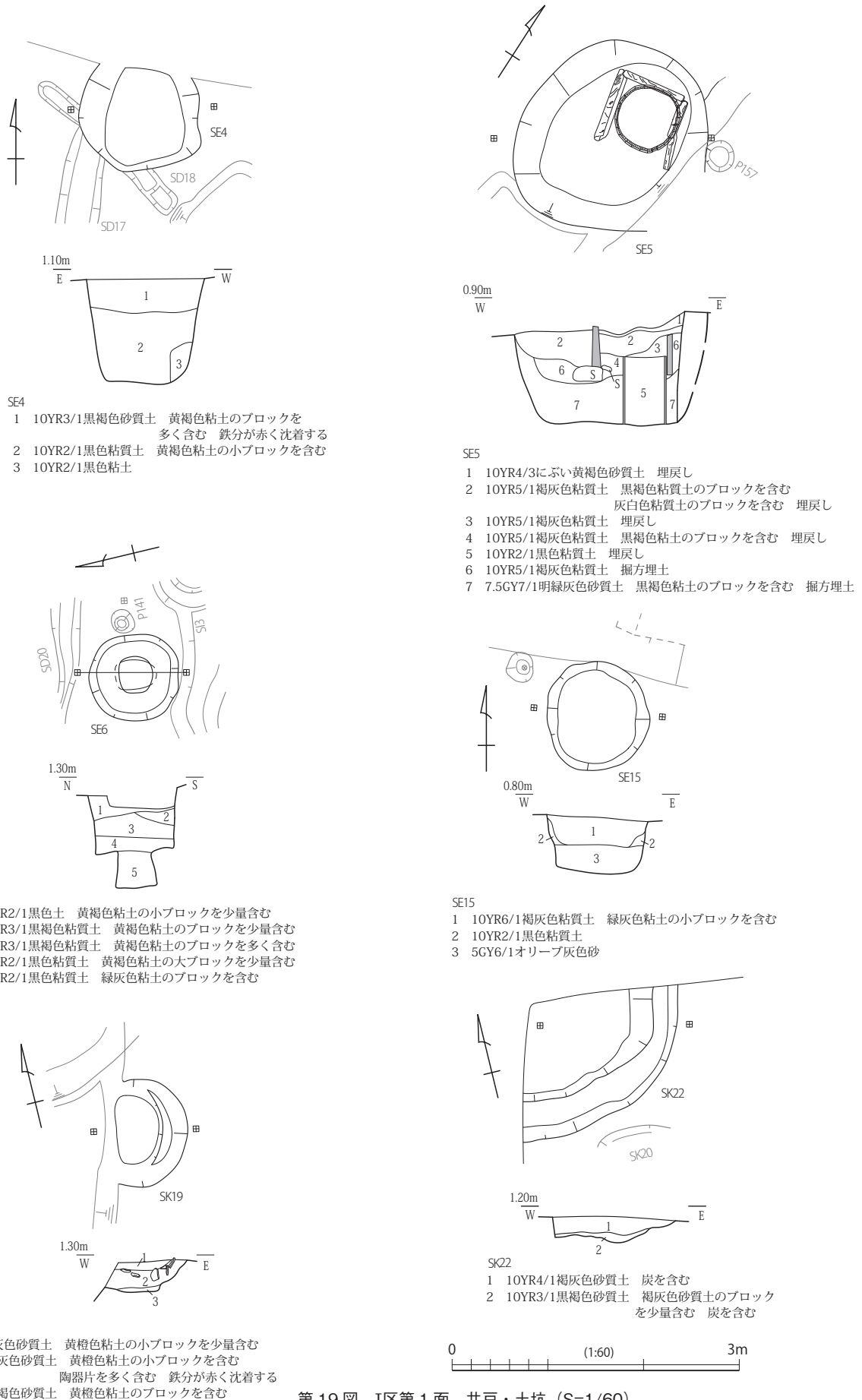
第16図 I区第1面 掘立柱建物(1) (S=1/60・1/80)

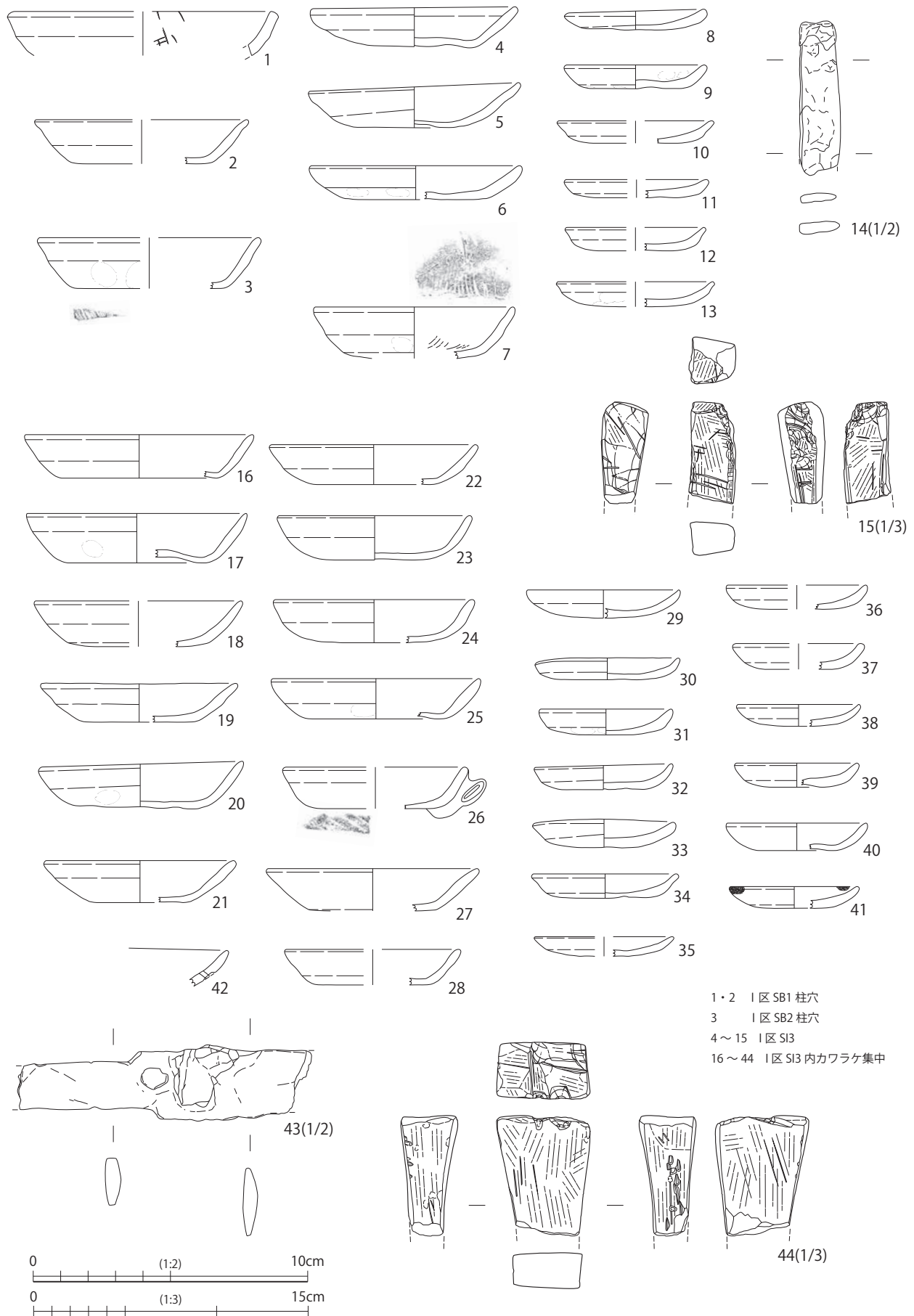


第17図 I区第1面 掘立柱建物 (2) (S=1/60・1/80)

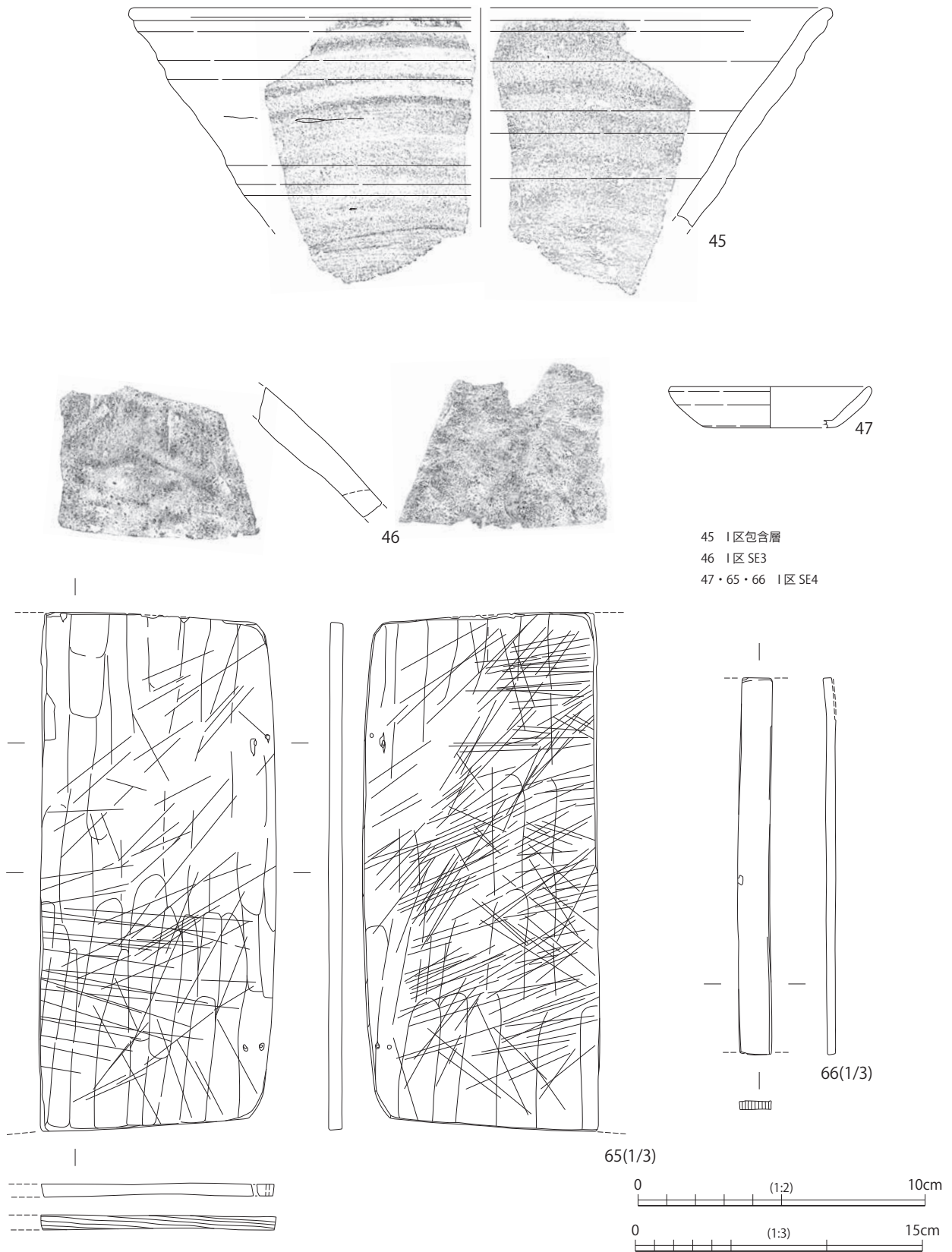


第18図 I区第1面 竪穴建物・井戸 (S=1/60)

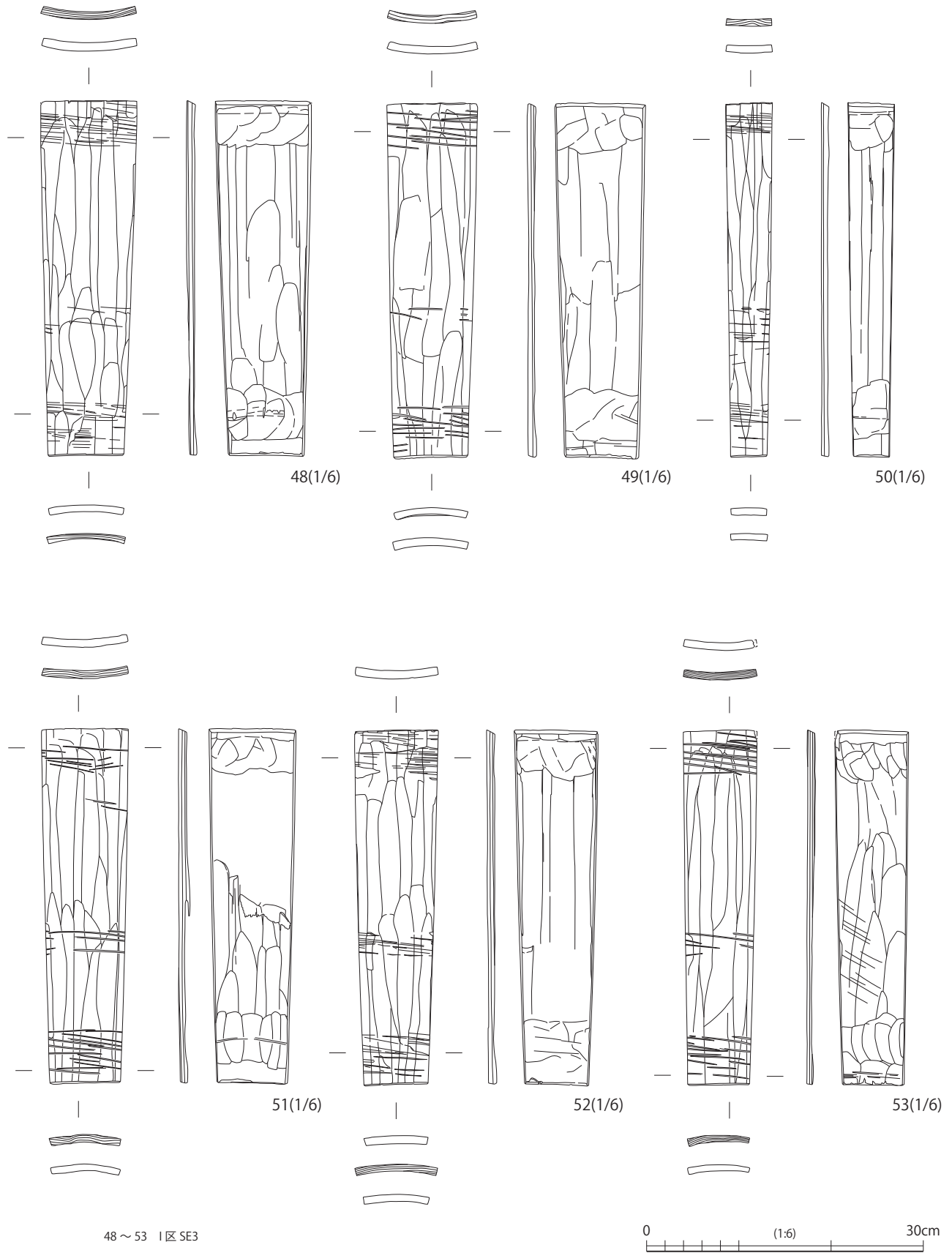




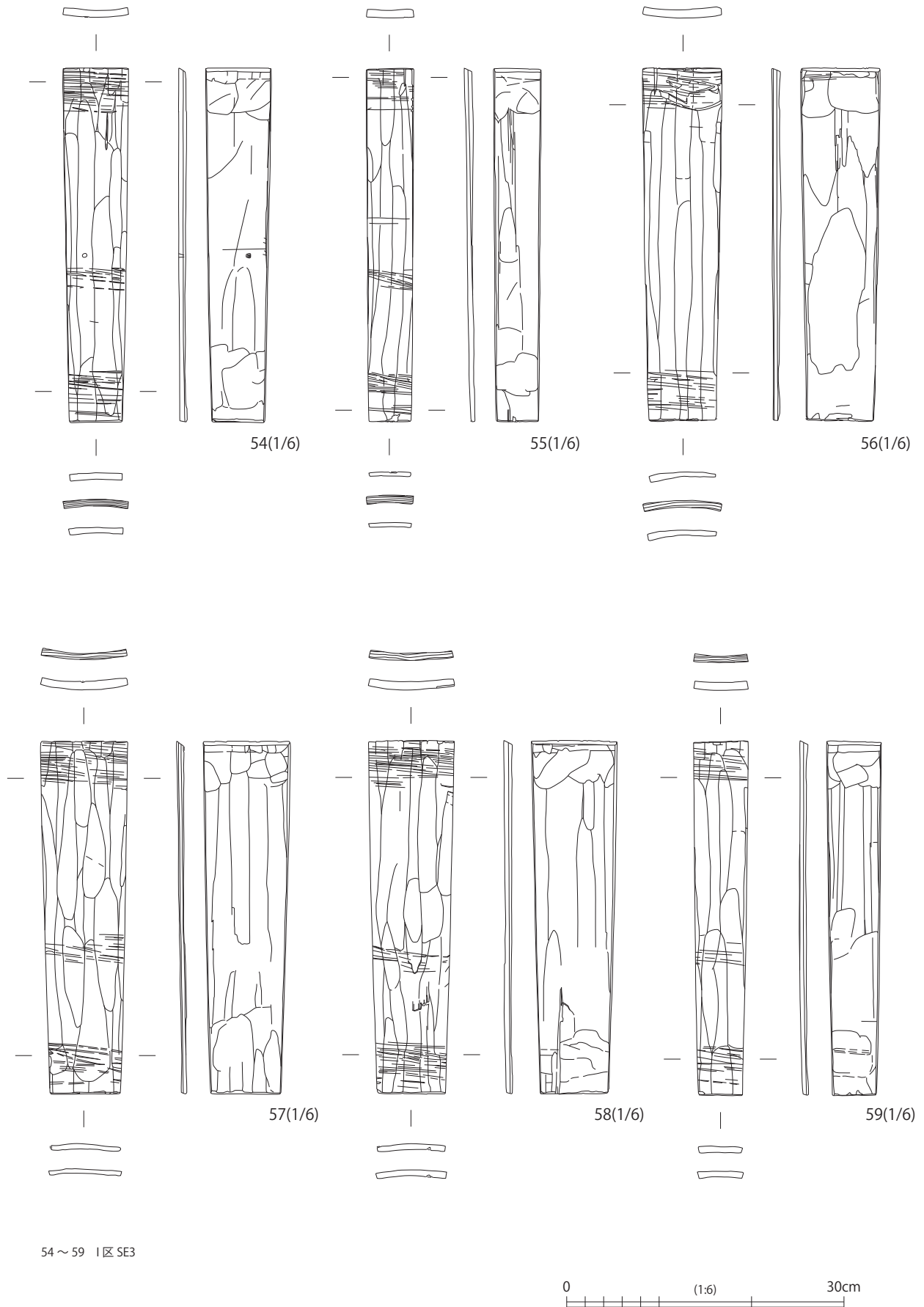
第20図 第1面出土遺物 (1) (S=1/2・1/3)



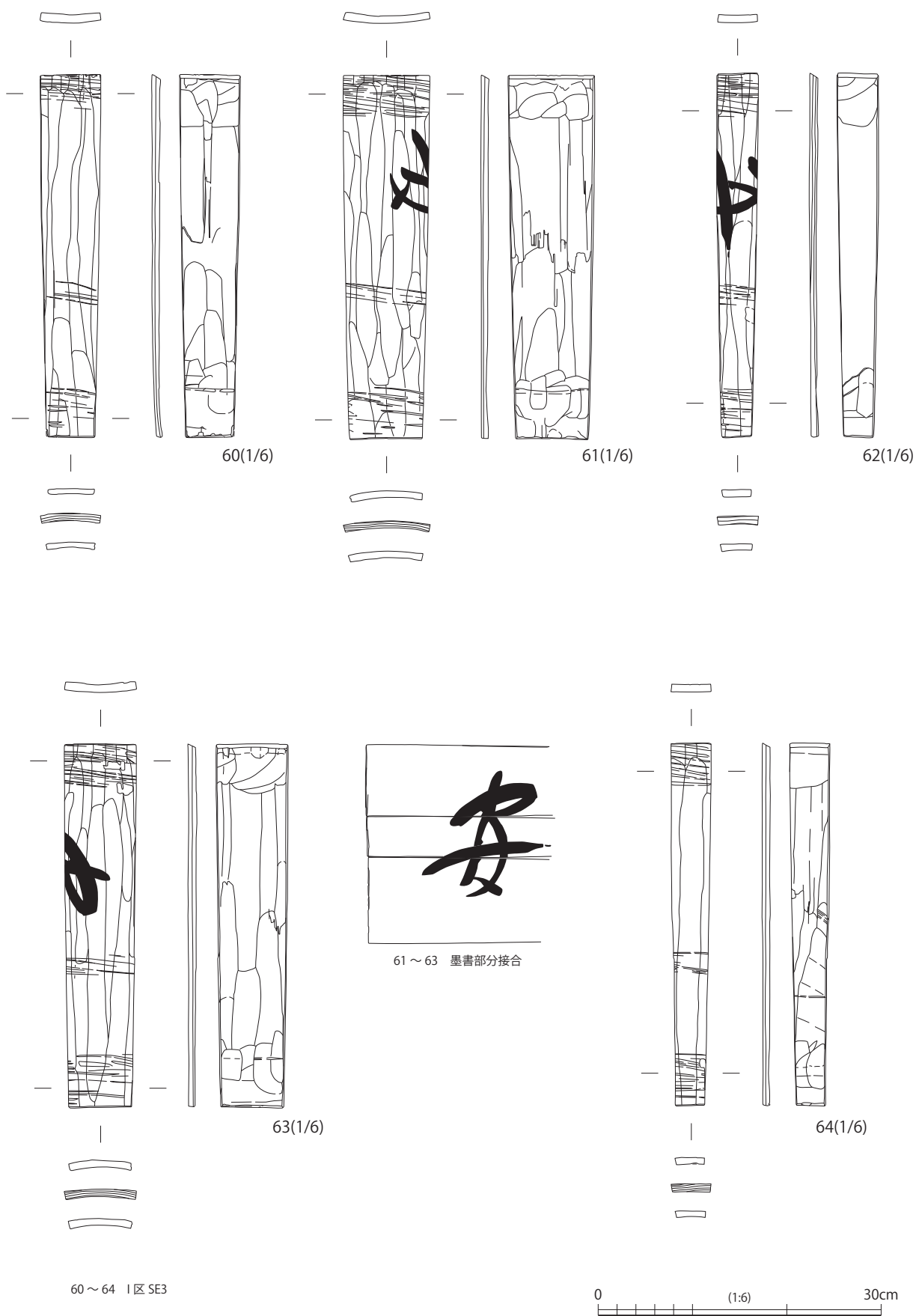
第21図 第1面出土遺物(2) (S=1/2・1/3)



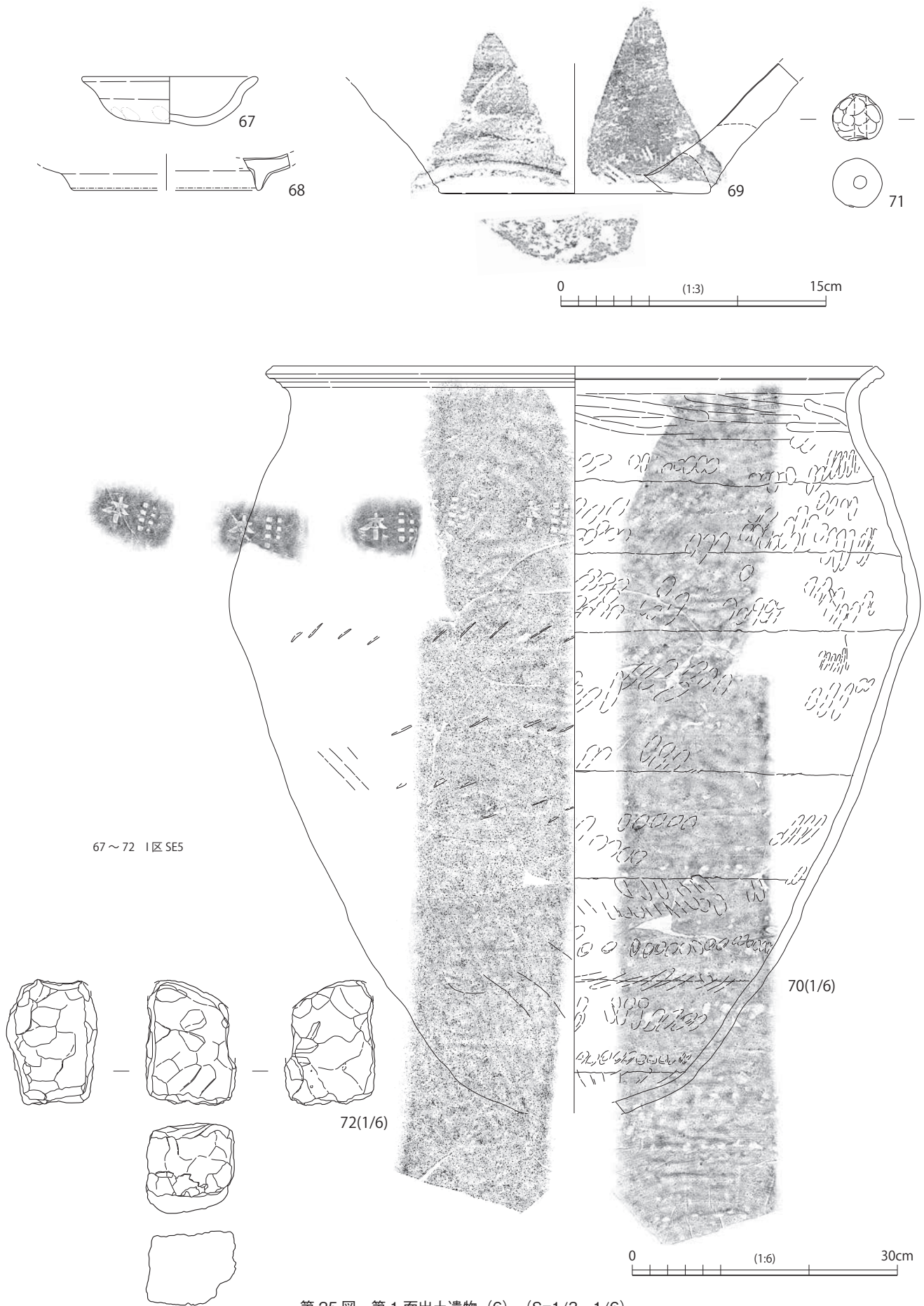
第22図 I区第1面出土遺物(3) (S=1/6)



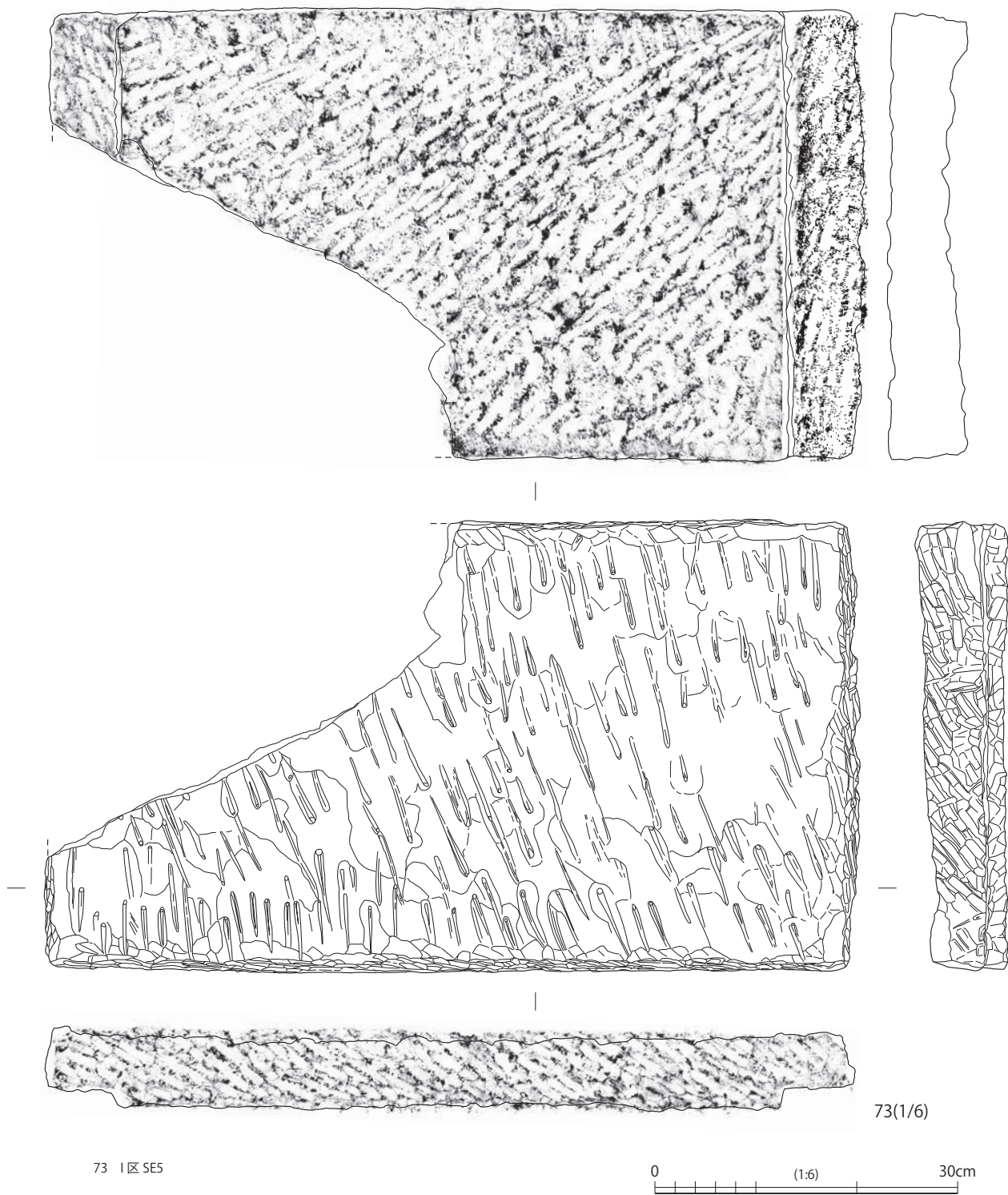
第23図 第1面出土遺物(4) (S=1/6)



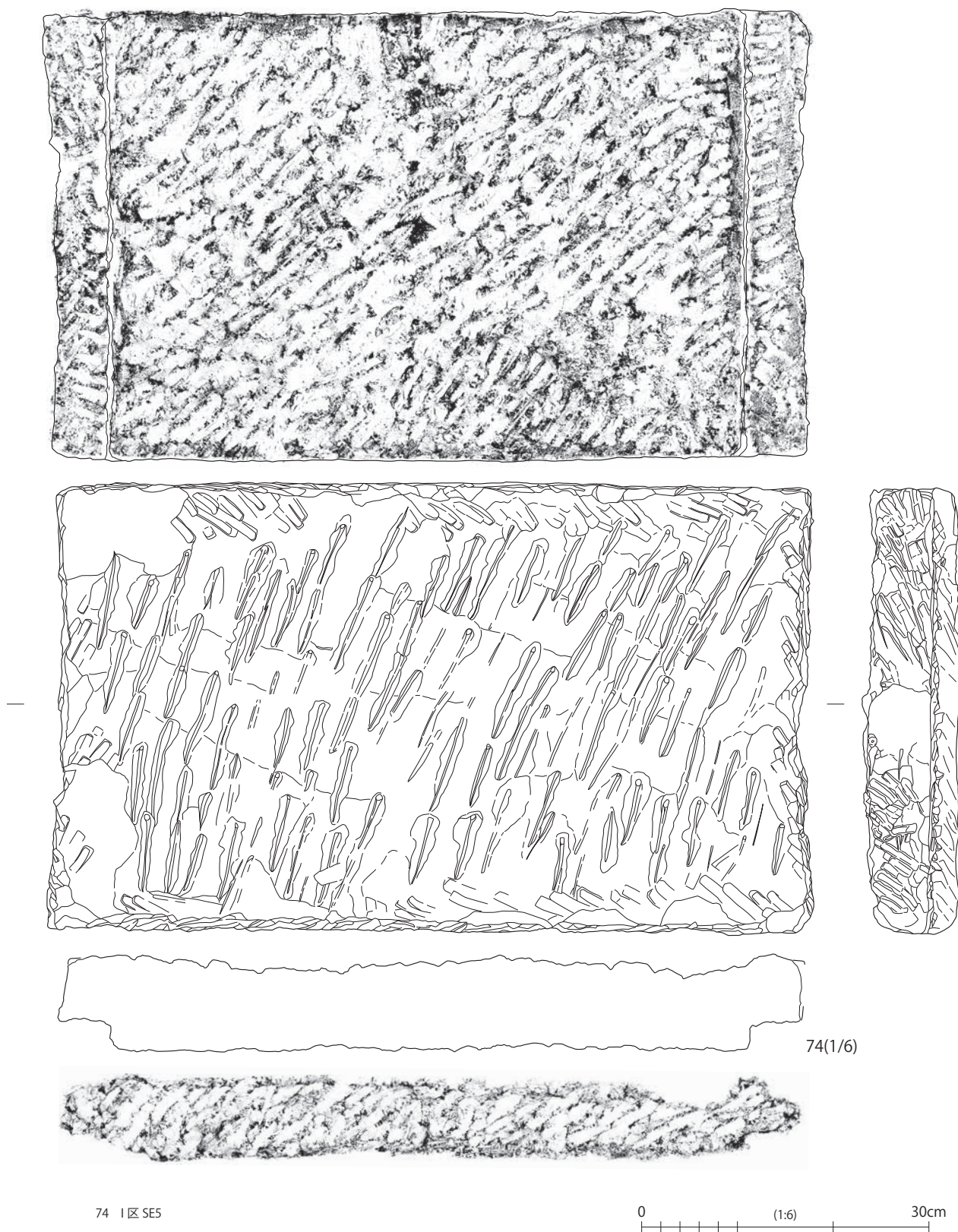
第24図 第1面出土遺物(5) (S=1/6)



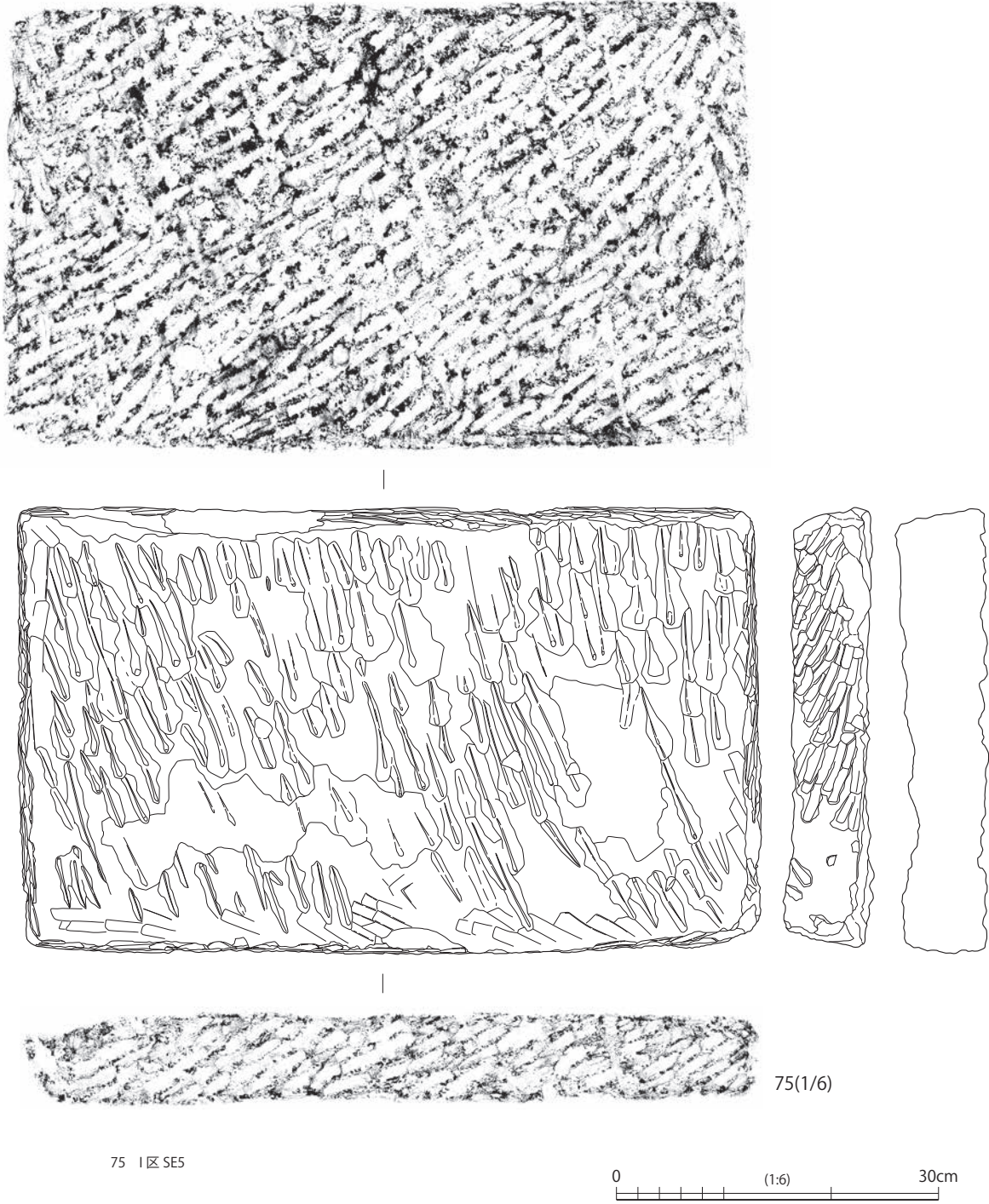
第25図 第1面出土遺物(6) (S=1/3・1/6)



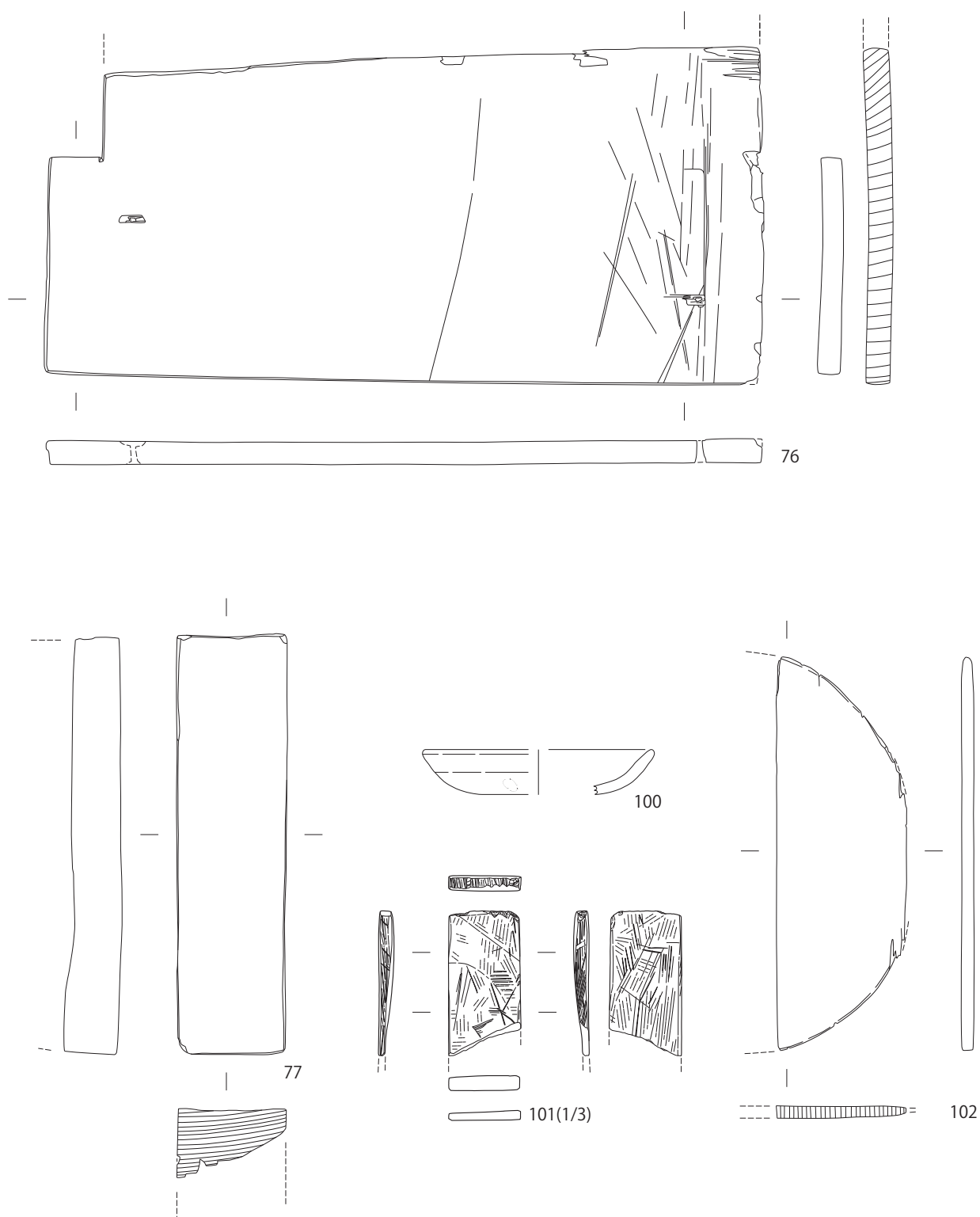
第26図 第1面出土遺物(7) (S=1/6)



第27図 第1面出土遺物(8) (S=1/6)



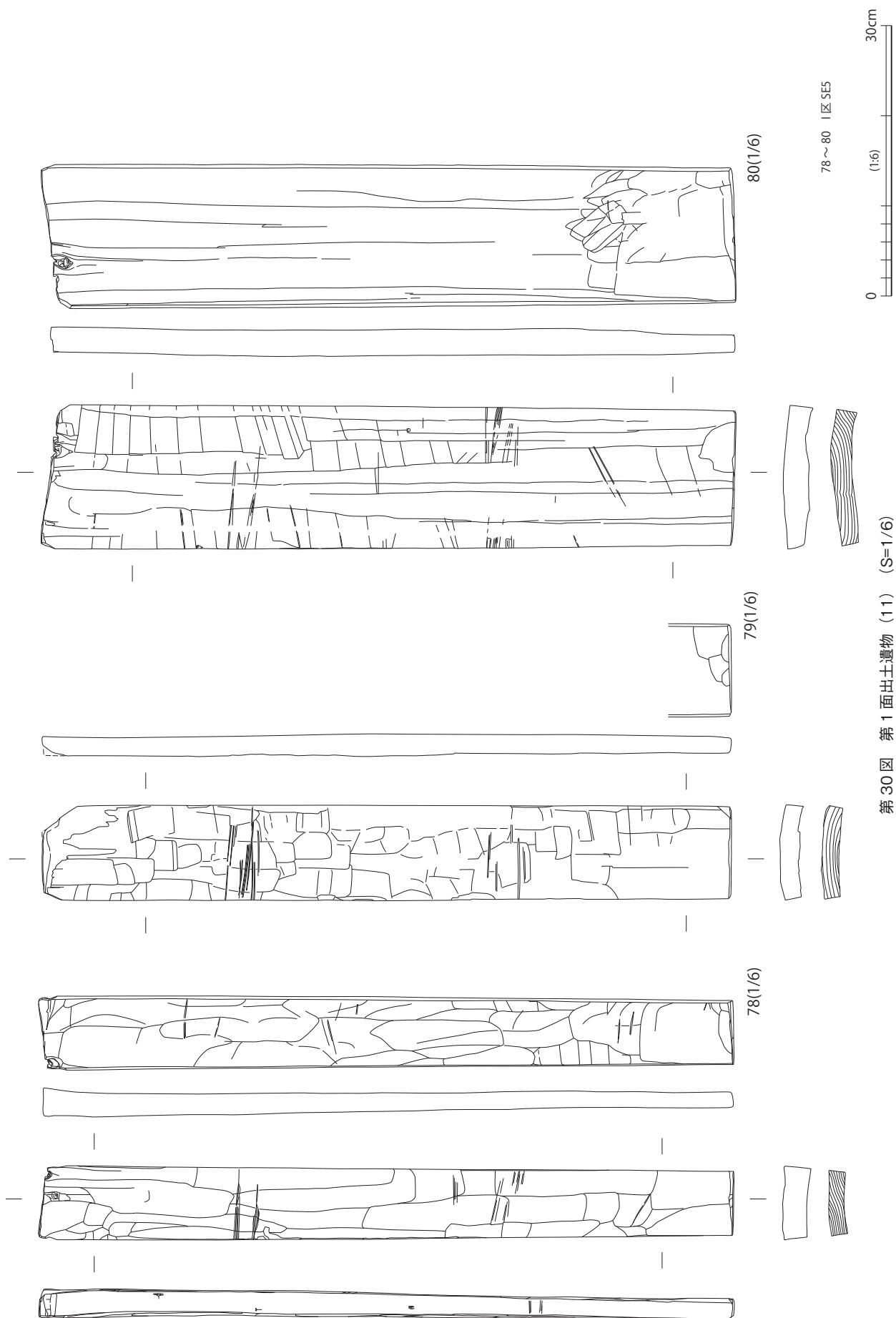
第28図 第1面出土遺物(9) (S=1/6)



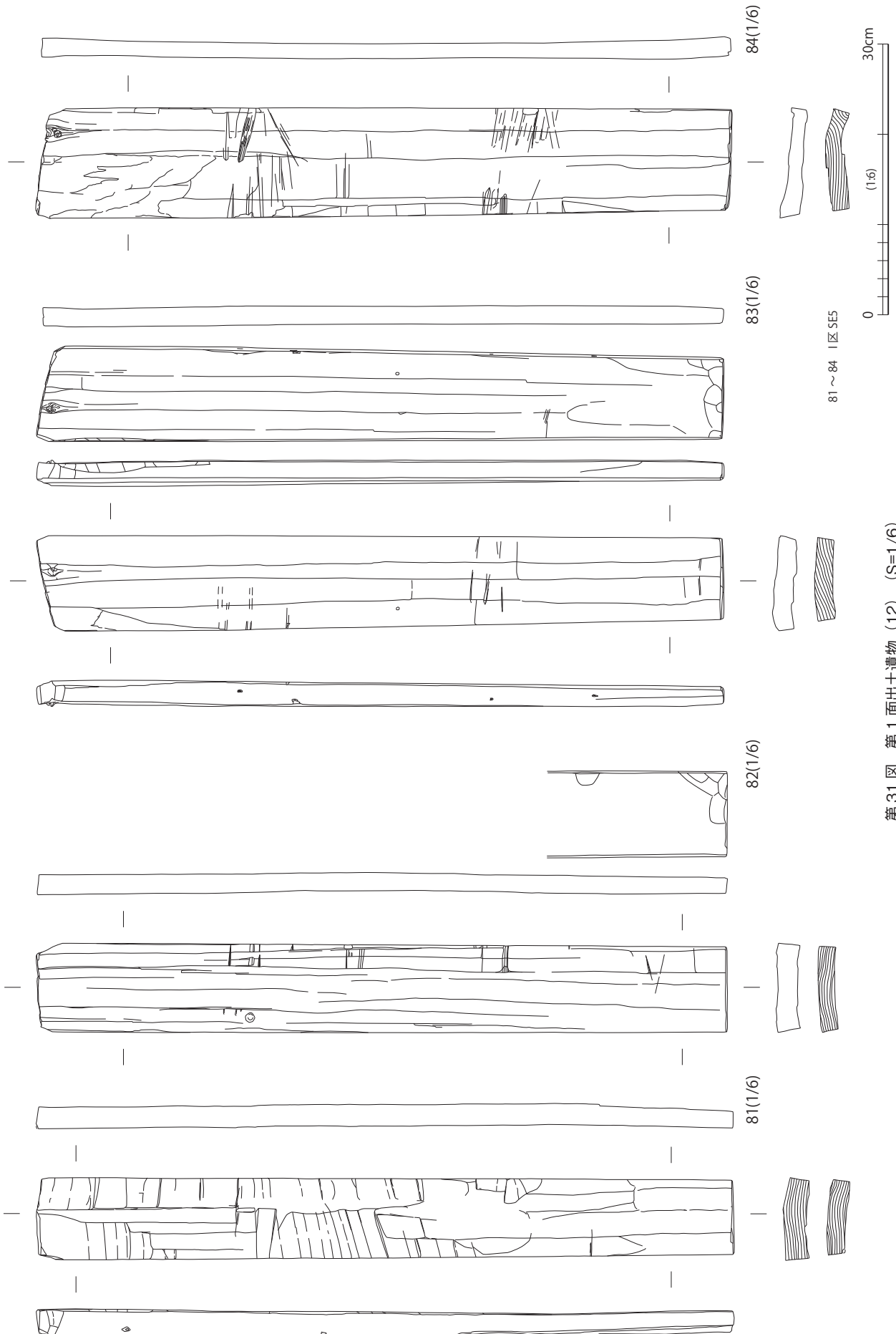
76・77 I区 SE5
100～102 I区 SE6

0 (1:3) 15cm

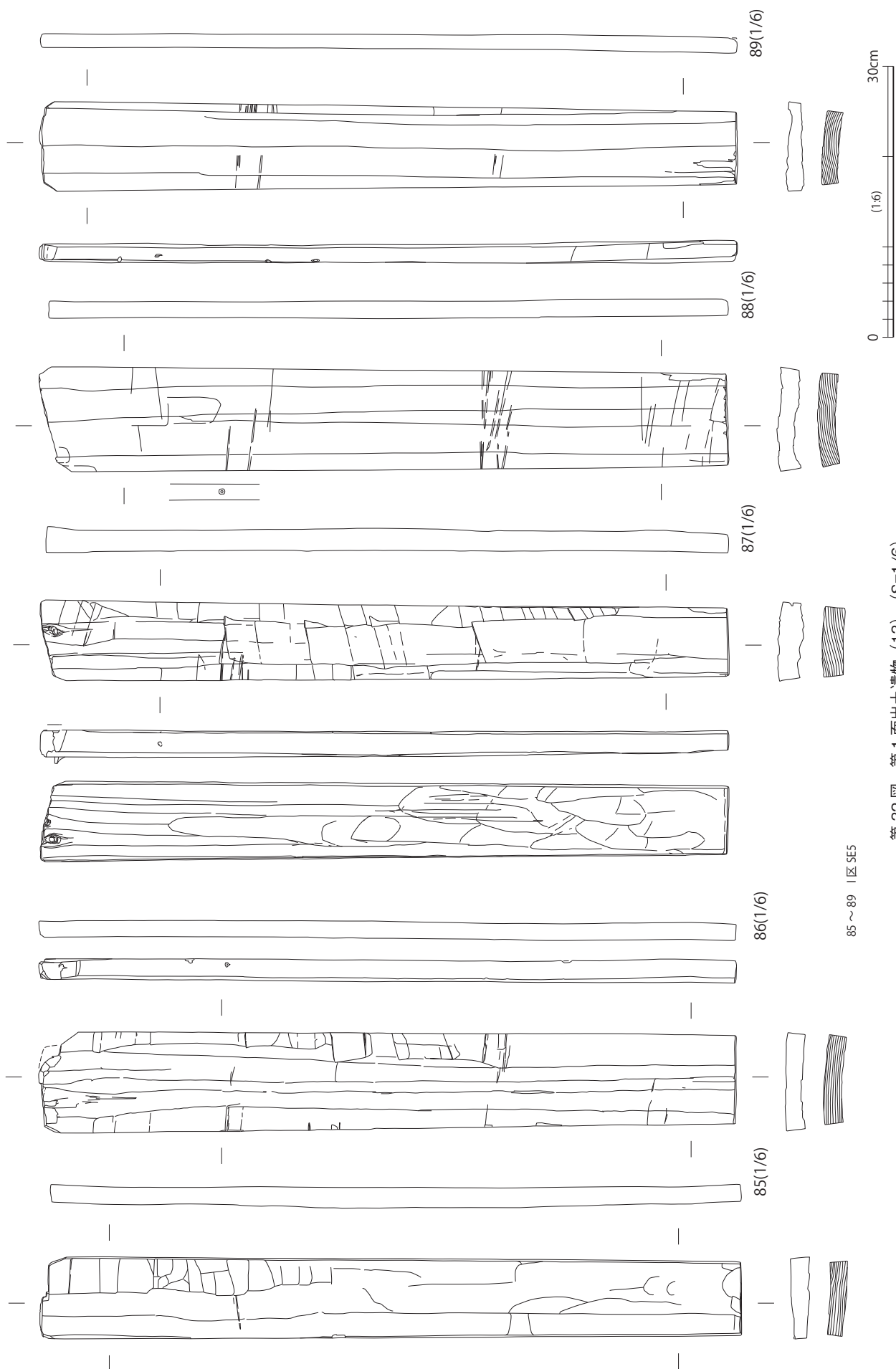
第29図 第1面出土遺物(10) (S=1/3)



第30図 第1面出土遺物(11) (S=1/6)

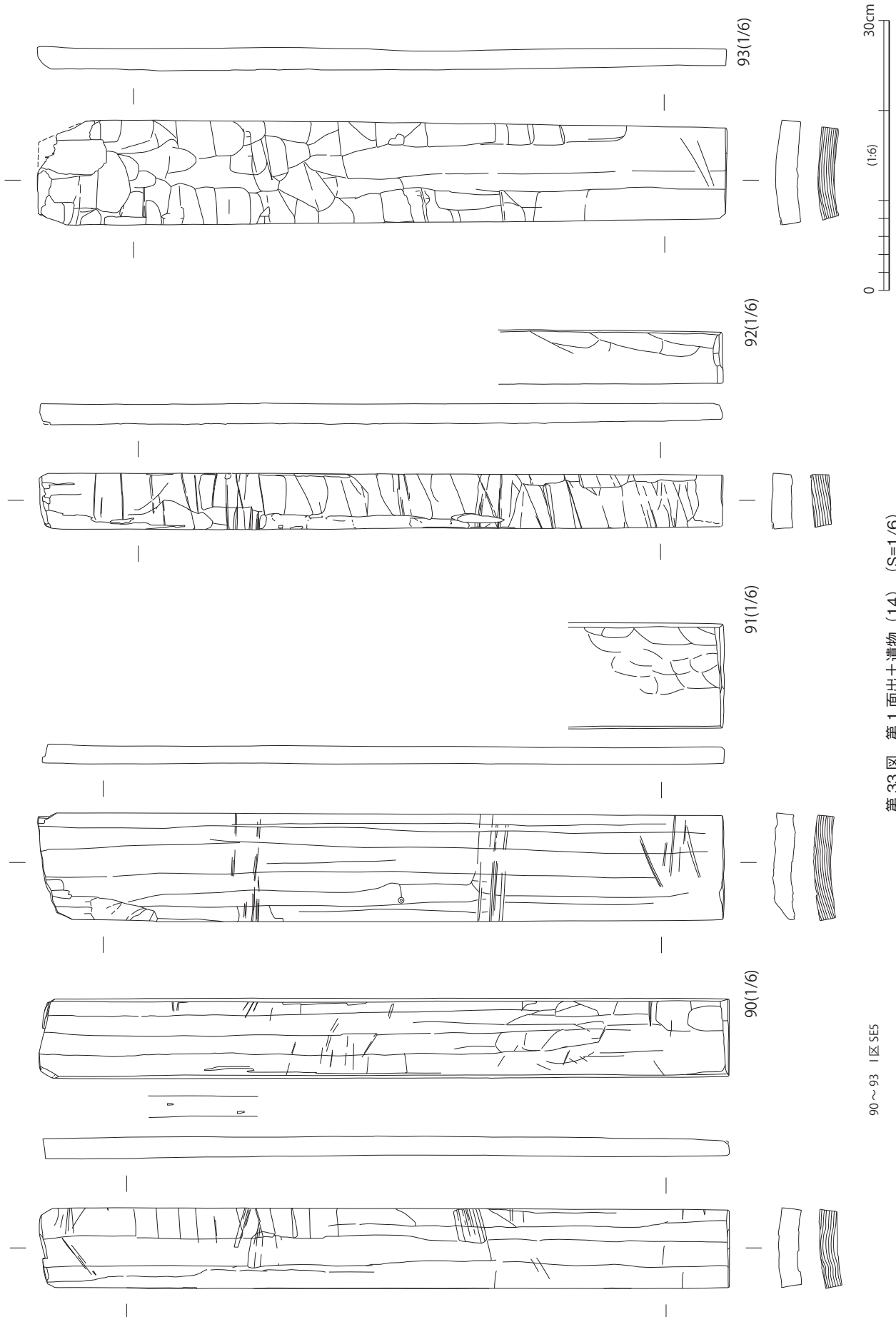


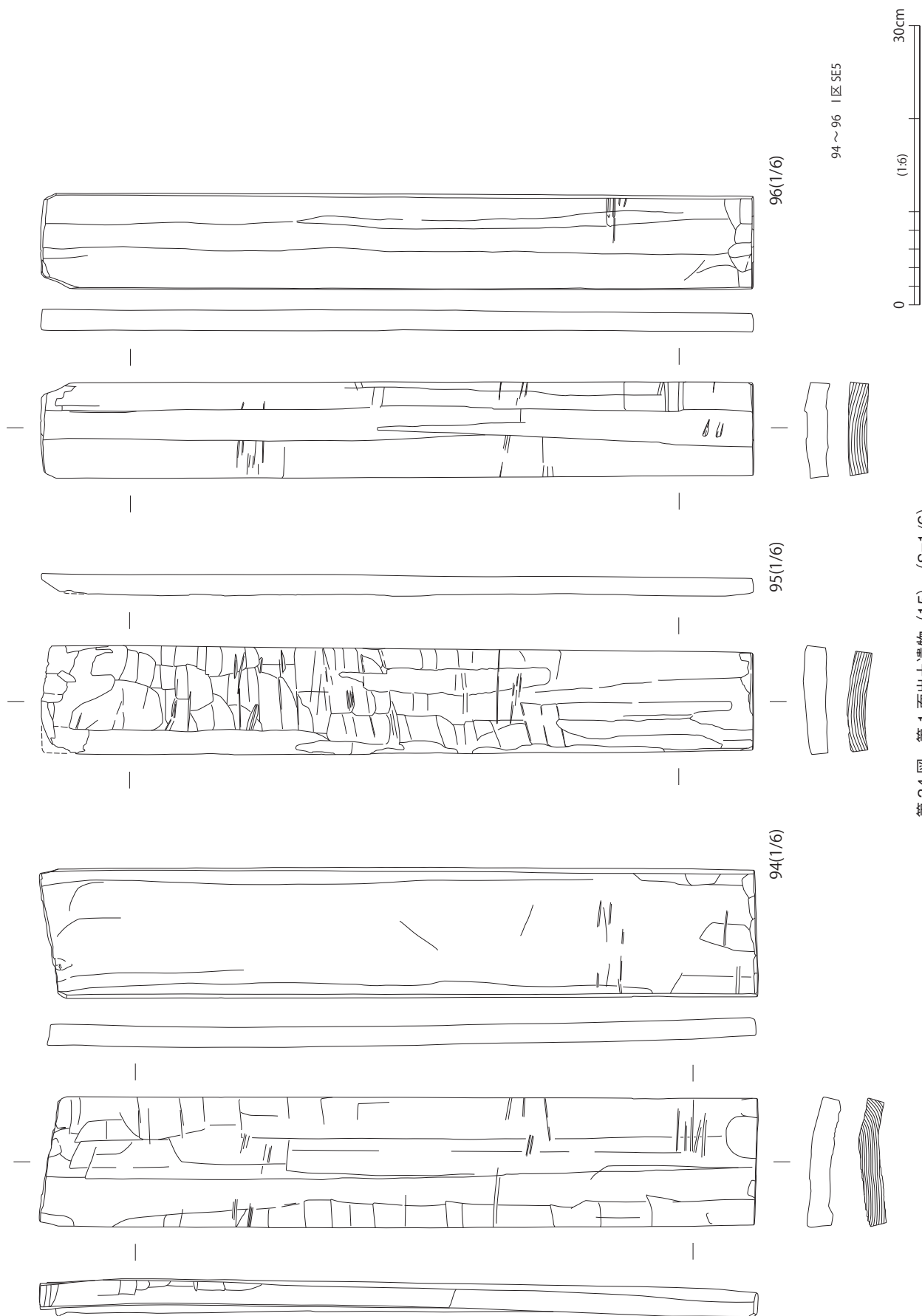
第31図 第1面出土遺物 (12) (S=1/6)

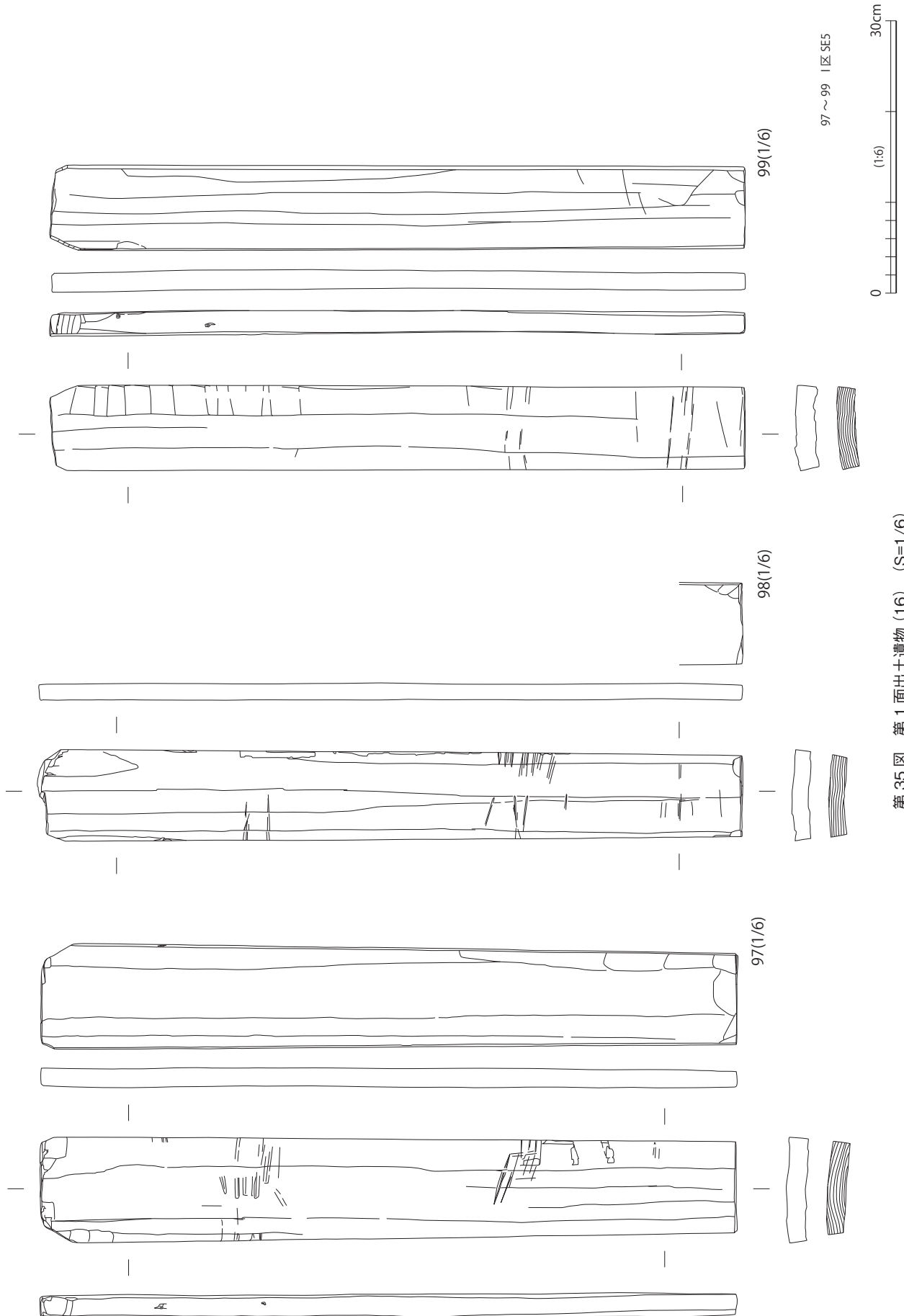


85 ~ 89 I区SE5

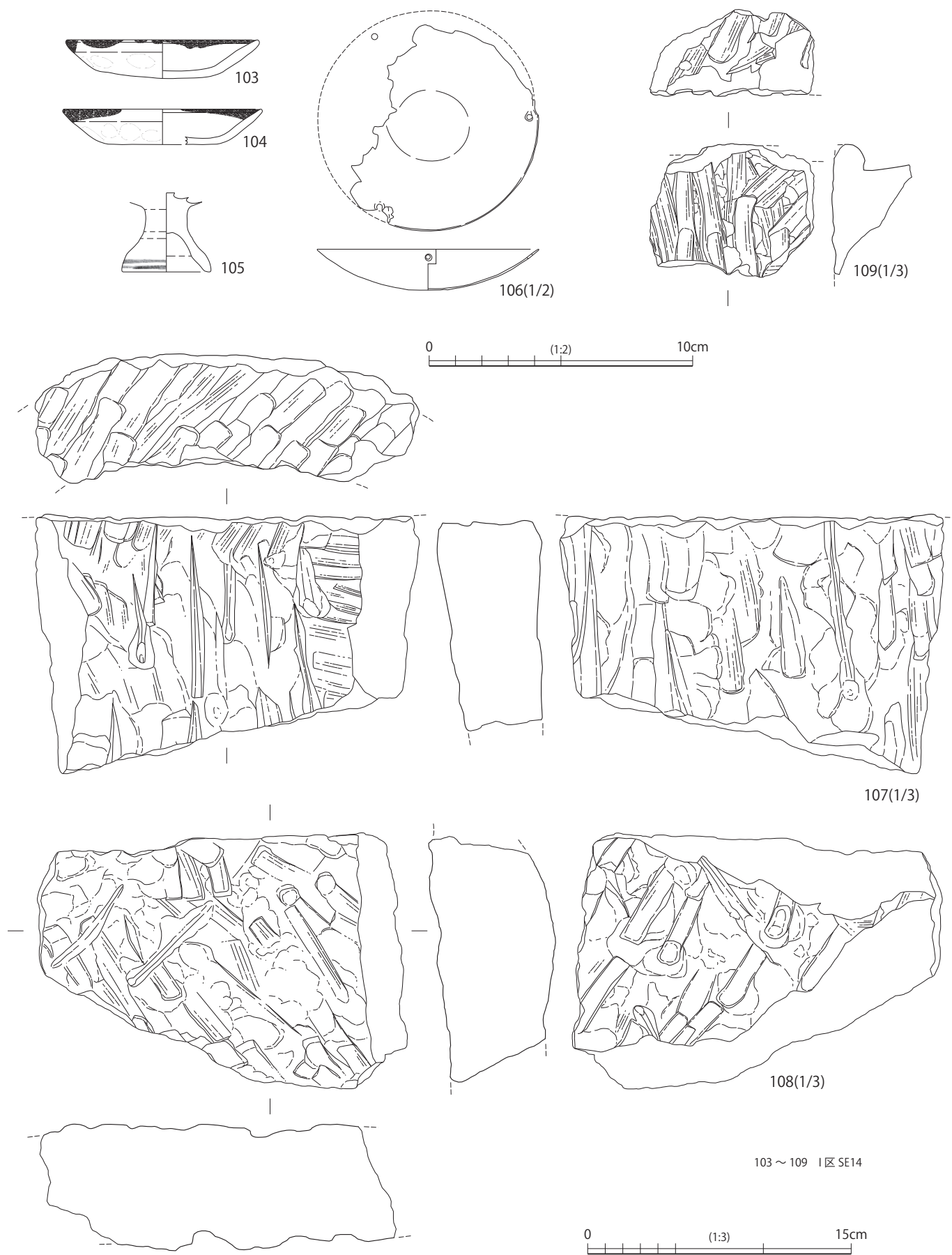
第32図 第1面出土遺物 (13) (S=1/6)



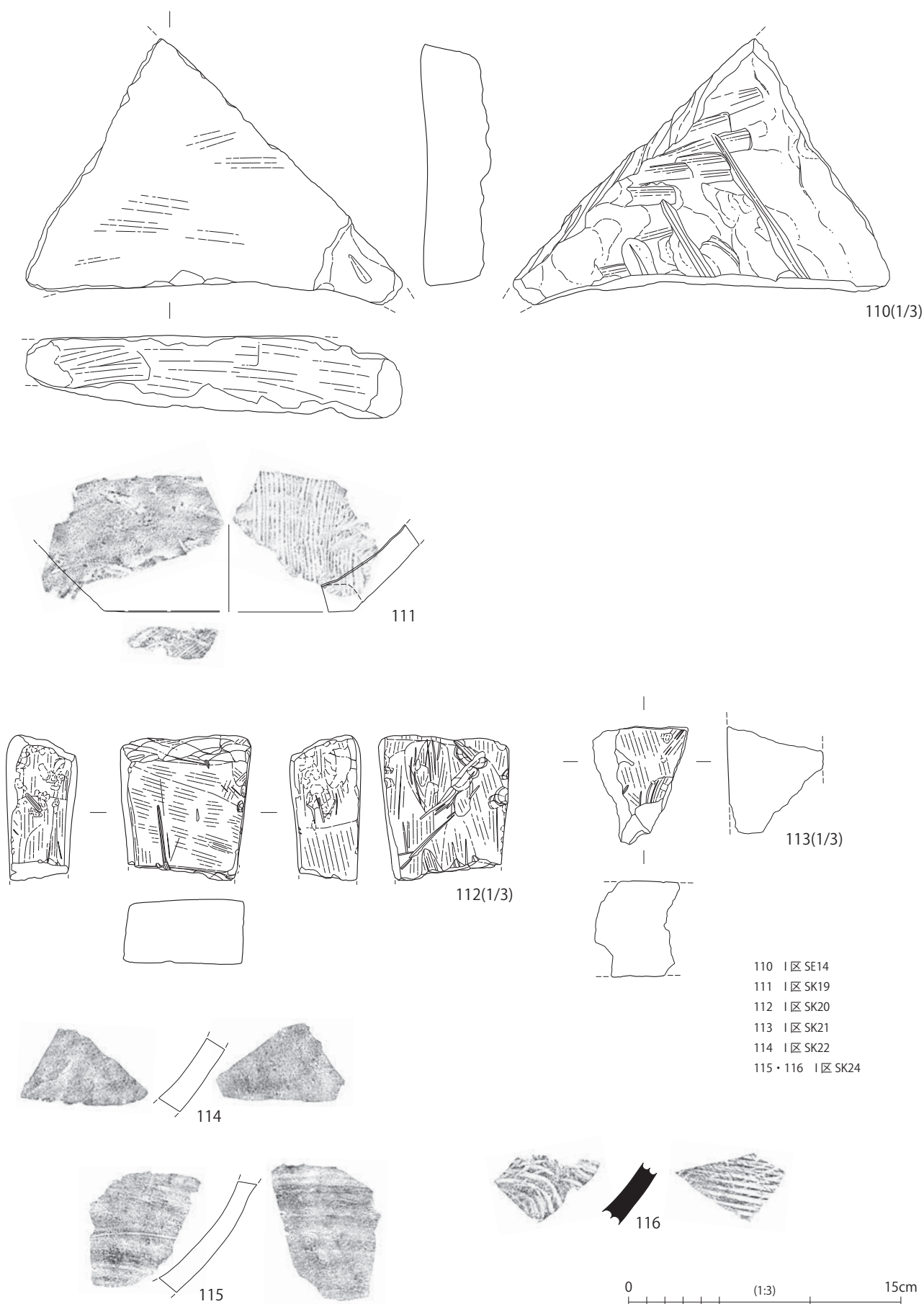




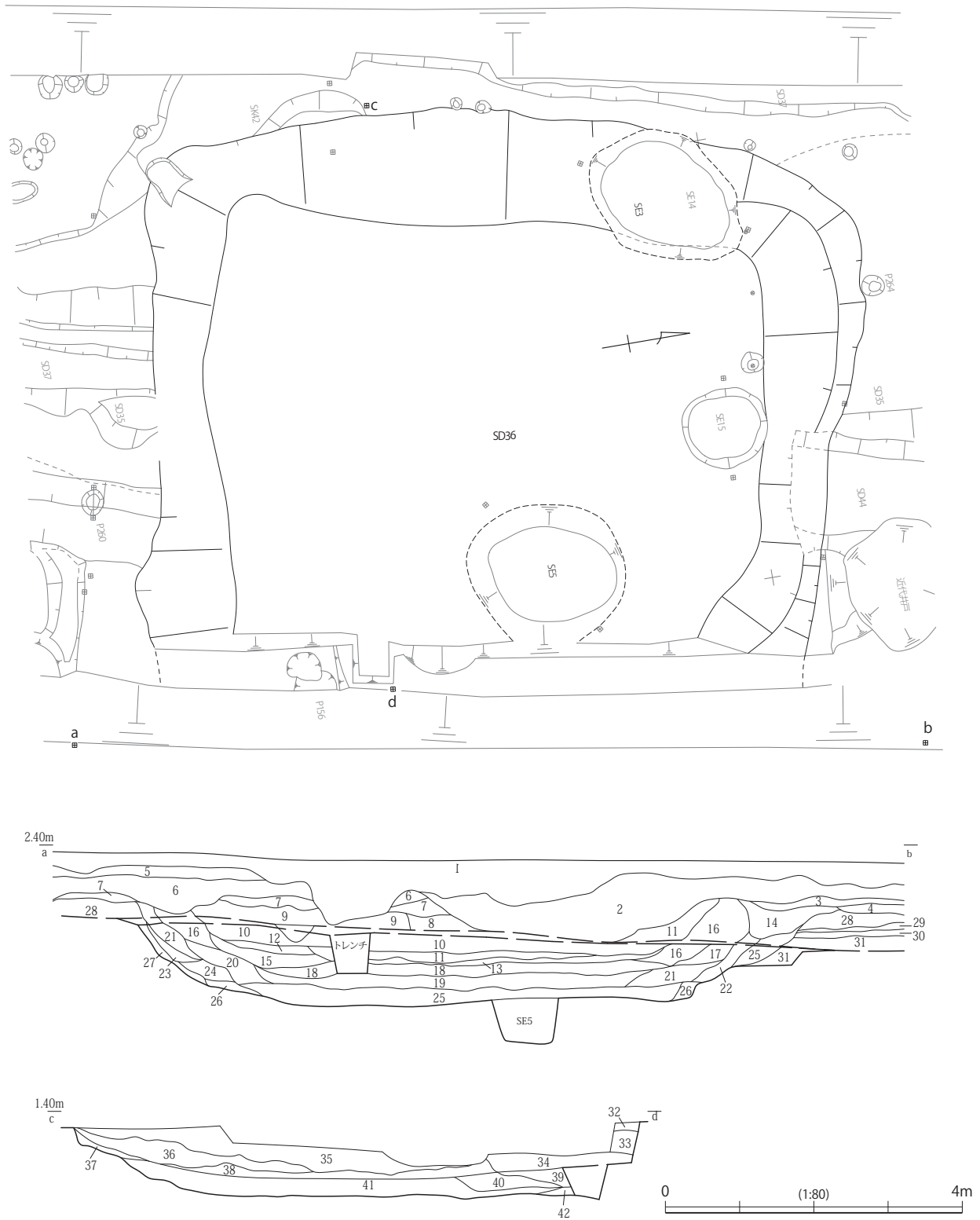
第35図 第1面出土遺物(16) (S=1/6)



第36図 第1面出土遺物(17) (S=1/2・1/3)



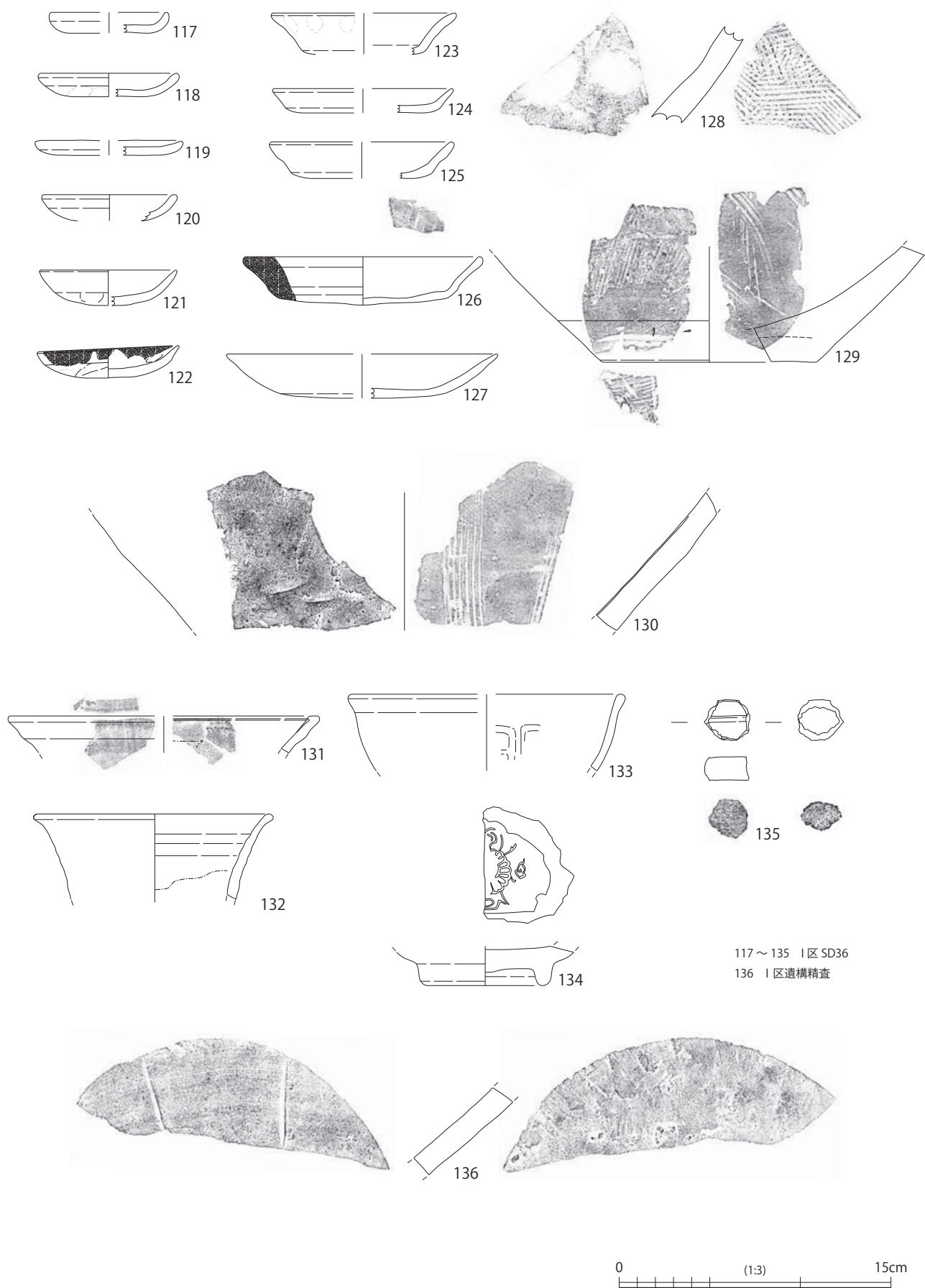
第37図 第1面出土遺物(18) (S=1/3)



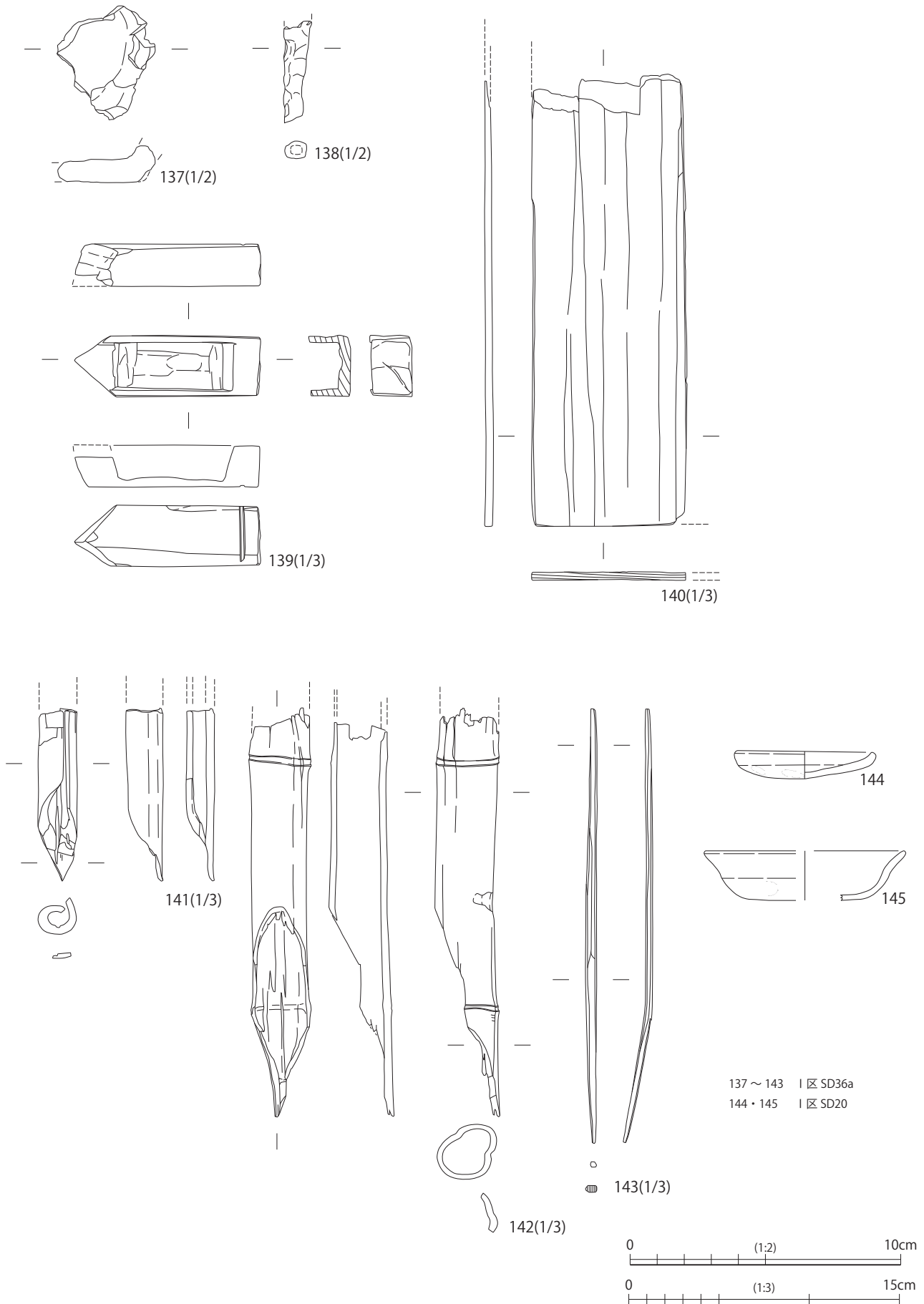
第38図 I区第1面 SD36 (S=1/80)

- 1 10YR3/4暗褐色土 コンクリート・石などを多く含む
- 2 10YR6/1褐灰色土 黄褐色粘土の特大ブロックを含む 炭粒を含む 石を含む
- 3 10YR4/4褐色砂質土
- 4 10YR7/1灰白色粘土 炭粒を含む
- 5 10YR5/1褐灰色土 炭粒を含む 旧耕作土
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色土 黄褐色粘土の小ブロックを含む 中世包含層
- 7 10YR5/1褐灰色粘質土 黄褐色粘土のブロックを含む 中世包含層
- 8 10YR7/1灰白色粘質土 黄褐色粘土のブロックを含む
- 9 10YR4/1褐灰色粘質土 黄褐色粘土の大ブロックを多く含む
- 10 10YR4/1褐灰色粘質土 黒褐色粘土の小ブロックを含む 黄褐色粘土の大ブロックを含む 埋戻し土
- 11 10YR4/1褐灰色粘質土 黒褐色粘土の小ブロックを多く含む 黄褐色粘土の小ブロックを多く含む 埋戻し土
- 12 10YR4/1褐灰色粘質土 黄褐色粘土の小ブロックを多く含む 埋戻し土
- 13 2.5Y5/2暗灰黄色砂 鉄分が赤く沈着する 堀底堆積（3回目）
- 14 10YR5/1褐灰色粘質土 炭粒を含む 堀肩の崩落土
- 15 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土 褐灰色粘土と暗黄灰色砂が3～4cm程の厚さで攪拌されたように混じる 安定していない 堀肩の崩落土
- 16 10YR6/1褐灰色粘土 灰白色粘土の大ブロックを含む 褐灰色砂のブロックを含む 堀肩の崩落土
- 17 10YR6/1褐灰色砂質土 炭粒を含む 堀肩の崩落土
- 18 10YR6/1褐灰色粘質土 灰黄色砂層と層厚2～4cm程で互層で堆積 あまり安定せず、層中で細かく途切れる 堀底堆積（2回目）
- 19 10YR2/1黒色粘土 堀底堆積（2回目）
- 20 0YR5/1褐灰色砂質土 黄褐色粘土の小ブロックを少量含む 堀肩の崩落土
- 21 10YR7/6明黄褐色粘土 褐灰色粘質土の大ブロックを含む 堀肩の崩落土
- 22 10YR5/1褐灰色粘質土 黄褐色粘土のブロックを多く含む 堀肩の崩落土
- 23 10YR5/1褐灰色粘質土 堀肩の崩落土
- 24 10YR5/1褐灰色粘質土 黄褐色粘土の小ブロックを含む 堀肩の崩落土
- 25 10YR2/1黒色粘土 明緑灰色粘土のブロックを含む 堀底堆積土（1回目）
- 26 10YR2/1黒色粘土 明緑灰色粘土の大ブロックを多く含む 堀肩の崩落土
- 27 10YR7/6明黄褐色砂 黒色粘土の大ブロックを多く含む 堀肩の崩落土
- 28 10YR3/1黒褐色砂質土 弥生包含層 弥生包含層
- 29 10YR4/1褐灰色砂質土 黄褐色砂質土のブロックを含む 地山
- 30 10YR3/1黒褐色砂質土 地山
- 31 10YR7/4にぶい黄褐色砂質土地山
- 32 10YR4/1褐灰色粘質土 黄褐色粘土の大ブロックを含む
- 33 10YR6/1褐灰色粘質土 黒褐色粘土の小ブロックを含む 黄褐色粘土の小ブロックを含む
- 34 10YR6/1褐灰色粘土
- 35 10YR3/1黒褐色粘質土 黄褐色粘土の小ブロックを少量含む
- 36 10YR3/1黒褐色粘質土 黄褐色粘土の大ブロックを多く含む
- 37 10YR5/1褐灰色砂質土 黒褐色砂質土のブロックを含む 18層に相当
- 38 10YR4/1褐灰色砂質土 黄褐色砂質土の大ブロックを含む 19層に相当
- 39 10YR2/1黒色粘土 明緑灰色粘土のブロックを含む
- 40 10YR7/8黄褐色砂質土 黄褐色砂のブロックを含む
- 41 10YR2/1黒色粘土 25層に相当
- 42 10YR2/1黒色粘土 26層に相当

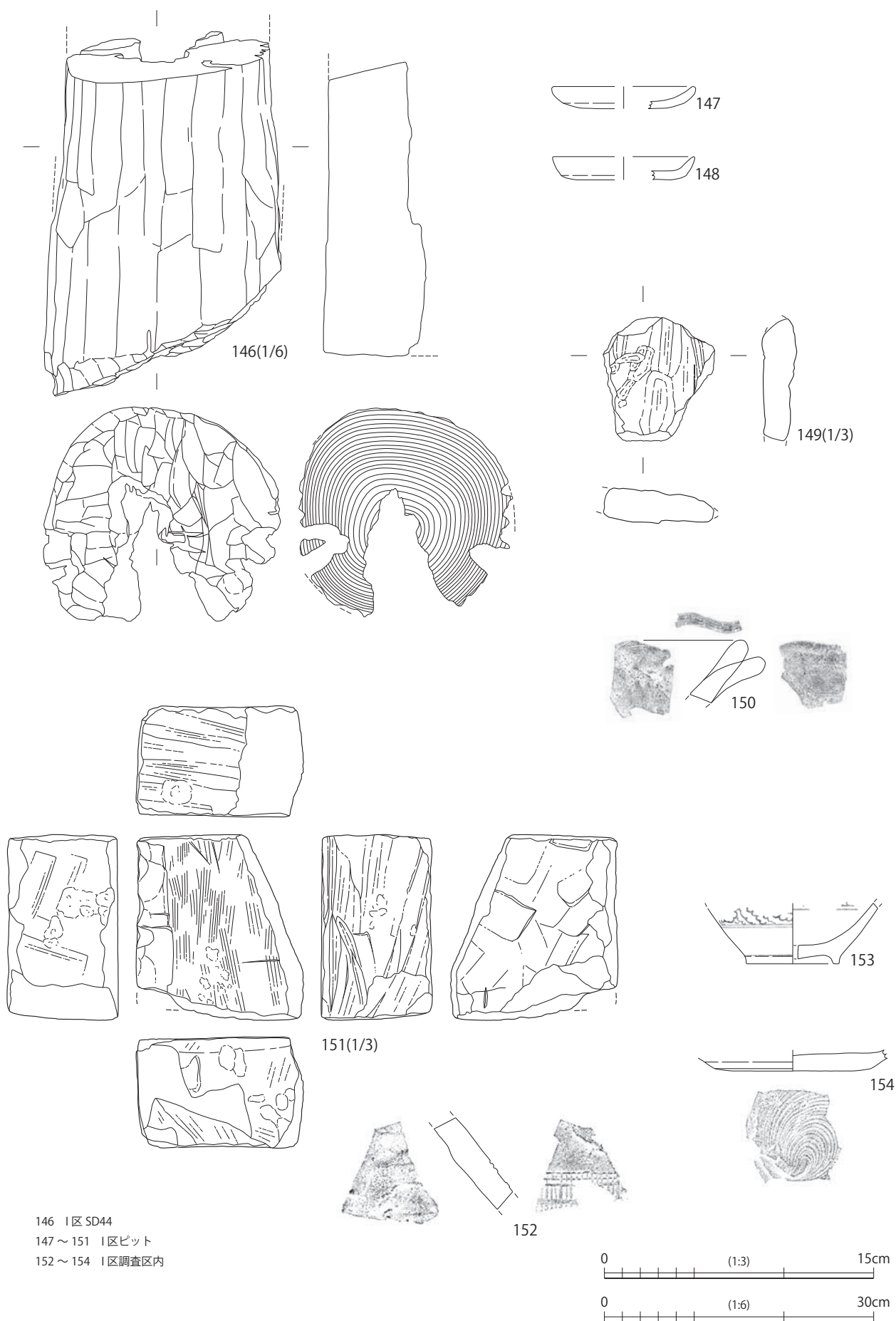
第39図 I区第1面 SD36 土層注記



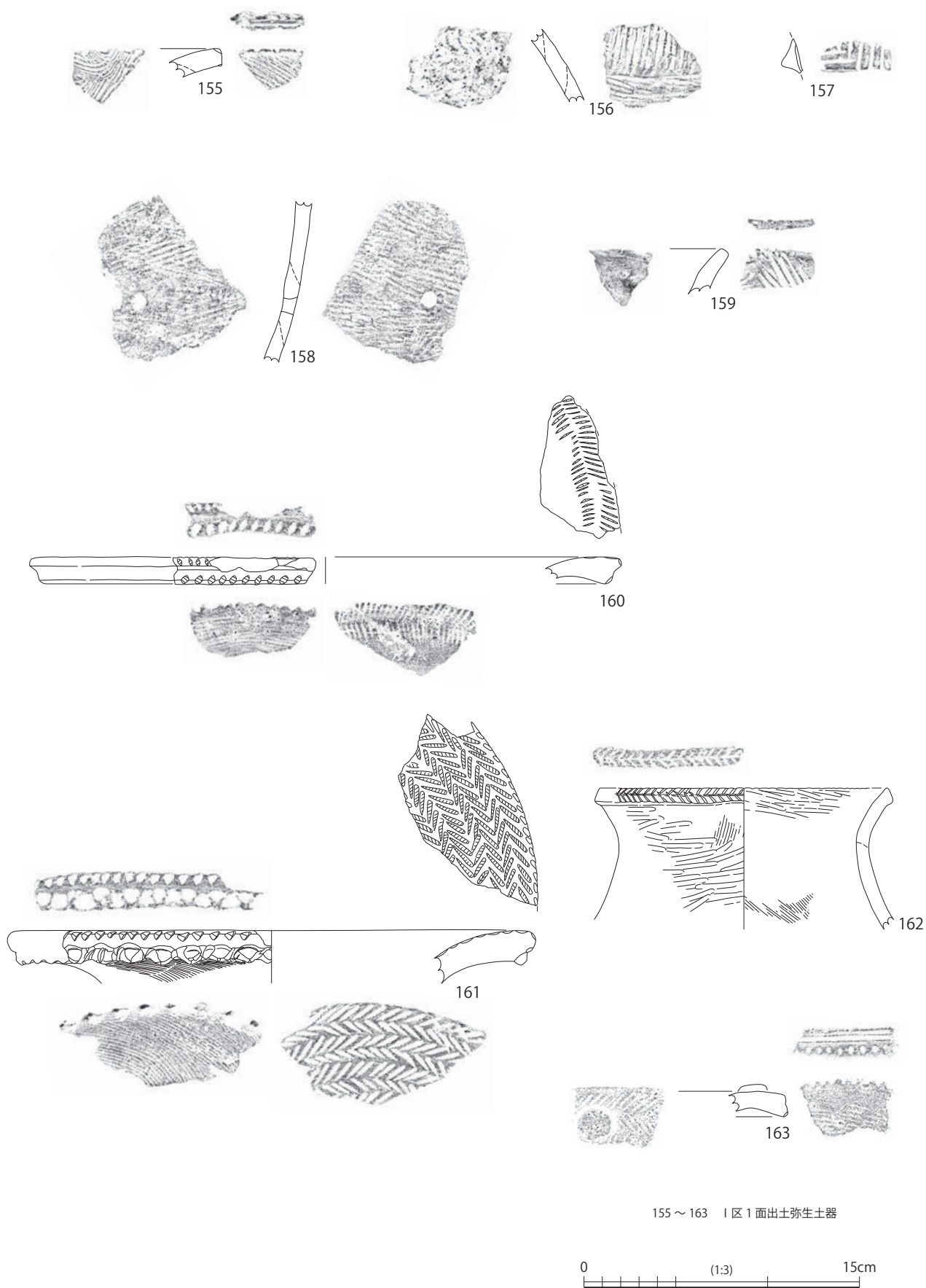
第40図 第1面出土遺物(19) (S=1/3)



第41図 第1面出土遺物(20) (S=1/2・1/3)

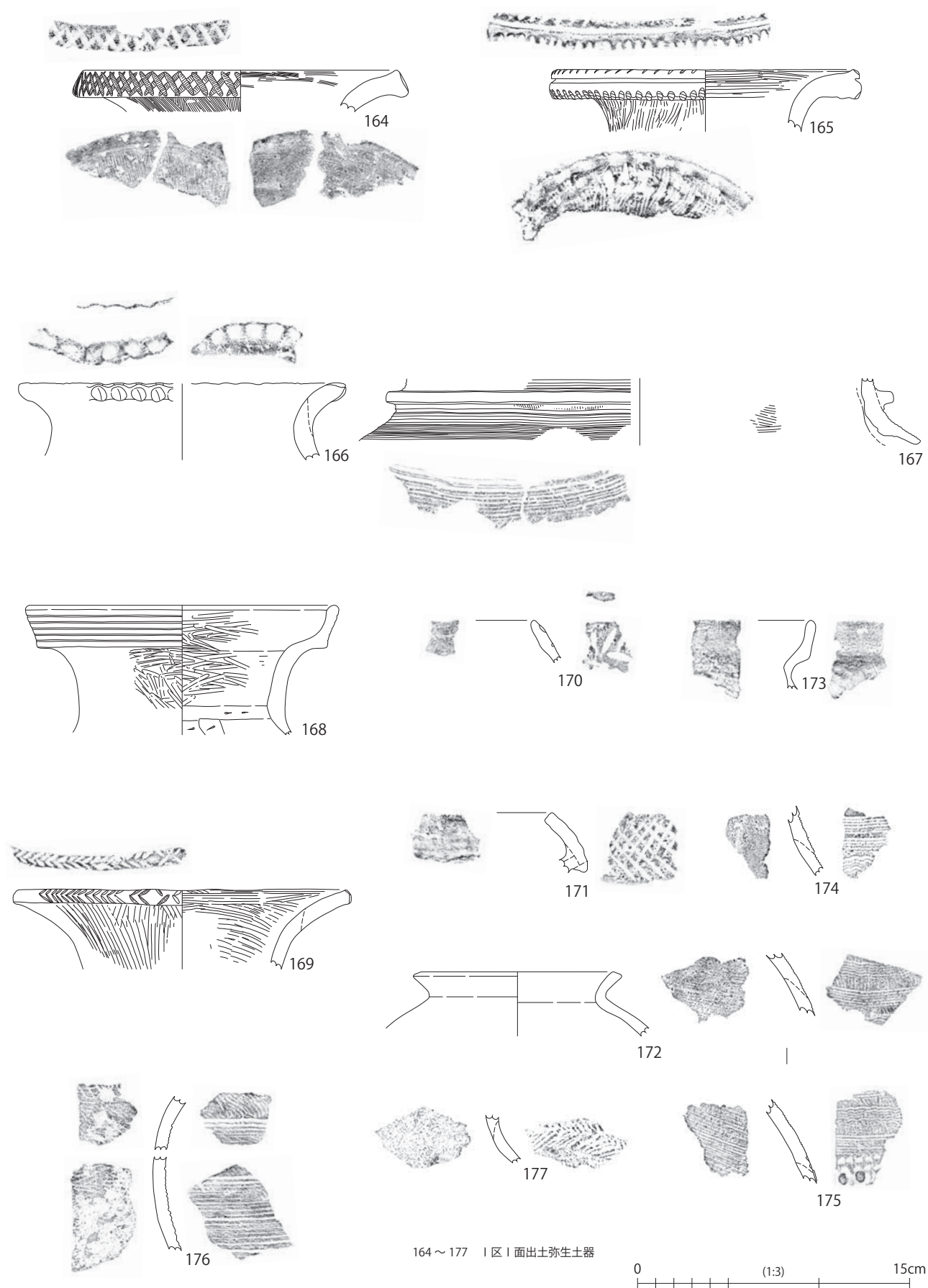


第42図 第1面出土遺物(21) (S=1/3・1/6)

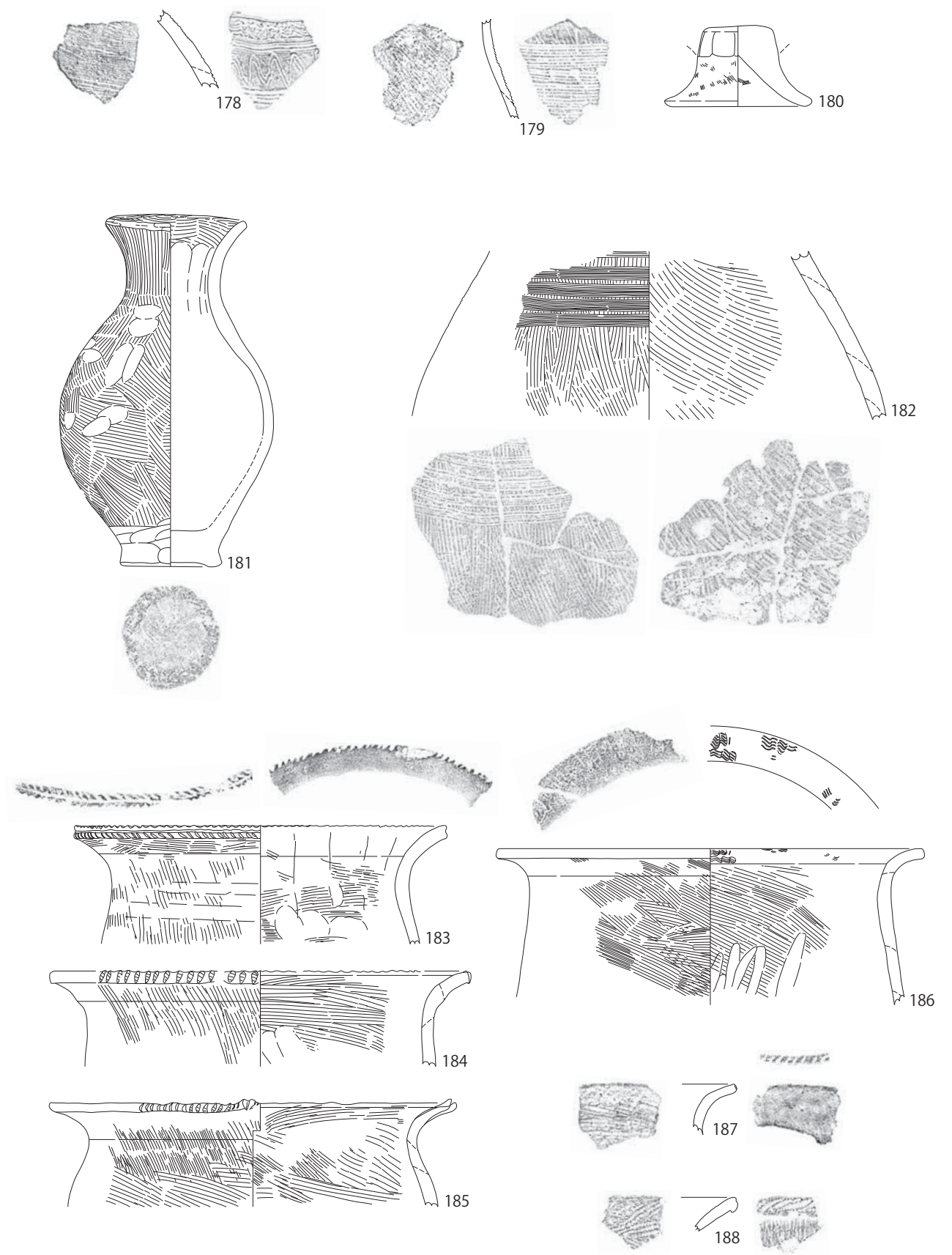


155 ~ 163 I区1面出土弥生土器

第43図 第1面出土遺物(22) (S=1/3)



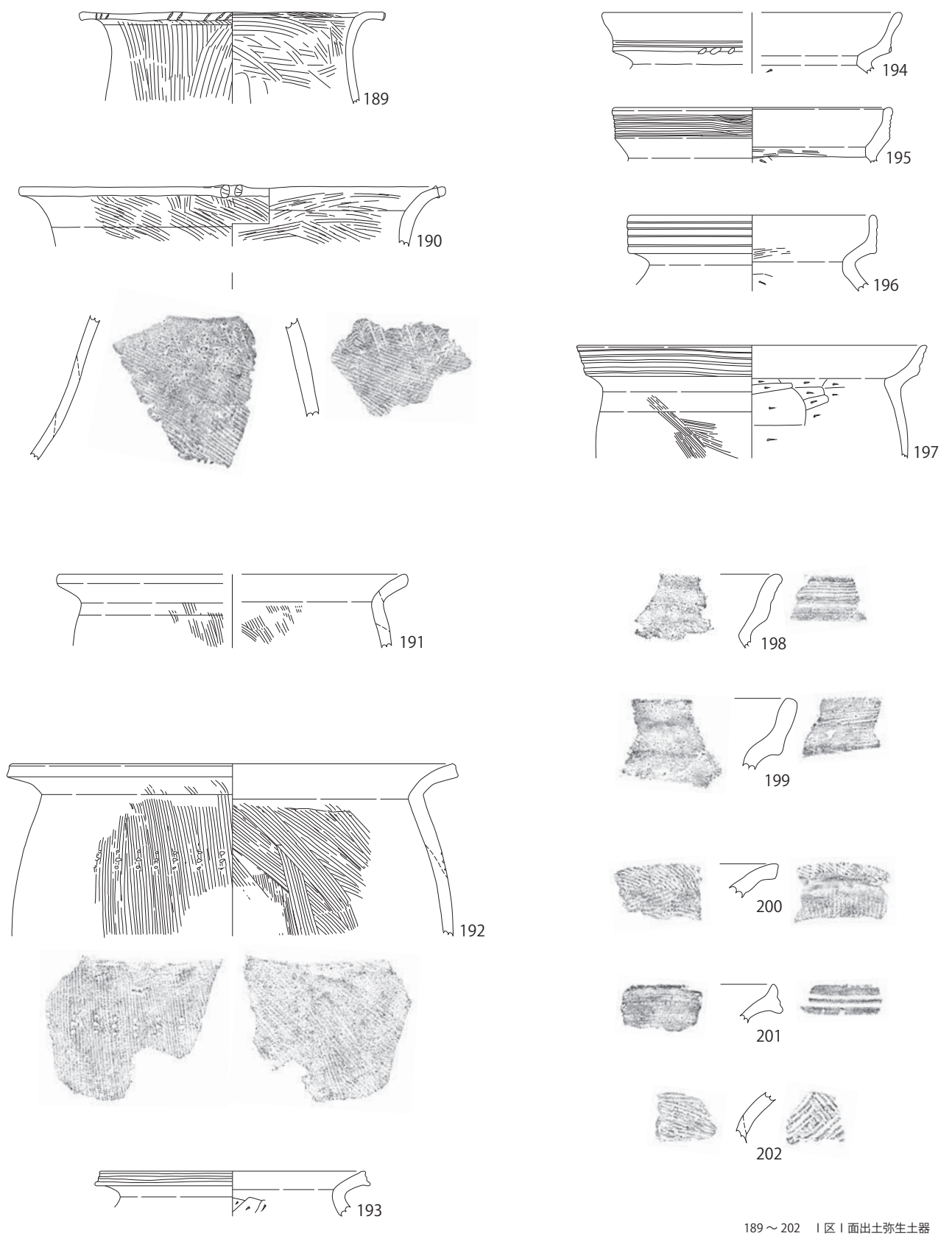
第44図 第1面出土遺物(23) (S=1/3)



178～188 I区I面出土弥生土器

0 (1:3) 15cm

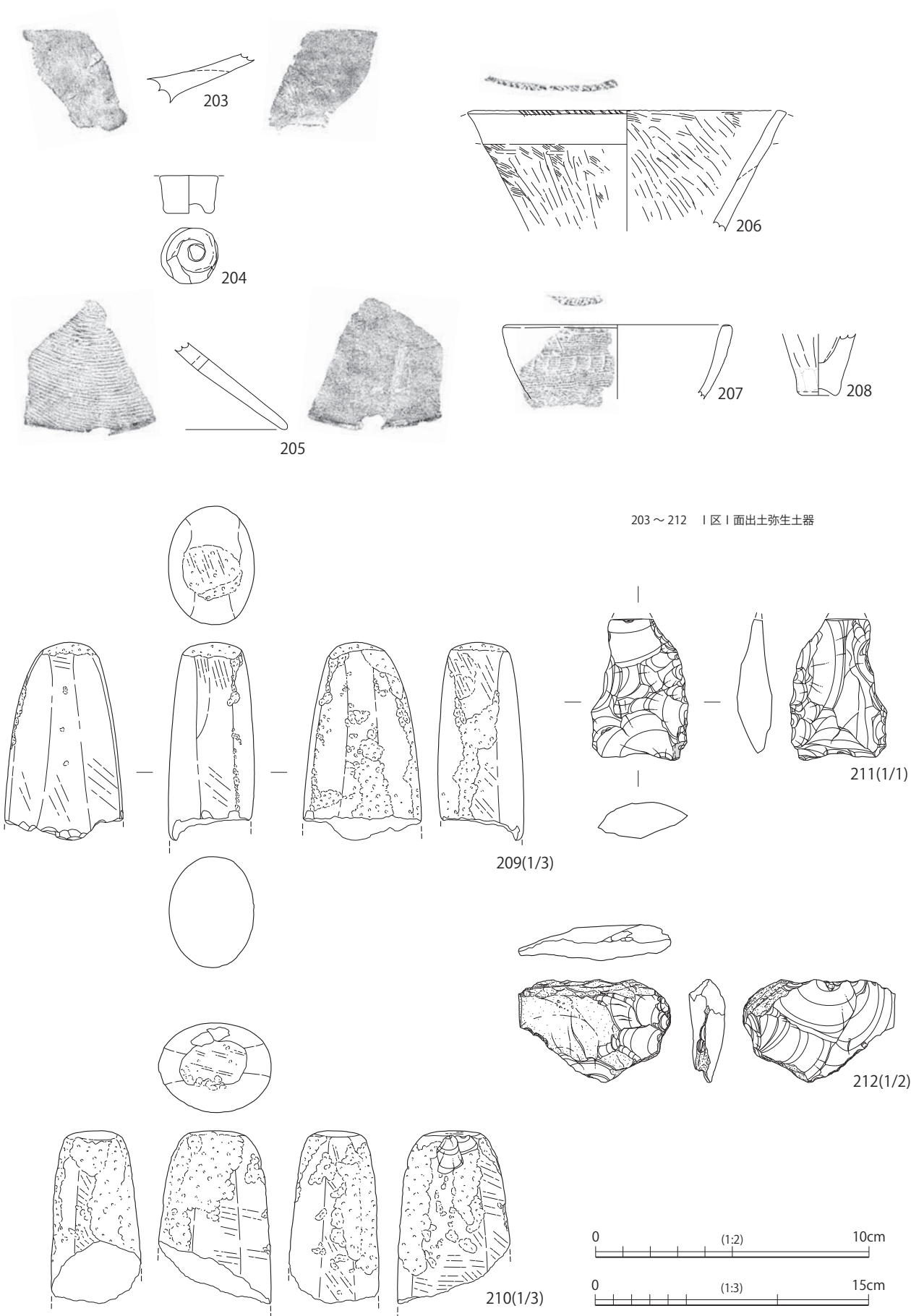
第45図 第1面出土遺物(24) (S=1/3)



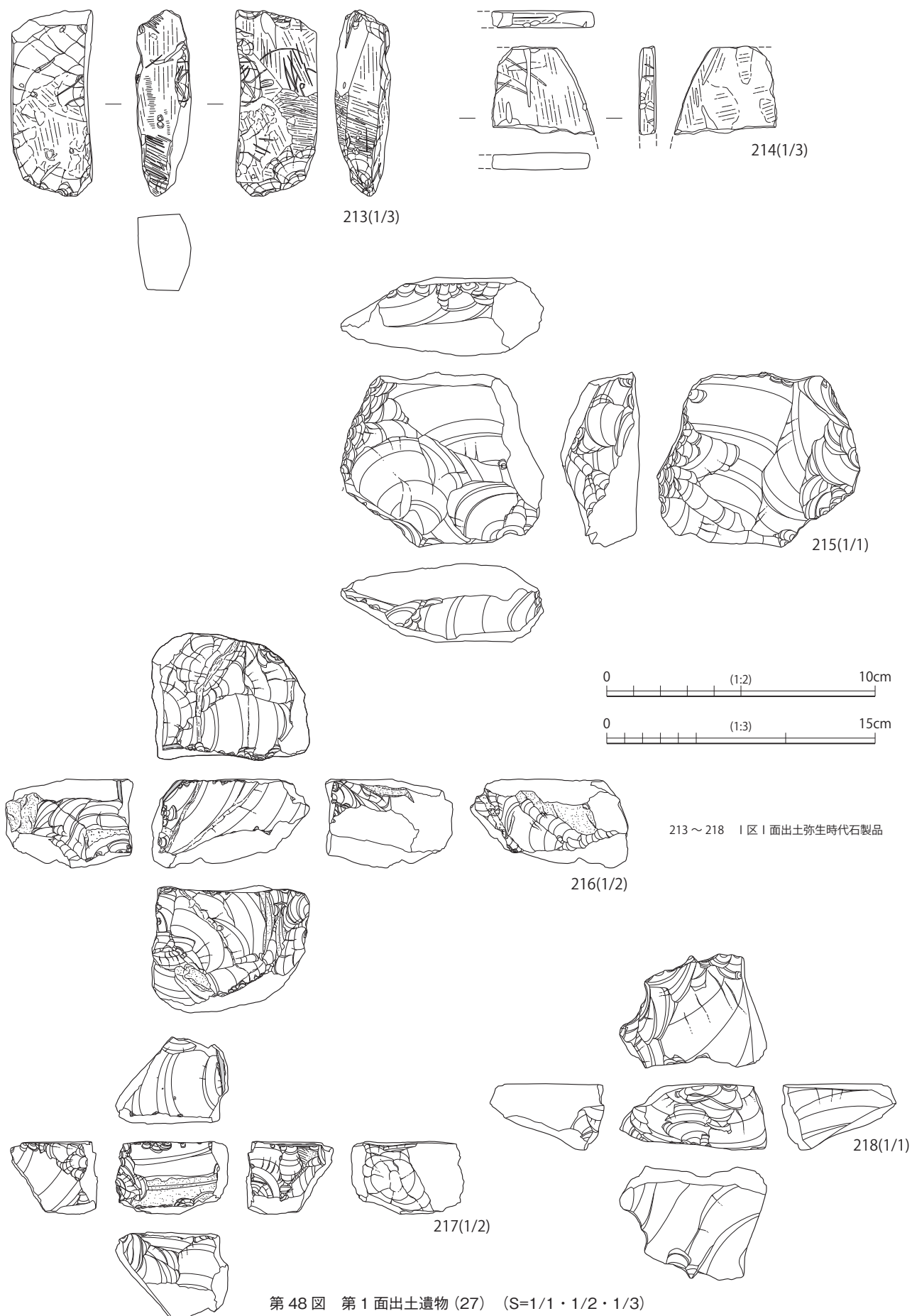
189～202 I区I面出土弥生土器

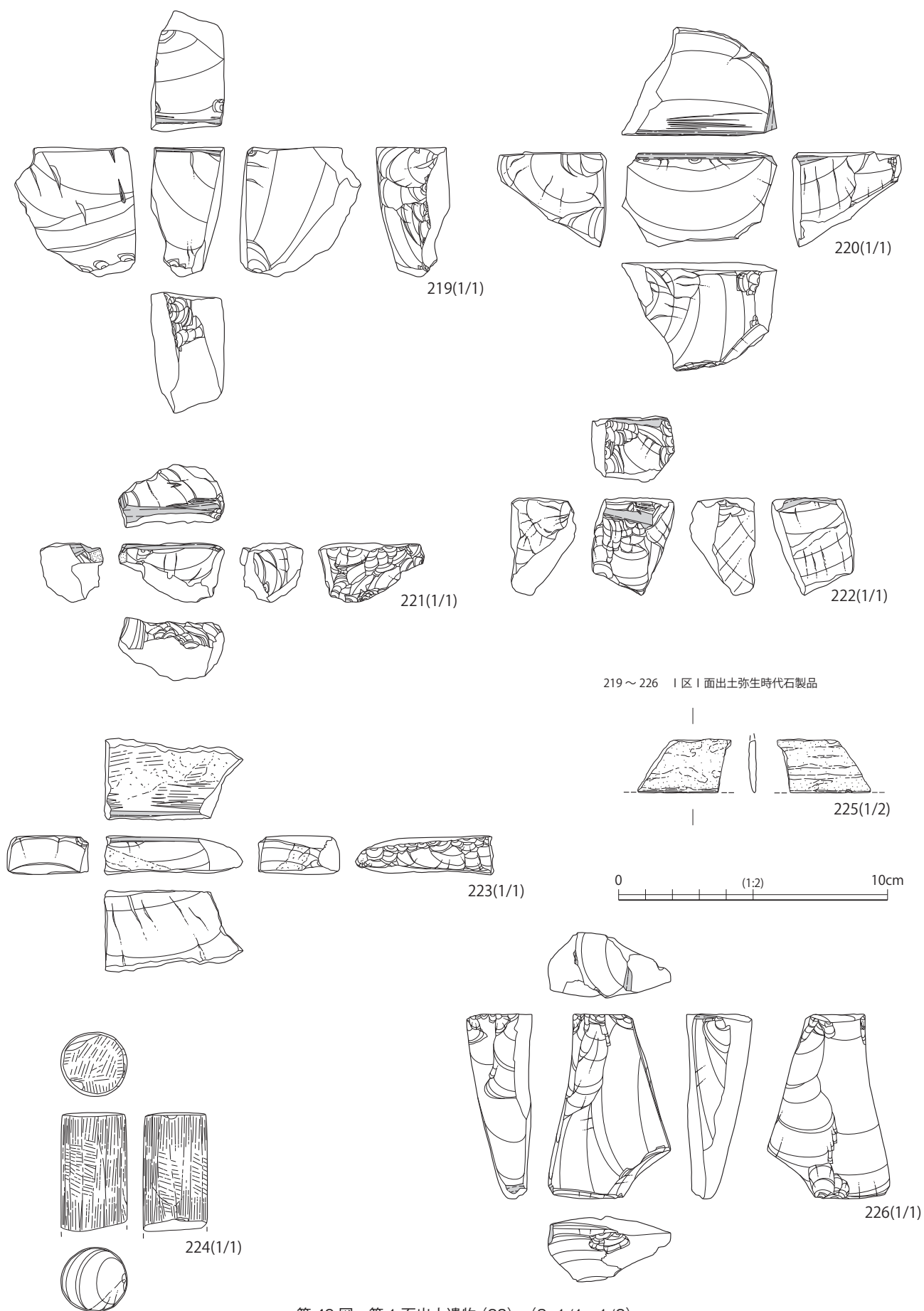
0 (1:3) 15cm

第46図 第1面出土遺物(25) (S=1/3)



第47図 第1面出土遺物(26) (S=1/1・1/2・1/3)





第49図 第1面出土遺物(28) (S=1/1・1/2)

第4節 II区第1面の調査成果

SB4（第50図） B～C14～15グリッドに位置する2×1間の側柱建物である。桁行3.6m・梁間2.3mで、建物主軸はN-58°Eである。桁行柱間は1.9・1.5mを測り柱筋はばらつく。柱穴埋土は黄灰色・黒褐色砂質土を基調とする。遺構の切り合いは、SB5と重複するが先後不明。遺物は出土せず詳細不明。

SB5（第50図） B14～15グリッドに位置する1×1間の小型の側柱建物である。規模は桁行3.0m・梁間2.6mで、建物主軸はN-16°Wである。SB4と重複するが先後不明。遺物は出土せず詳細不明。

SE1（第51図、第54・55図227～236） B～C15グリッドに位置する縦板組横棧留の方形井戸である。断面図から推定した井戸枠寸法は約60cmで、最下段に集水施設として曲物を2段重ねていた。227は口径11.0cmの土師器皿A類。口縁部の横ナデは弱く上方がやや肥厚する。228は加賀焼甕底部片で、外底面にはハケ状具による調整痕が残る。また、内面は平滑で調理具等に転用された可能性がある。229・230は凝灰岩の切石で被熱面があることから炉石として用いられたか。234は井戸側縦板でスギ材、幅17cm、上部の大半が欠損している。曲物側板232・233は残存高17cmのスギ材。235・236は凹凸柄で組み合わせる横棧でスギ材。出土状況の記録が残らず構造は不明だが、組み合わせの内寸は約50cmである。

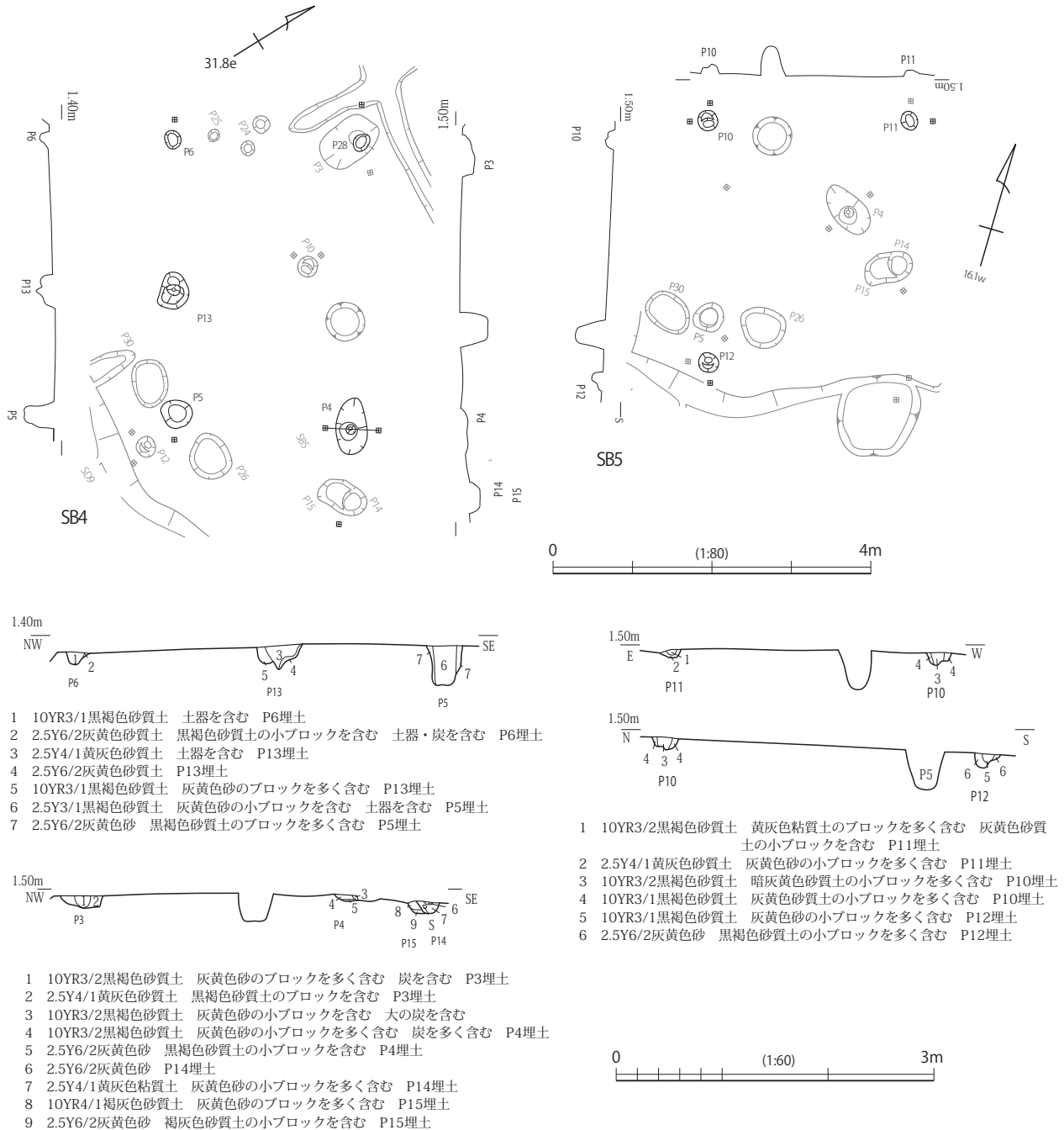
SK3（第51図、第56図241・242） 調査区北東隅にある二段掘りの土坑で、長軸1.5m・深さ0.6mで東側は調査区外に延びる。埋土は褐灰色砂質土を基調とする。241は外底面中央を押し上げる、いわゆるへそ皿F類で京都系土師器皿の一群に含まれる16世紀代の製品である。242はJ字に曲がる鉄製工具で鑿か。

SD1（第52図） 東西に延びる溝で、調査区東端で屈曲し北に延びる。幅1.9m、深さ0.4mを測り、埋土は黒褐色砂質土を基調とする。I区SD36に次ぐ大型の溝で方形区画を呈する可能性があるが、出土遺物は下層の弥生土器のみで時期等不明である。

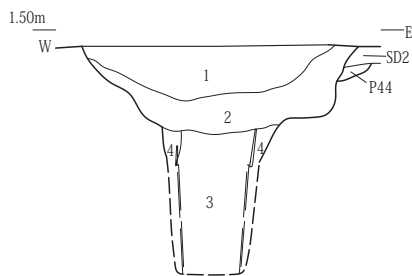
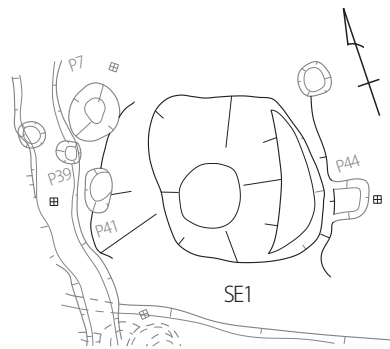
SD3（第52図、第57図243） 東西に延びる溝状遺構でSD4に切られる。幅・深さ0.3mを測り、埋土は黒褐色砂質土を基調とする。243は口径7.4cmの土師器皿A類。器形は歪み平面形は楕円形状となる。I区SD20に対応する同軸の区画溝となるか。

II区その他の遺物 237は完形品である。平底の底部から体部は緩やかに外反して立ち上がり、口縁端部を上方に軽くつまみ上げる。16世紀代とみられる京都系土師器皿E類で口縁部の一箇所に油煤痕がみられる。238・239は同じ作りで、体部は緩やかに内湾して立ち上がり屈曲する口縁端部外面には沈線状の弱い条線が1条巡る。典型的な京都系土師器皿とは異なるが237に伴う同系列の製品とした。240は凝灰岩（笏谷石か？）製の行火。245は焼成が硬質な近世の土師器皿で、体部の立ち上がりが強く平底箱型となる。17世紀前半頃の製品か。246・247は胎土に砂粒の含みが少なく、口縁部を外反先細りに仕上げる京都系の土師器皿E類で、底部内外面には部分的に黒斑がはいる。また、見込外周には口縁部を横ナデした際の粘土の盛り上がりが高く凸線状に巡る。16世紀代。248は胴部を大きく弧状に内湾させる褐釉磁器鉢。胎土は白く堅緻で高台部を無釉とする。249は瓦質火鉢の口縁部片である。口縁端部を内側にやや肥厚させ、外面には幅約0.8cmの浅い丸ノミ状の掘り込みが数方向にはいる。

250～303は第1面遺構に混入した第2面由来の弥生土器と石製品で、中期中葉の小松式が主体である。

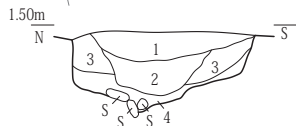
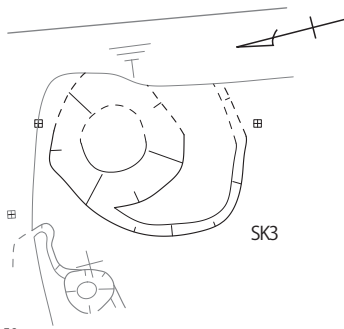


第50図 II区第1面 掘立柱建物 (S=1/60・1/80)



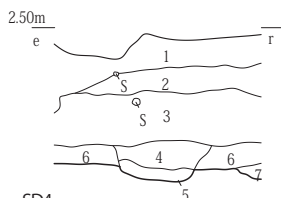
SE1

- 1 10YR3/2黒褐色砂質土 暗灰黄色砂質土のブロックを少量含む 炭を含む
- 2 10YR3/1黒褐色砂質土 灰黄色砂のブロックを多く含む 炭を含む
- 3 10YR3/1黒褐色砂質土
- 4 10YR2/1黒色粘質土 黄褐色粘質土のブロックを含む



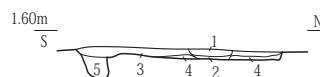
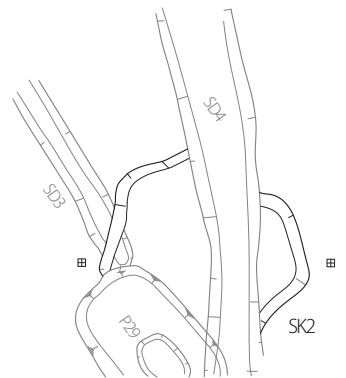
SK3

- 1 10YR4/2灰黄褐色粘質土 炭を含む 土器を含む 掘り直し埋土
- 2 10YR4/1褐灰色粘質土 灰黄色砂の大ブロックを含む 掘り直し埋土
- 3 10YR4/1褐灰色砂質土 灰黄色砂の大ブロックを多く含む SK3崩落土
- 4 10YR5/1褐灰色砂 黒褐色砂質土のブロックを多く含む SK3埋土



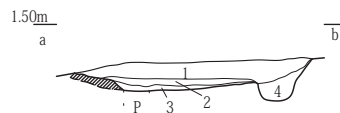
SD4

- 1 2.5Y5/1黄灰色粘質土 灰黄色粘質土のブロックを多く含む 石・砂利を含む 表土
- 2 10YR4/1褐灰色粘質土 灰黄色粘質土のブロックを含む 炭を含む 宅地整地層
- 3 10YR4/2灰黄褐色粘質土 炭を含む 旧耕作土
- 4 10YR2/1黒色砂質土 黒褐色粘質土のブロックを含む 炭を含む SD4埋土
- 5 10YR2/1黒色砂質土 灰黄色砂のブロックを多く含む SD4埋土
- 6 10YR3/2黒褐色砂質土 灰黄色砂の小ブロックを含む 包含層
- 7 10YR2/1黒色砂質土 SD8埋土



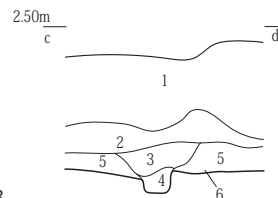
SK2

- 1 10YR3/1黒褐色砂質土 灰黄褐色砂の小ブロックを多く含む 炭を含む SD4埋土
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂 灰黄色砂のブロックを多く含む SD4埋土
- 3 10YR3/2黒褐色砂質土 灰黄色砂のブロックを多く含む 炭を含む SK2埋土
- 4 2.5Y5/2暗灰黄色砂 SK2埋土
- 5 10YR3/1黒褐色砂質土 灰黄色砂のブロックを含む 炭を含む SD3埋土



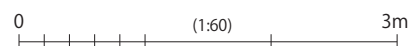
SD1・SD9

- 1 10YR3/1黒褐色砂質土 炭を含む
- 2 10YR2/1黒色砂質土
- 3 10YR2/1黒色砂質土 黄褐色砂のブロックを含む
- 4 10YR3/1黒褐色砂質土 SD9埋土

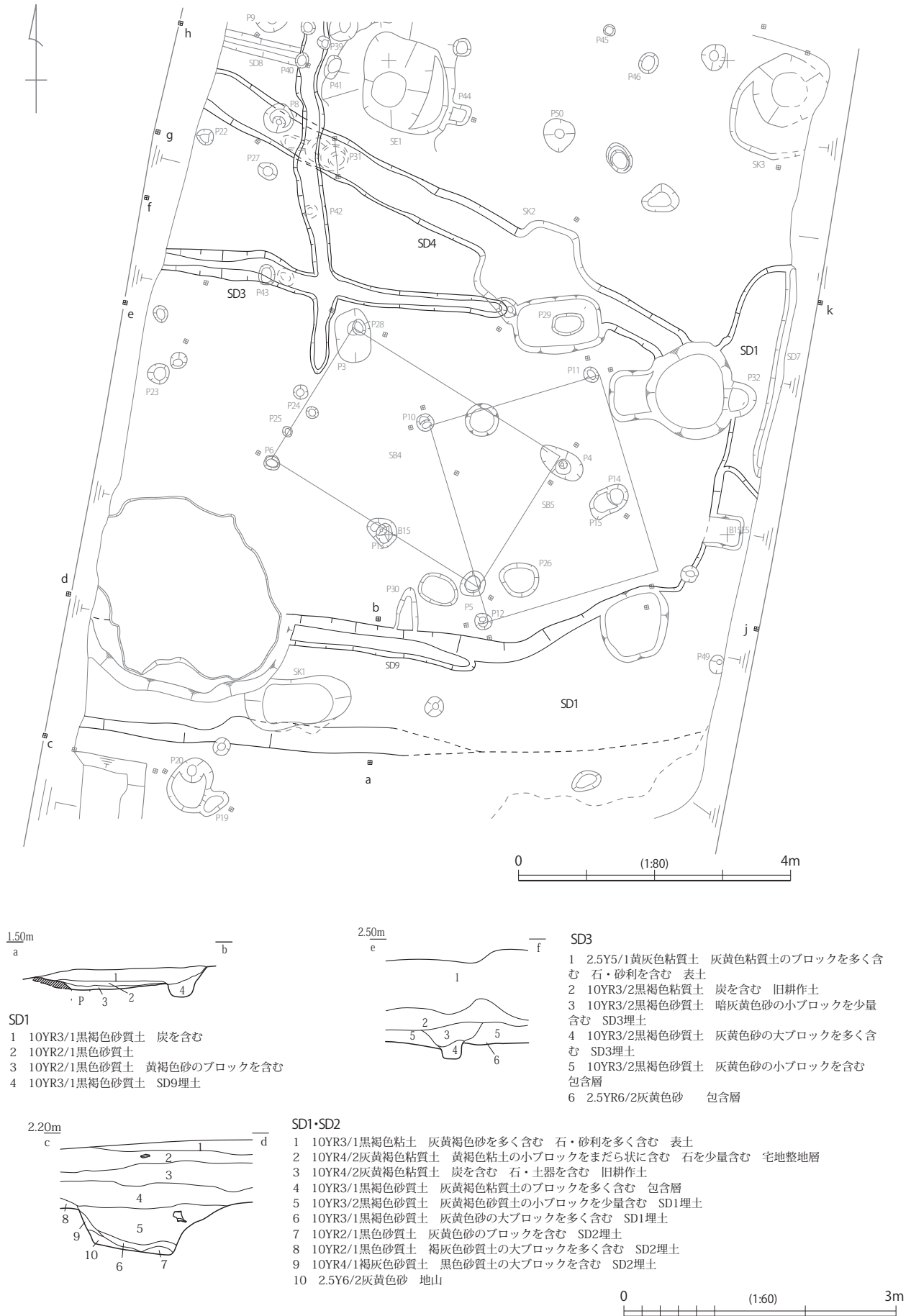


SD3

- 1 2.5Y5/1黄灰色粘質土 灰黄色粘質土のブロックを多く含む 石・砂利を含む 表土
- 2 10YR3/2黒褐色粘質土 炭を含む 旧耕作土
- 3 10YR3/2黒褐色砂質土 暗灰黄色砂の小ブロックを少量含む SD3埋土
- 4 10YR3/2黒褐色砂質土 灰黄色砂の大ブロックを多く含む SD3埋土
- 5 10YR3/2黒褐色砂質土 灰黄色砂の小ブロックを含む 包含層
- 6 2.5YR6/2灰黄色砂 包含層

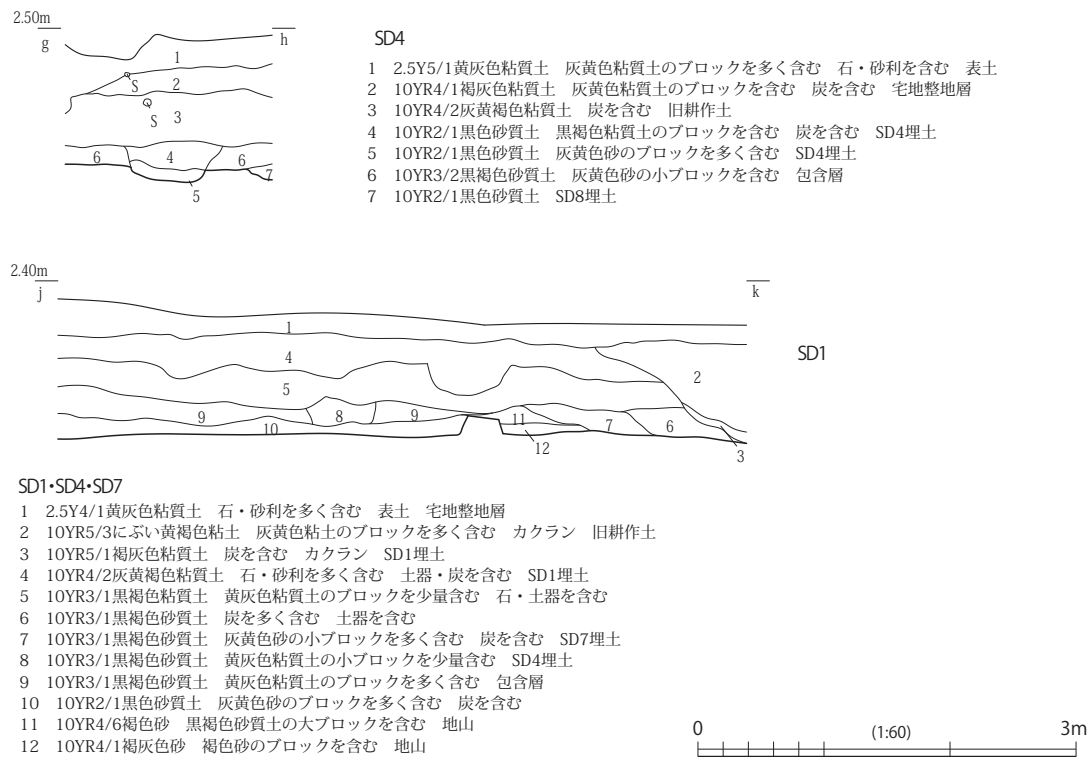


第51図 II区第1面 井戸・土坑・溝 (S=1/60)

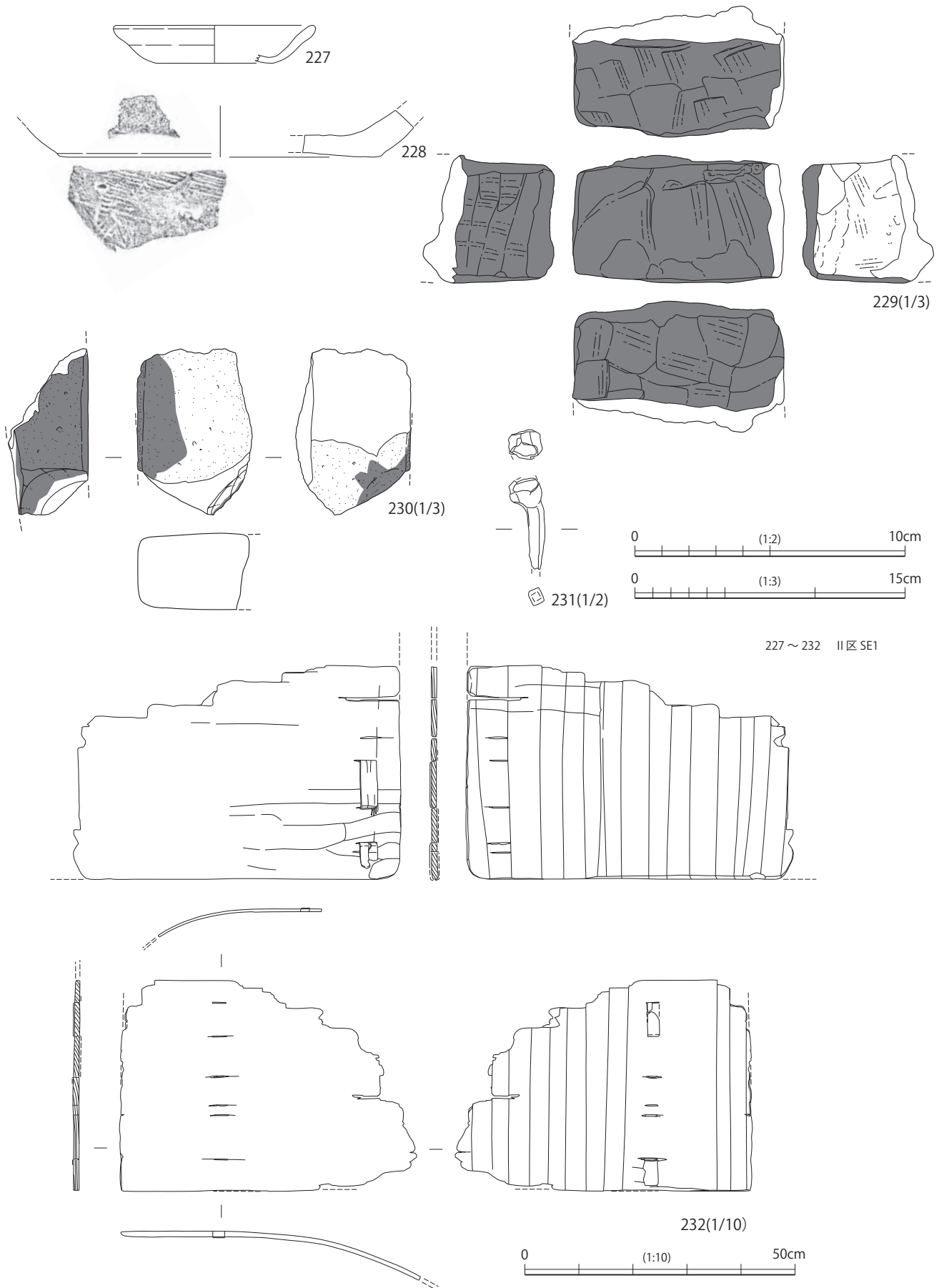


第52図 II区第1面 溝 (S=1/60 · 1/80)

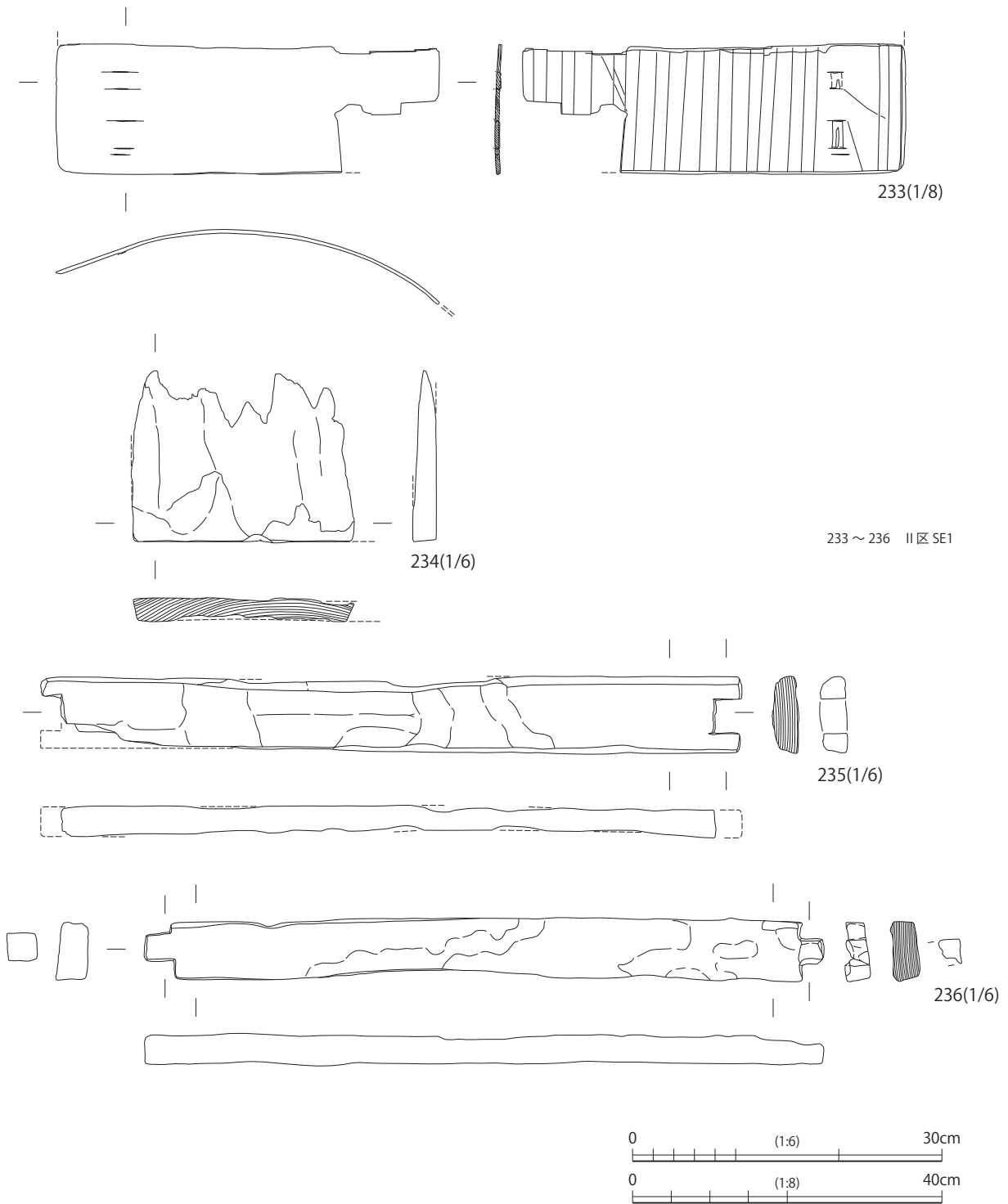
第4節 II区第1面の調査成果



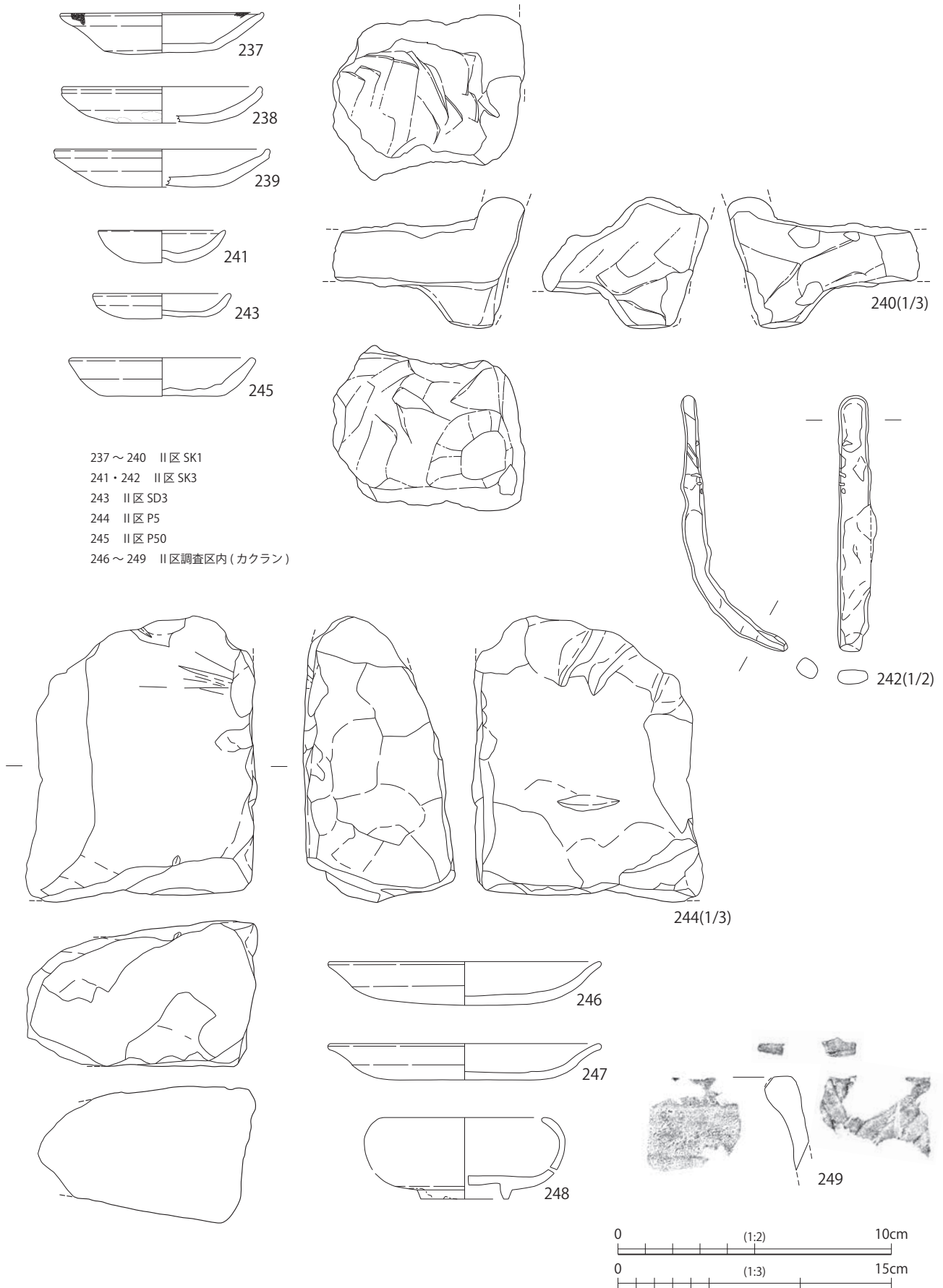
第53図 II区第1面 溝(2) (S=1/60・1/80)



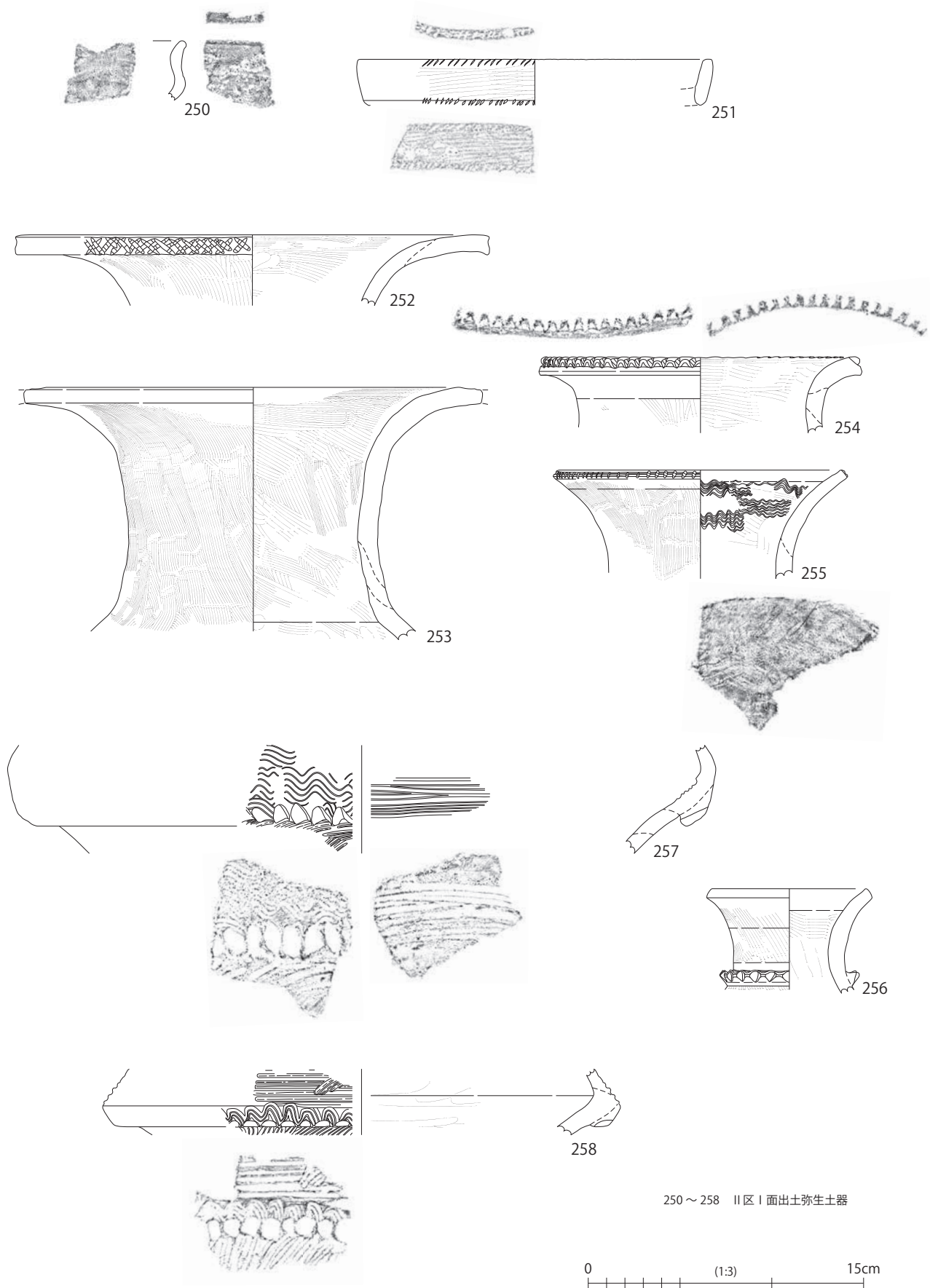
第54図 第1面出土遺物(29) (S=1/2・1/3・1/10)



第55図 第1面出土遺物(30) (S=1/6・1/8)

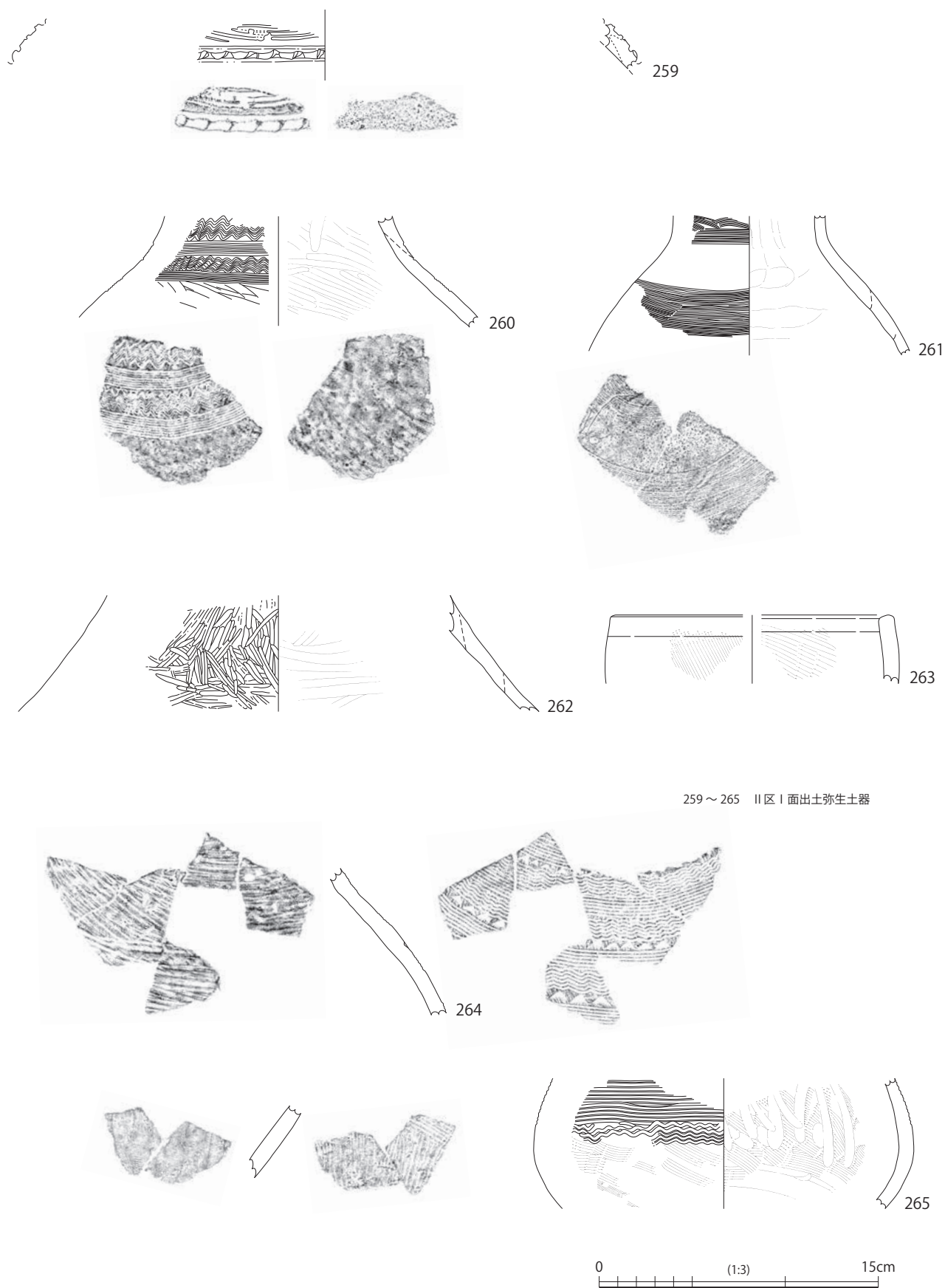


第56図 第1面出土遺物(31) (S=1/2・1/3)

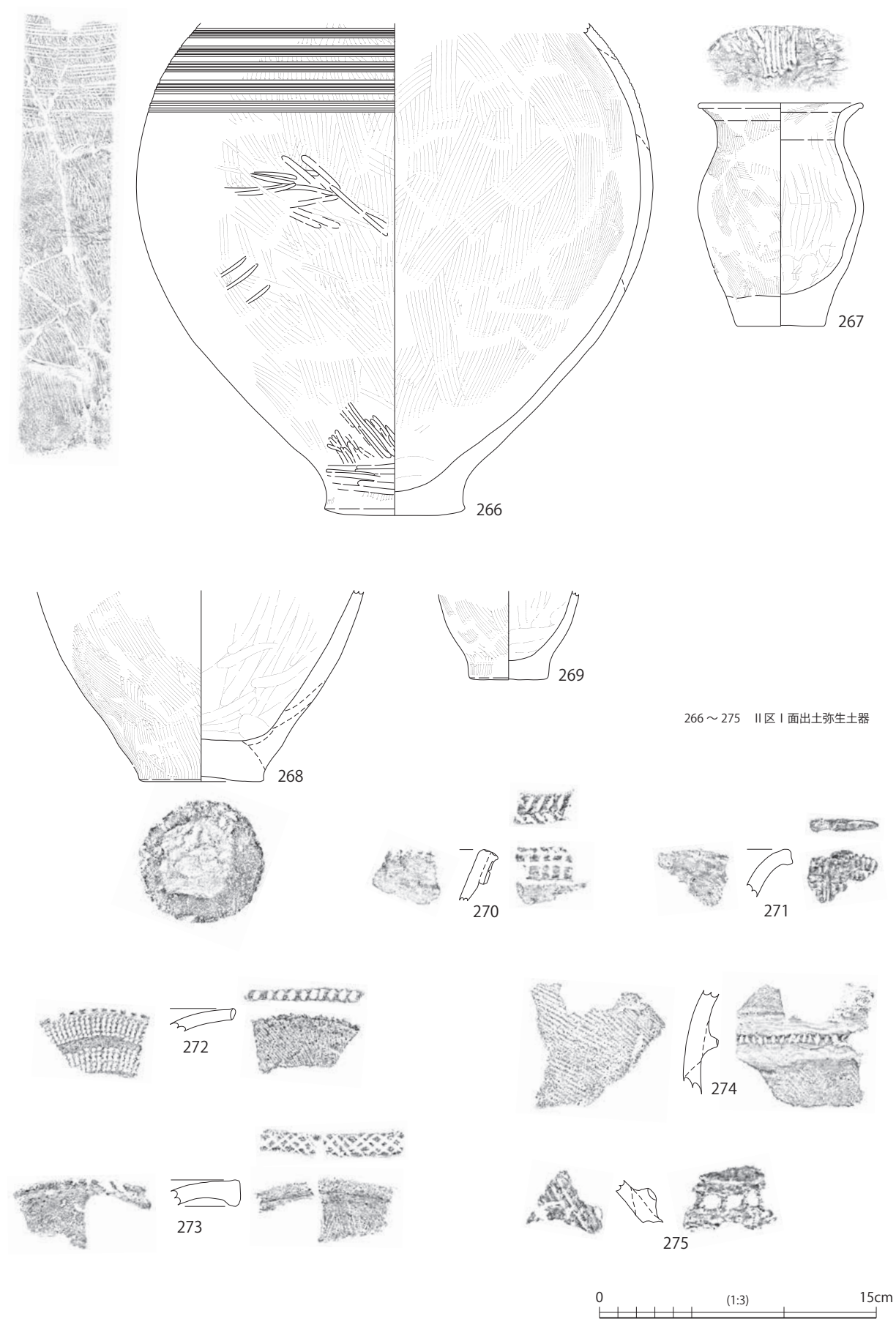


250～258 II区I面出土弥生土器

第57図 第1面出土遺物(32) (S=1/3)



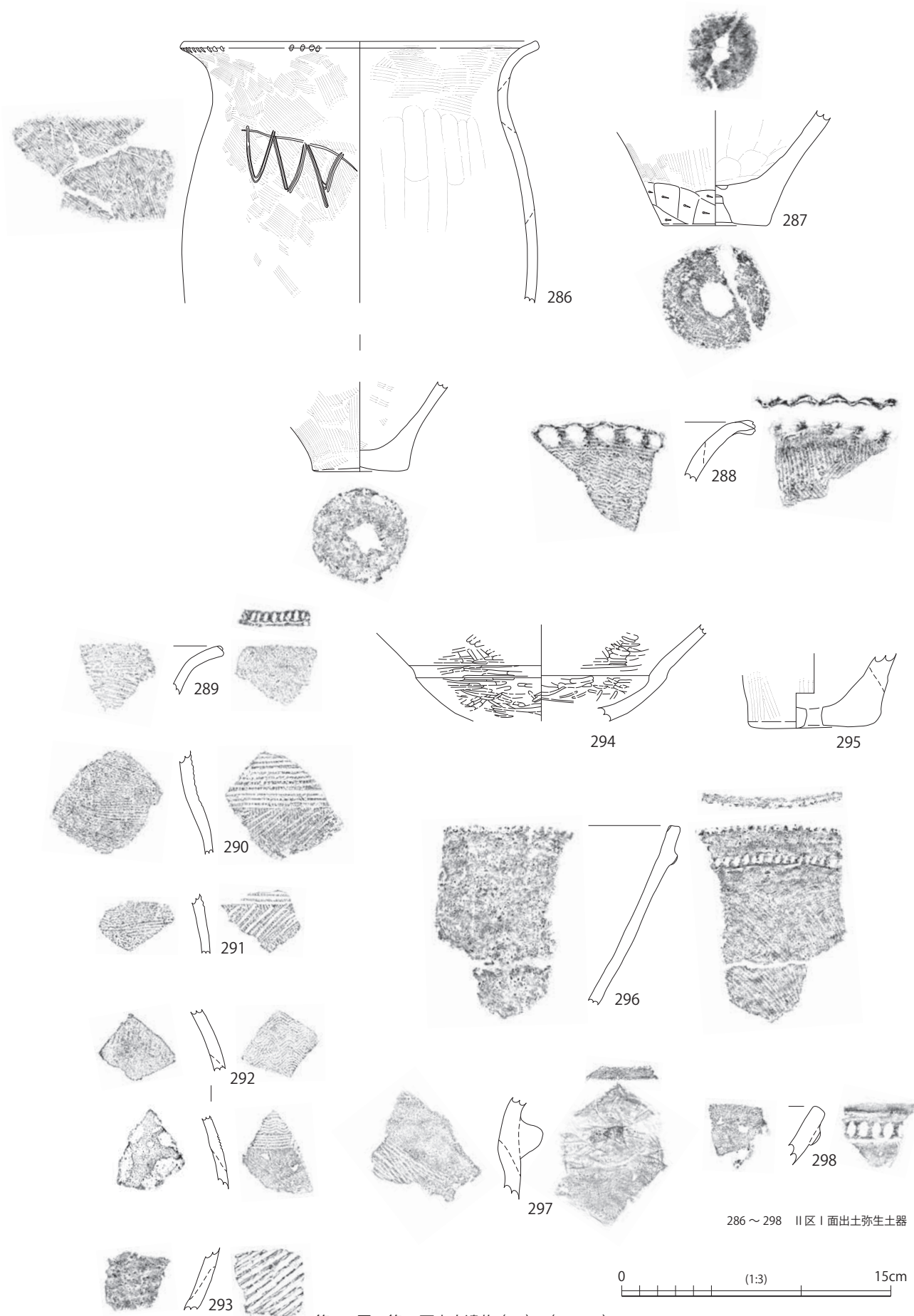
第58図 第1面出土遺物(33) (S=1/3)



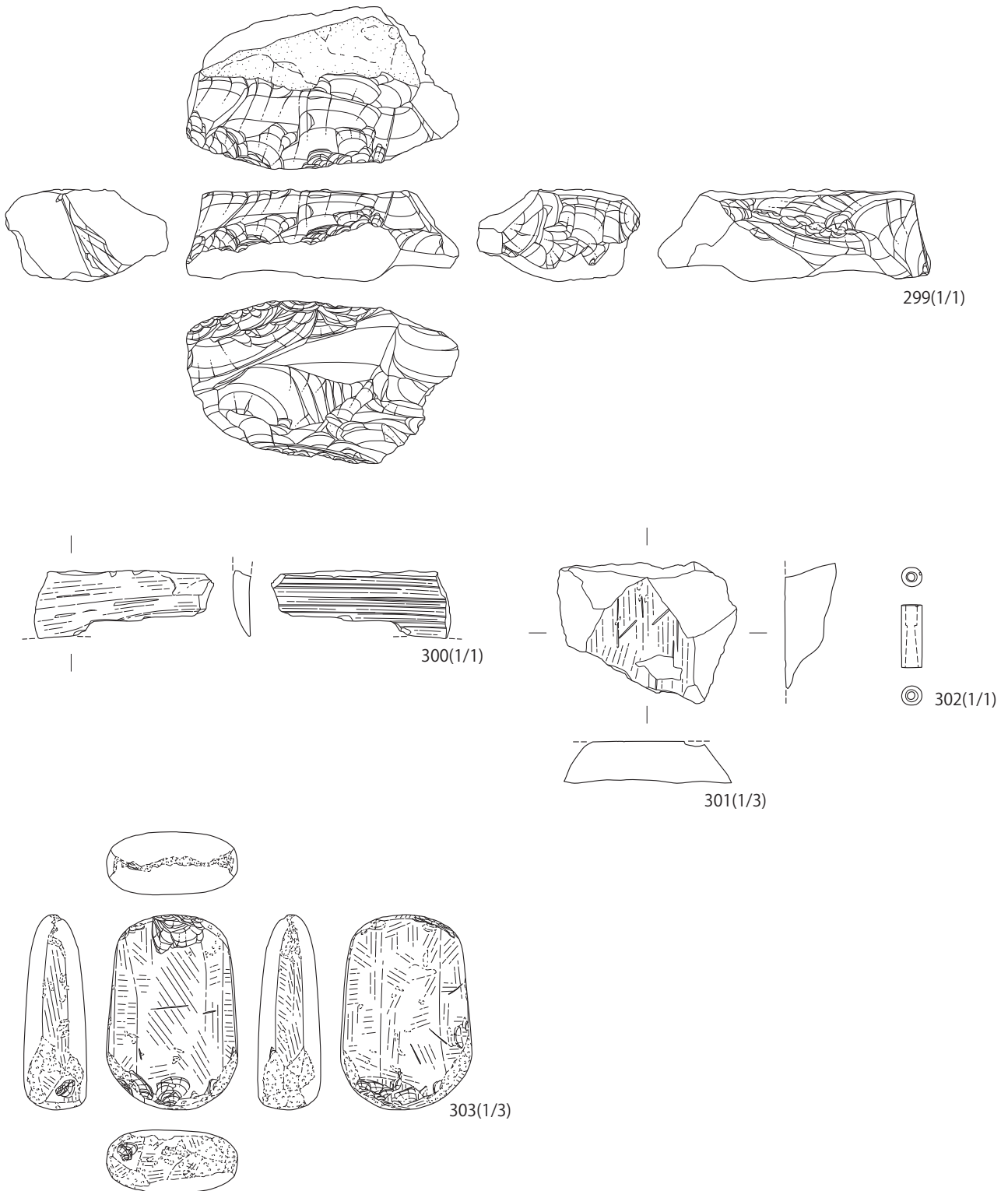
第59図 第1面出土遺物(34) (S=1/3)



第60図 第1面出土遺物(35) (S=1/3)



第61図 第1面出土遺物(36) (S=1/3)



299 ~ 303 II区I面出土弥生石製品

0 (1:3) 15cm

第62図 第1面出土遺物(37) (S=1/1・1/3)

第5節 Ⅲ区第1面の調査成果

SI2（第63図、第67図304） C9グリッドに位置する、浅い不定形の落ち込み状遺構。長軸3.5m・短軸2.8+mであり、埋土は黒褐色砂質土を基調とする。SD12に切り込まれる。304は口径7.0cmの土師器皿A類細片。体部は緩やかに内湾して立ち上がる。

SE1 (SI1)（第63図、第67～69図305～326） C9～10グリッドに位置する井戸である。2.3m四方の略方形の掘り方のやや北寄りに曲物が2段埋置されていた。井戸側の周囲には垂円礫を用いた礫敷の痕跡が残る。検出状況に残る柱状の残材から、曲物の上方に縦板等の井戸側が存在していた可能性がある。305～311は口径6～9cm台の小皿A類、312～316は口径10～11cm台の大皿D・A類であるが、細片が多く法量は不安定な部分もある。308は唯一の完形品で曲物内から出土している。平面形・高さ共に歪みをもつ。小皿類は概して立ち上がりが浅く扁平気味である。312は体部全体を幅広に外反させるD類で、315・316は平丸底の底部から明瞭な横ナデを内湾気味の口縁部全体に施す。大・小皿共に器形が全体に薄く華奢で14世紀中・後半代頃に位置づけられようか。317は外面に鎬蓮弁文を彫り出す青磁碗で間弁がはいるタイプである。318は越前焼播鉢。播目はなく内面は使用のため平滑となる。底部にはやや退化した低い高台が付く。Ⅱ3期（1290～1320）とした。319は越前焼の甕胴部片である。内外面には成形時の粘土紐の継ぎ痕が明瞭に残る。320は鉄釘。321～323は井戸掘り方から出土した凝灰岩製の炉石で被熱痕跡が見える。324は曲物内から出土した漆器碗でカツラ材の横木取りである。黒漆を内外面に塗布し、高台内面に「七」字に似る線刻がある。325・326は水溜として用いられていた曲物。2段目の326はほぼ完形で、高さ51cm・直径65～70cmを測る。

SE3 (SK9)（第64図、第70～87図327～387） C～D10グリッドに位置する、縦板組隅柱横棧留めの井戸である。井戸側は94×97cmの方形縦板組で、横棧は1段が残存しており隅柱に設けられた柄孔に差し込む形である。本井戸については、大型の縦板348・355で炭素14年代法による年代測定を行っており、ウイグルマッチング法による較正年代はそれぞれAD1039～1125・AD1039～1161が得られている（第4章参照）。なお、名古屋大学中塚武夫教授のご厚意により、348を年輪酸素同位体法で年代測定を行っていただいた結果、最外年輪年代でAD1032が得られている。出土土器は以下のように13世紀半ば～後半の年代観であり、分析結果とは100年以上の開きが生じているが、縦板で材の一端に方孔を持つもの（354・358など）の存在から転用材を井戸縦板として用いられた可能性を指摘しておきたい。

土師器皿は327～332の小皿と333・334の大皿がある。中でも329～332の口縁端部にはつまみ上げ気味の弱い面取り、333の大皿にはより鋭角な面取りが認められるなどB類の大・小セットとなる可能性があり、やや古手となる13世紀後半代の傾向をもつか。335・336は珠洲焼の播鉢片。335に播目はみられず口縁端部は方形状に外傾する。336の播目は波状に施され、内面は使用のため平滑となる。共にⅢ期（1250～80）頃の製品か。340～347は箸状木製品で、341のみノリウツギの他はスギ材である。348～377は井戸縦板で、長さ90～100cm前後・幅30～50cm・厚さ3～4cmの大型材（348～351・353・355・357・359・362・365）、長さ50～80cm前後・幅20cm前後・厚さ1～3cmの板材（352・354・356・358・360・361・363・364・366～374）、長さ20cm前後の端材（375～377）で構成される。樹種は全てスギ材。大型材の多くは表面に大ぶりのチョウナ痕をそのまま残す。378～382は横棧材で、長さ91cm・5～4cm角のスギ角棒材の両端に隅柱に差し込むための柄を加工する。383～386は隅柱で、長さ100cm強、8～9cm角のスギの角材を加工する。下端から60～65cmの箇所、横棧を差し込む方形の柄孔（未貫通）を作り出す。

SK5（第64図、第88・89図389～395） C～D10グリッドに位置し、西側が調査区外に延びる不定

形土坑である。埋土は多層が混じる様相を呈し、何らかの埋め戻し行為を経たものか。389は越前焼播鉢細片。口縁端部は僅かに肥厚し上面には弱い沈線が巡る。Ⅱ3期（1290～1320）とした。390は越前焼甕胴部片で、大甕に復元可能な大きさをもつ。391～395は炉石や行火・石鍋片で一括廃棄されたものか。

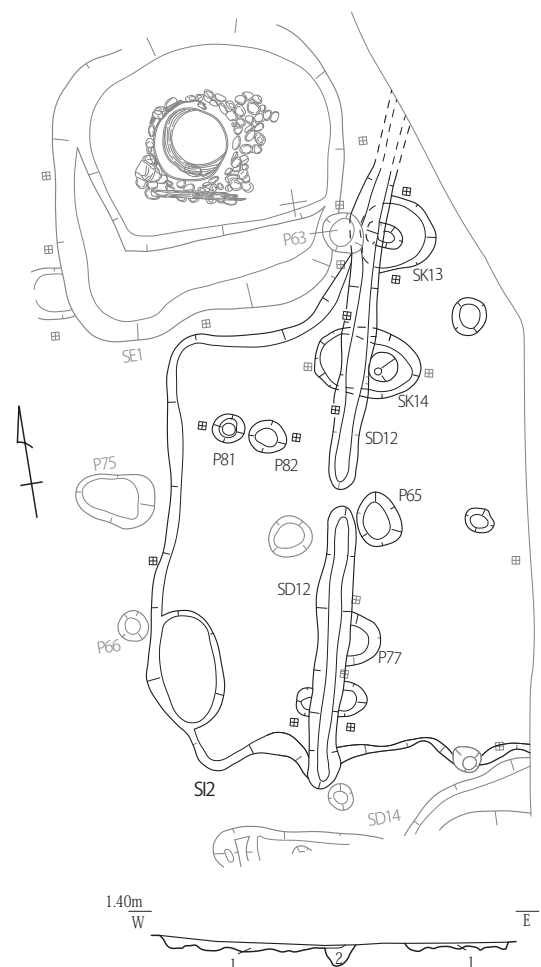
SK7（第65図、第90図398） D9グリッドに位置する大型土坑で、西側が調査区外に延びる。長軸3.1m・深さ0.8mを測り、埋土は褐灰～黒褐色土を基調とする。398は越前焼播鉢片。口縁部上面は水平に近くやや丸味をもち、内面に沈線はみられず播目は間隔があく。Ⅳ1期（1380～1410）とした。

SK15（第65図、第90図403～406） C10グリッドに位置し、西側の一部が調査区外へ延びる不整円形の土坑であり、数タイプの土師器皿片が出土する。403は底部を部分的に欠くが、6cm台の口径や薄手の作りから底部中央を押し上げるへそ皿F類とした。器形が大きく歪む404もへそ皿の可能性もある。また、406は口縁部を外反させ端部上方をつまみ上げ気味とする京都系土師器皿E類である。共に16世紀代の製品と思われる。

SD5（第66図、第91図408～412） C12グリッドに位置し、調査区を東西に横断する区画溝か。主軸方位の異なるSD6に切られる。幅0.8～1m・深さ0.2m、埋土は黒褐色砂質土を基調とする。408～412は口径11.0～11.4cm、器高2.5～3.0cmの法量・成形共にまとまりをもつ土師器皿A類で、409・411・412（溝上層出土）には取り上げ番号が付く。平面形に多少の歪みはみられるが体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部の横ナデは明瞭で下端には稜が巡る。横ナデ幅は器高の約2/3程度を占める。14世紀前半頃に位置づけられるか。

SD6（第66図、第91図413～415） C11～12グリッドに位置し、SD5を切る区画溝で調査区を南北方向に延びる。幅0.5～0.7m・深さ0.2m、埋土は黒褐色砂質土を基調とする。413は口縁端部を先細りにつまみ上げる京都系の土師器皿。17世紀前半代の近世初頭とした。414は外面に藁灰釉、内面に鉄釉を掛け分ける陶器碗。内面には藁灰釉が一部流れ込み高台は無釉とする。胎土は肥前とは異なる暗灰色で17世紀前半の福岡産か。415は瀬戸・美濃灰釉皿の底部片。大窯1・2段階（1480～1560）で漆継ぎの痕跡がみられる。溝の年代観は17世紀代に想定されようか。

Ⅲ区その他の遺物 388は平面形が大きく歪む土師器皿D類とした。体部は平底から強い角度で直線的に立ち上がる。396は越前焼甕肩部片。押印等は確認できない。397は片口の石鉢か。399～401は土師器皿A類で器形が歪み浅く扁平となる。色調・摩耗具合等は不揃いである。407は平底から体部が急角度で立ち上がる土師器皿D類。同類の388よりも薄手である。416は中世、417は近世17世紀代の土師器皿である。416は扁平で器形が歪むA類小皿、417は口縁端部を先細りとし口縁と底部内外面には油煤痕が付着する。418は口縁部を引き伸ばし端部を僅かにつまみ上げる京都系土師器皿E類。16世紀代か。421・422は口縁端部に弱い面取りを施すB類、423・426は口縁部を斜め上方に引き上げる京都系土師器皿E類である。425は瀬戸・美濃の灰釉袴腰形香炉。器形は全体に扁平で口縁端部を外側に引き出し肥厚させる。外面下半と内面は無釉で、古瀬戸後期様式Ⅱ期（1400前後）とした。429は土師器鍋。丸みを帯びた胴部から口縁部はくの字型に外反し、端部は面取りを施す。内外面を横・縦のハケ調整とし、外面には煤が付着する。433は素焼きの片口鉢未製品。19世紀以降の再興九谷関連資料である。434は加賀焼甕の口縁部片。口縁端部を上下に引き出し、やや内傾するN字状の口縁帯を作り出す。14世紀前半代を盛期とする湯上ユノカミダニ窯の製品か。436・440は肥前播鉢の底部片。口縁部以下を無釉とし外底には回転糸切り痕を残す。特に436の内面は播目の大半が磨り減り使用が著しい。17世紀前半。439は瓦質播鉢である。口縁端部は外傾肥厚し方形状とする。外面は縦、内面には横方向のハケ調整がみられるがいずれも摩耗している。442～444は包含層出土の炉石・石製行火（蓋）。445～537は第2面由来の弥生土器と石製品。中期初頭矢木ジワリ式～中葉小松式～後期法仏式が含まれる。



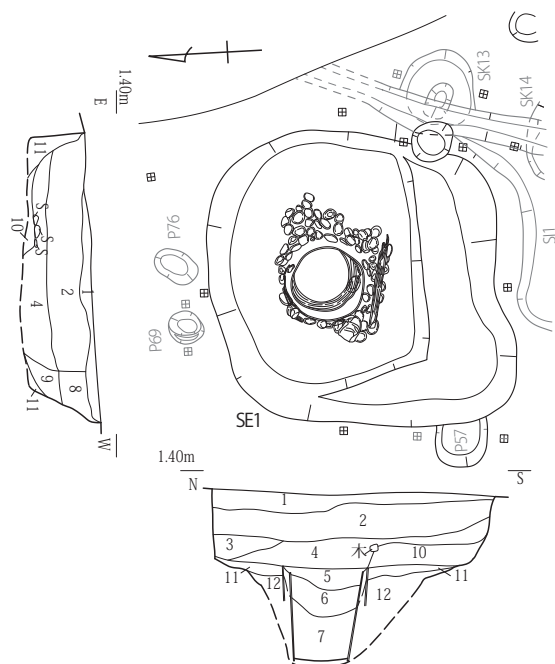
- SI2
1 10YR3/1黒褐色砂質土 灰黄色砂のブロックを含む。 黒色粘質土のブロックを多く含む。
2 2.5Y6/2灰黄色砂 黒褐色砂質土の大ブロックを多く含む。 SD12埋土

- SK13
1 10YR4/1褐灰色砂質土 灰黄褐色砂のブロックを多く含む。
2 10YR6/1褐灰色砂質土 黒褐色砂の小ブロックを少量含む。

- SK14
1 10YR4/1褐灰色砂質土 黄褐色砂のブロックを含む。炭を含む。埋土の一部が赤く焼けている。
2 10YR6/1褐灰色砂質土 黒褐色砂の小ブロックを少量含む。

- SD12
1 10YR2/1黒色砂質土 黄橙色砂質土のブロックを含む。
2 10YR7/6明黄褐色砂 褐灰色砂質土の小ブロックを含む。

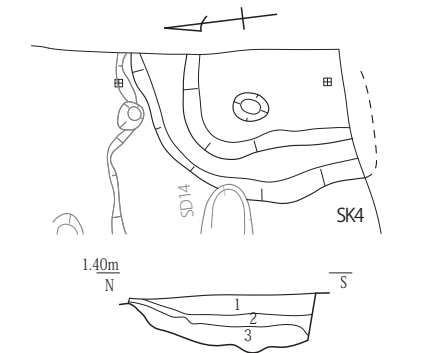
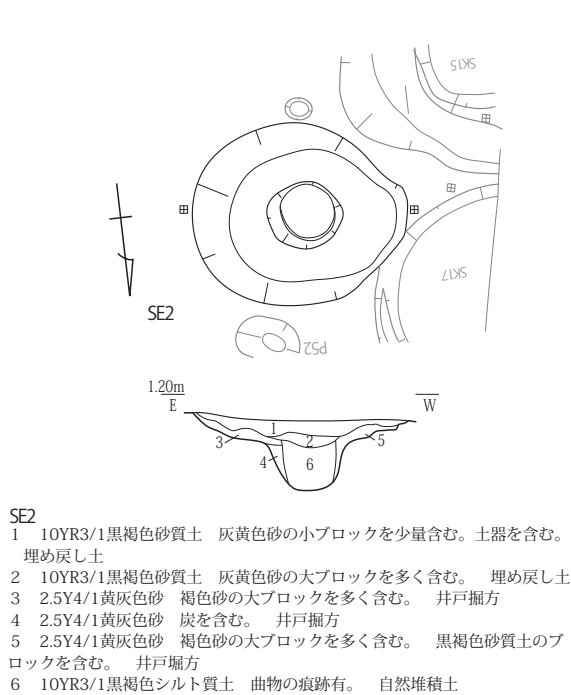
- P81・82
1 10YR3/1黒褐色粘質土 炭を含む。
2 10YR5/1褐灰色砂 黒褐色粘質土のブロックを含む。
3 10YR5/1褐灰色砂 黒褐色粘質土のブロックを少量含む。
4 10YR4/1褐灰色粘質土 炭を含む。
5 10YR4/1褐灰色砂質土 褐色砂のブロックを多く含む。炭を含む。



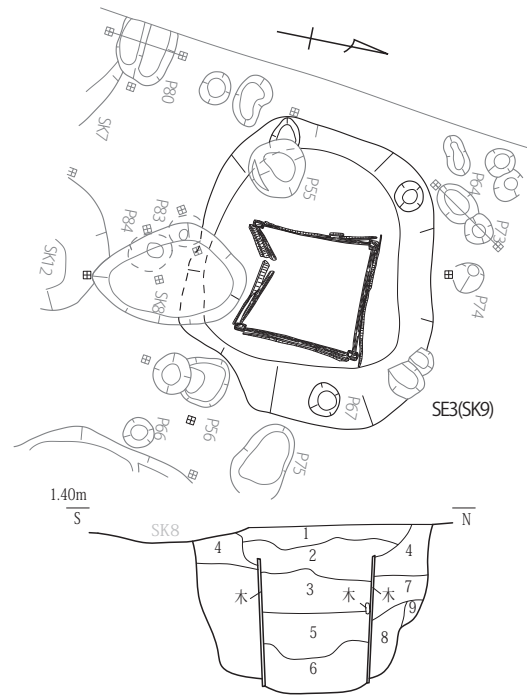
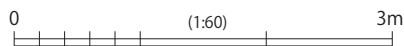
- SE1
1 10YR3/2黒褐色砂質土 灰白色粘土の小ブロックを少量含む。土器・炭を含む。埋め戻し土
2 10YR3/1黒褐色砂質土 灰白色粘土の大ブロックを多く含む。土器・炭を含む。埋め戻し土
3 10YR3/1黒褐色砂 灰黄褐色砂の大ブロックを含む。灰白色粘土のブロックを含む。埋め戻し土
4 10YR3/1黒褐色砂 黒褐色粘土のブロックを含む。埋め戻し土
5 10YR4/1褐灰色砂質土 灰白色粘土のブロックを含む。埋め戻し土
6 10YR3/1黒褐色砂質土 埋め戻し土
7 10YR3/2黒褐色砂質土 埋め戻し土
8 10YR3/1黒褐色砂 灰白色粘土の大ブロックを多く含む。 黒色砂質土の大ブロックを多く含む。 掘方埋土
9 2.5Y6/1黄灰色砂 黒色砂質土の大ブロックを含む。 灰白色粘土の大ブロックを含む。掘方埋土
10 10YR4/2灰黄褐色砂 黒褐色粘土の大ブロックを多く含む。 掘方埋土
11 10YR3/2黒褐色粘土 灰白色粘土のブロックを多く含む。 掘方埋土
12 2.5Y6/2灰黄色粘土 黄褐色粘土のブロックを含む。 黄灰色砂のブロックを含む。掘方埋土

0 (1:60) 3m

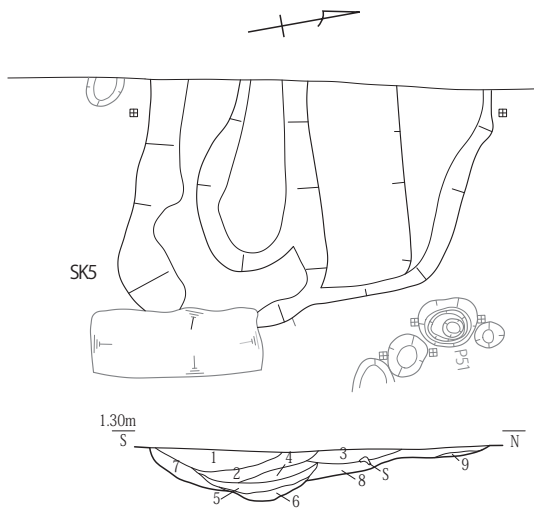
第63図 Ⅲ区第1面 竪穴建物・井戸 (S=1/60)



- SK4
- 1 10YR3/1黒褐色砂質土 黒色砂質土の大ブロックを含む。炭・土器を含む。
- 2 10YR3/2黒褐色砂質土 土器・炭を含む。
- 3 2.5Y4/1黄灰色砂 黒色粘質土の大ブロックを含む。灰黄色砂の大ブロックを少量含む。

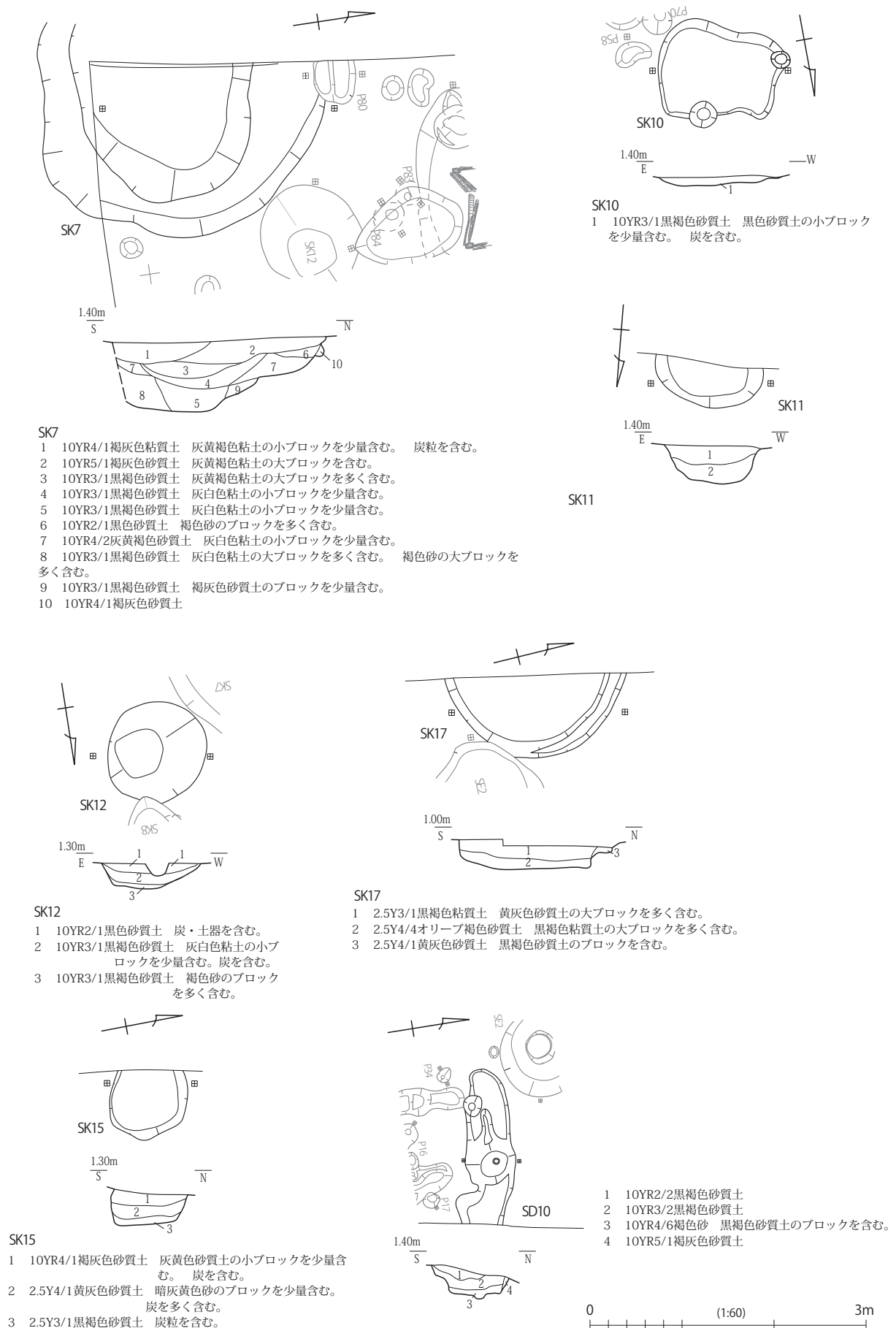


- SE3(SK9)
- 1 10YR3/2黒褐色砂質土 浅黄色砂の小ブロックを少量含む。
- 2 10YR3/1黒褐色砂質土 浅黄色砂のブロックを少量含む。
- 3 10YR2/1黒色砂質土 浅黄色砂の小ブロックを少量含む。炭粒を少量含む。
- 4 10YR2/1黒色シルト質土 浅黄色粘土のブロックを多く含む。掘り方埋土
- 5 10YR2/1黒色シルト質土 腐植を多く含む。
- 6 10YR2/1黒色砂 腐植を少量含む。
- 7 10YR4/1褐色砂質土 浅黄色砂のブロックを含む。
- 8 10YR3/1黒褐色砂質土
- 9 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土 黒褐色砂質土の小ブロックを含む。

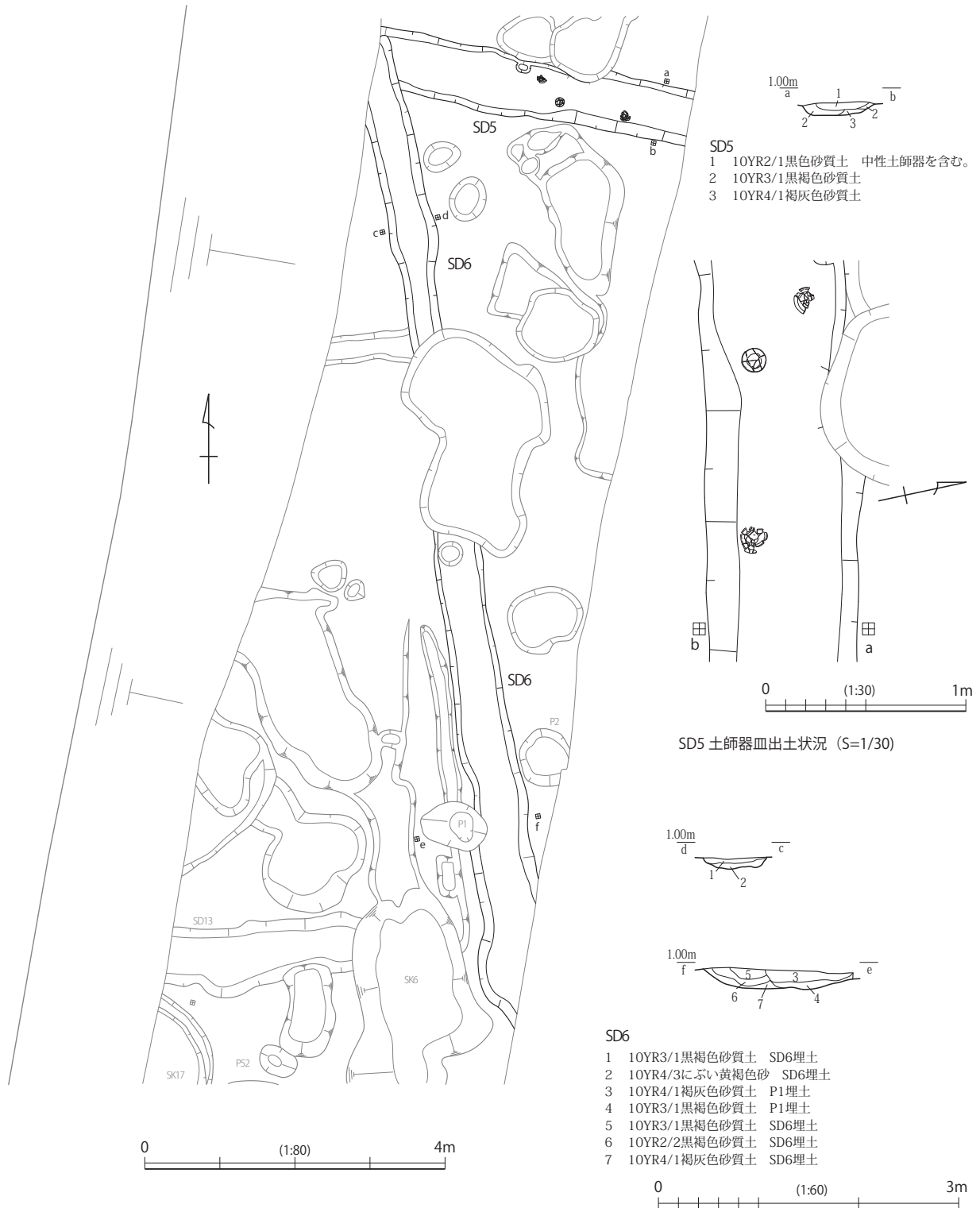


- SK5
- 1 10Y5/1灰色粘土 黒褐色粘質土の小ブロックを少量含む。
- 2 2.5Y4/6オリーブ褐色砂 黄灰色粘土の大ブロックを含む。
- 3 2.5Y4/1黄灰色砂質土 灰色粘土の大ブロックを多く含む。炭を含む。
- 4 2.5Y3/1黒褐色砂質土 灰色粘土の大ブロックを多く含む。
- 5 7.5GY5/1緑灰色砂
- 6 5Y4/1灰色粘土
- 7 5Y4/1灰色粘土 緑灰色砂の大ブロックを含む。炭を含む。
- 8 5Y4/1灰色シルト質土 灰色粘土のブロックを多く含む。
- 9 10YR2/1黒色砂質土 褐色粘質土のブロックを含む。SD11埋土

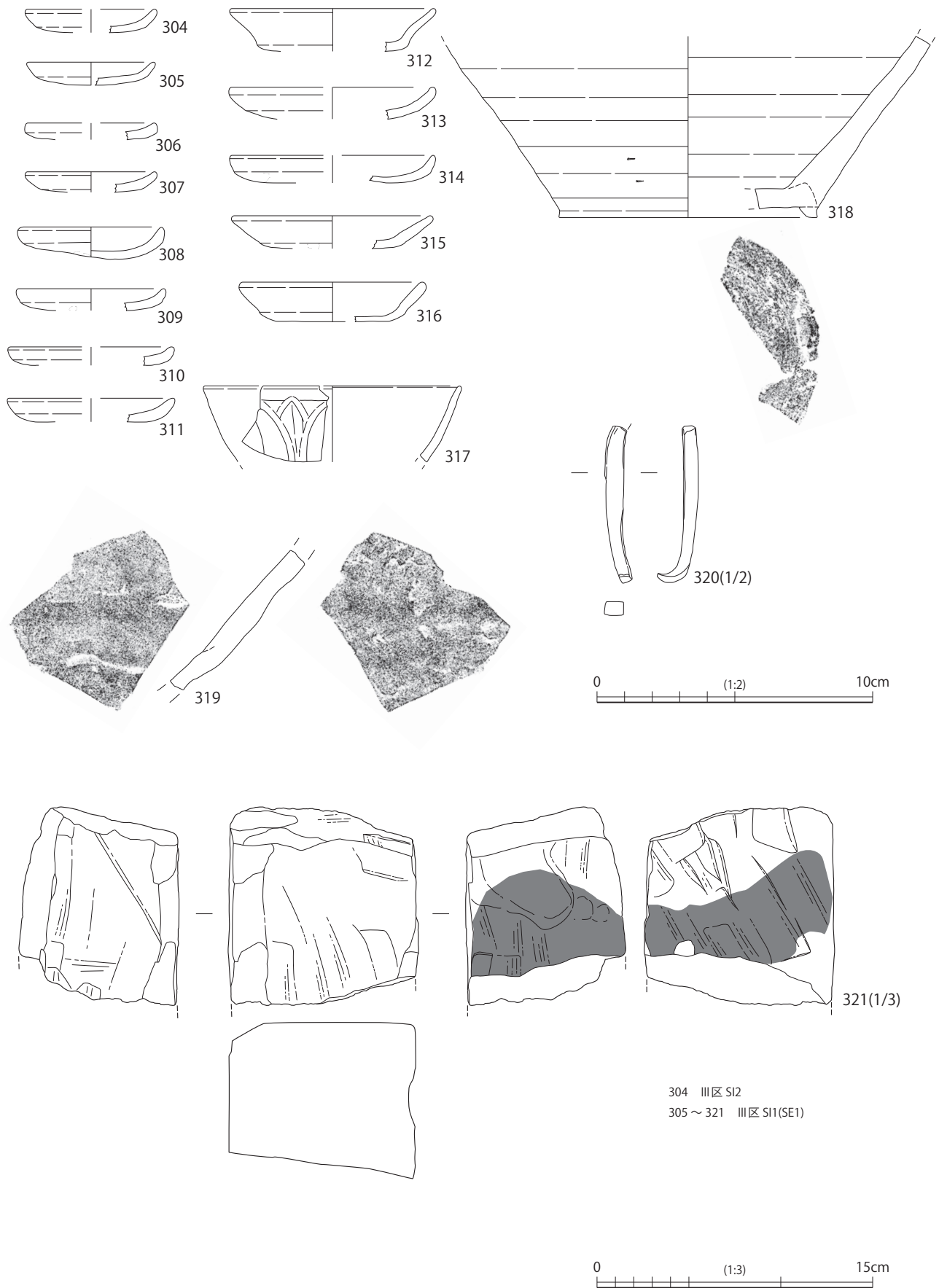
第64図 Ⅲ区第1面 井戸・土坑 (S=1/60)



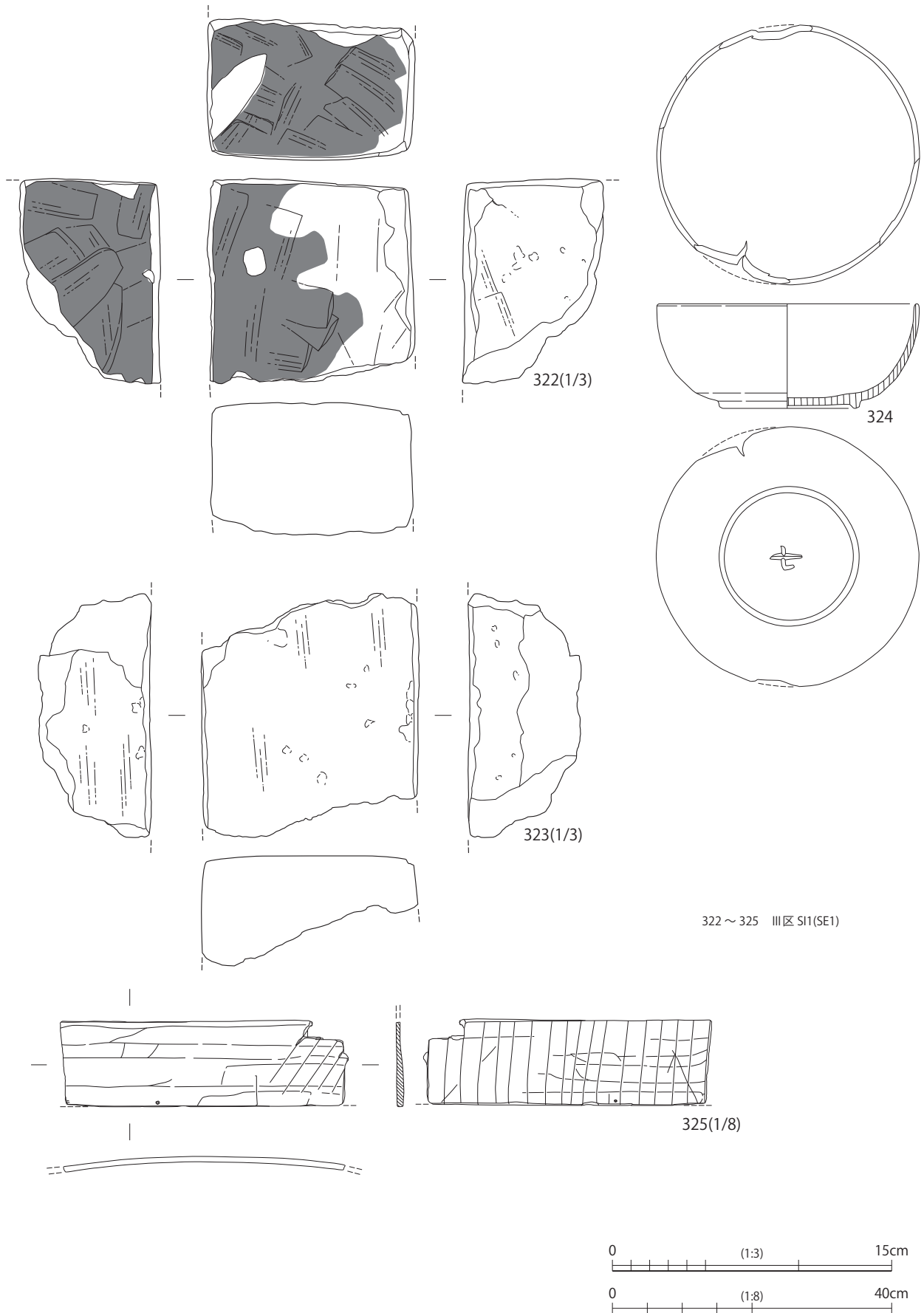
第 65 図 Ⅲ区第1面 土坑・溝 (S=1/60)



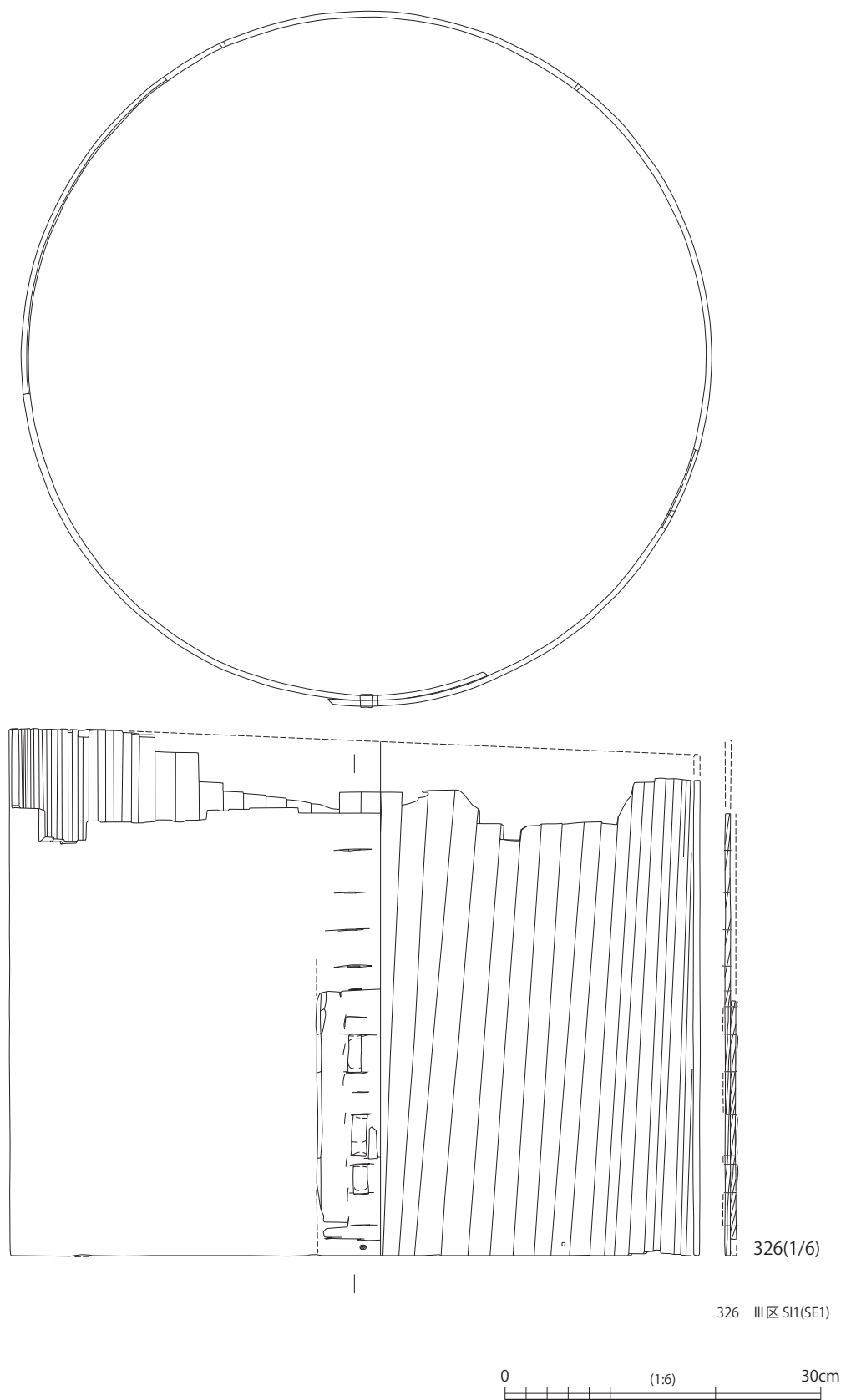
第66図 Ⅲ区第1面 溝 (S=1/60・1/80)



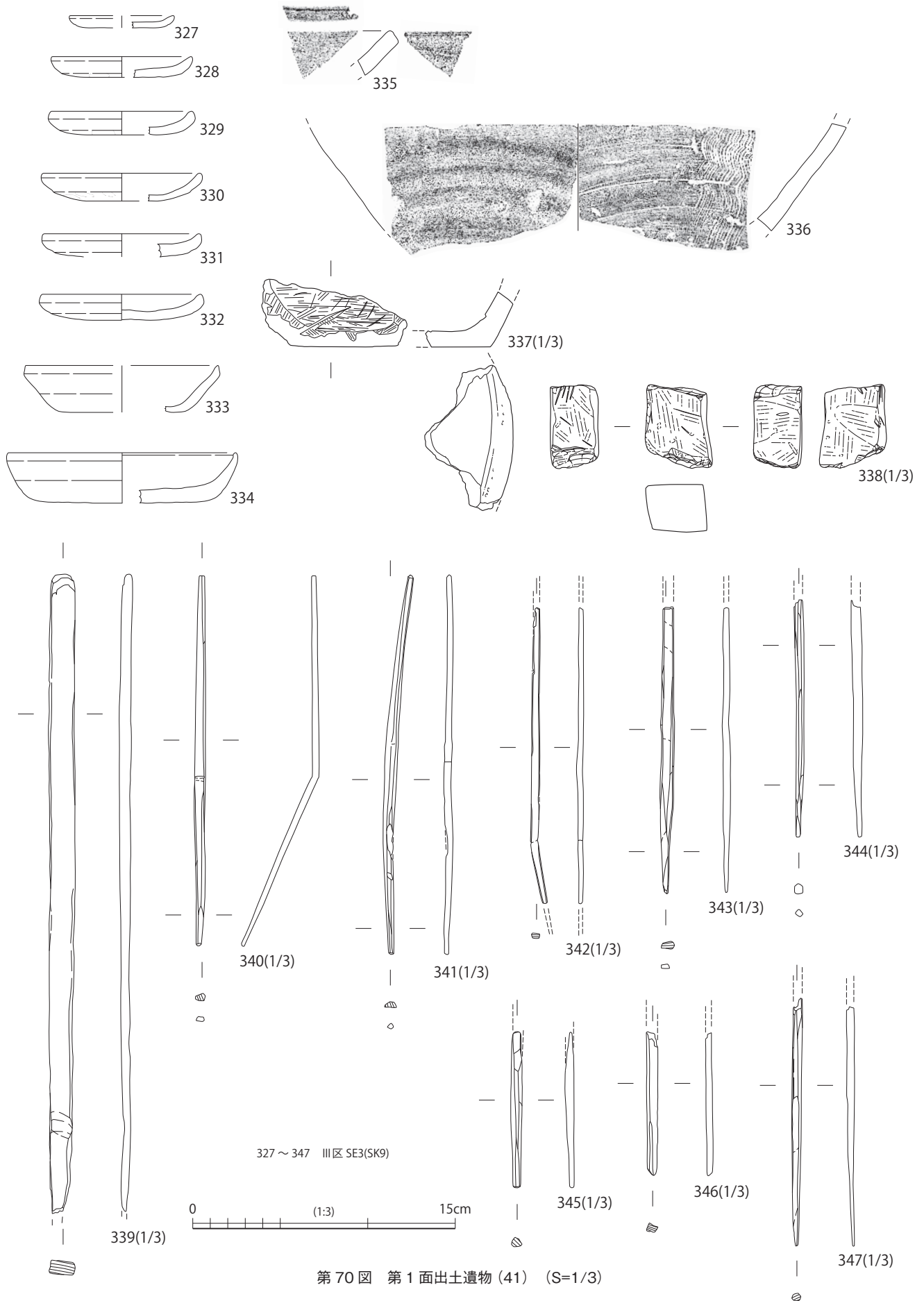
第 67 図 第 1 面出土遺物 (38) (S=1/2・1/3)

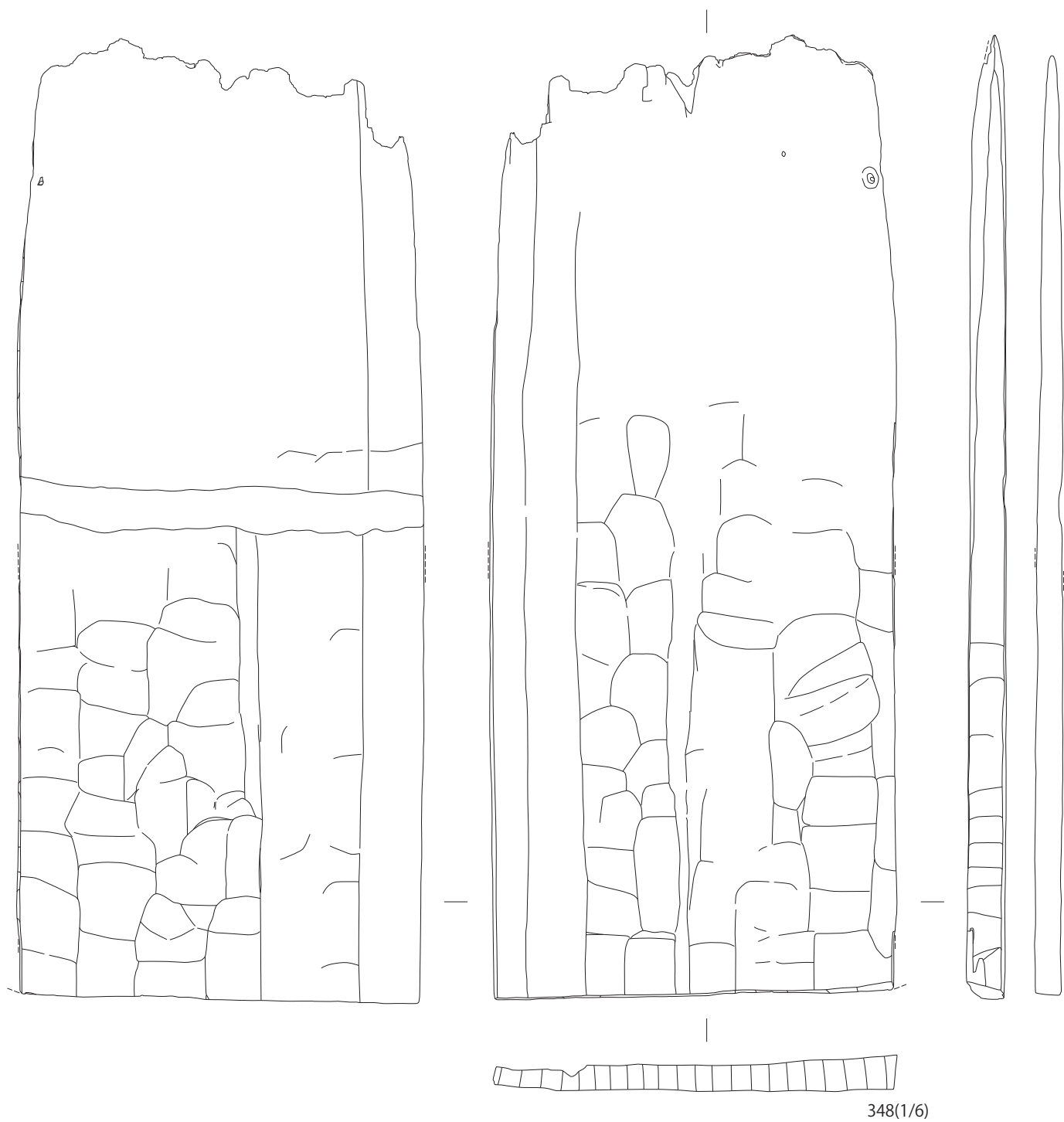


第68図 第1面出土遺物(39) (S=1/3・1/8)



第69図 第1面出土遺物(40) (S=1/6)

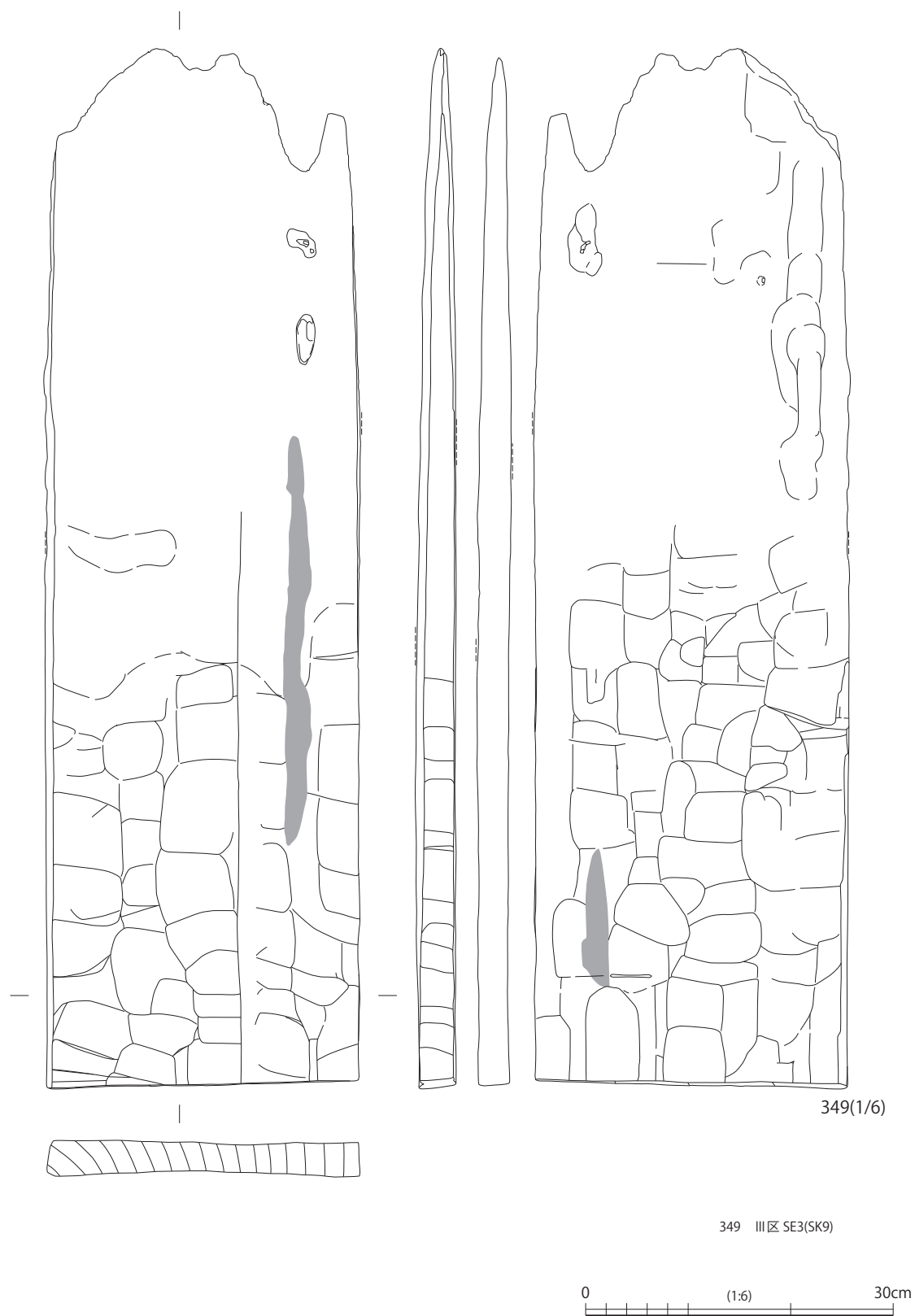




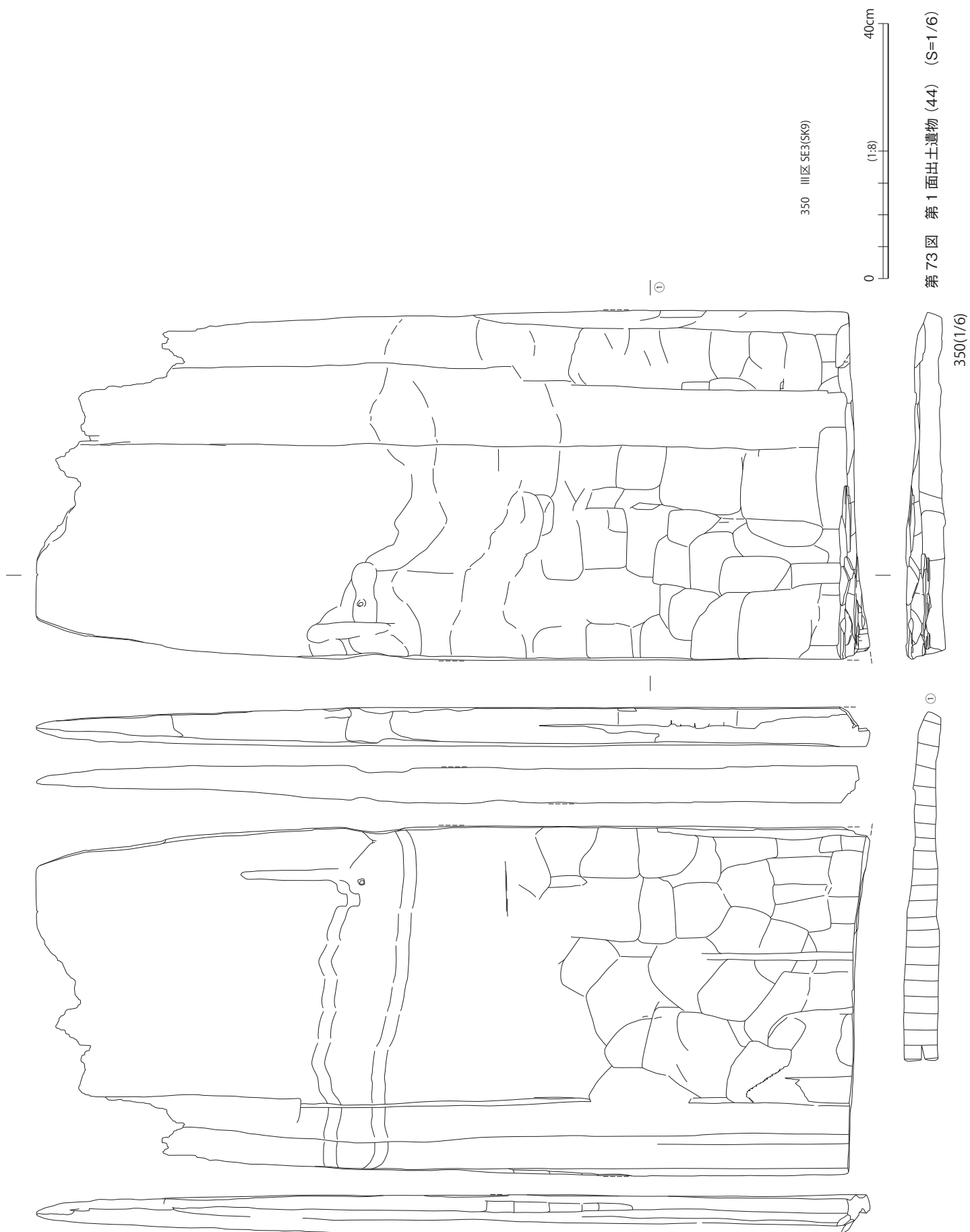
348 III区 SE3(SK9)

0 (1:6) 30cm

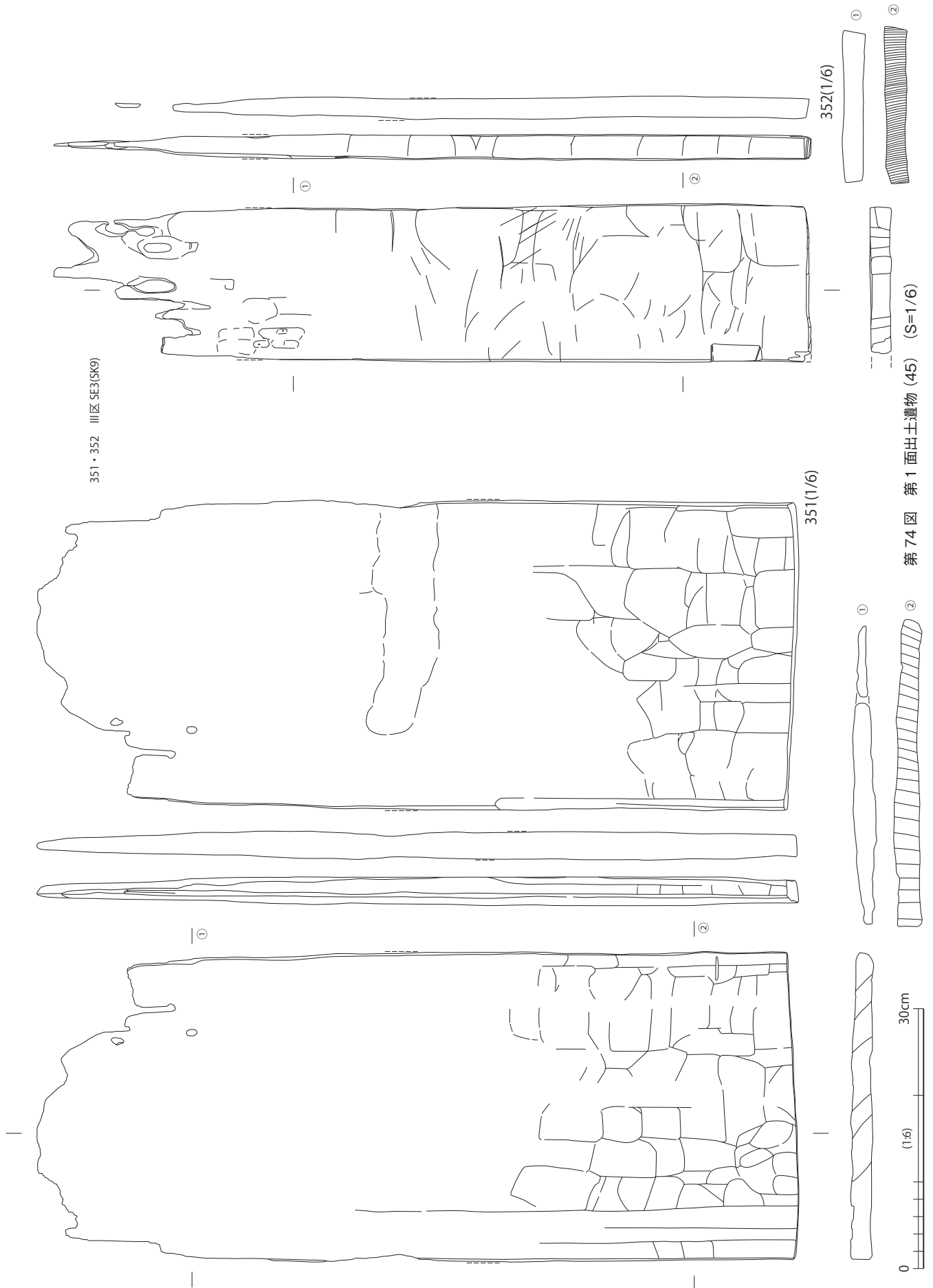
第71図 第1面出土遺物(42) (S=1/6)

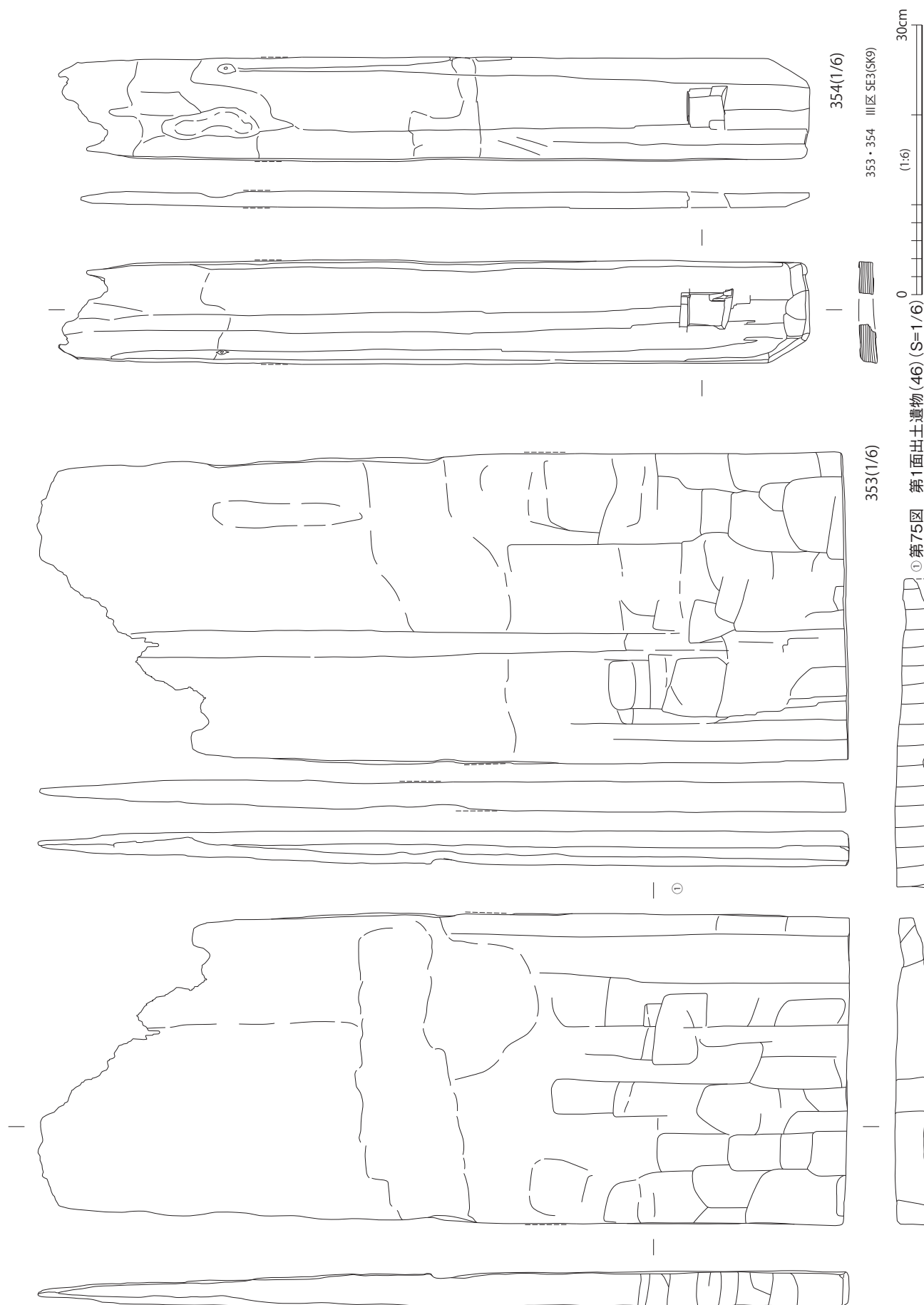


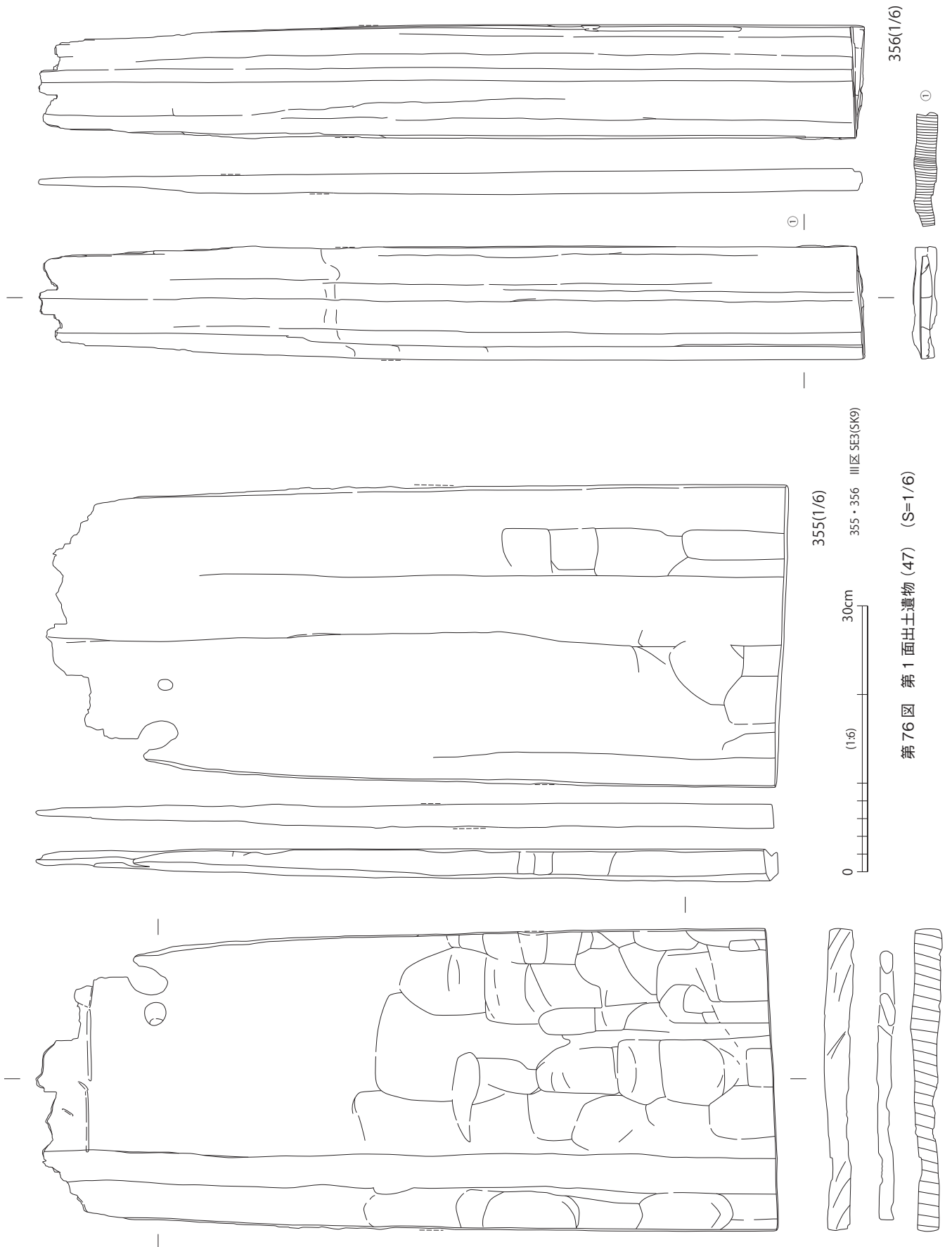
第72図 第1面出土遺物(43) (S=1/6)

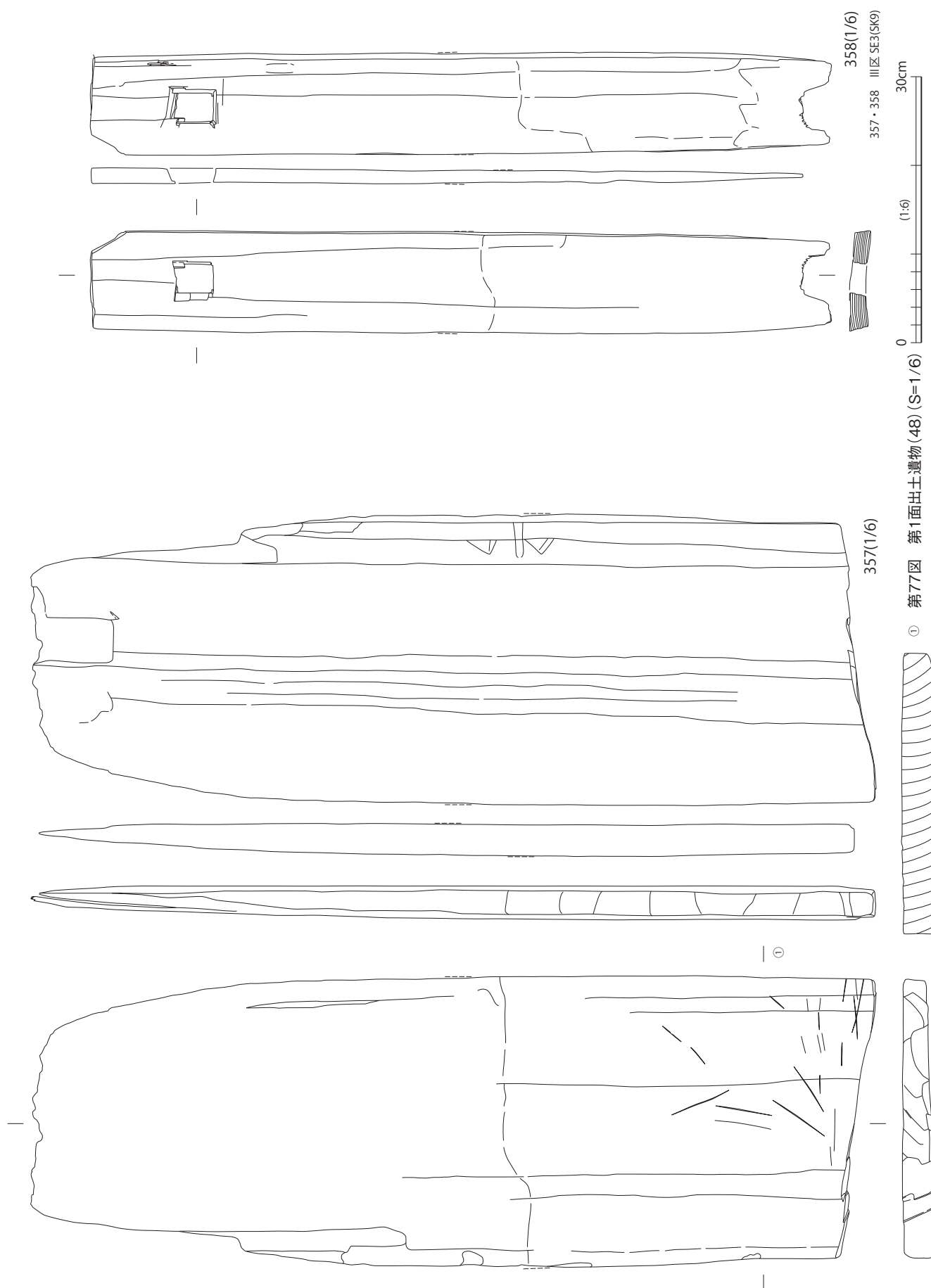


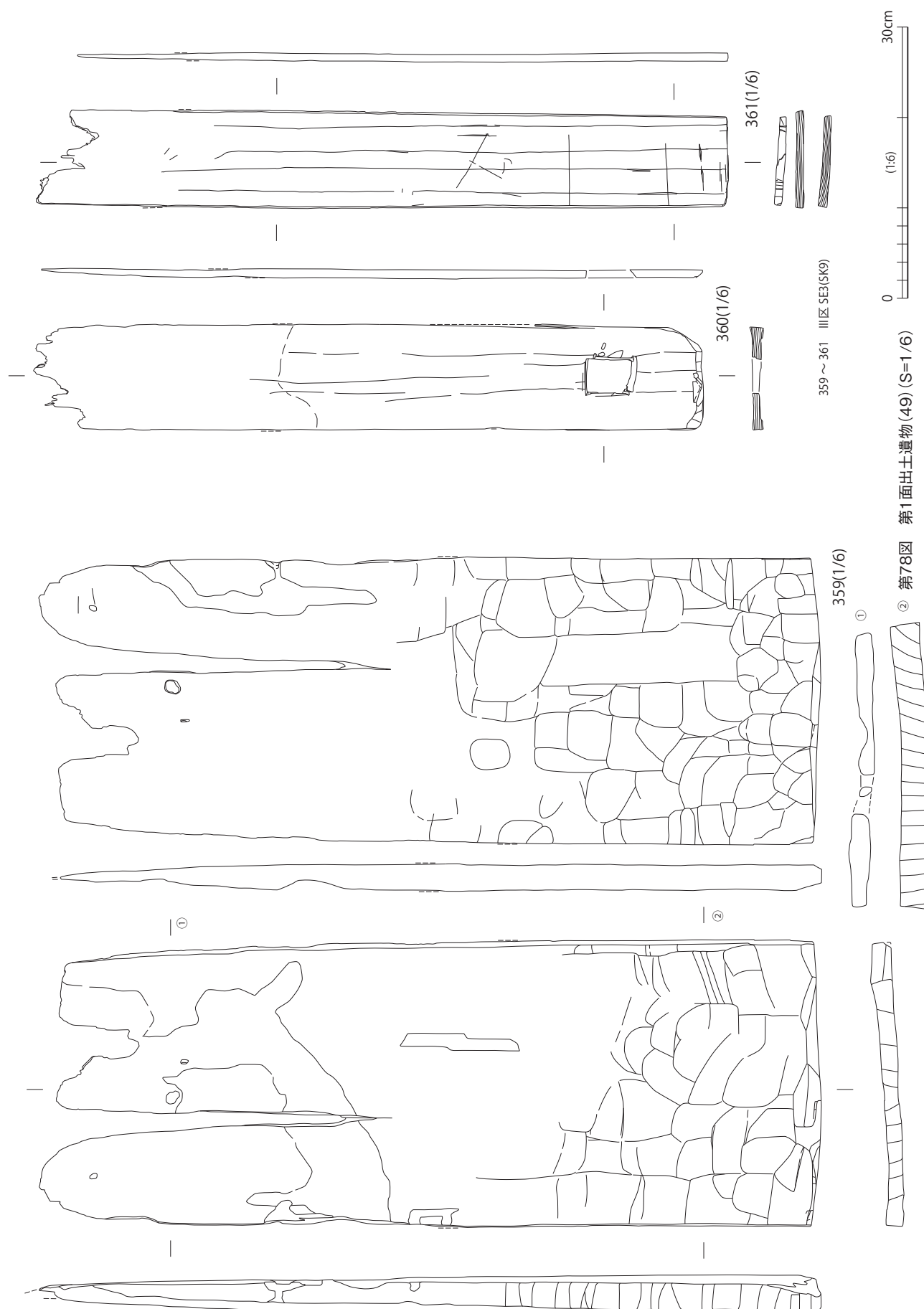
第73図 第1面出土遺物(44) (S=1/6)

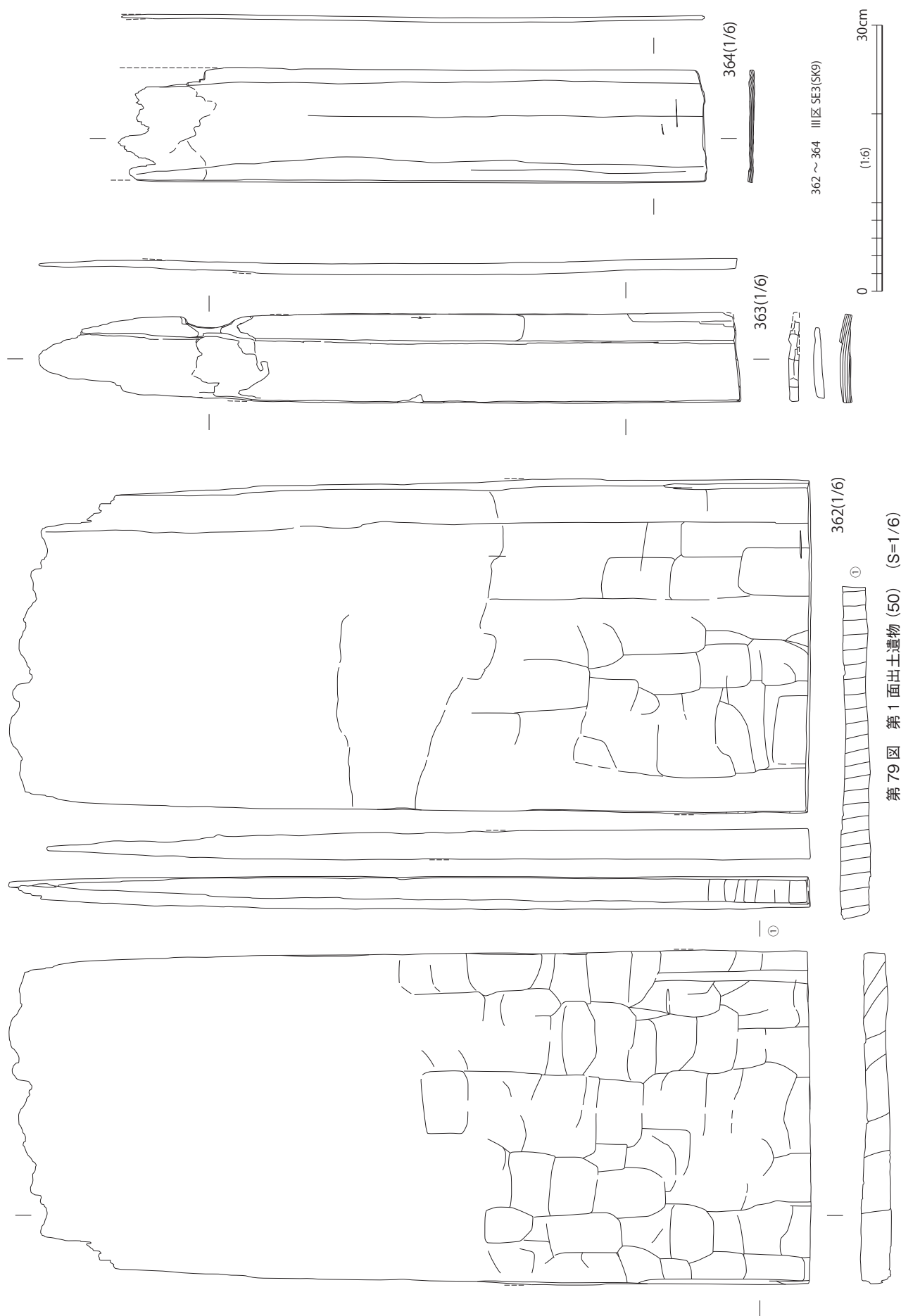




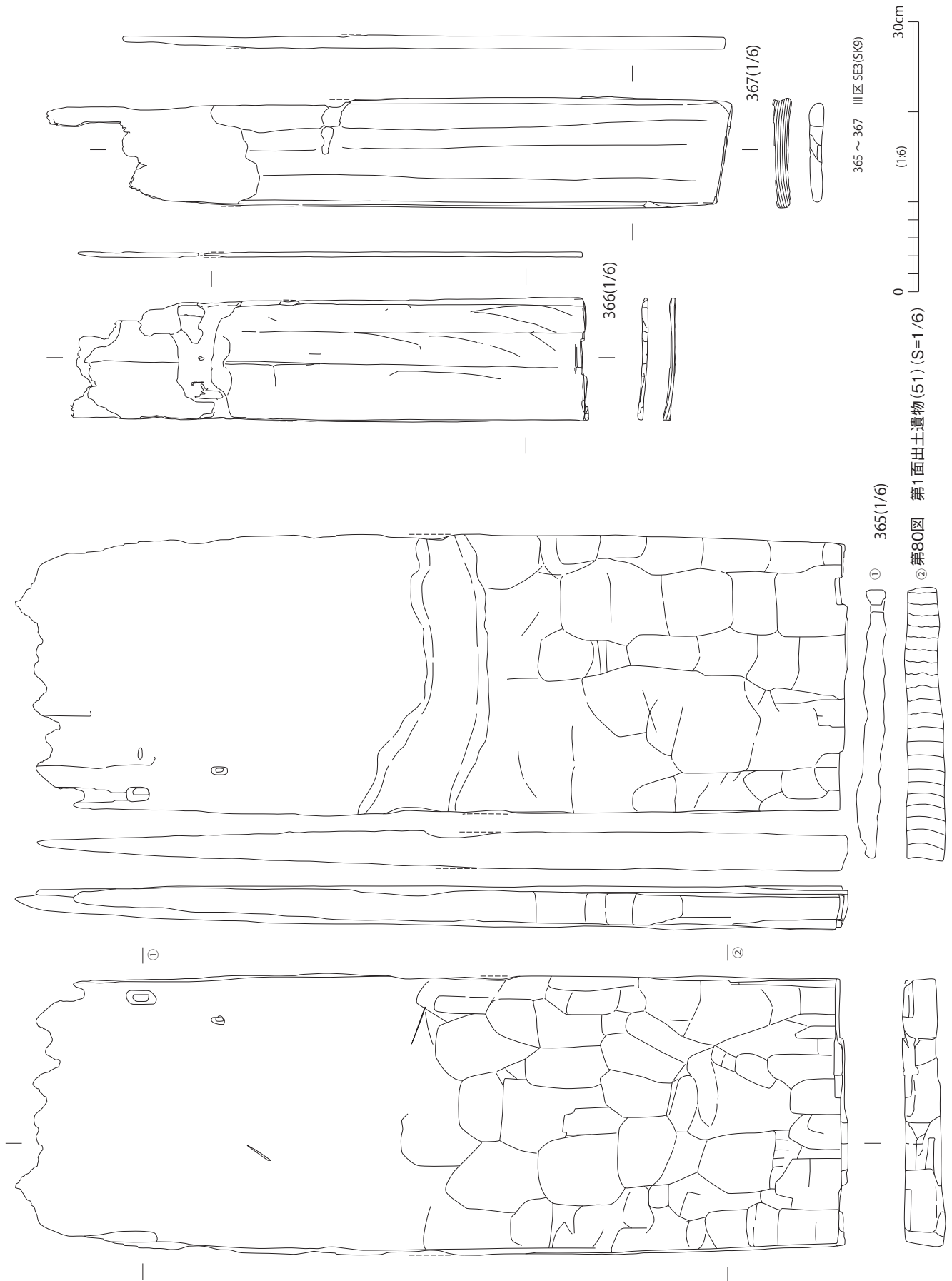


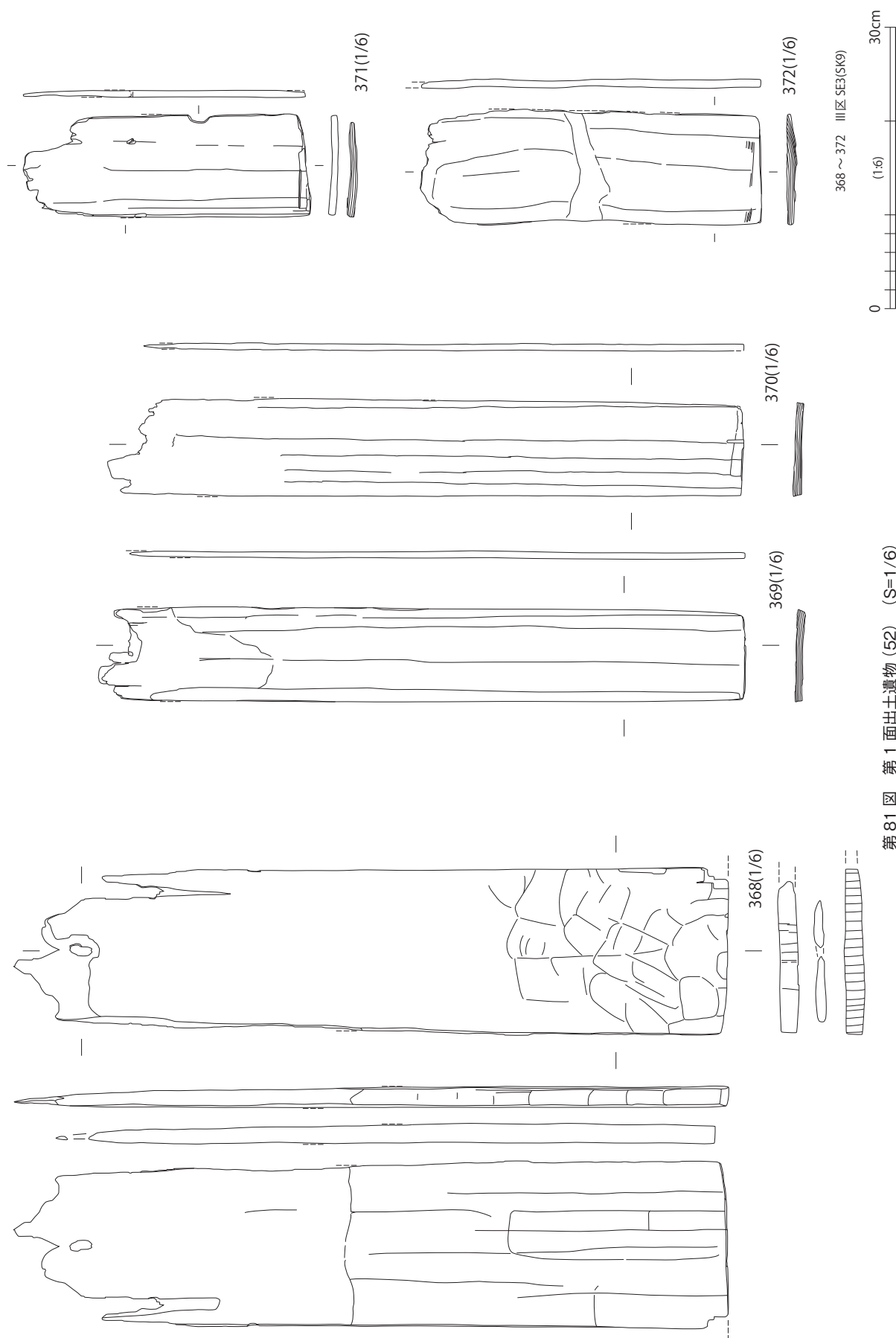




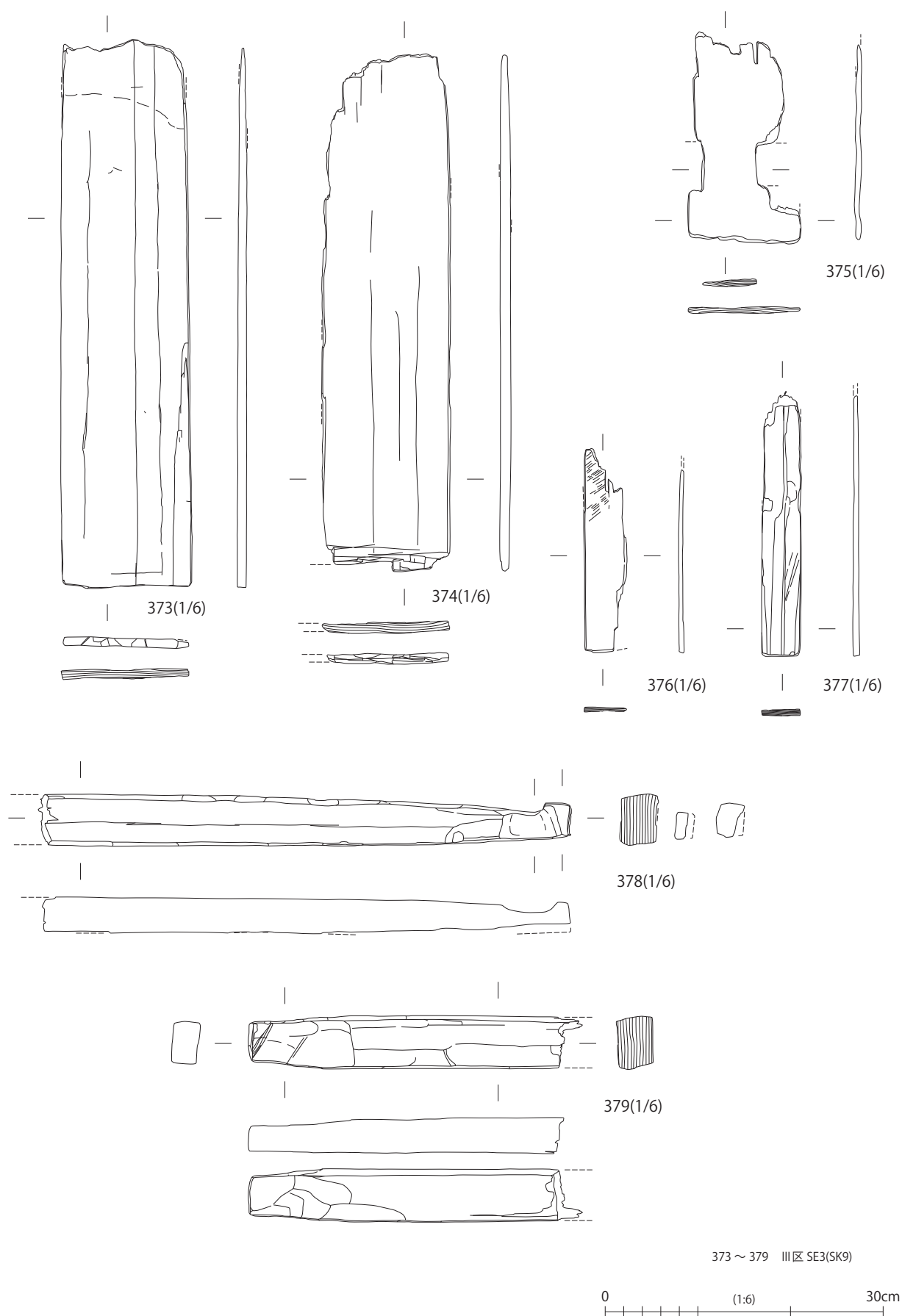


第79図 第1面出土遺物(50) (S=1/6)

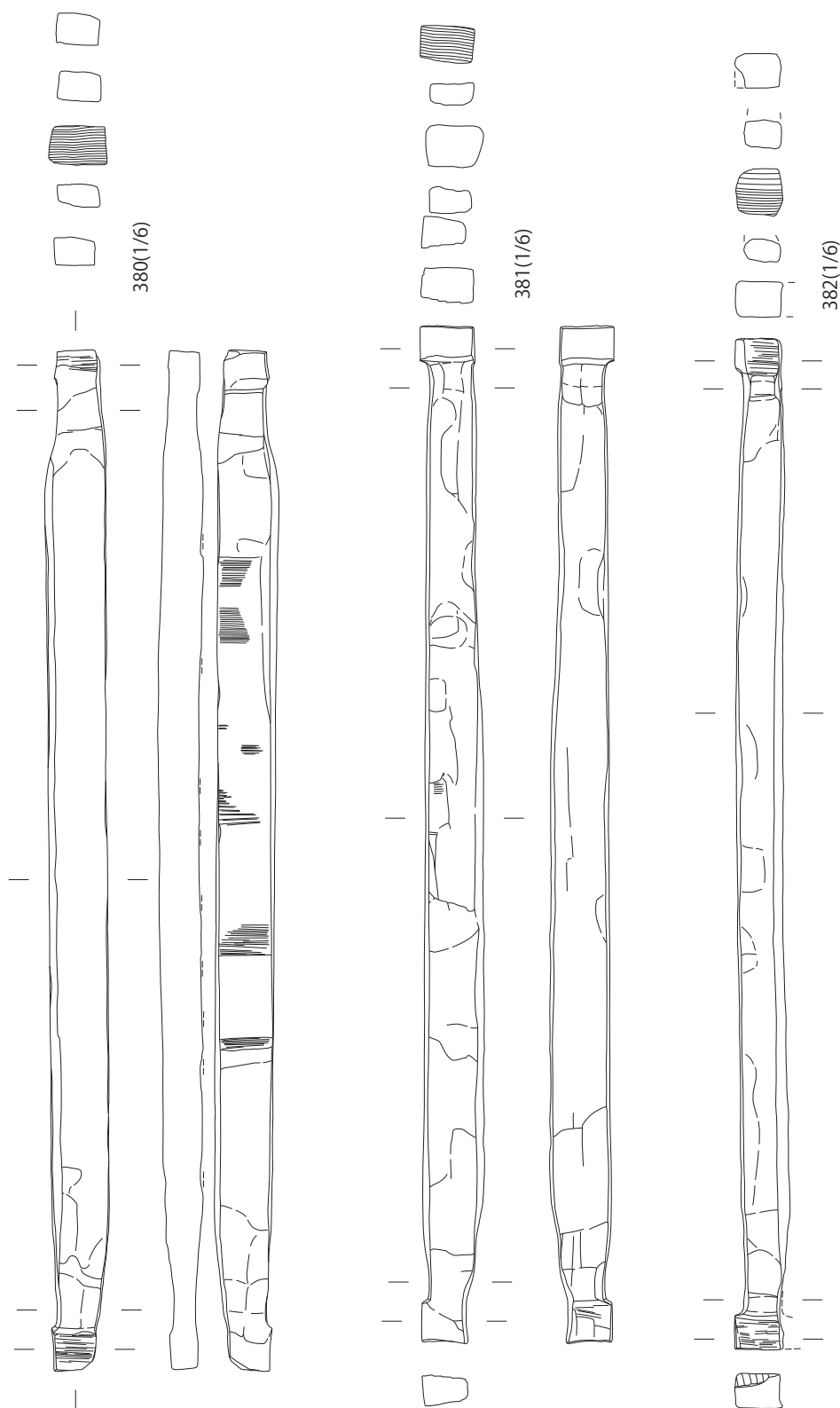




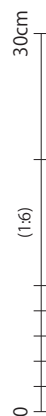
第81図 第1面出土遺物(52) (S=1/6)



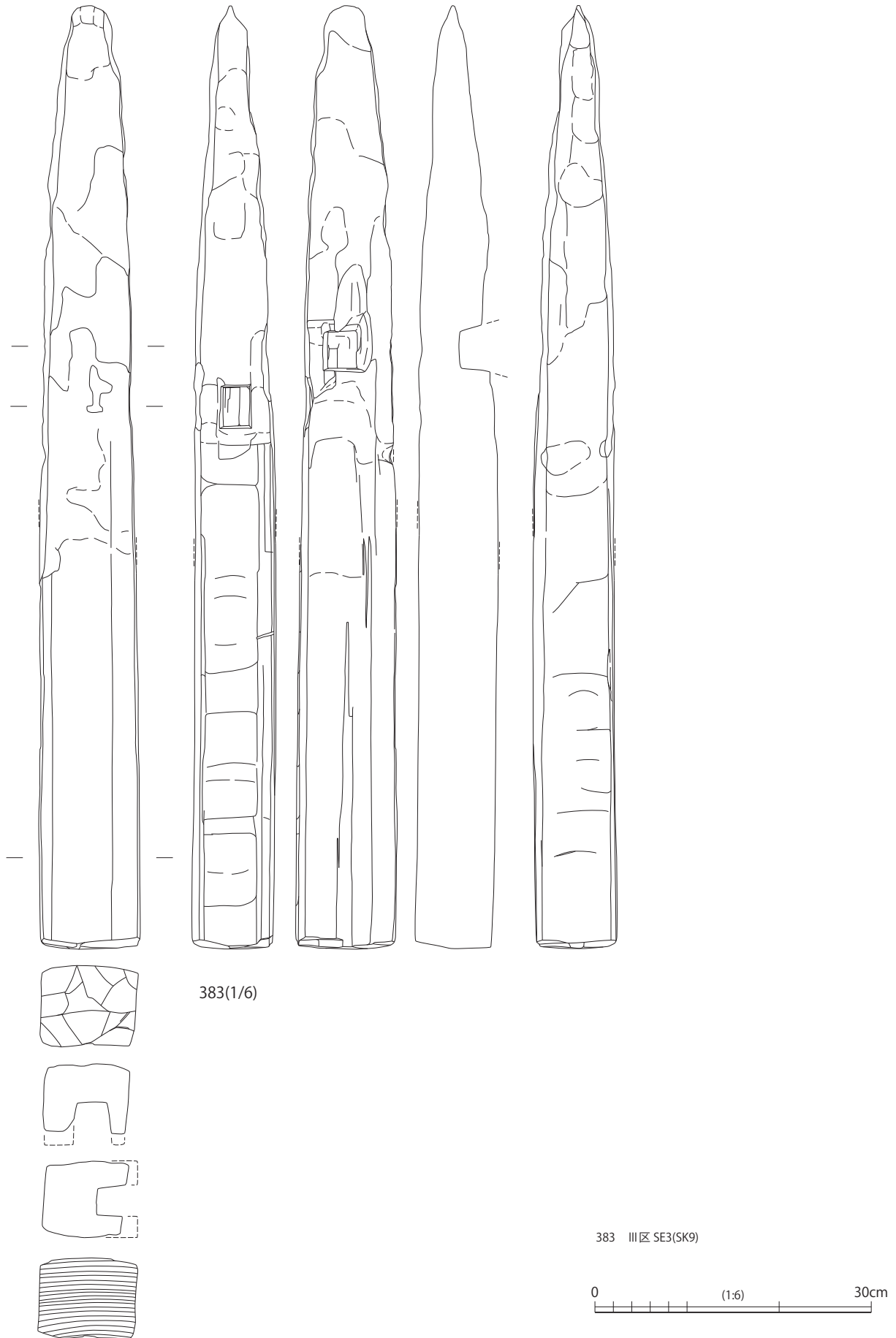
第82図 第1面出土遺物(53) (S=1/6)



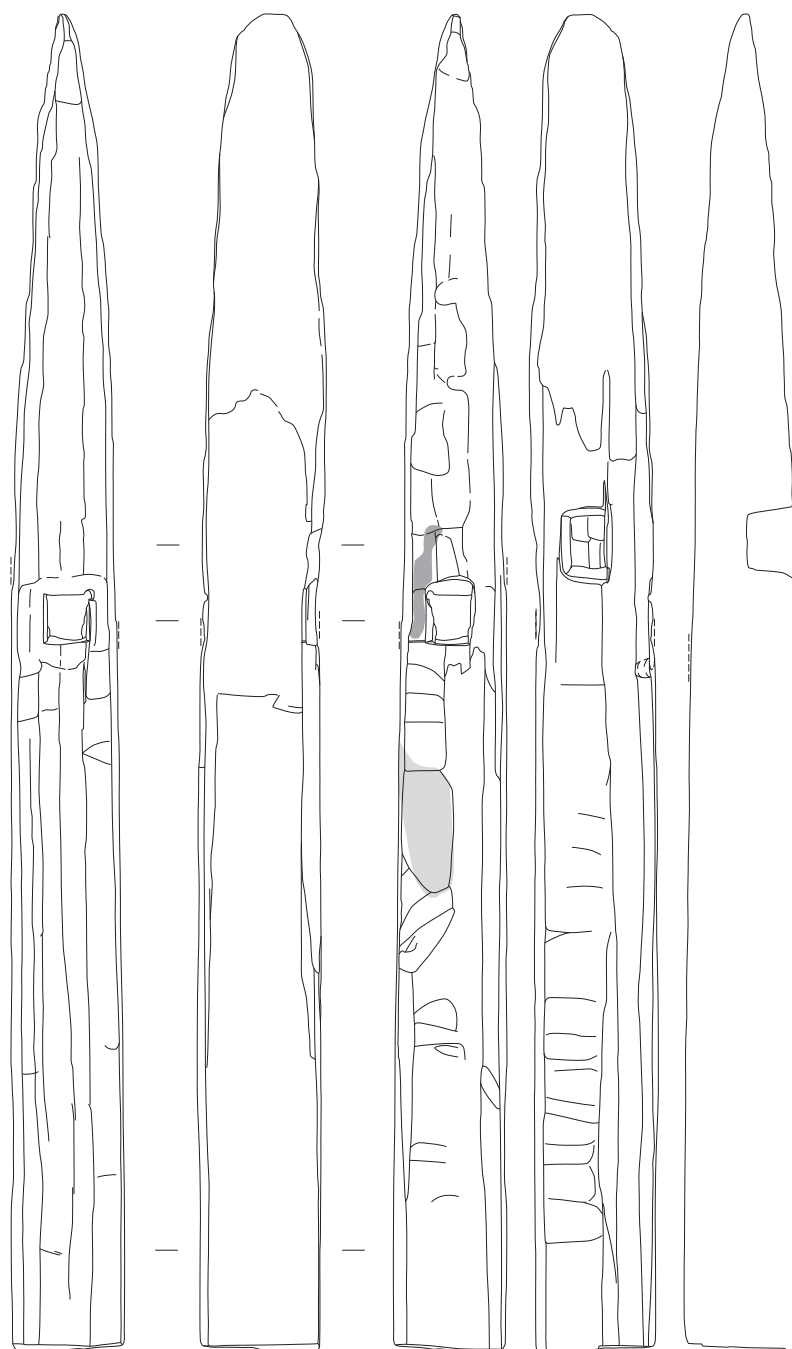
380 ~ 382 Ⅲ区 SE3(SK9)



第83図 第1面出土遺物(54) (S=1/6)



第84図 第1面出土遺物(55) (S=1/6)



384(1/6)



384 III区 SE3(SK9)

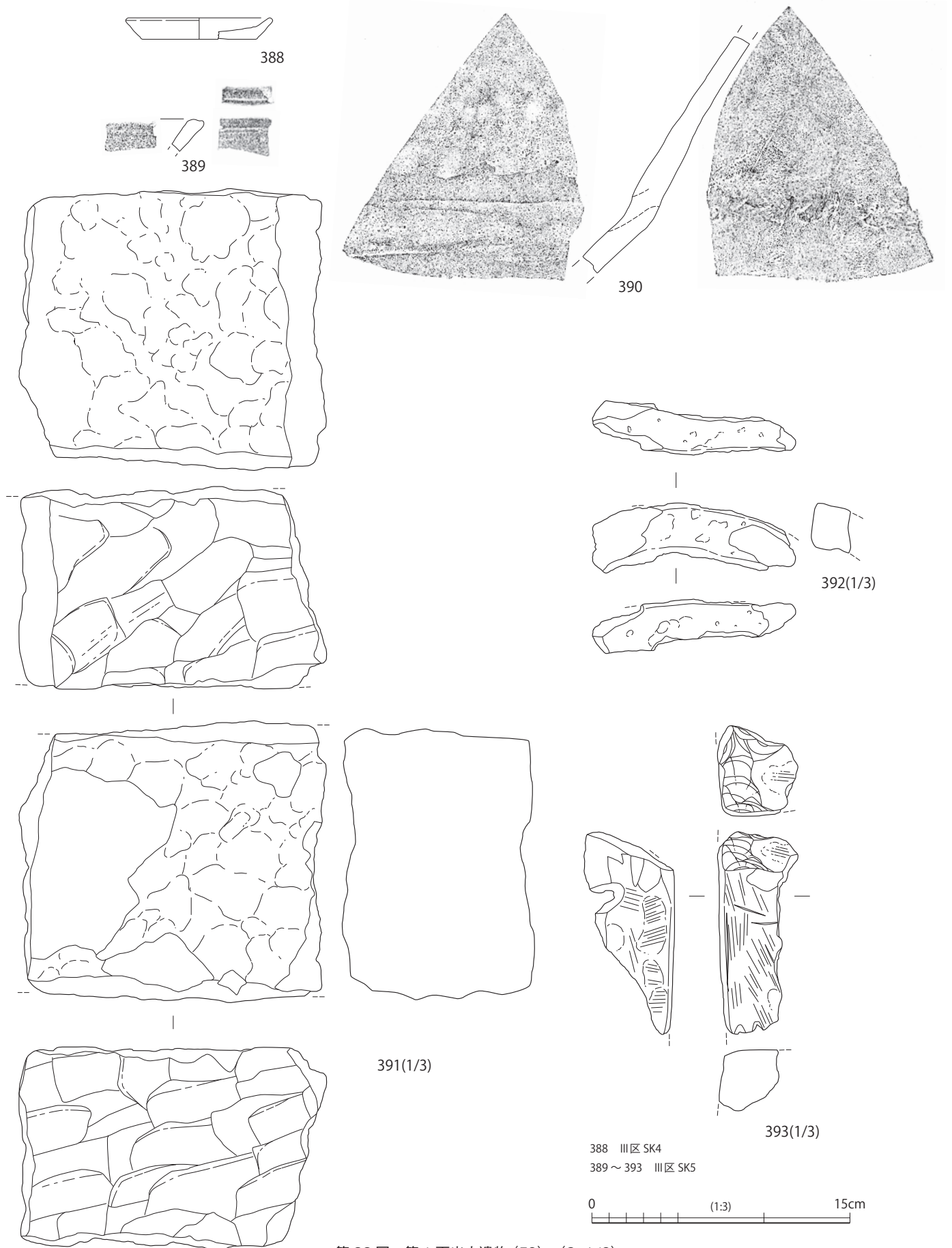


第85図 第1面出土遺物(56) (S=1/6)

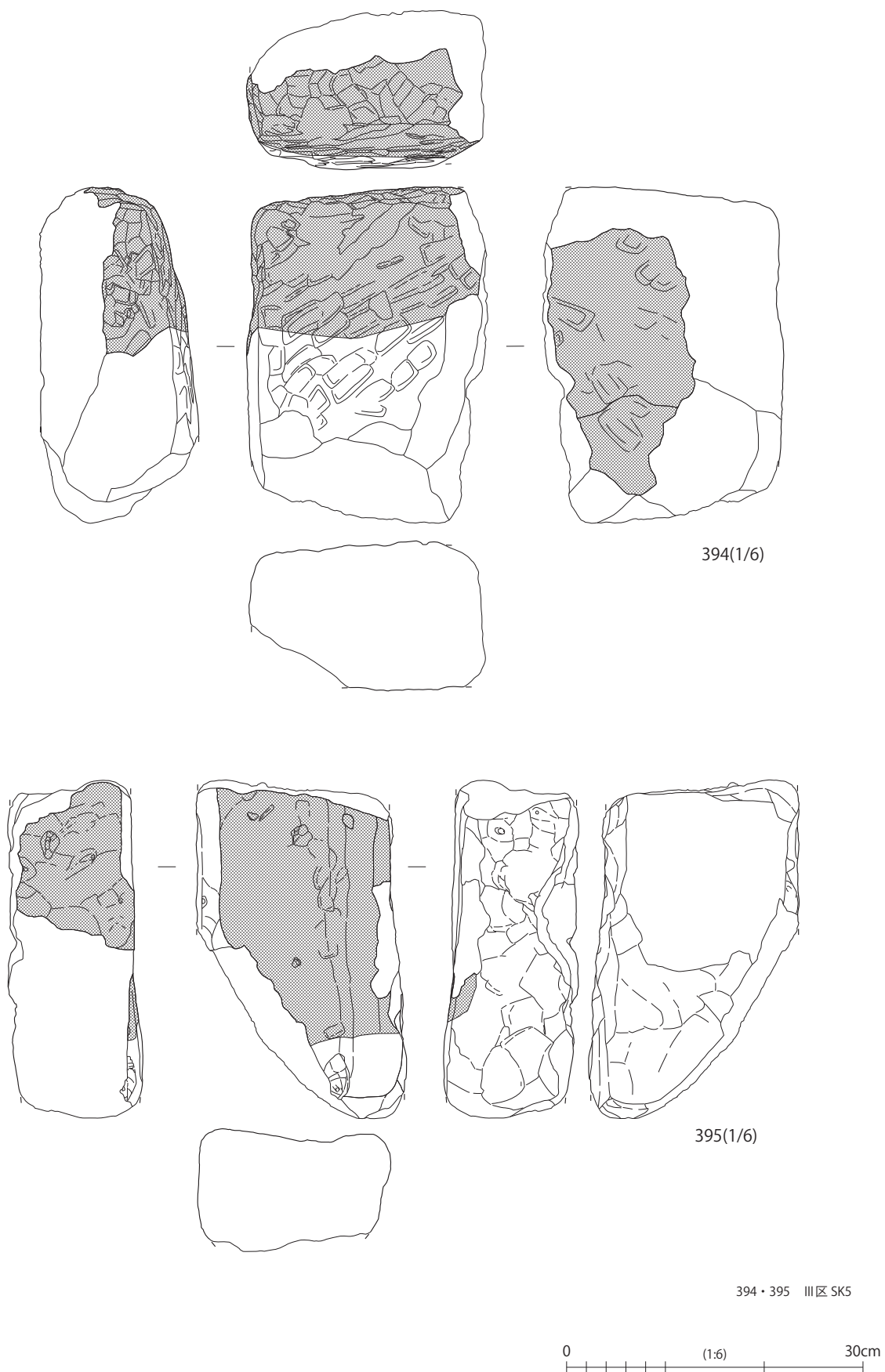


第86図 第1面出土遺物(57) (S=1/6)

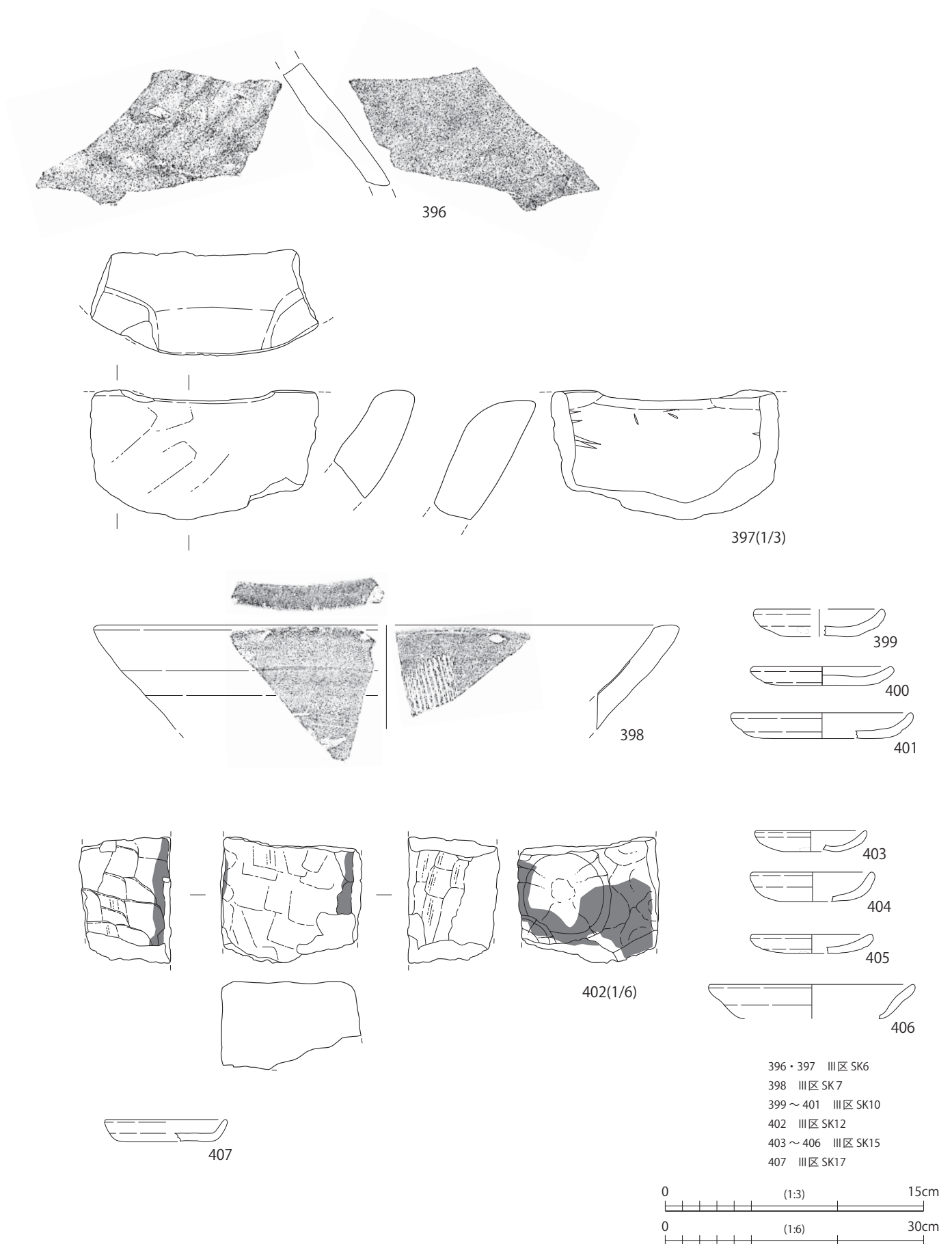




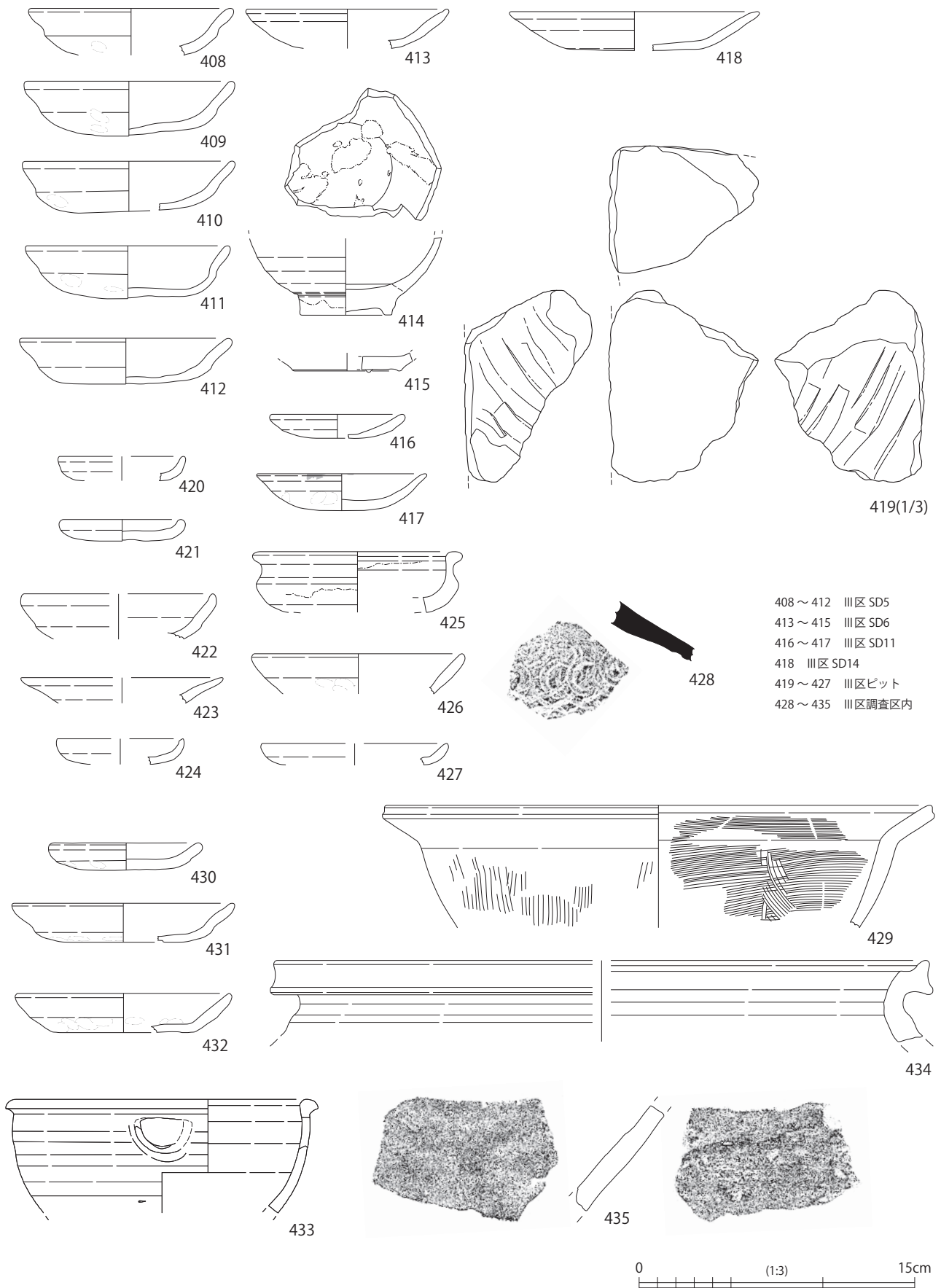
第88図 第1面出土遺物(59) (S=1/3)



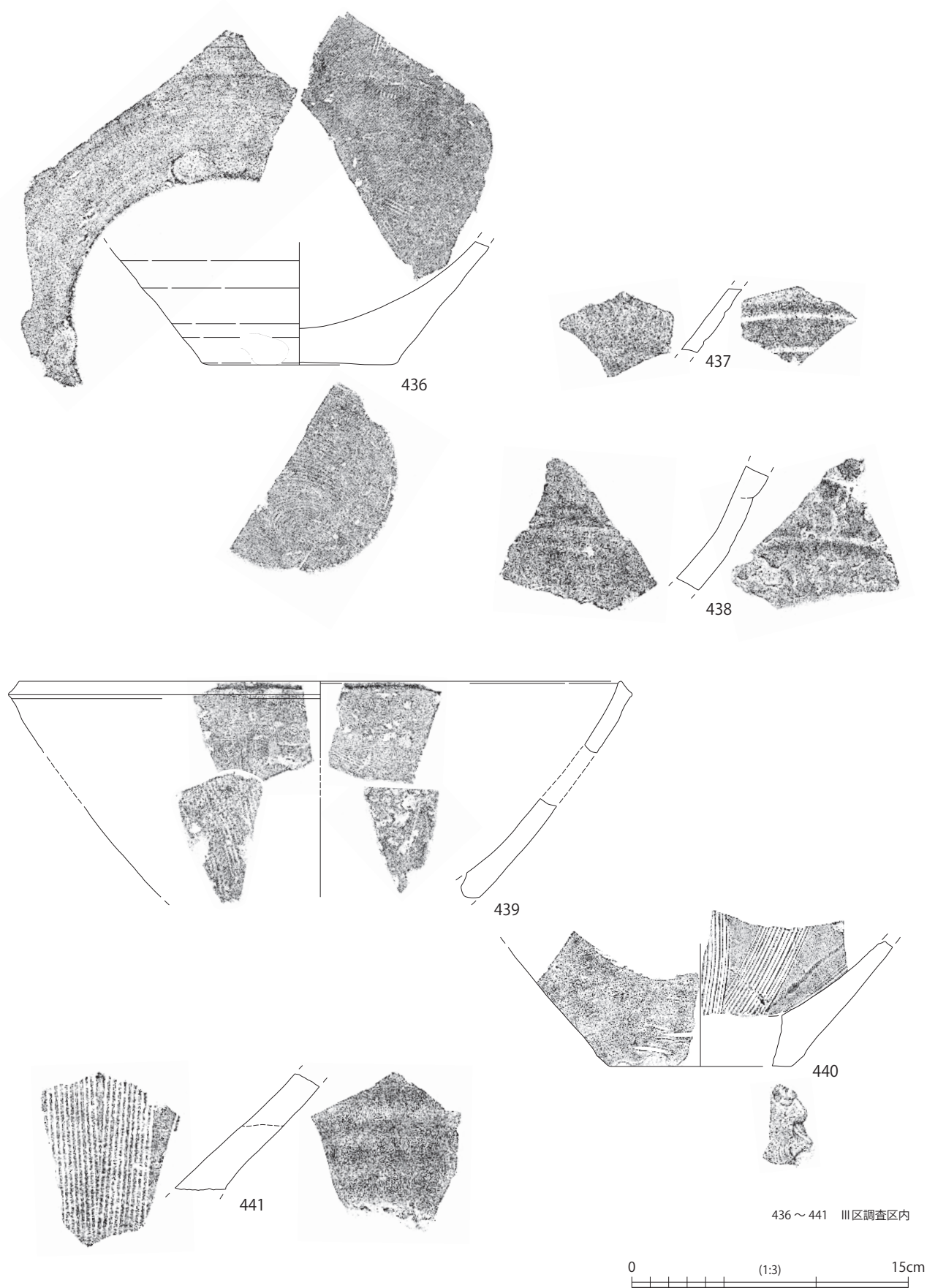
第89図 第1面出土遺物(60) (S=1/6)



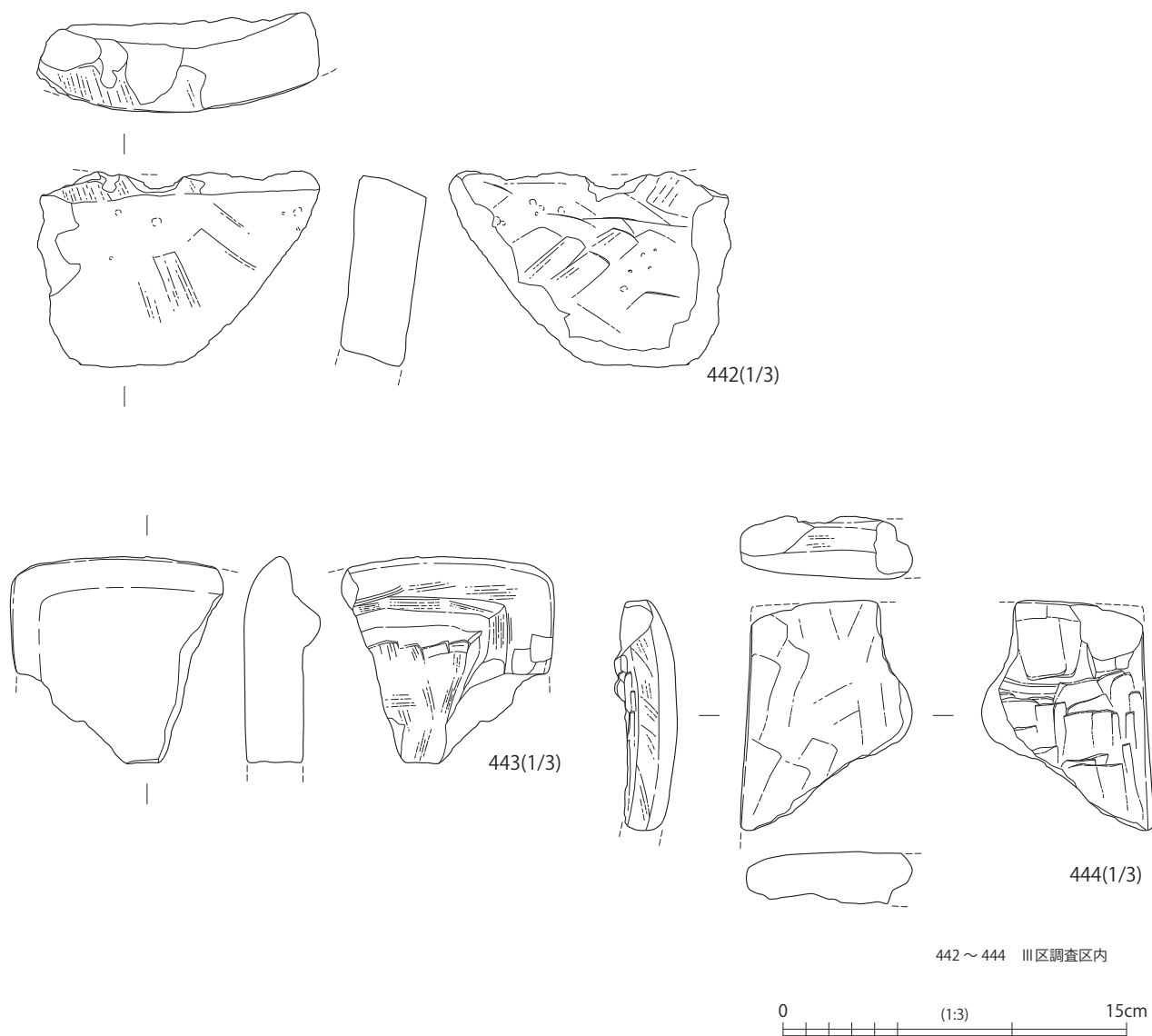
第90図 第1面出土遺物(61) (S=1/3・1/6)



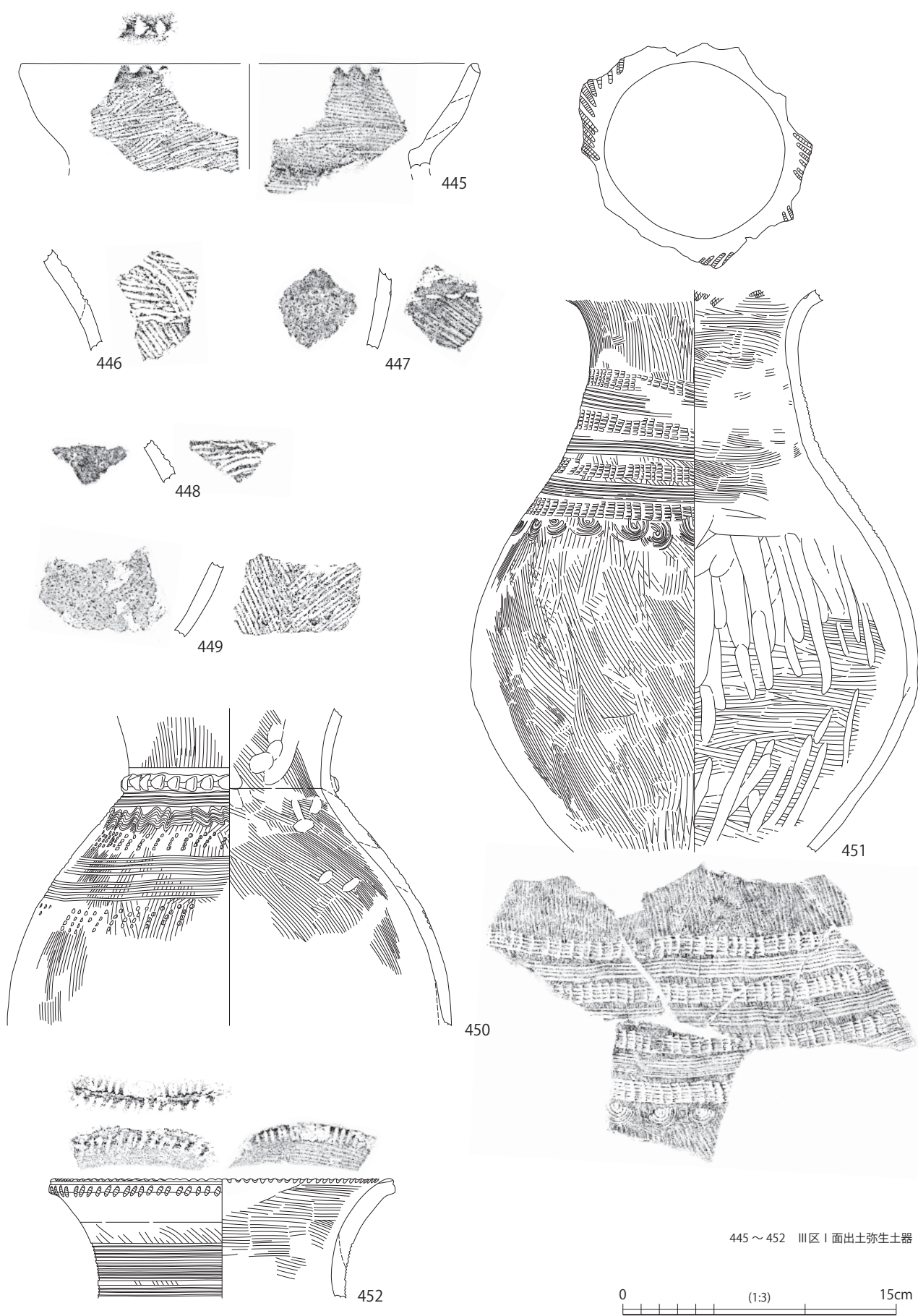
第91図 第1面出土遺物(62) (S=1/3)



第92図 第1面出土遺物(63) (S=1/3)

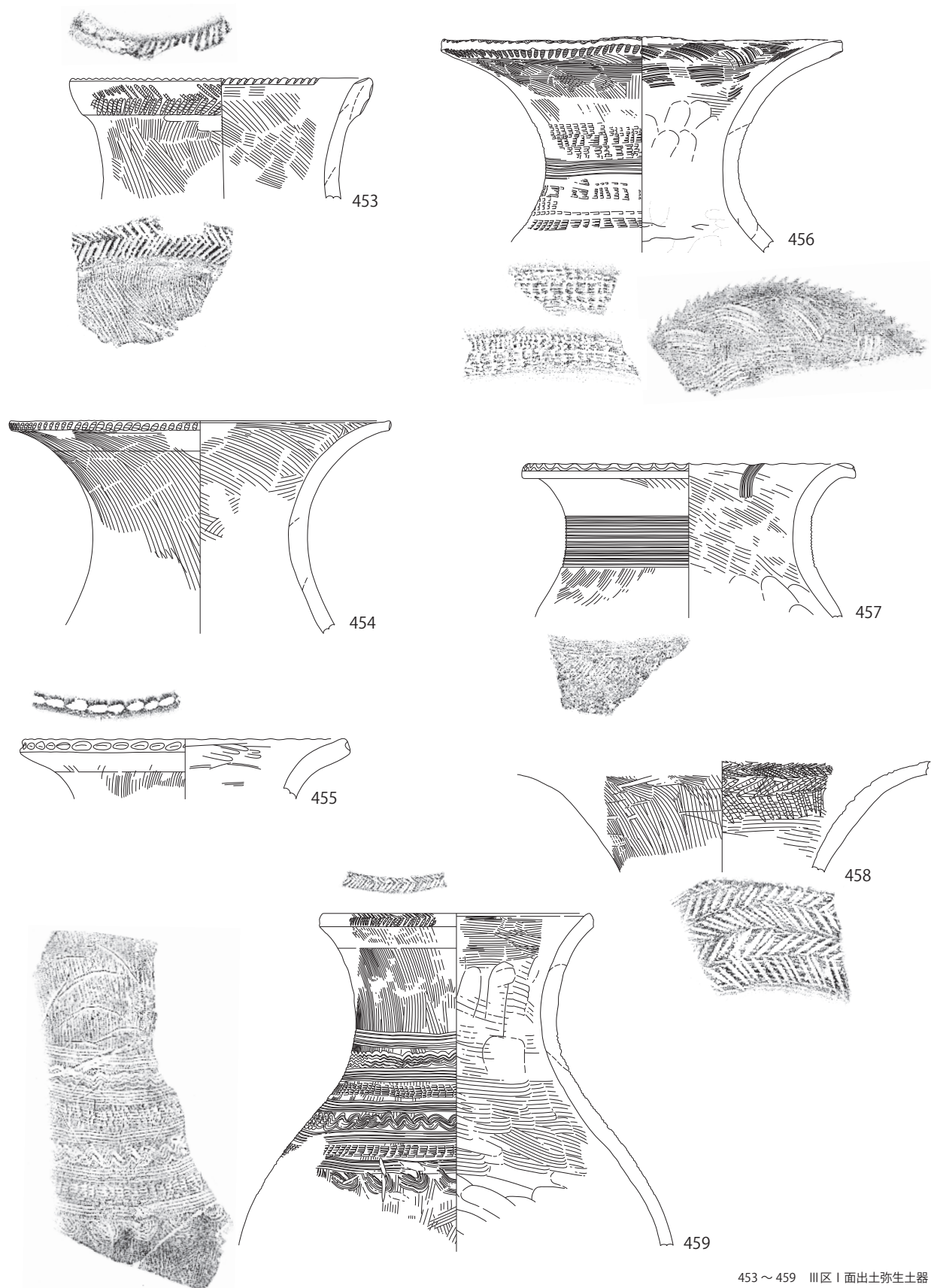


第93図 第1面出土遺物(64) (S=1/3)



445 ~ 452 III区I面出土弥生土器

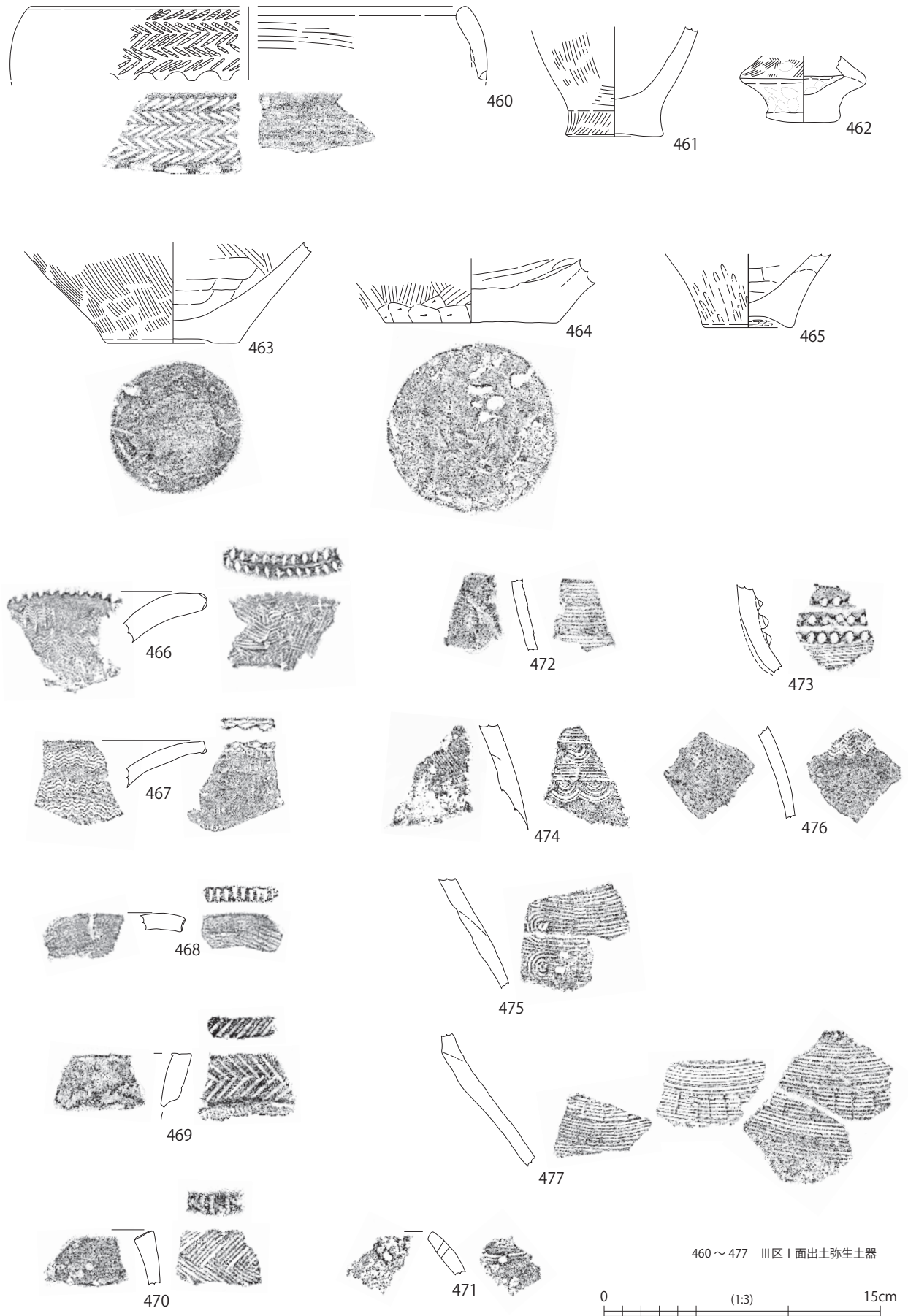
第94図 第1面出土遺物(65) (S=1/3)



453 ~ 459 Ⅲ区Ⅰ面出土弥生土器

0 (1:3) 15cm

第95図 第1面出土遺物(66) (S=1/3)



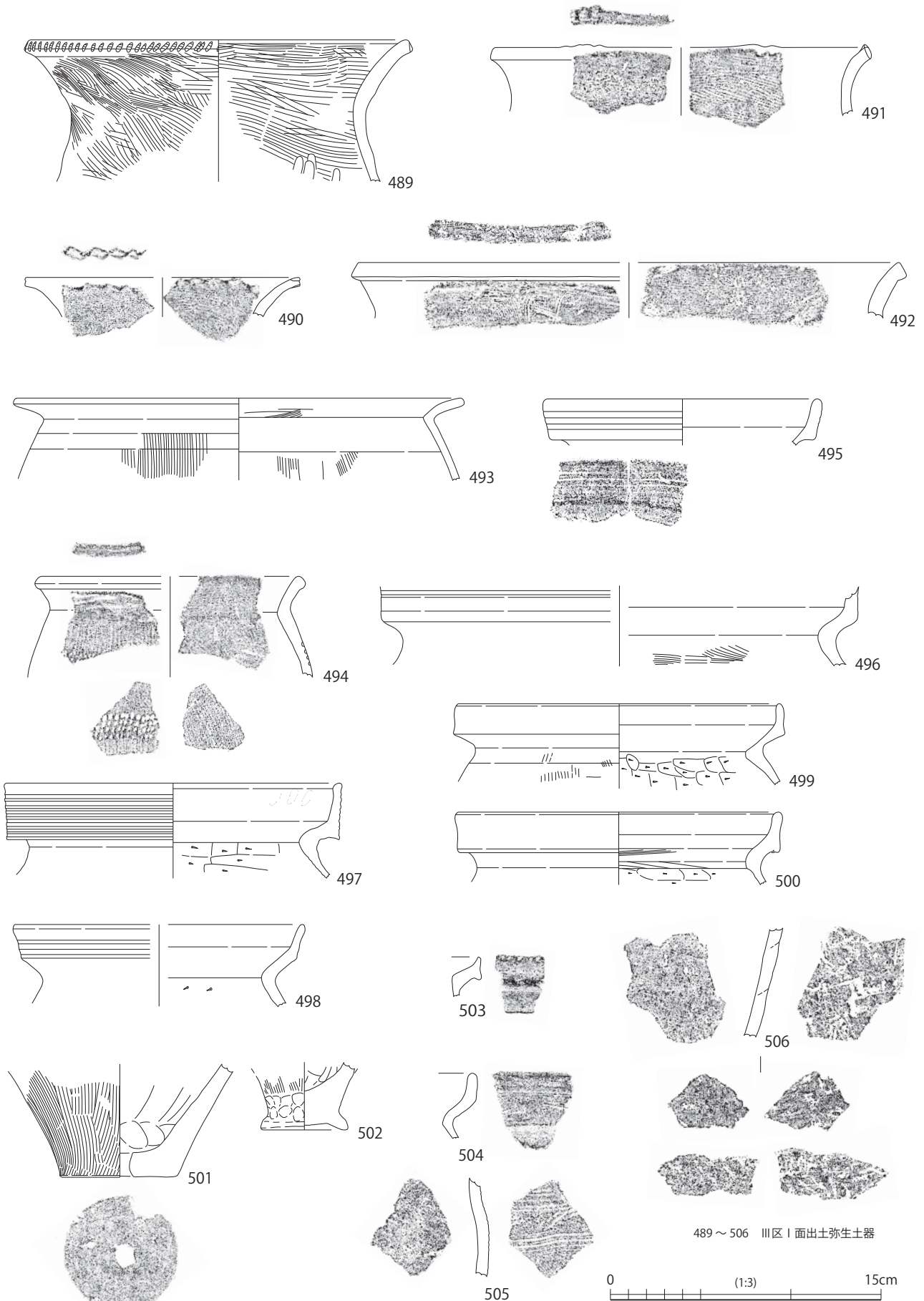
第96図 第1面出土遺物(67) (S=1/3)



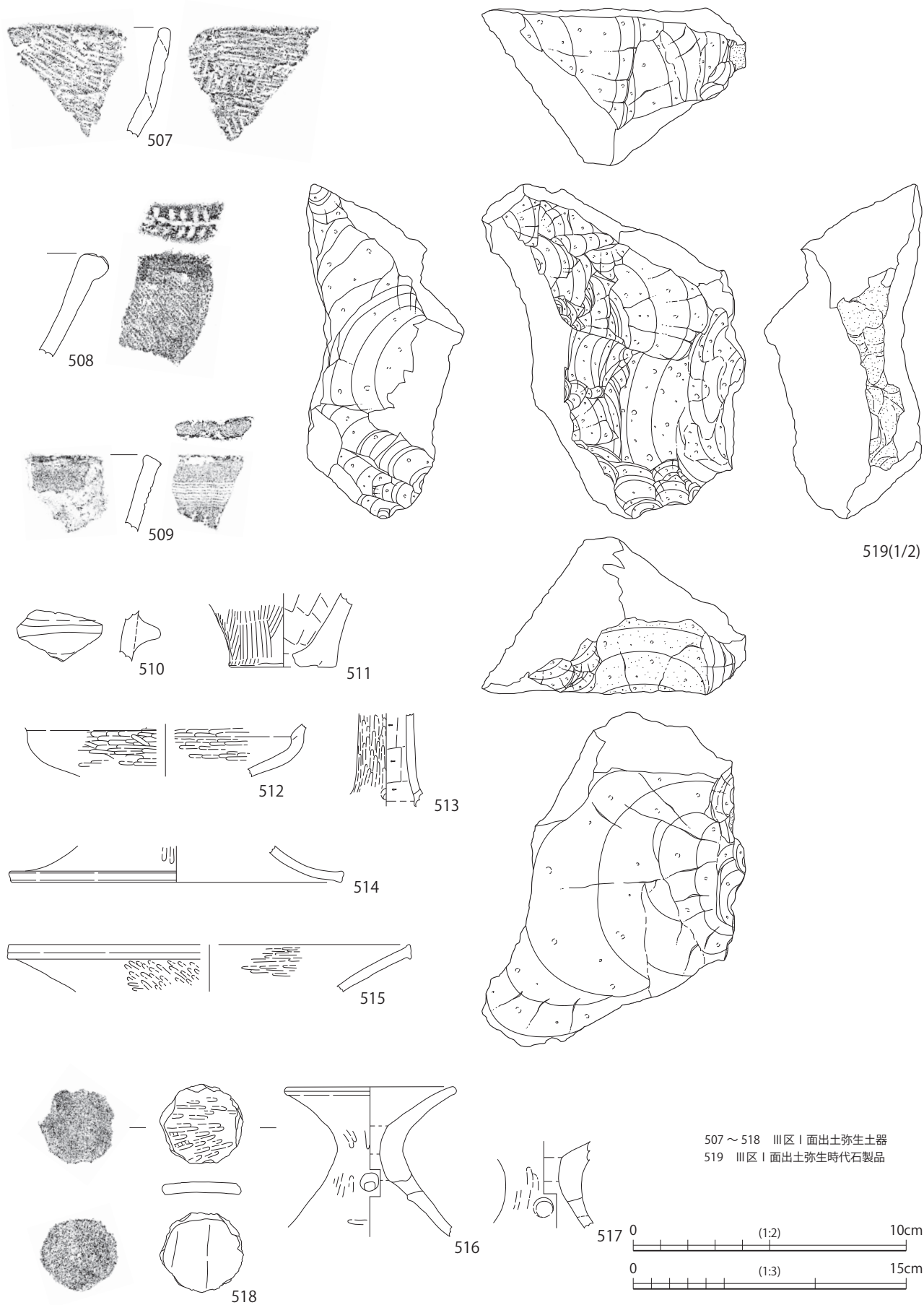
478～488 Ⅲ区Ⅰ面出土弥生土器

0 (1:3) 15cm

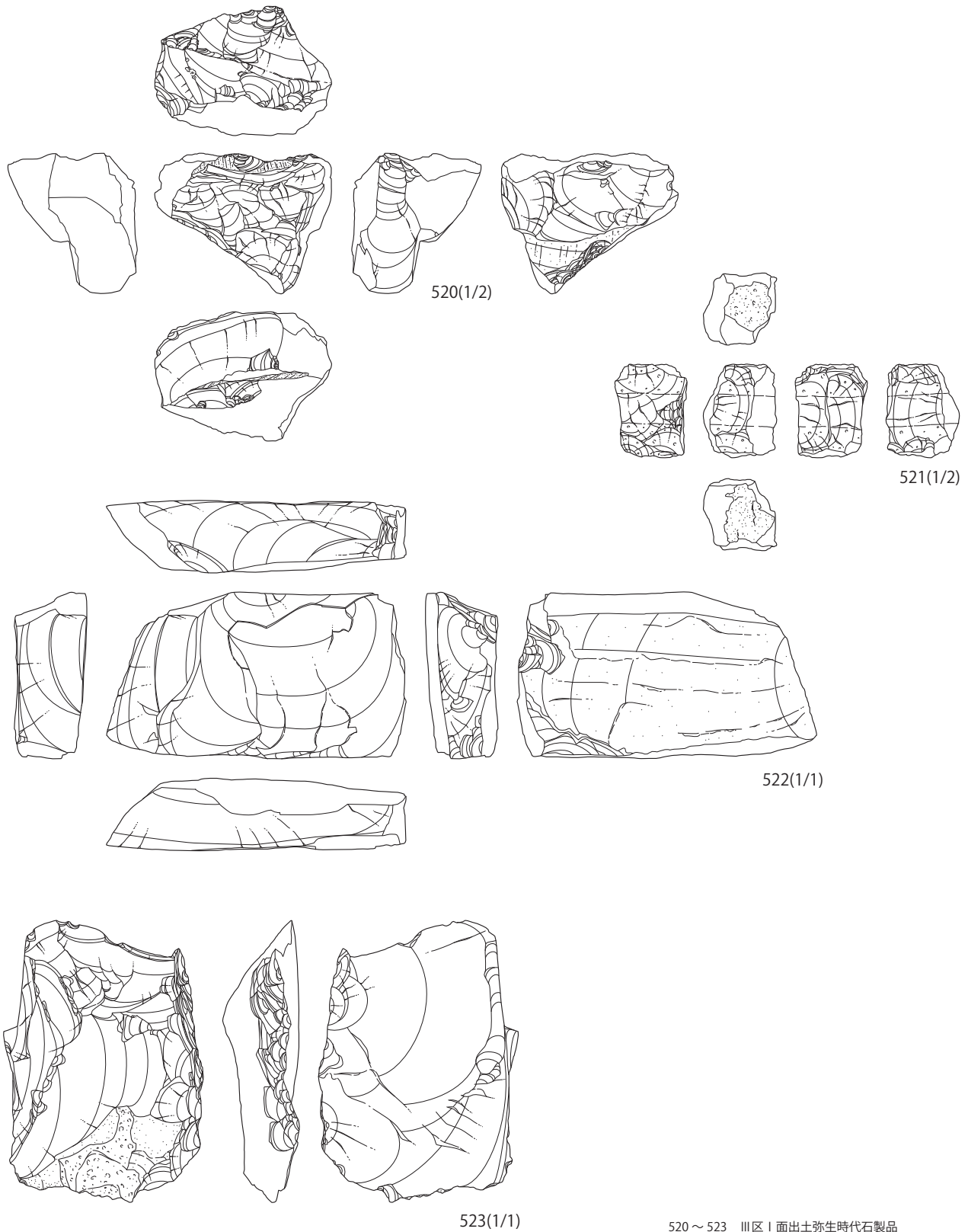
第97図 第1面出土遺物(68) (S=1/3)



第98図 第1面出土遺物(69) (S=1/3)



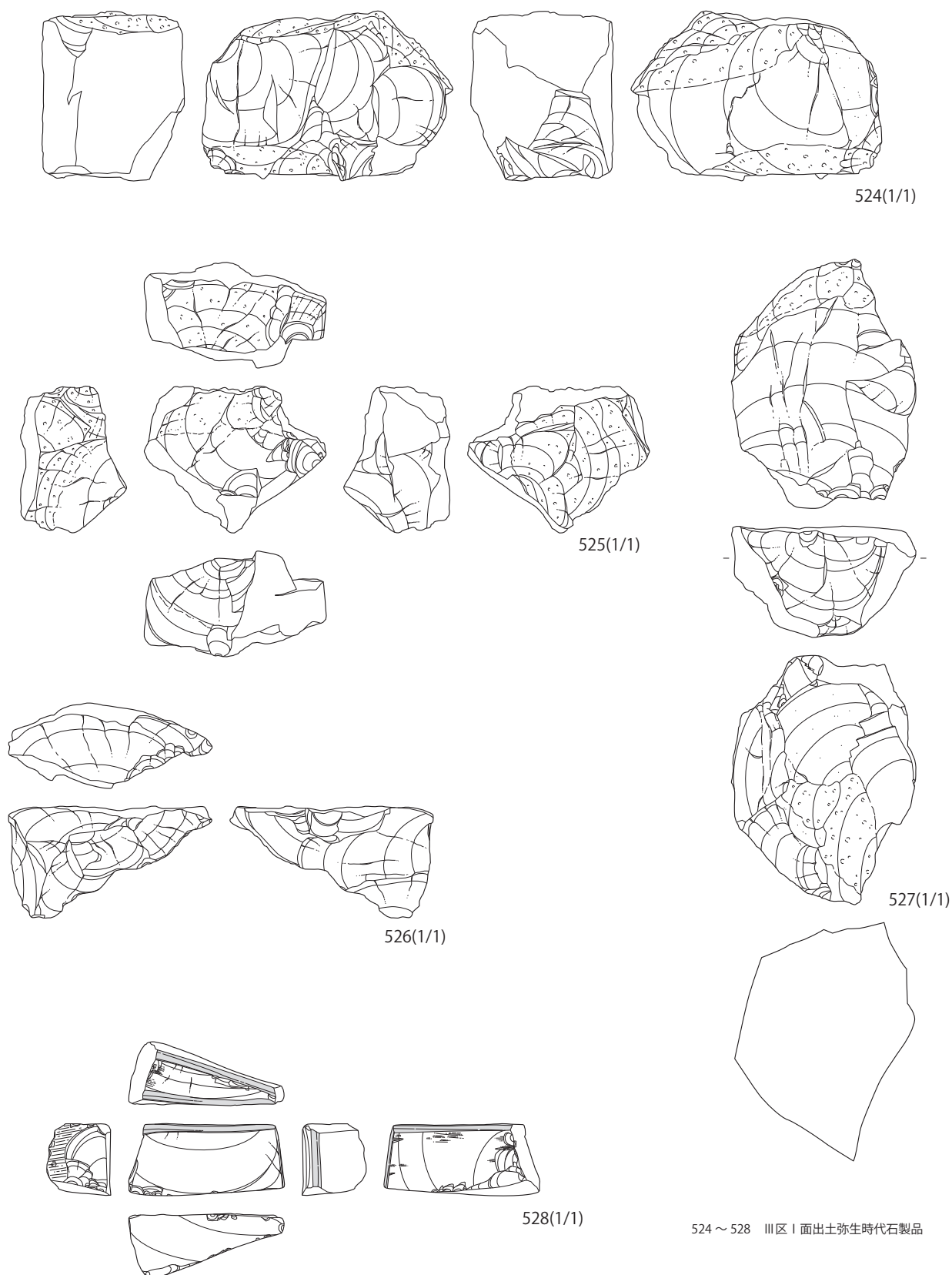
第99図 第1面出土遺物(70) (S=1/2・1/3)



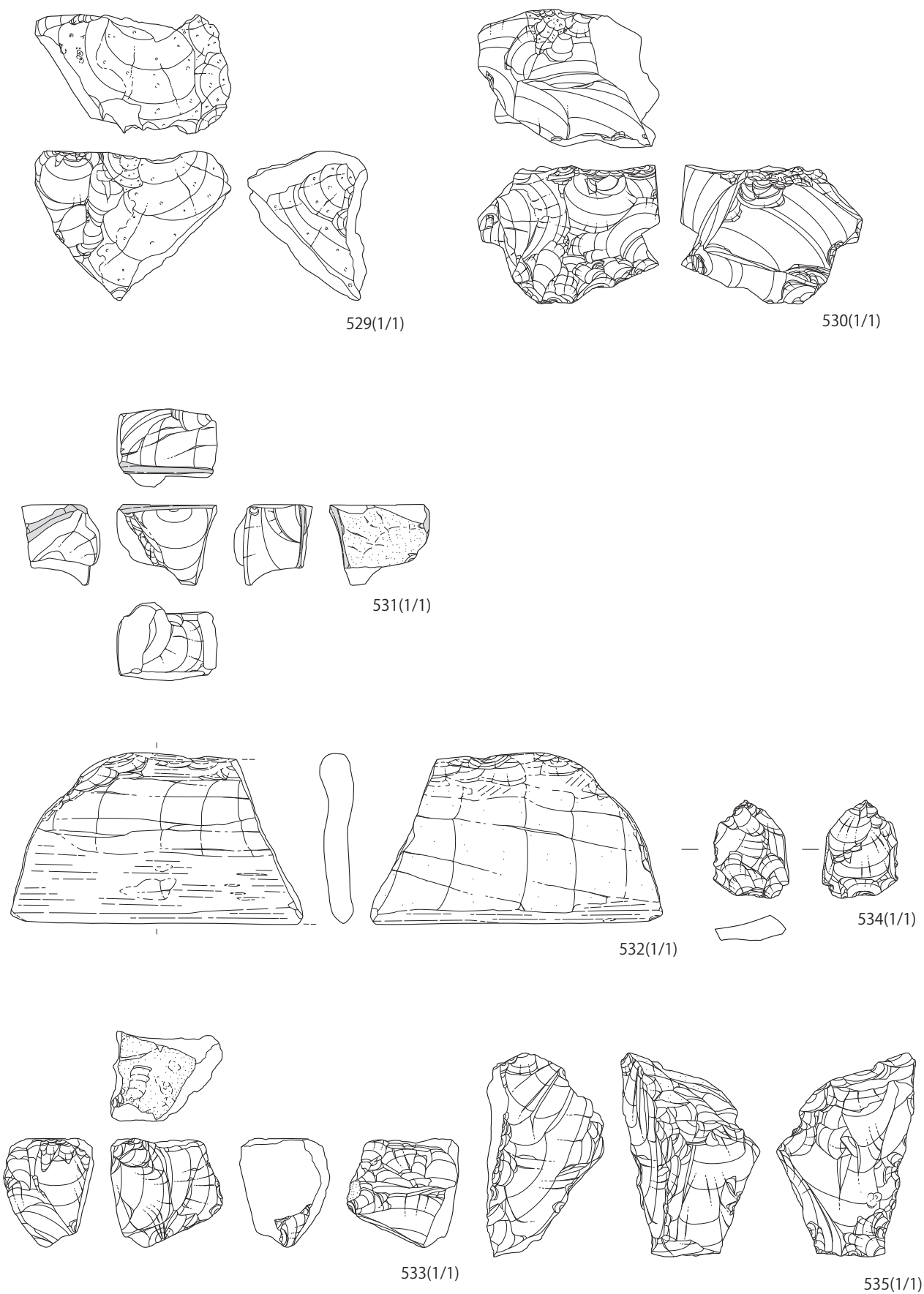
520 ~ 523 III区I 面出土弥生時代石製品

0 (1:2) 10cm

第100図 第1面出土遺物(71) (S=1/1・1/2)

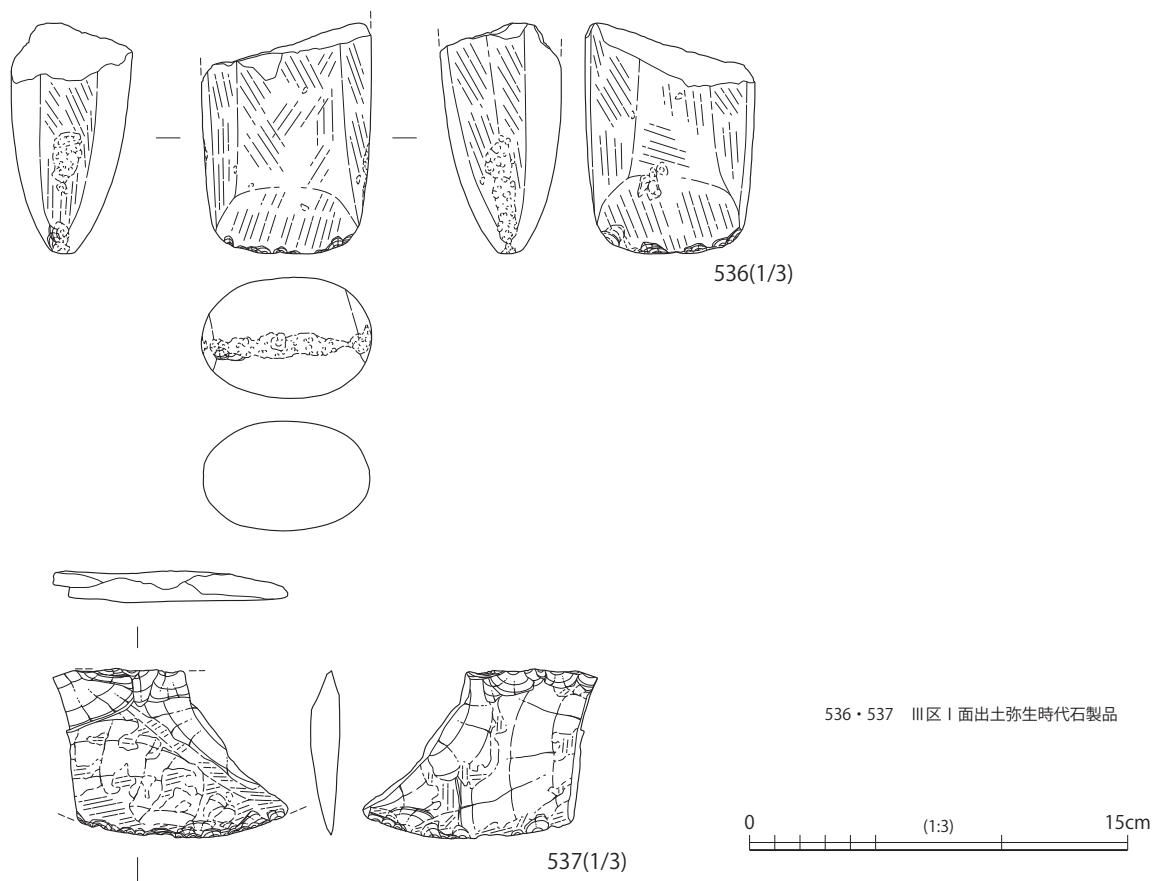


第101図 第1面出土遺物(72) (S=1/1)



529～535 III区I面出土弥生時代石製品

第102図 第1面出土遺物(73) (S=1/1)



第103図 第1面出土遺物(74) (S=1/3)

第6節 IV区第1面の調査成果

SB6（第104図、第109図538～541） C～D9～10グリッドに位置する、東西2×南北3間東西棟の総柱建物である。規模は桁行6.4m・梁間4.8mで、建物主軸はN-6°Wである。桁行柱間は比較的整っているP279-211-212間で3.2m・梁間は西梁で1.4～1.6mを測る。柱穴埋土は褐灰色砂質土を基調とする。遺構の切り合いは、SD38を切り込み、SE10（SK34）に切り込まれる。538～540はSB6を構成するP279から出土している。538・539は平底から体部が浅く立ち上がる土師器小皿A類。540は越前焼播鉢の口縁部片で、方形状とする端部中央には1条の沈線が巡る。播目はみられない。Ⅱ3～Ⅲ1期（1290～1350）とした。

SB7（第105図、第109図538～541） C～D8グリッドに位置する南北2×東西3間東西棟の総柱建物である。規模は桁行6.6m・梁間4.3mで、建物主軸はN-12°Eである。桁行柱間は南桁で2.2m・梁間は東梁で2.0～2.2mを測る。柱穴埋土は黒褐色砂質土を基調とする。541はSB3としたP191からの出土で538と同様の土師器皿小片A類である。

SI4（第106図、第109図542～565） C～D6～7グリッドに位置する方形の竪穴状遺構で、3方のコーナーは調査区外へ延びる。規模は4+m、深さは0.3mを測り、埋土は褐灰色砂質土を基調とする。土師器皿がまとまって出土しており、何点かは番号を付けて取り上げられている。542～556は口径7～8cm台を主体とする小皿類である。器形は平底から比較的短い体部が直線的に立ち上がる542～546・549のC類、安定感のない平丸底の底部から丸味をもって立ち上がり、口縁部外面の横ナデを1回転させた後に上方にナデ抜く547・548・550～556のA類に大別される。557～563・565は口径10～11cm台の大皿A類である。概して深い器形で口縁部外面の横ナデは弱く、559・560には小皿に確認できた上方へのナデ抜きが認められるなど両者間でのセット関係が想定される。また、564は平底から体部が直線的に立ち上がる別タイプのC類として小皿542等とのセットがうかがわれようか。Ⅲ区SD5等に近い14世紀前半頃を想定しておきたい。

SE7（第106図、第109～112図566～634） C7グリッドに位置する井戸である。径は1.3mで略円形を呈し、井戸底には水溜の曲物が2段残置されていた。井戸側材は抜き取られた可能性がある。曲物632は推定径約70cmを測る。633は完存の曲物で、直径64cm・高さ32cmを測る。曲物内等からは多量の土師器皿が出土する。566～600はやや丸みを帯びた平底の底部から短い体部が内傾気味に立ち上がる土師器小皿で、平面形及び器高に歪みのある個体も一定量認められる。口径は6～8cm台と幅があるが7cm台が大半を占め、593の1点にのみ口縁部に油煤痕がみられる。多少の個体差はあるが、胎土・色調等も近く同タイプD類の製品とした。601～622は口径11cm台を主体とする土師器大皿D類。平底で口縁部を底部際まで外反気味に大きく横ナデし、下端には明瞭な稜が巡る特徴的な器形である。共伴の小皿とは明確な相似形をとらないが焼成・色調共に一括性が強く、大小セットとしてみておきたい。なお、土師器皿の年代観については小皿の法量がSI4でみられたものより一回り小さいなど、SI4よりやや新しい一群（14世紀前半～中葉頃）と想定されようか。623は越前焼播鉢。口縁端部はほとんど肥厚せず上面には沈線が巡る。播目はみられないが内面はすり減り使用の痕跡が残る。Ⅲ1期（1320～50）頃の製品か。624・625は瀬戸・美濃の灰釉鉋皿である。口縁端部の肥厚は弱く、体部外面は屈曲せずに丸味をもって立ち上がる。同一個体の可能性もあるか。古瀬戸中期様式（14世紀前半）とした。626・627は鉄釘。628～634は箸状木製品。

SE8（第106図、第113～117図635～649） C8グリッドに位置する井戸で、隅柱等の構造から縦板組隅柱横棧留めであろう。縦板は全て抜き取られ、隅柱と最下段の横棧、水溜が残置されていた。掘り方は略方形で2.0mを測り、一回り大きい2.8mの掘り方は井戸側撤去時に広げられたもので、土層

からも攪乱され埋め戻された痕跡がうかがえる。635は口縁部の横ナデを器高の1/2程度に施す土師器皿。口縁端部の一部に面取りを施すB類でやや古手（13世紀後半～）の製品となるか。636は器形が深く平面形は楕円形となる。口縁部外面の横ナデは不明瞭で、部分的に粘土紐の継ぎ痕が残る。637は越前焼播鉢。体部は逆ハの字型に直線的に立ち上がり正面には片口を設ける。口縁端部に顕著な肥厚はみられず上面には明瞭な沈線が巡る。また、体部下半には横方向のケズリ調整が施され、底部には断面三角形のやや退化した高台が付く。使用痕のある内面に播目はなく、窯印の一種とみられる3体の格子を組み合わせた押印がはいる。Ⅱ2・3期（1250～1320）とした。638はヒノキ材の薄板で、折敷を組に転用したものか。表裏面に多数の刃物痕が残る。639～642は隅柱で、7cm角のスギ角材を用いる。約50cmの間隔で横棧を通す柄孔が加工されている。最下端の柄孔の位置は端部から13～25cmとバラツキを見せており、断面形状も異なることから転用材を集めて作られたものであろう。643～646は横棧で、3～5cm角のスギ角材を用いる。長さが100cm前後で、両端に2方向から削ぎ落とすだけの簡易な柄を作り出す。647は水溜として用いられていた曲物で、649の外側に置かれていたものである。直径60cm・高さ40cmを測る。649は水溜内側の曲物でヒノキ材、直径48cm・高さ41cmを測る。両者とも下端に底板を留めていた木釘痕跡が残る。

SE9（第106図、第116図650・651）C～D9グリッドに位置する素掘り井戸で、直径1.7mの略円形を呈し、深さ約1.3mを測る。SD38を切りこむ。650は瀬戸・美濃灰釉平碗の口縁部片である。体部は浅めで緩やかに内湾し、口縁部を僅かに外反させ端部は先細りに仕上げる。断面には漆継ぎの痕跡が残る。古瀬戸後期様式Ⅱ期（1400前後）頃の製品か。651は土師器鍋。体部から口縁部にかけてくの字に屈曲し、口縁端部には弱い面をもつ。内外面共に横方向のハケ調整を施し、外面全体には煤が付着する。650よりも古手の製品である。

SE10（SK34）（第107図、第117・119図652、671～682）C9グリッドに位置する深さ約70cm、断面逆台形を呈する2段掘りの土坑である。埋土の状況や、縦板と考えられる板材652が出土していることから井戸と推定した。671は摩耗の顕著な土師器皿で時期等の判別は難しい。672～675は肥前の染付皿である。いずれも口縁端部が外反し内面には染付文様、外面には圈線がはいる。676は白磁皿の底部片。端反口縁となる16世紀代の中国製品である。677は肥前の染付小杯で高台部を無釉とする。678・679は外面を青磁、内面を白磁に掛け分ける肥前の磁器碗である。なお、出土の肥前製品はいずれも初期伊万里とされる17世紀前半代に属するものである。また、680・681は肥前製品と同時期の越中瀬戸焼の鉄釉碗である。682は下駄の端部でスギ材。

SK29（第107図、第118図657～661）D7グリッド、調査区西側で東西方向に広がる大型土坑群の一画に位置する。SD32を切り込む。長軸3.8m・短軸1.9mの長楕円形を呈し、深さ0.3mで埋土は黄灰～褐灰色砂質土を基調とする。657～659は土師器皿A類片。658、659は口径9.0、10.0cmと大小間の中間的な法量を示す。器壁は全体に厚く658は丸底となるか。14世紀後半～15世紀以降の製品と思われる。660は越前焼播鉢。播目の間隔は狭く比較的密に施される。Ⅳ1期（1380～）以降とした。661は鉄釘。

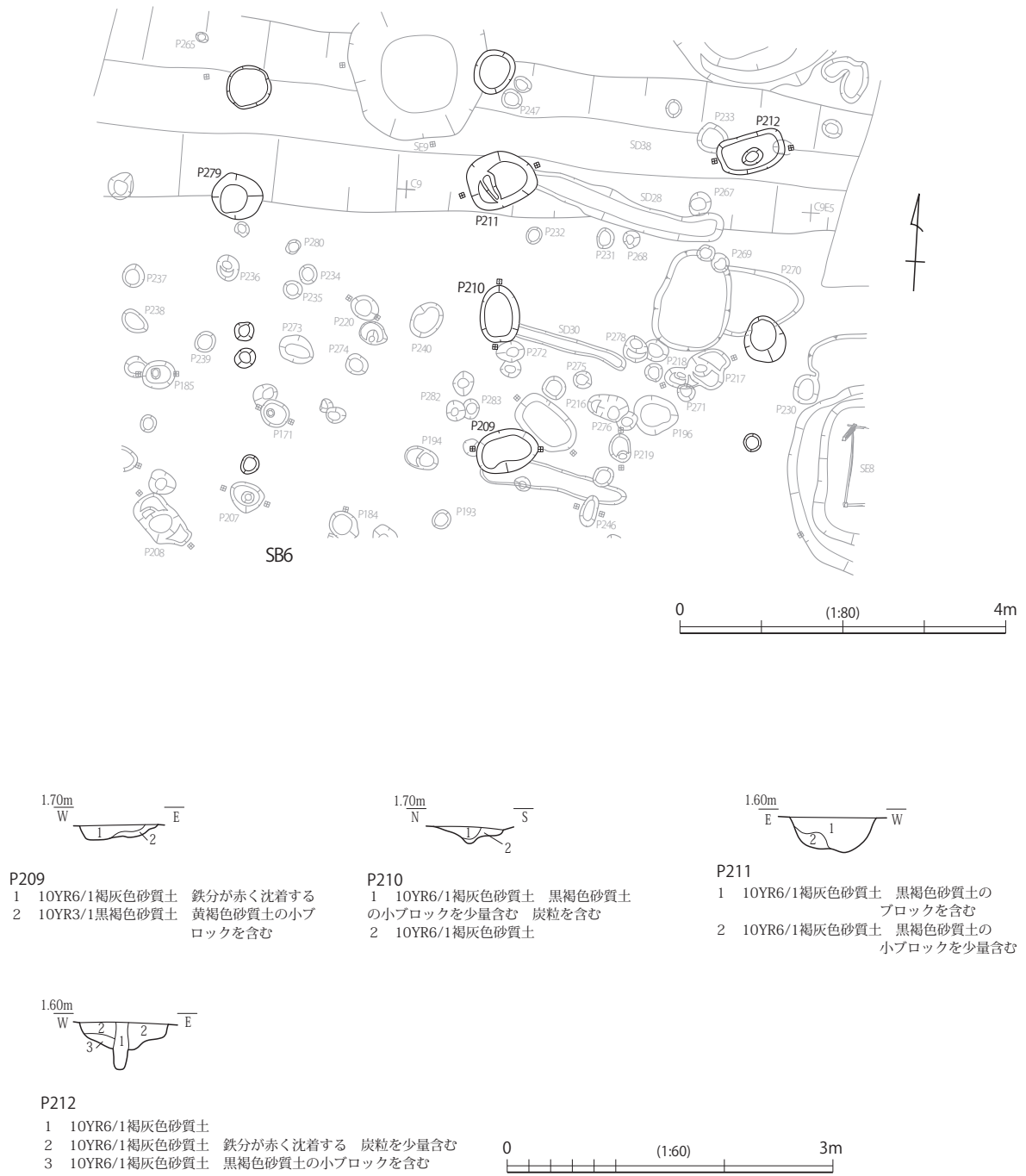
SK37・38（第108図、第119図688～694）D7グリッドの大型土坑群の一つで、長軸5.2m・短軸2.7mを測る大型土坑である。南側の深い方を38、北側の浅く38を切り込むものを37とする。埋土は黒褐色・黒色砂質土を基調とする。土師器皿688～690は厚手の平丸底の底部から口縁部を外反気味に横ナデし、688・689の口縁部には油煤痕が付着する。691は同様に厚手であるが、器形は扁平とする。いずれもA類で15世紀前半以降の製品である。692～694は鉄釘。

SD24・25（第108図、第119図706～709）SD24は15世紀代とみられるSD22と同じ軸をもつ溝状遺構でSI4を切る。25は北方延長線上にあり、さらに西側に屈曲してSD31とつながる区画溝の可能

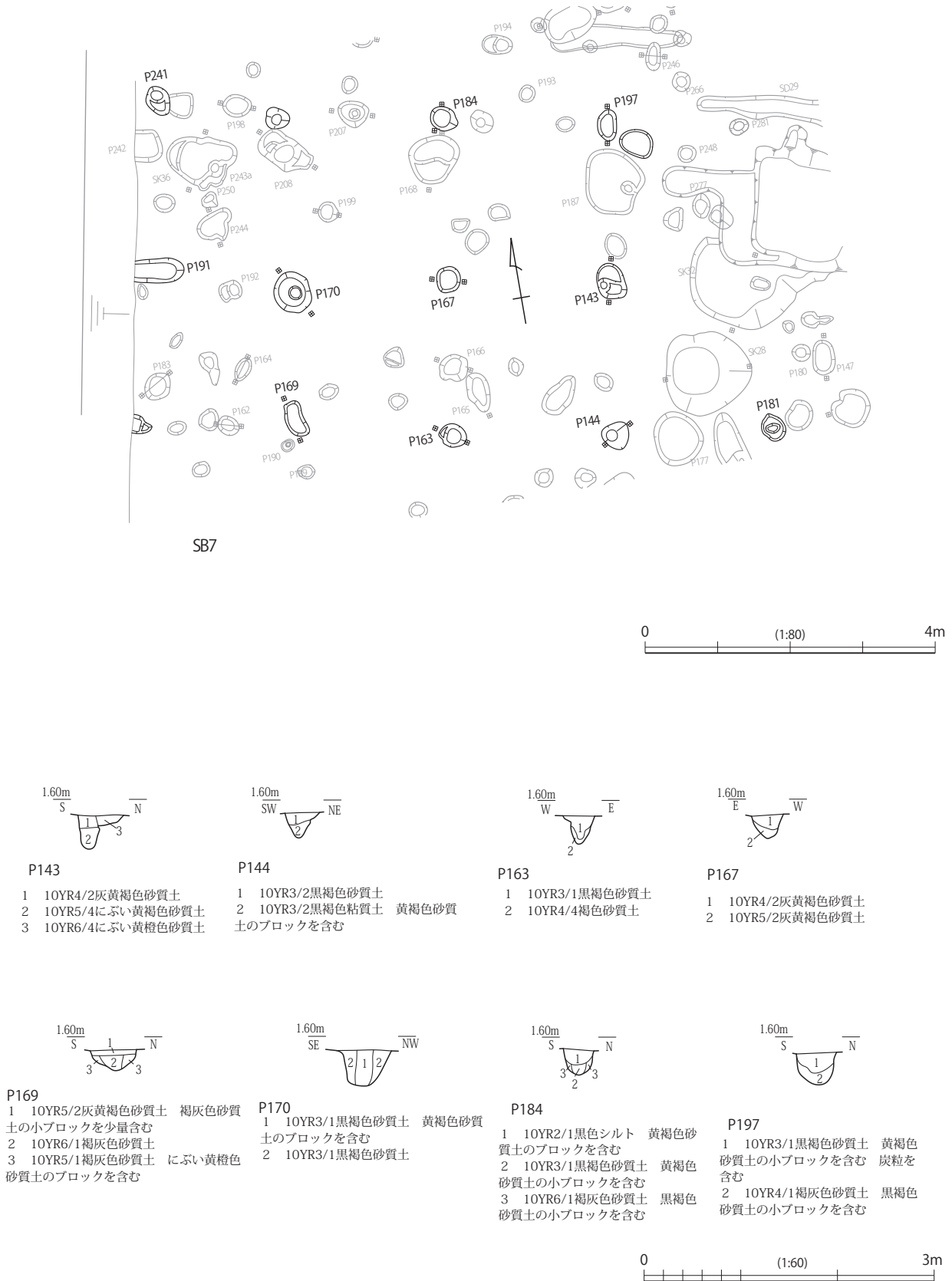
性がある。706は菊花を模した銅製の小皿（杯）で小さな高台がつき紅皿か。708・709共に細片の土師器皿A類で、709は厚手丸底となる15世紀以降の製品である。

Ⅳ区その他の遺物 653はやや深めに立ち上がる土師器皿A類で口縁部外面の横ナデ幅は狭い。体部外面下半には黒斑がみられる。654は越前焼播鉢。口縁端部はやや丸味をもつ方形状で上面には沈線が巡る。内面に播目はみられずⅡ3期（1290～1320）とした。655は鎬蓮弁文をもつ青磁碗片で間弁のはいるタイプである。P221出土品と同一個体とみられる。656は加賀焼甕片。SK31・SE9・包含層から同一個体と思われる破片が出土している。口縁部を欠くが未実測破片の一部に斜め格子の押印が確認できる。13世紀後半～14世紀代的那谷カミヤ窯あるいは湯上ユノカミダニ窯の製品と思われる。662～664は口径8cm台の土師器皿A類。口縁部はいずれも内湾して立ち上がる。665・667は体部の立ち上がりが丸く、口縁部の横ナデは狭く不明瞭となる。全体に大柄で歪みが少なく、やや古手（13世紀後半～14世紀前半）の印象を受ける。668は白磁碗。幅広の畳付と削り込みの浅い方形状の高台をもつ。胎土は粘性の強い淡灰色で釉色も灰味が強い。高台周辺を無釉とし見込中央には繊細な草花の印花文がはいる。なお、今回実測された白磁碗はこの1点のみである。669は砂粒の含みが少ない精良な胎土をもつ京都系土師器皿E類。口径は15.8cmと大きく口縁部は僅かに外反する。16世紀代。670は形の歪な薄手の土鍾である。土師器皿683・685・686の口縁端部には弱い面取り風の痕跡が部分的に残るが不明瞭であるためA類とした。695は平底気味の底部から短い体部が立ち上がるD類、696は深みをもつ器形で口縁部外面の横ナデ幅は狭い。SK31出土土師器皿と同様のやや古手の印象を受ける。697は器形の厚みが7～8mm台となる口径7.4cmの土師器皿A類。丸底の底部から口縁部を横ナデ外反させる15世紀代の製品である。698は古瀬戸灰釉卸皿の底部片。細片であり時期の判断は難しい。699は越前焼甕片とした。肩部には降灰がみられる。701～705はSD23出土、土師器皿はSE7に近い分類構成で、700・701は口径8.0cmで体部の立ち上がりの短い小皿D類。702～704は平底気味の広い底部から体部下半が明確な稜をもち外反屈曲して立ち上がる同タイプのD類で、702の見込には弱い一定方向のハケ調整がみられる。ただし、SE7出土品よりも若干法量が大きくやや古くなる可能性もある。710はやや厚手で短い立ち上がりの土師器皿A類片。遺構の切り合い等からは14世紀代の可能性が高い。712の土師器皿A類は厚手丸底で口縁部を外反横ナデし下端には稜が巡る。また、内面全体にタール状の付着物が広がる。15世紀以降。713は底部をやや内反りとする平底の白磁皿片。上部を欠くが口縁端部を口禿げとする製品で14世紀代での出土例が多い。714～731はピット出土。714は越前焼播鉢。焼きは硬く播目は密にはいる。近世の可能性もあるか。718は珠洲焼播鉢。播目はやや間隔があき、施文には動きもみられる。Ⅳ期（1280～1380）とした。なお、土師器皿片の大半は口径7・8cm台の小皿類と11cm台の大皿類に大別でき、概ね14世紀代に収まるものと思われるが、728・729の2点は厚手丸底で口縁部の外反する15世紀以降に位置づけられよう。732・733は口縁部の立ち上がりの短い土師器皿A類。732の器壁は厚い。734は大型瓦質土器の底部片である。円形の火鉢となる可能性があるが破片内に脚部の痕跡はみられない。735は平底から深い体部をもつ白磁皿。口縁端部を釉剥ぎする口禿げ皿である。736・740は17世紀代の肥前陶器瓶である。736は外面に白色化粧土で横方向に刷毛目装飾を施し緑釉を流し掛けする。幅広の畳付には粗い砂が付着する。740は鉄釉の上に藁灰釉が掛かり、内面には同心円の叩き成形痕がみられる。737・738は瓦質土器の火鉢・風炉である。737には菊花の押印、738の口縁部下には円形の透孔がはいる。739は加賀焼甕片であるが、両面に何かを擦ったような痕跡があり砥石的な用途への転用がうかがわれる。破片の端には菊花が集合した押印がみえ、湯上ユノカミダニ窯に類例があるか。741・742は大型の土鍾である。743～783は第2面に由来する弥生時代の土器と石製品。縄文時代晩期の深鉢（743・744）～中期小松式、後期法仏式が見られる。

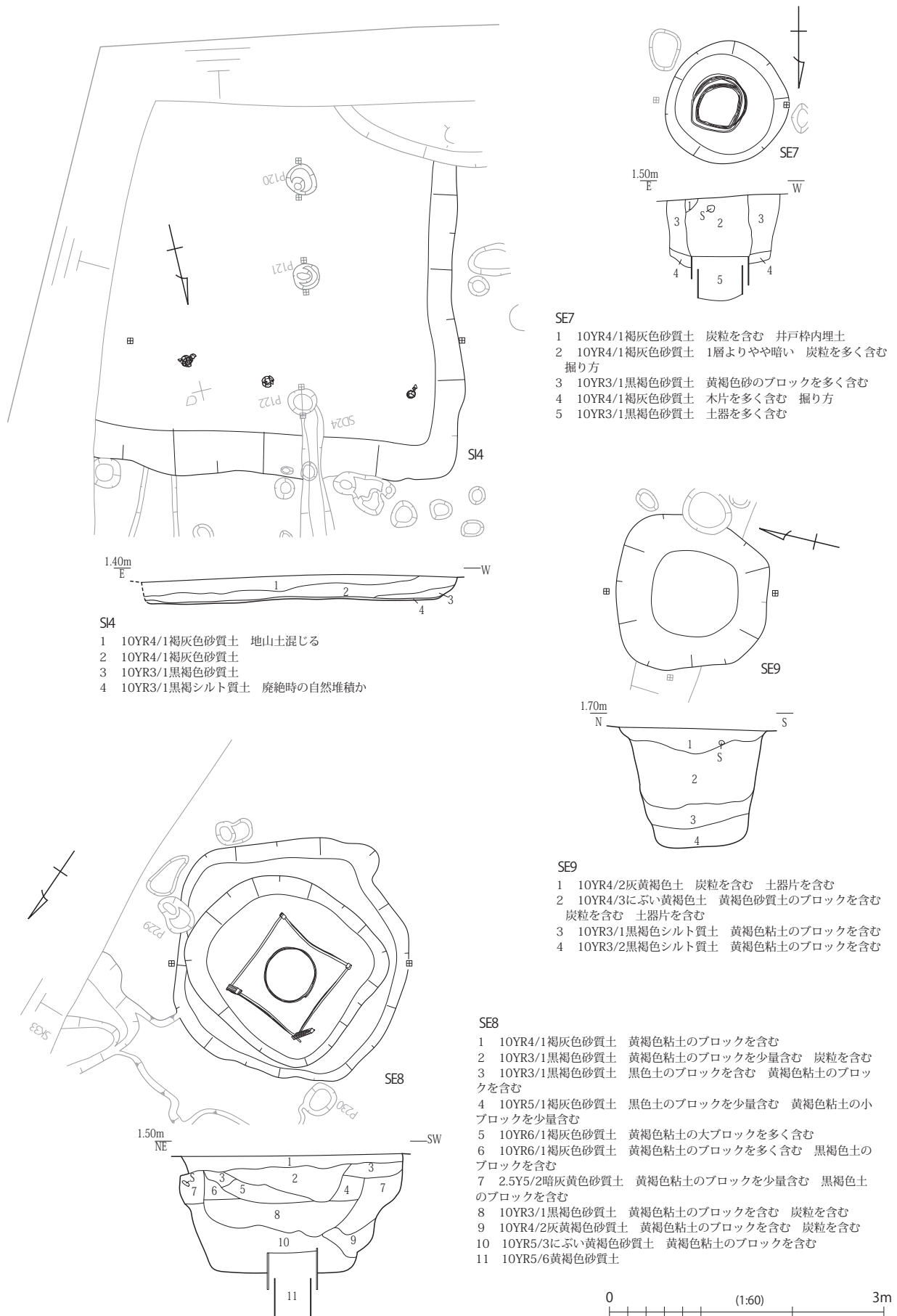
第6節 IV区第1面の調査成果



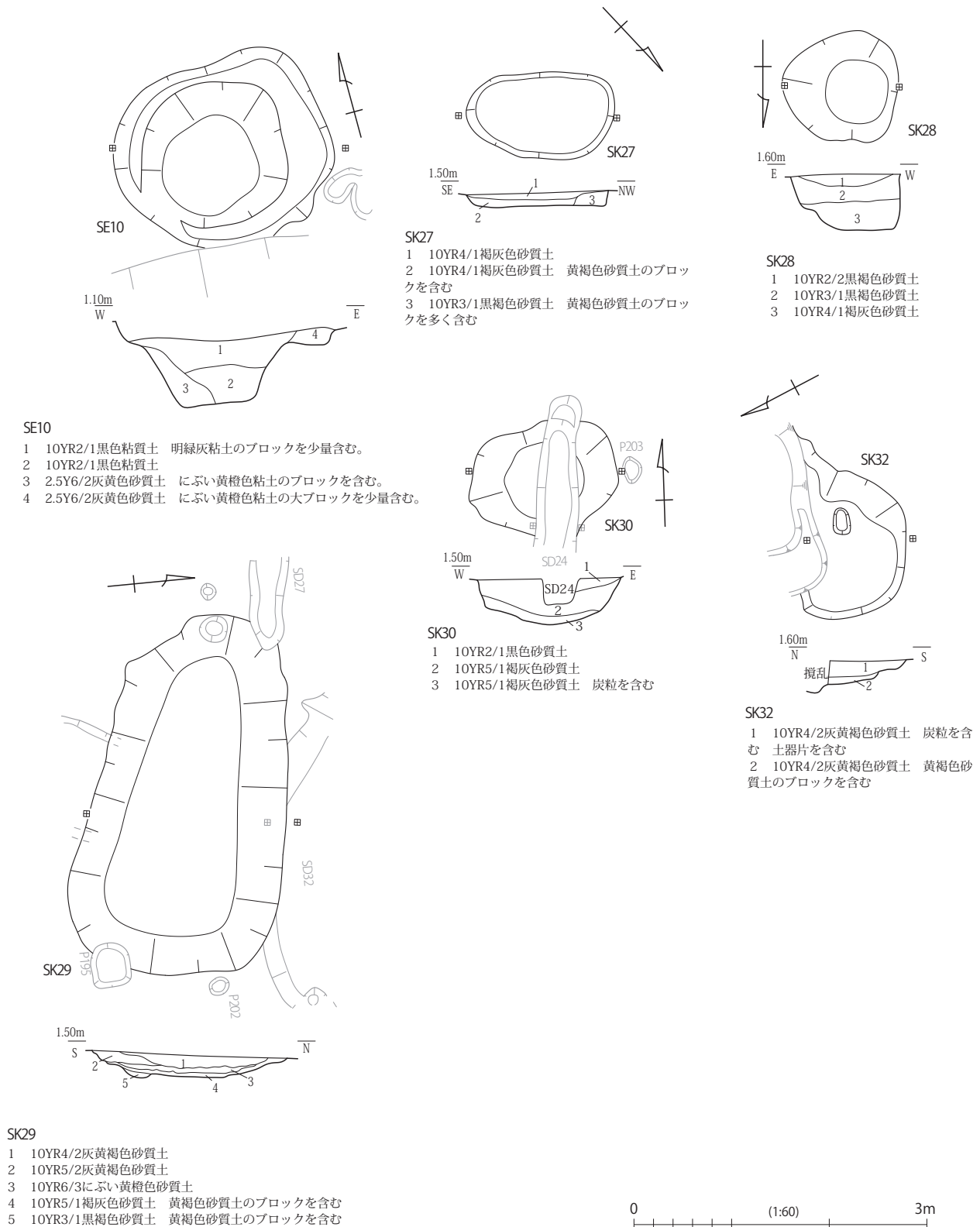
第104図 IV区第1面 掘立柱建物(1) (S=1/60・1/80)



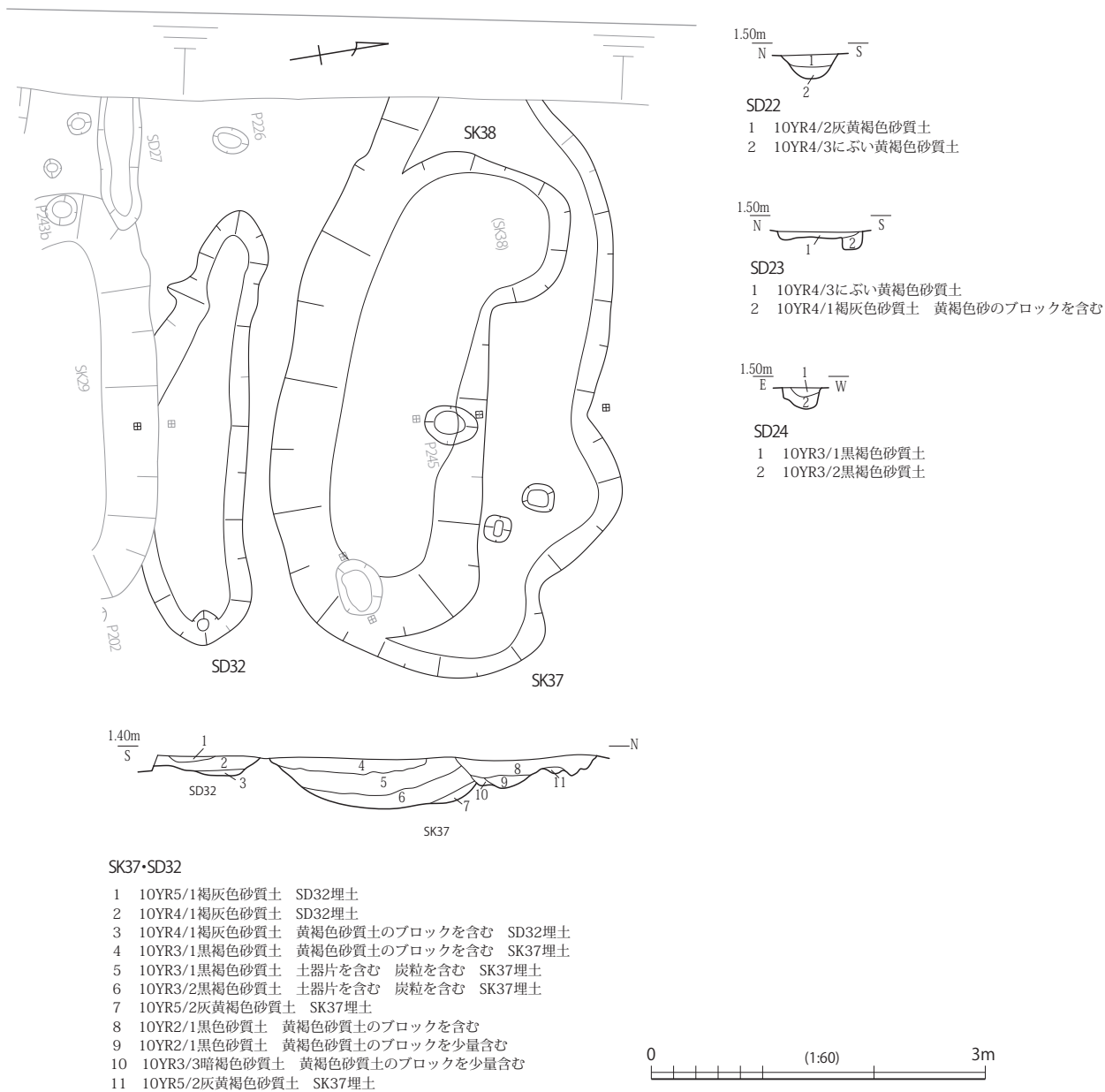
第105図 IV区第1面 掘立柱建物(2) (S=1/60・1/80)



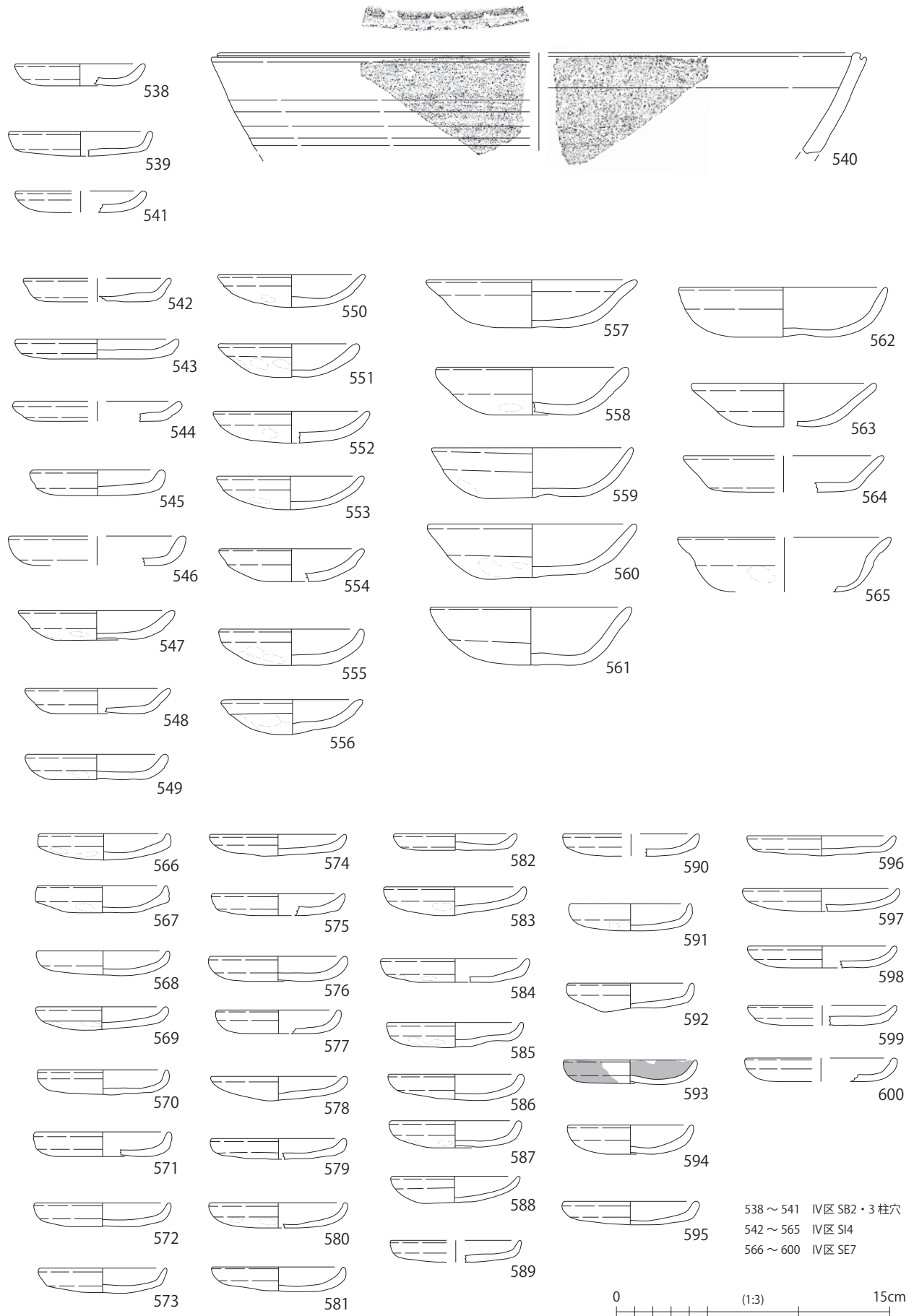
第106図 IV区第1面 竪穴建物・井戸 (S=1/60)



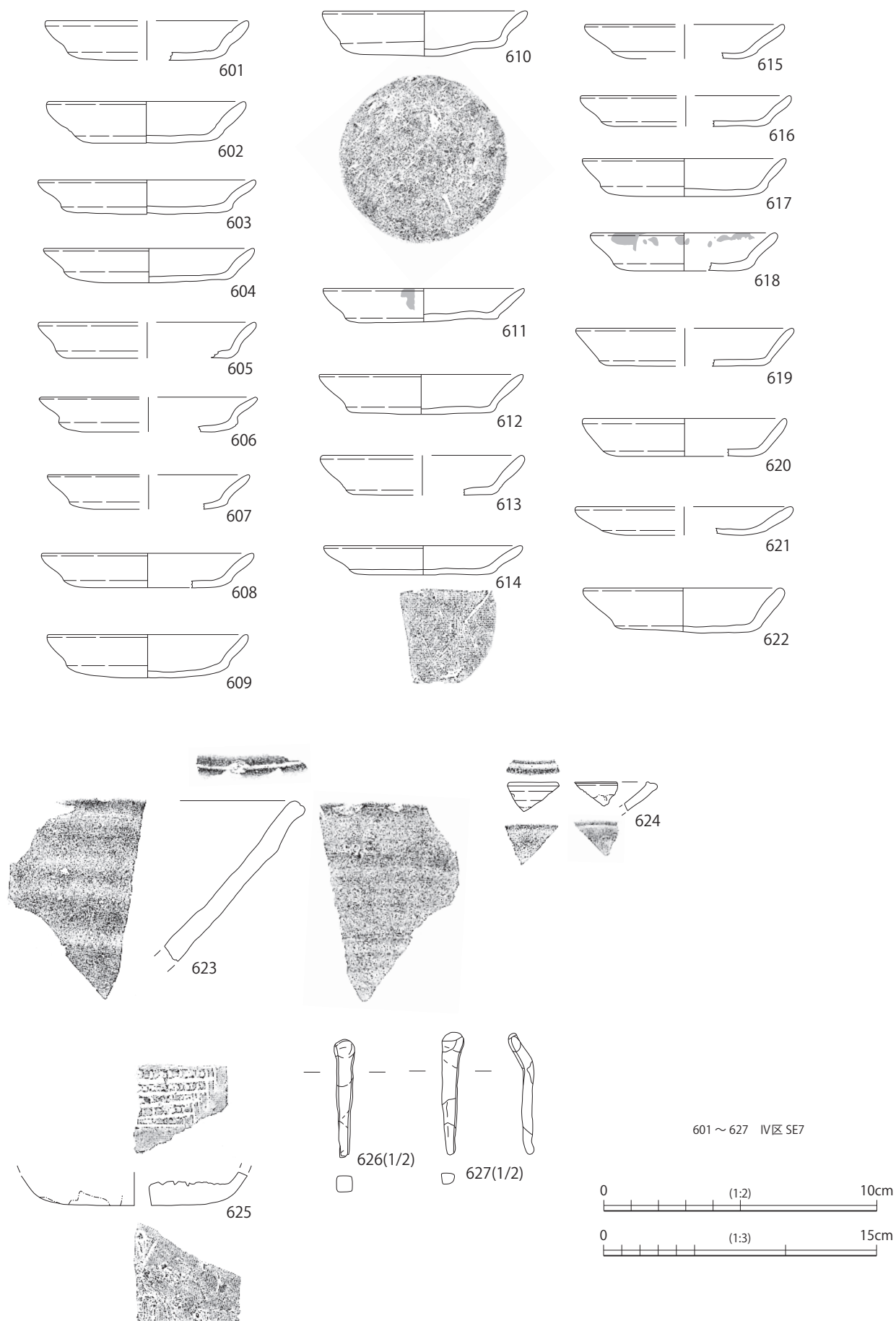
第107図 IV区第1面 土坑 (S=1/60)

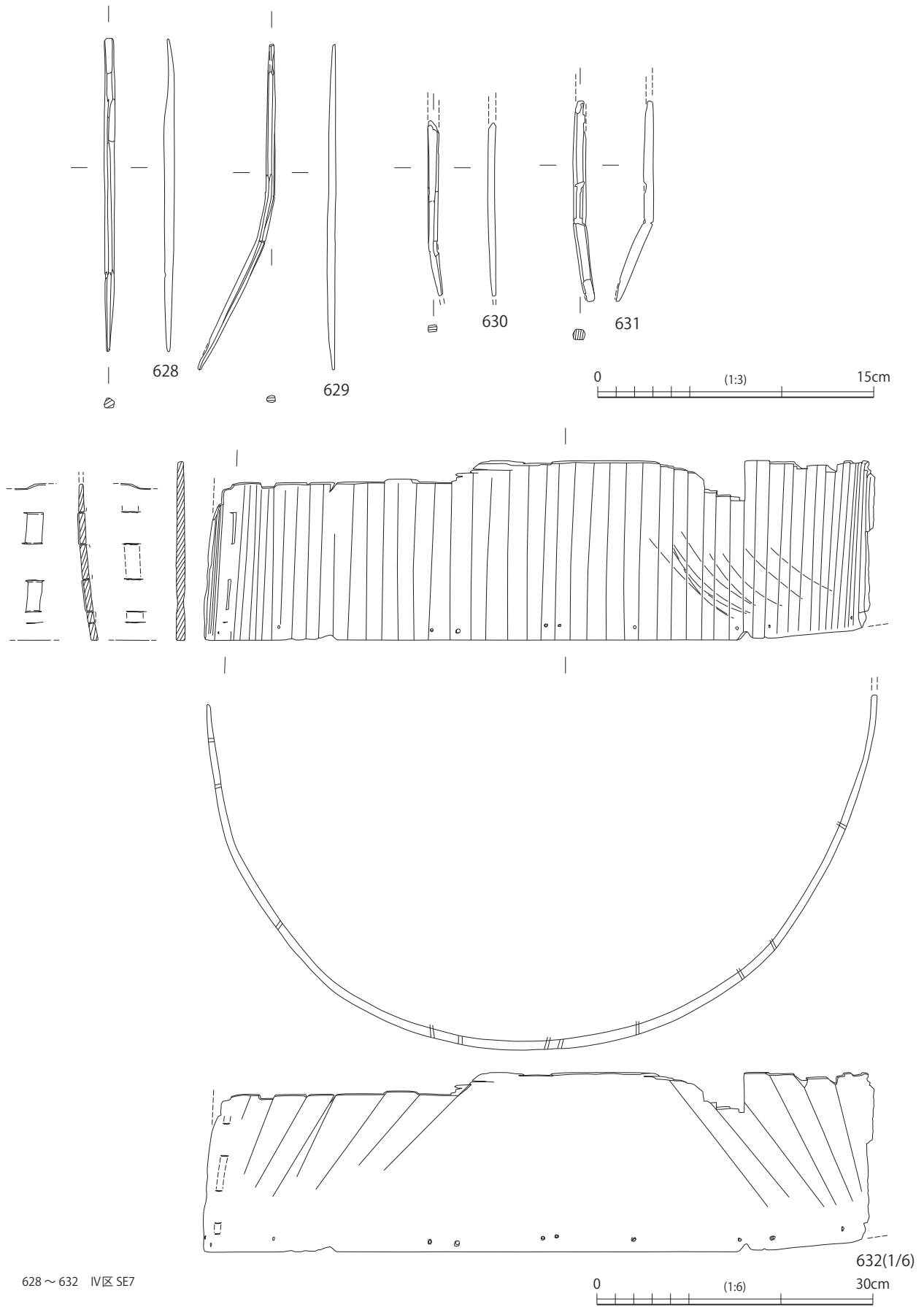


第108図 IV区第1面 土坑・溝 (S=1/60)

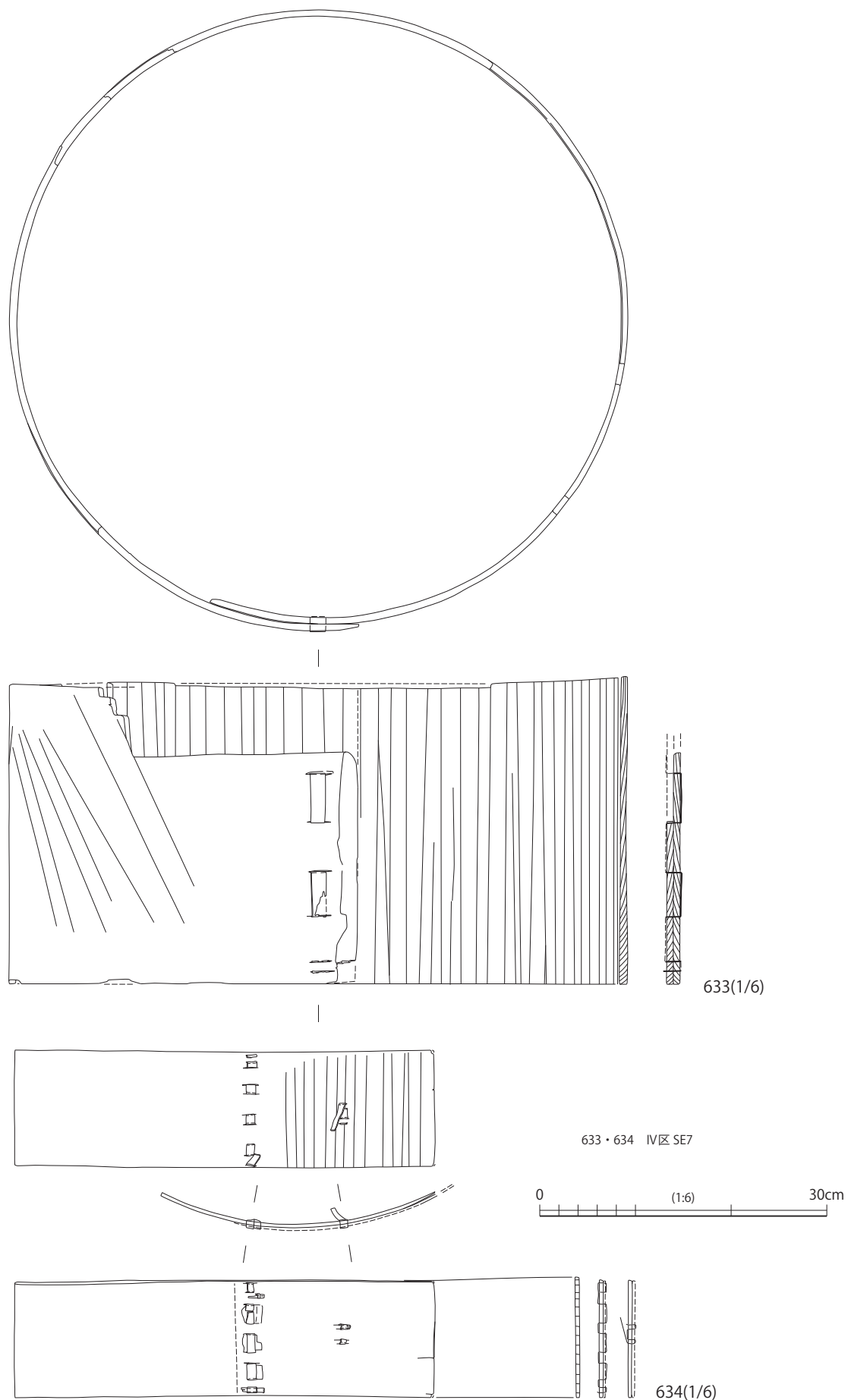


第109図 第1面出土遺物(75) (S=1/3)

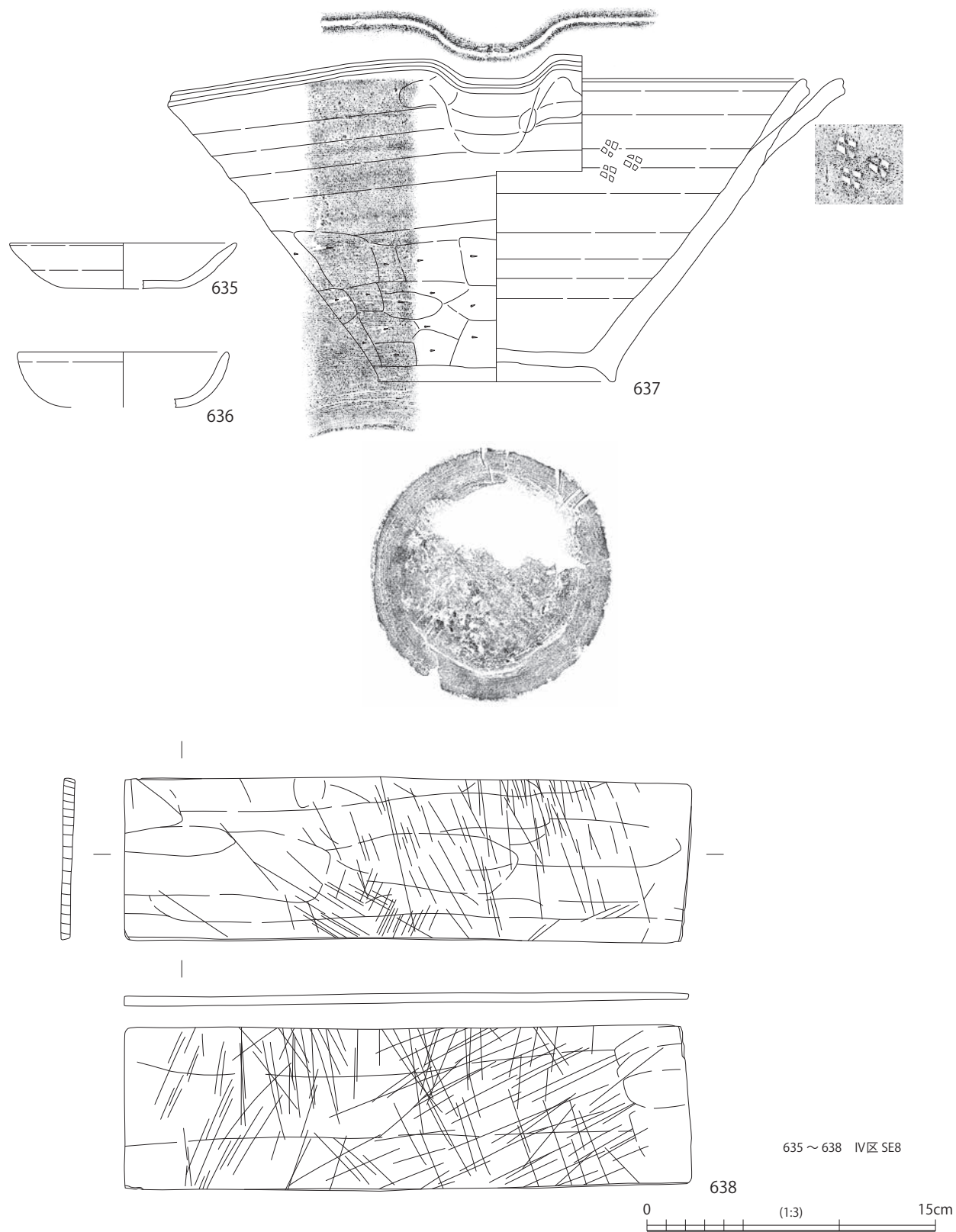




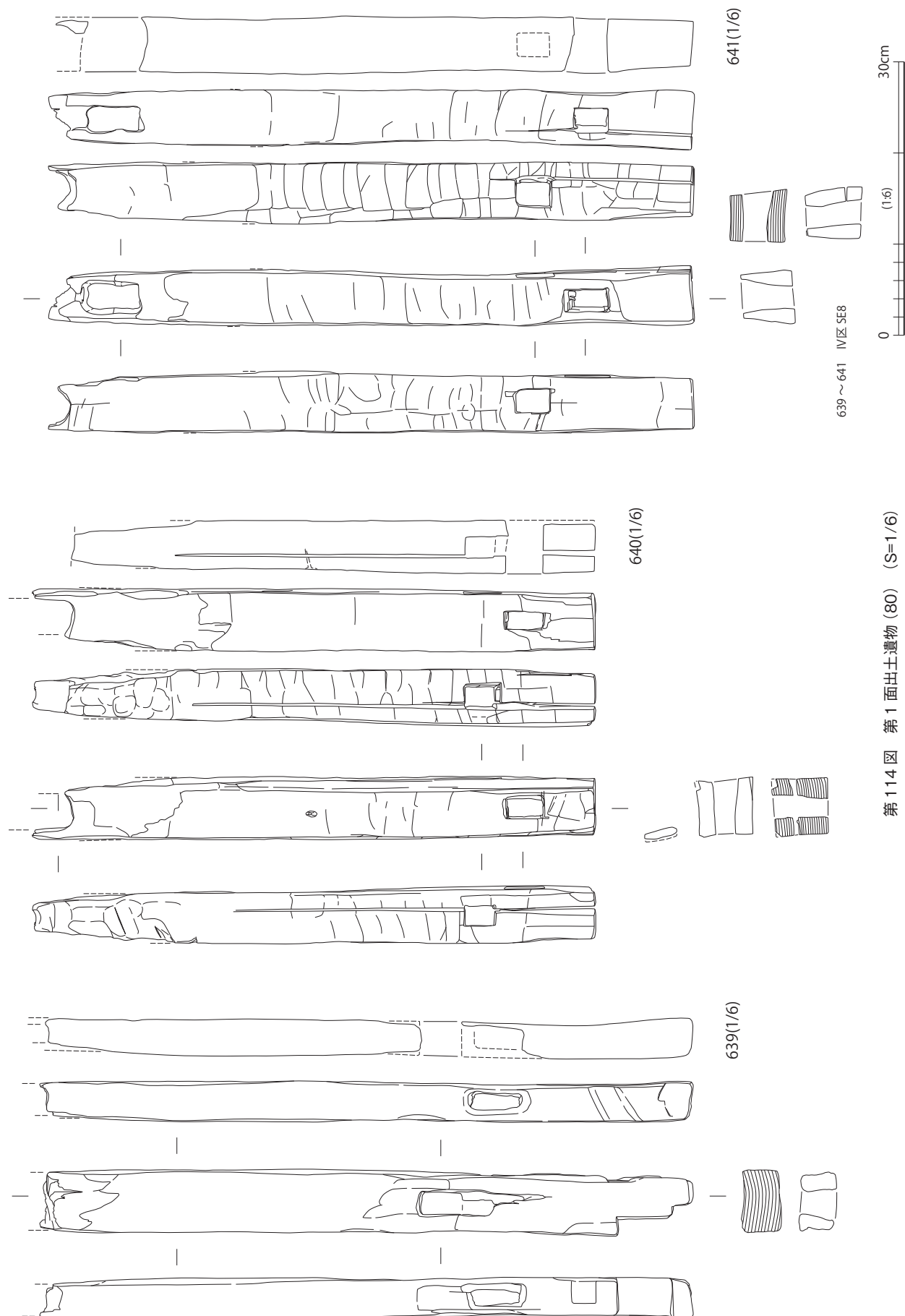
第111図 第1面出土遺物(77) (S=1/3・1/6)

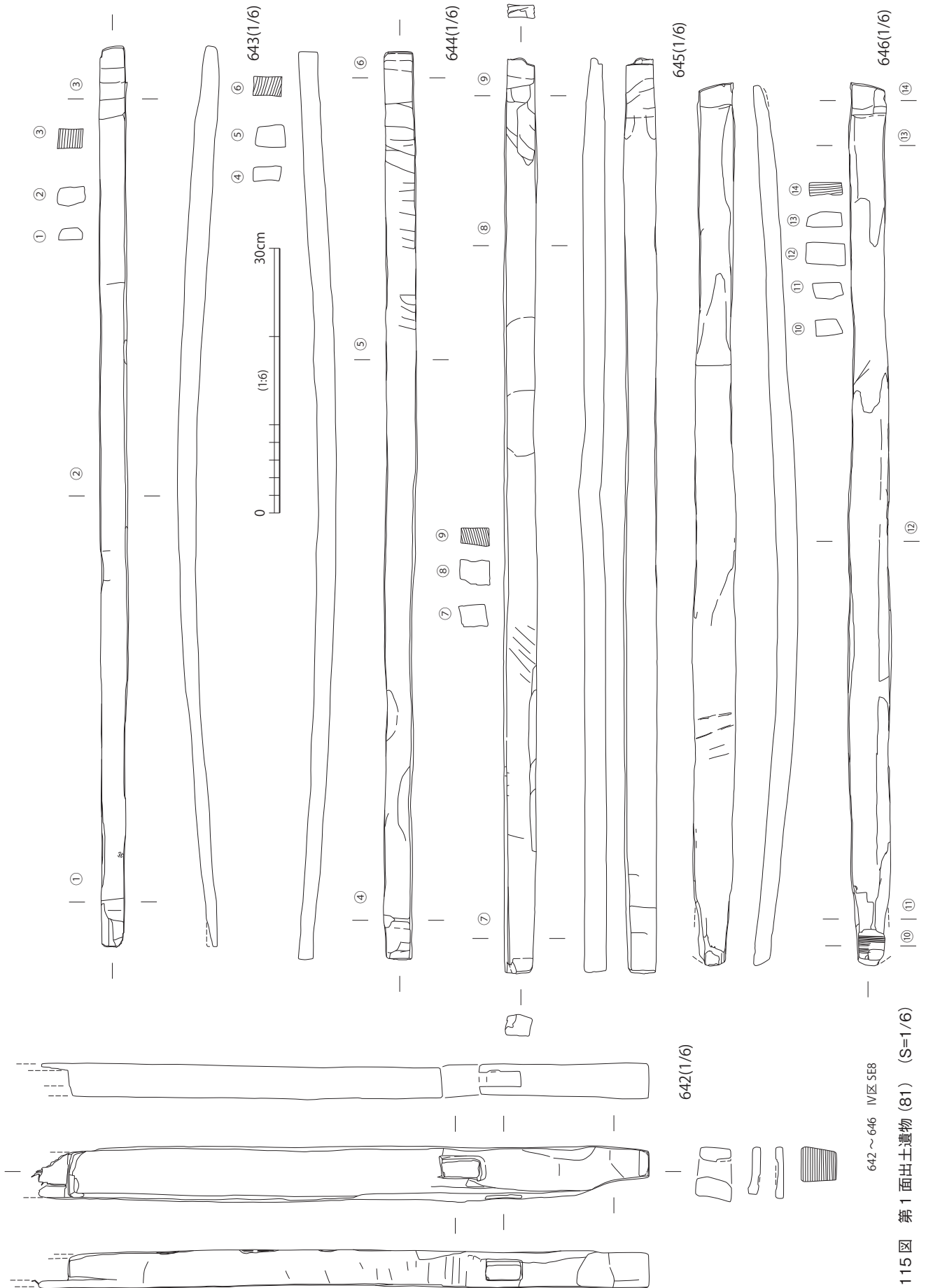


第112図 第1面出土遺物(78) (S=1/6)

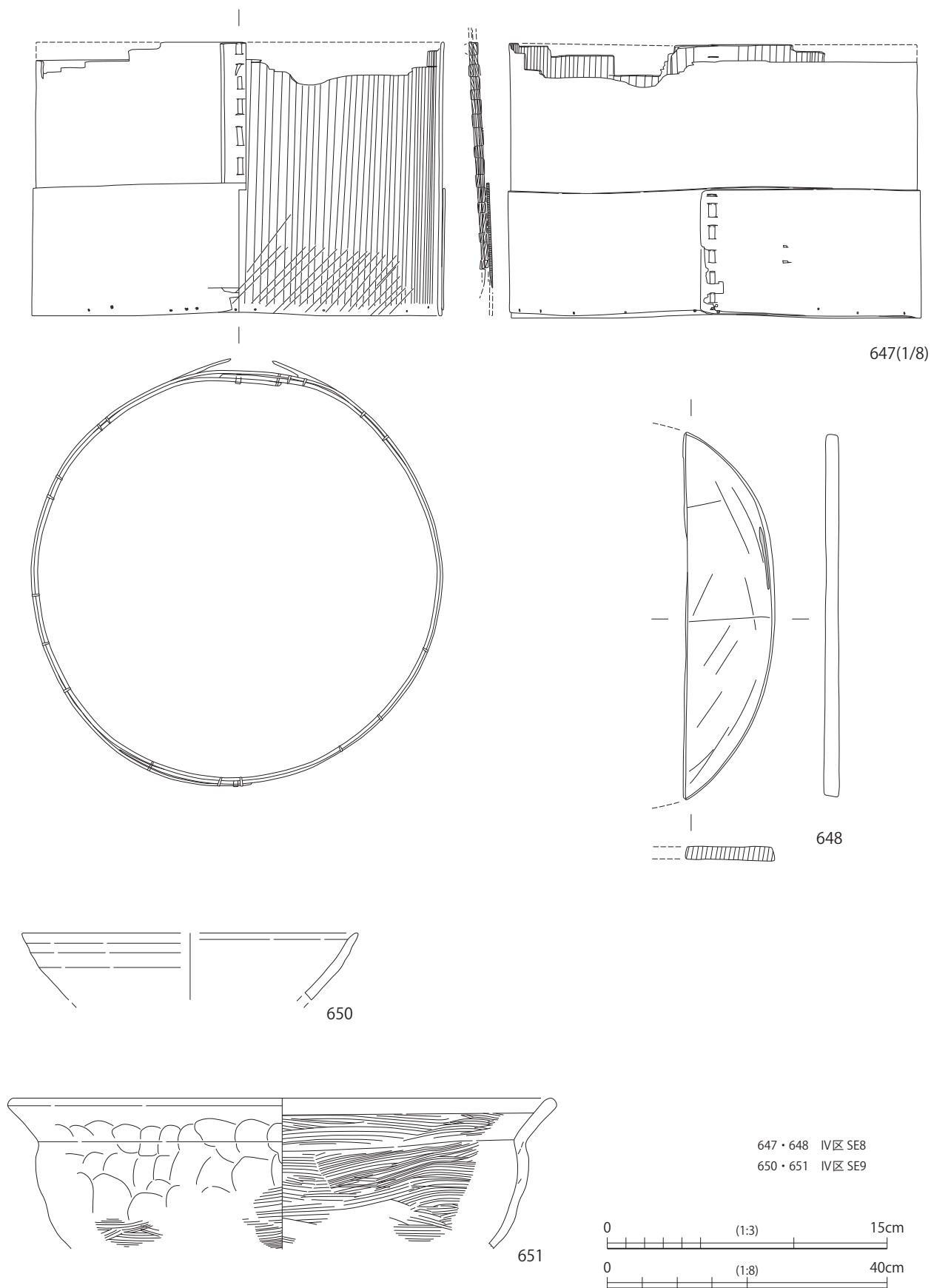


第113図 第1面出土遺物(79) (S=1/3)

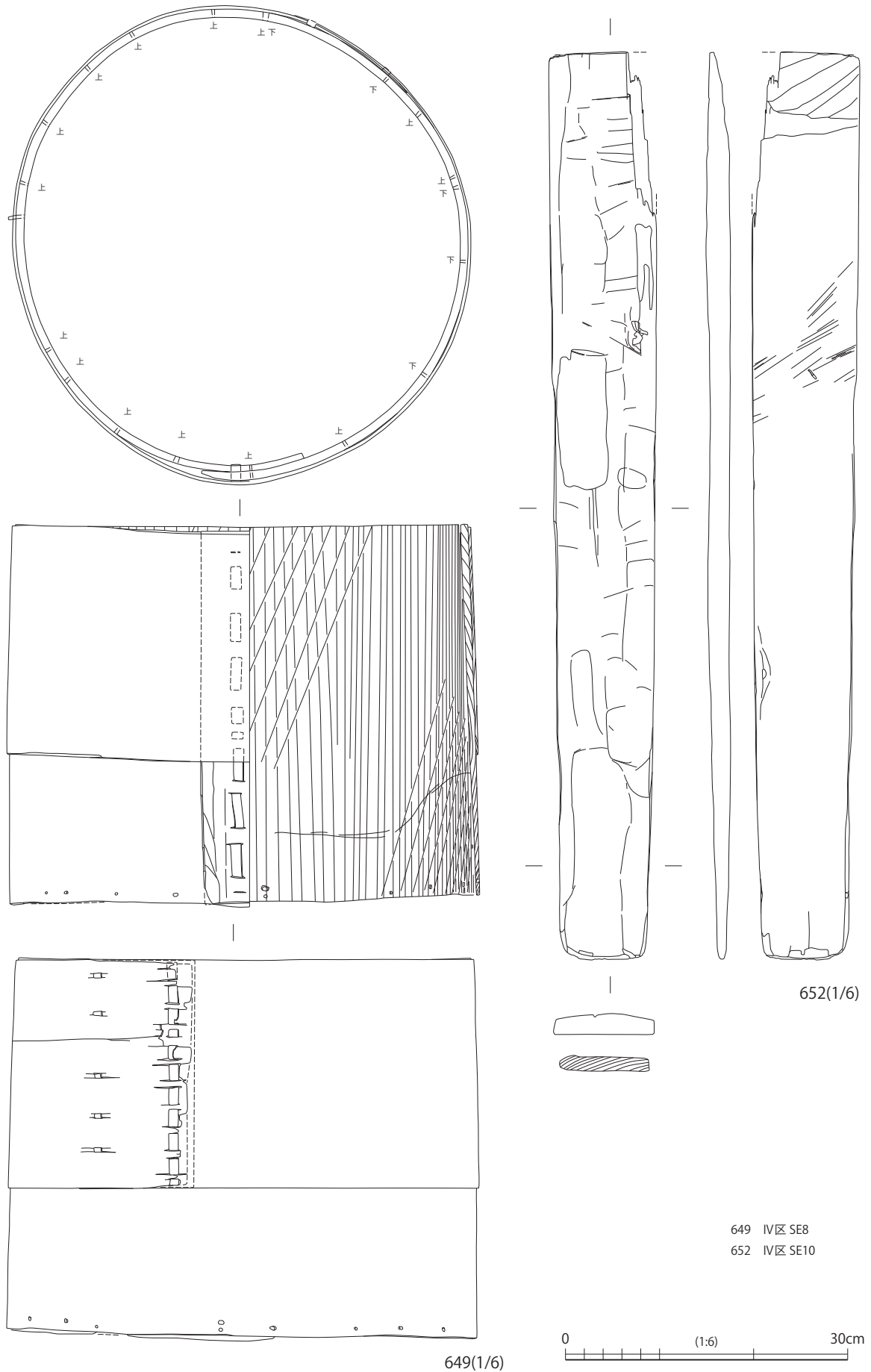




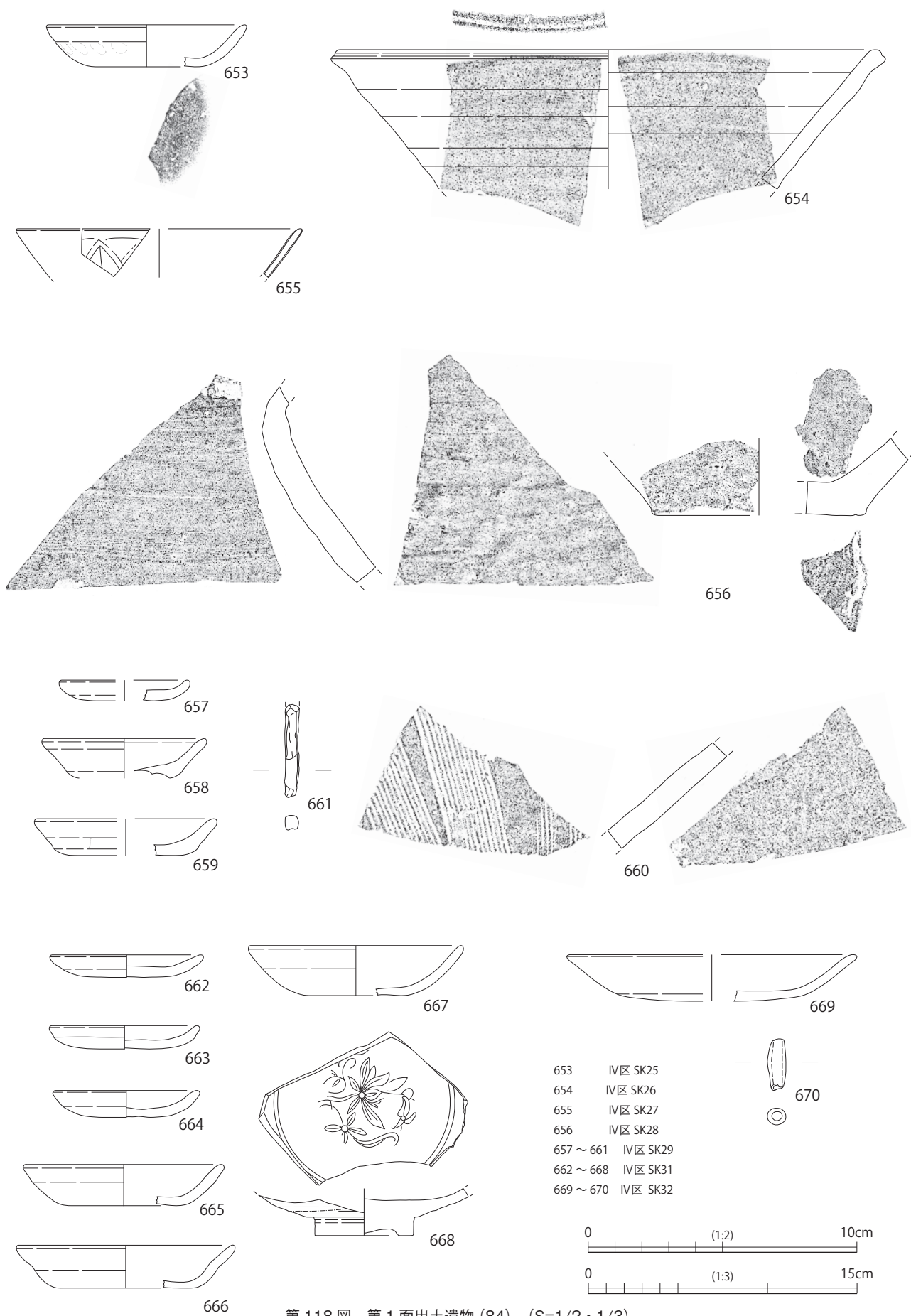
第115図 第1面出土遺物 (81) (S=1/6)

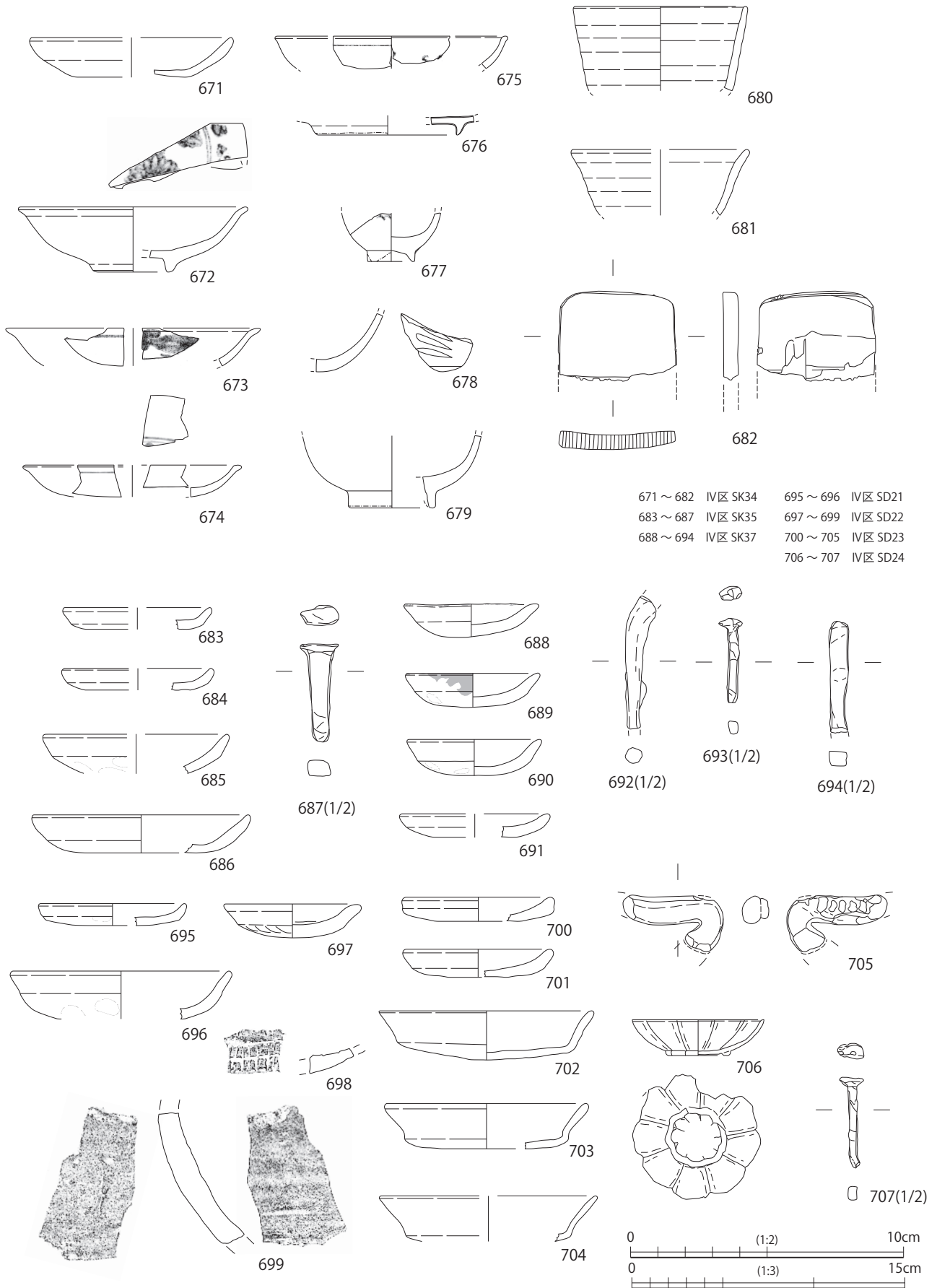


第116図 第1面出土遺物(82) (S=1/3・1/8)

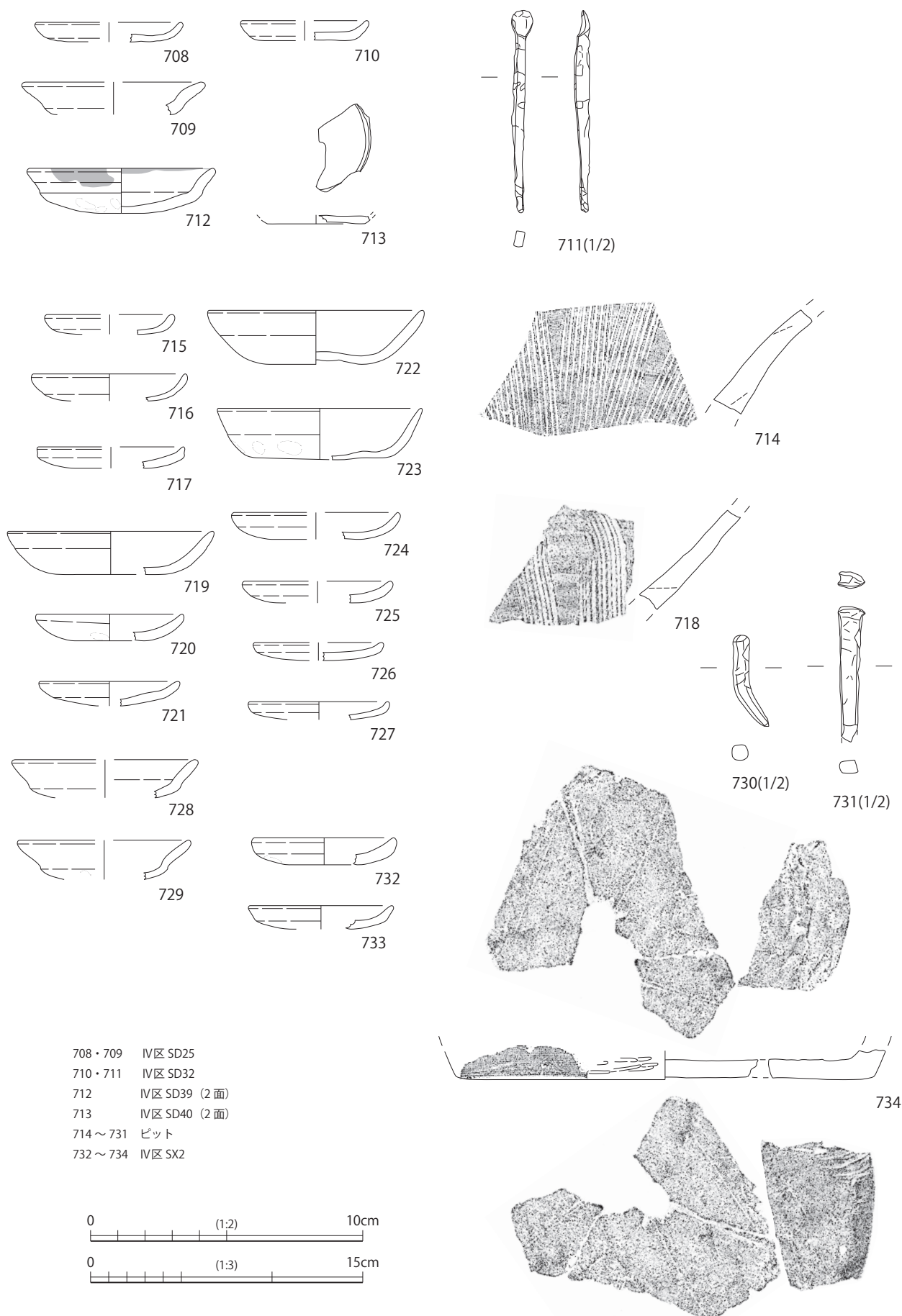


第117図 第1面出土遺物(83) (S=1/6)

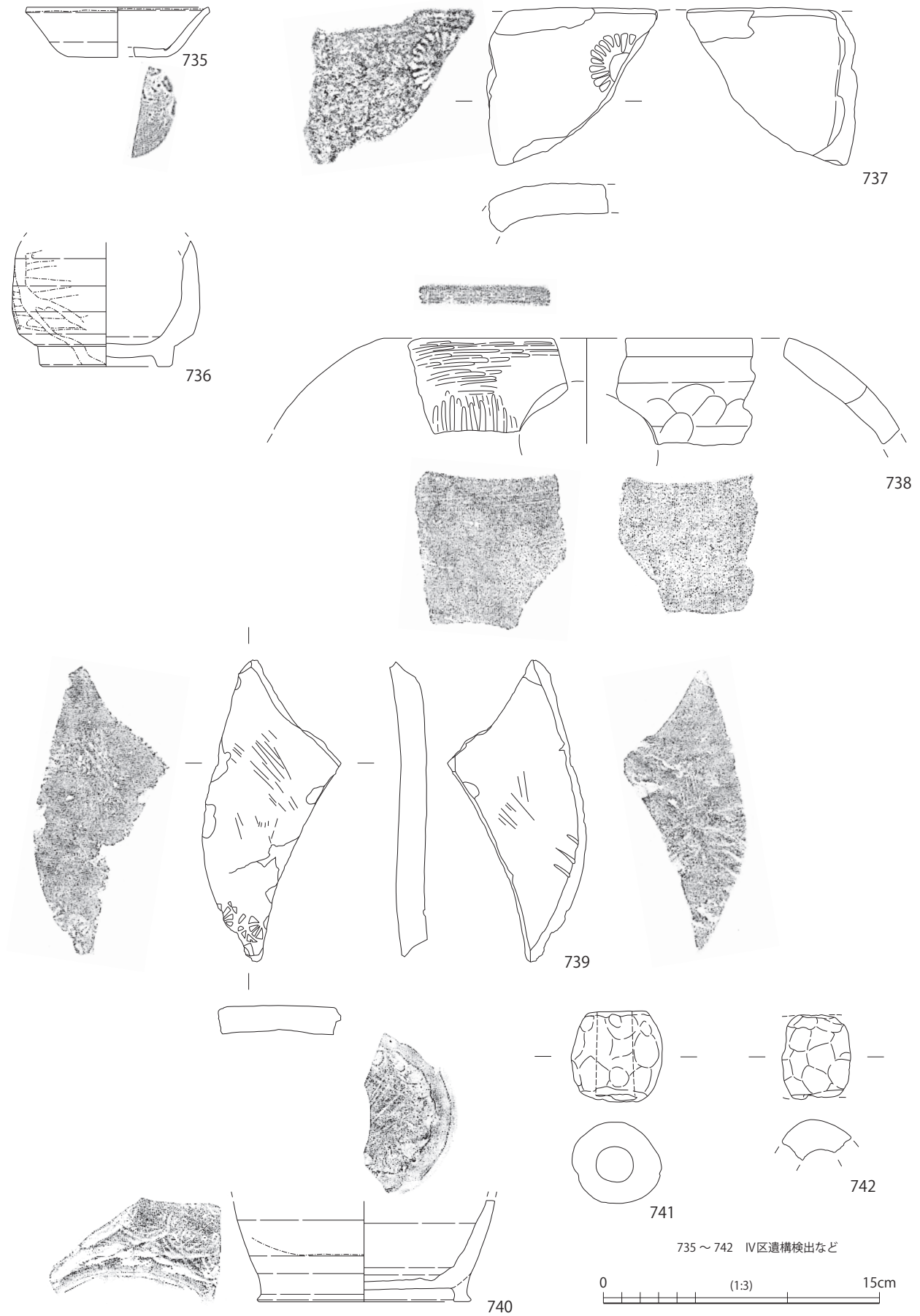




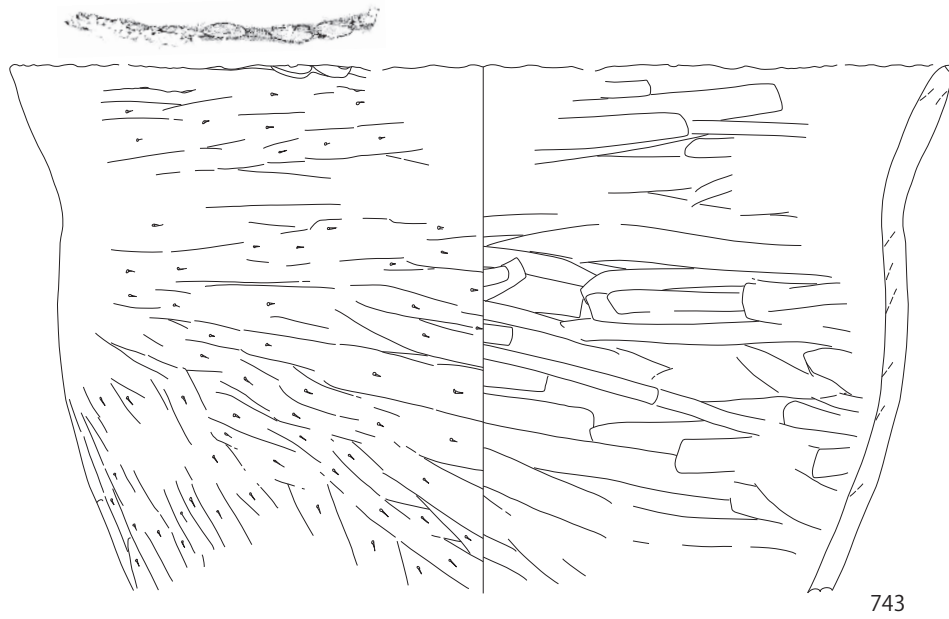
第119図 第1面出土遺物(85) (S=1/2・1/3)



第120図 第1面出土遺物(86) (S=1/2・1/3)



第121図 第1面出土遺物(87) (S=1/3)



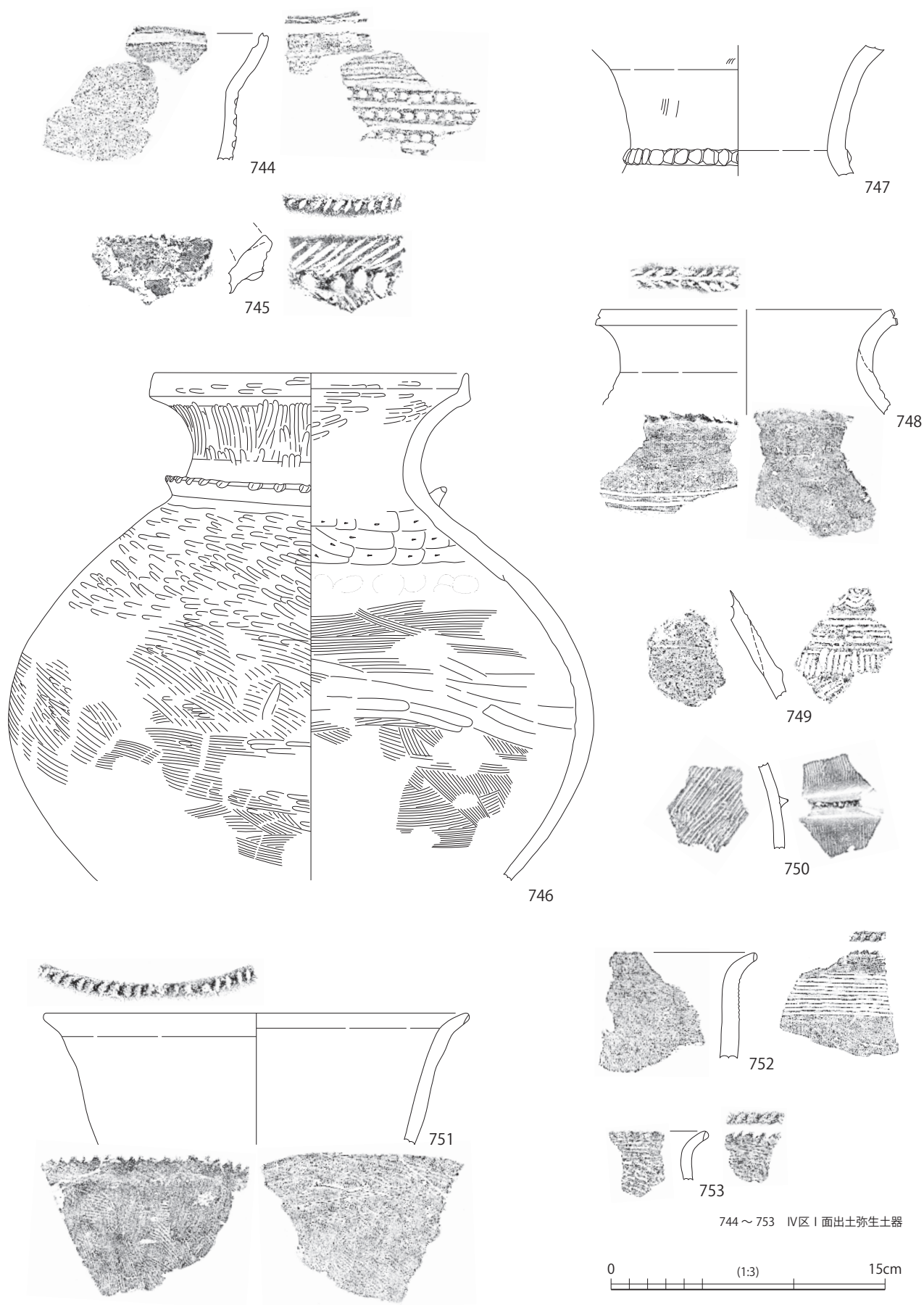
743



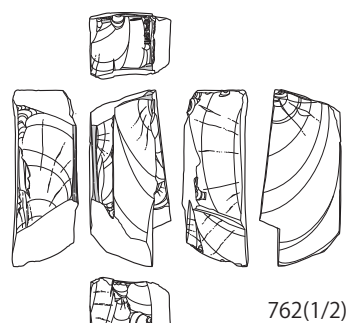
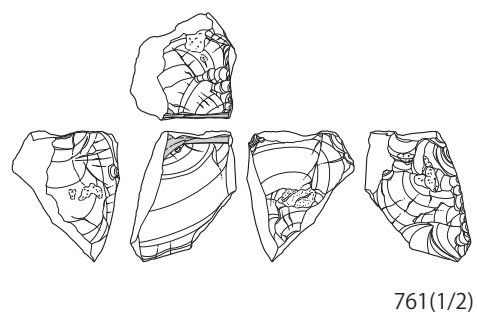
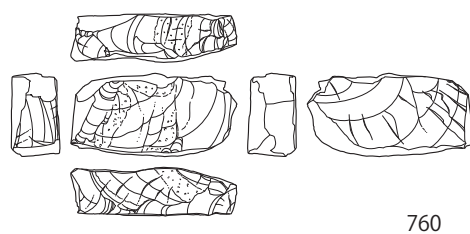
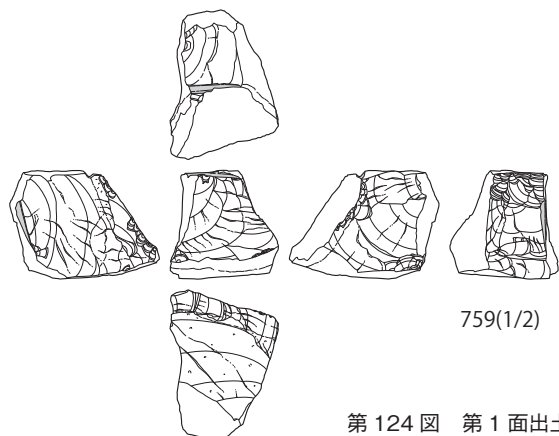
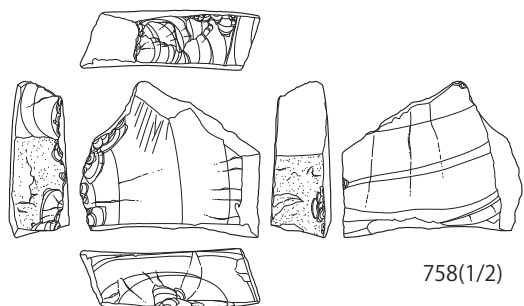
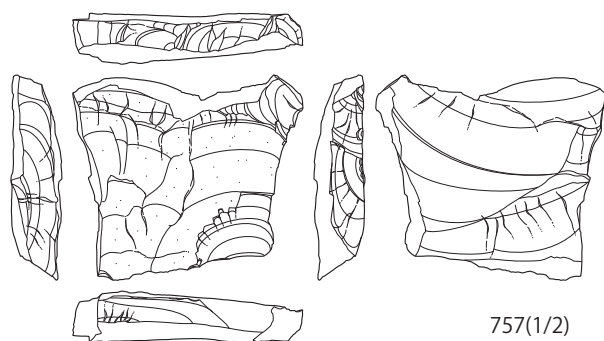
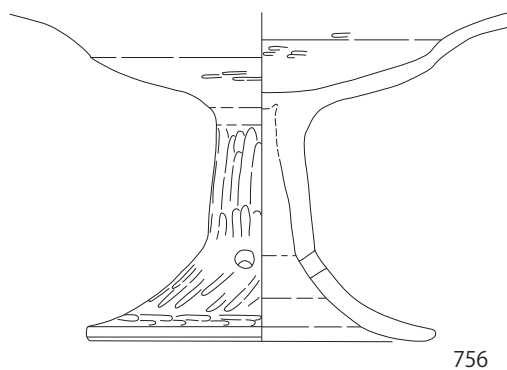
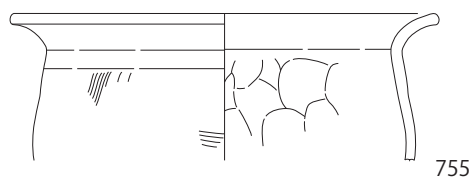
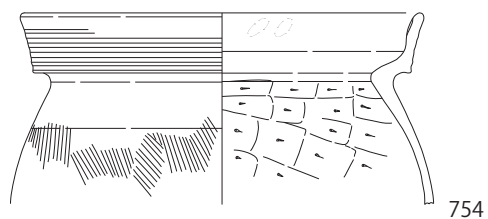
743 IV区I面出土弥生土器

0 (1:3) 15cm

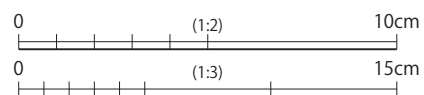
第122図 第1面出土遺物(88) (S=1/3)



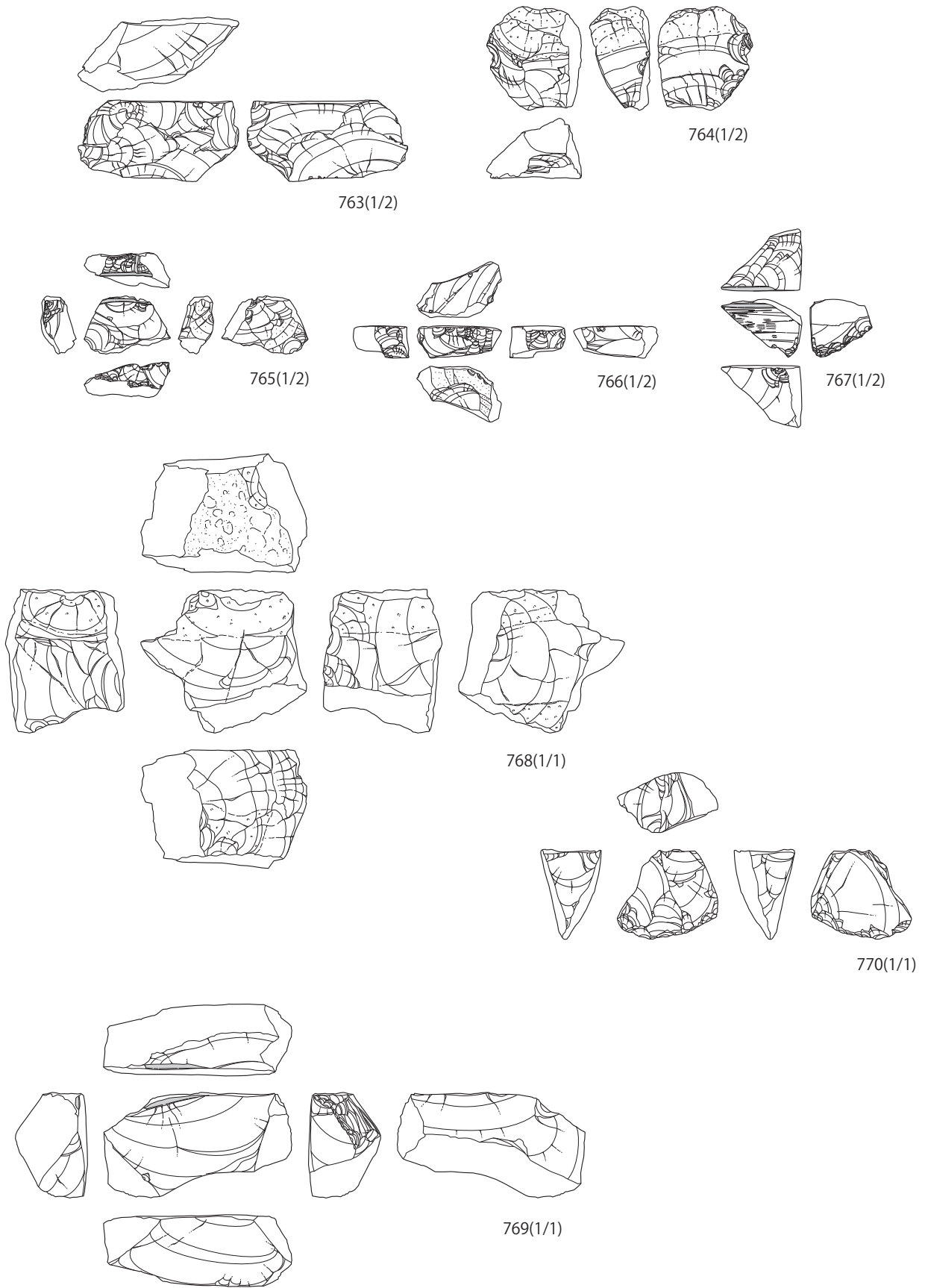
第123図 第1面出土遺物(89) (S=1/3)



754 ~ 762 IV区I面出土弥生土器・石製品



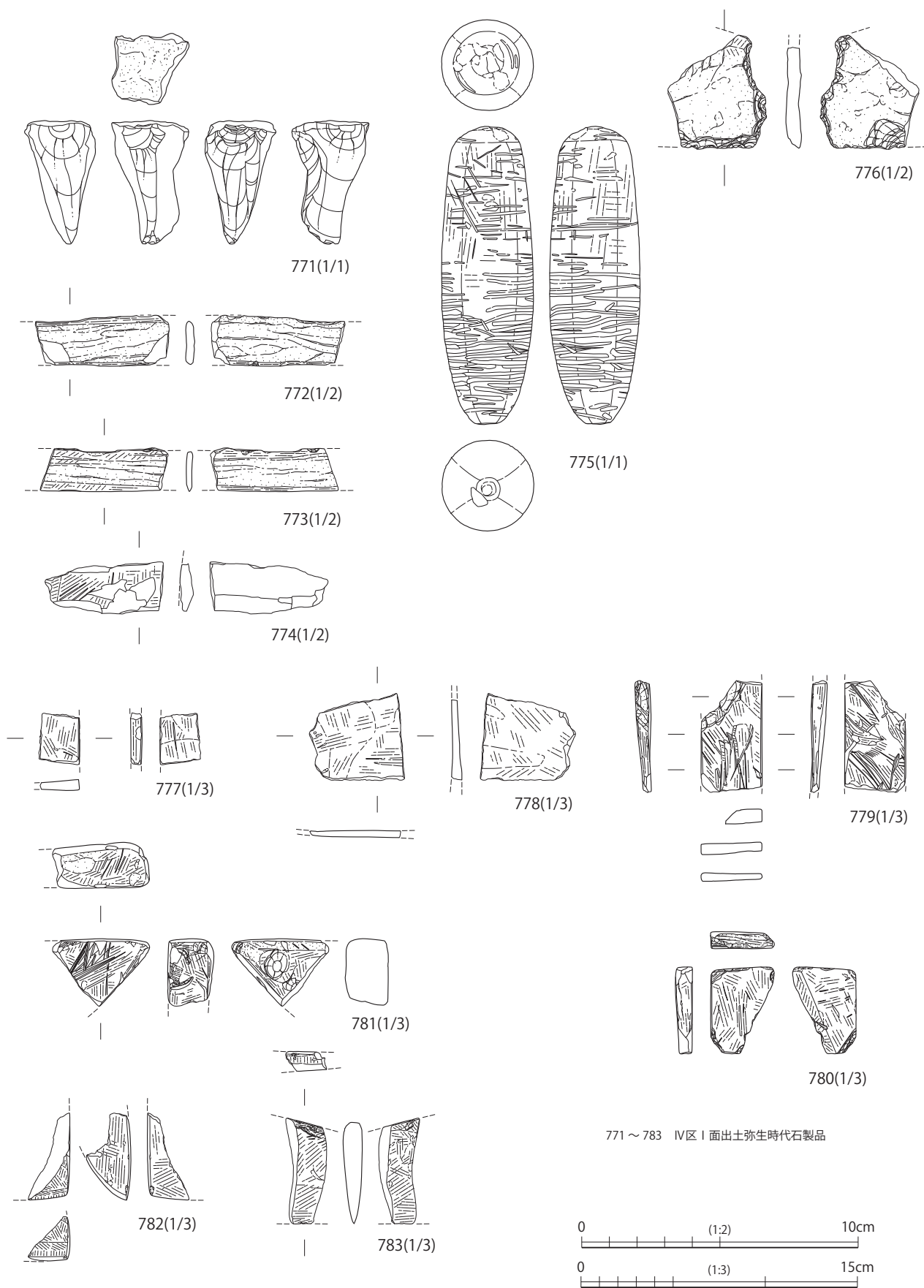
第124図 第1面出土遺物(90) (S=1/2・1/3)



763～770 IV区I面出土弥生時代石製品

0 (1:2) 10cm

第125図 第1面出土遺物(91) (S=1/1・1/2)




第126図 第1面出土遺物(92) (S=1/1・1/2・1/3)

第7節 第2面の概要

第2面は弥生時代を主体とした遺構面である。遺構面の標高は1.06m（Ⅰ区北端）～1.35m（Ⅳ区南端）で、Ⅱ・Ⅲ区は第1面と同レベルで検出されている。Ⅰ区～Ⅲ区を縦断して流れる環濠及び旧河道からは、弥生時代中期を中心にした土器や石製品などが出土する。環濠はⅣ区北側で東西方向に分流し、その南側には数基の方形周溝墓が築造されている。集落本体は調査地の西側に広がるものと予想している。

出土遺物は土器717点・石製品101点・木製品16点を図化した。土器はその大半を中期中葉の小松式が占め、中期前葉の矢木ジワリ式および後期後半の法仏～月影式がわずかに含まれる。石製品は玉造りに由来する緑色凝灰岩製の石核や石鋸・砥石などが出土するが、完成品は含まれていない。なお、第1面で報告されている「弥生時代の遺物」は、第2面由来のものが取り上がったもので、紙面の制約から言及できなかったがおおむね小松式で占められている。以下に用いる時期区分や土器型式は概ね右表のようになる。

時期区分	型式名	参照編年	遺跡の活動
弥生前期	柴山出村	八日市地方1期	
		八日市地方2期	
弥生中期前葉	矢木ジワリ	八日市地方3期	
		八日市地方4期	
		八日市地方5期	
弥生中期中葉	小松	八日市地方6期	
		八日市地方7期	
		八日市地方8期	
弥生中期後葉～末	磯部運動公園	八日市地方9期	
	専光寺養魚場	八日市地方10期	
	戸水B		
	+		
弥生後期前半	猫橋	漆町1群	
弥生後期後半	法仏	漆町2群	
	月影	漆町3群	
弥生終末期		漆町4群	

○八日市地方編年は、福海貴子2003『八日市地方遺跡Ⅰ』
○漆町遺跡編年は、田嶋明人1986『漆町遺跡Ⅰ』

第127図 石川県の弥生時代編年

第8節 Ⅰ区第2面の遺構・遺物

SD44/Ⅱ区SX1（第128図、第130図784・176図1103～1109）Ⅰ区を南北に流れる溝で、Ⅱ区SX1として確認できる落ち込みを最後に遺構としては確認できなくなる。調査区北端ではSD35に、南端では旧河道SD37に切り込まれる溝で、遺構としては最も古いものとなる。溝幅は1.5～1.6m、深さは断面図a-b上で約40cmを測る。埋土は褐灰色砂質土を基調とする。遺物は784・1104～1109を図示した。784は縄文時代晩期の深鉢口縁部で、内外面に横位に条痕を施し、外面の口唇部付近をヨコナデする。外面穿孔の補修孔が確認できる。1104は口縁内面に三角列点文を施す。1106は細頸壺の口縁部付近で近江系の受け口を呈する。1107・08は口縁部に刻みを施す。いずれも弥生時代中期中葉の小松式のもの。

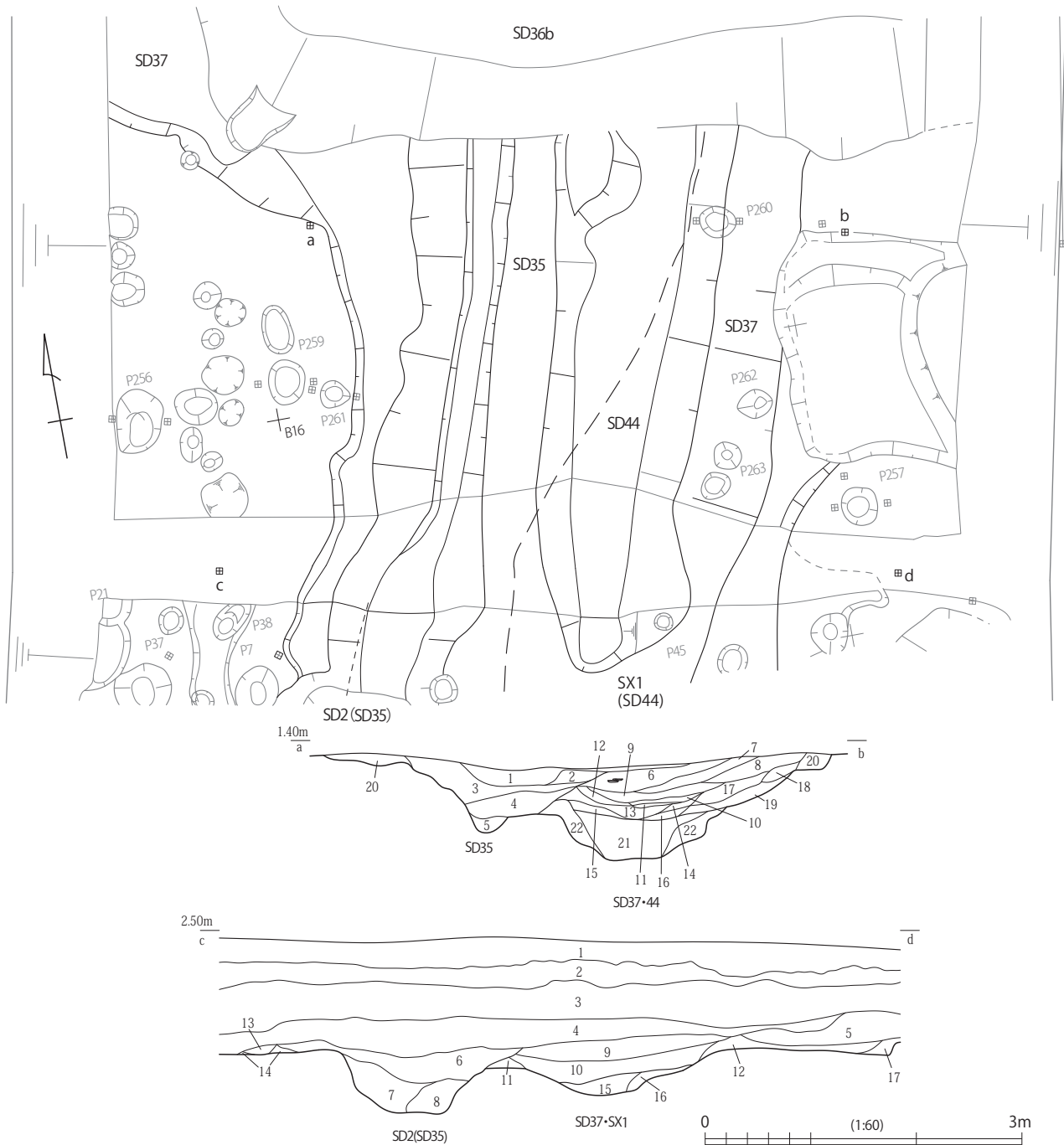
旧河道SD37（第128図、第130図785～141図859）遺跡を南北に貫流する自然河道であり、のちに右岸側を再掘削され環濠として利用されている。Ⅰ区SD37－Ⅱ区・Ⅲ区旧河道と接続し、Ⅲ区とⅣ区の境にある東西溝SD39に合流する。大半を近世の堀状遺構SD36によって損壊され遺構として不鮮明なところはあるが、調査時の所見では、SD36の北西側から始まりゆるやかに真南側へ流れを変え、B16グリッド中央付近で北から流れる環濠SD35に切られる。また北から流れるSD44（SX1）を切り込み、遺構順はSD44→SD37→SD35の順となる。旧河道と環濠の関係については第5章で整理することとしたい。川幅は約4.6m、深さは断面図a-b上で約50cmを測る。埋土は褐灰色砂質土を基調とし、同系の砂質土・砂で構成されることから洪水等で短期間に埋まったことが想定できる。

遺物は785～854を図示した。785は縄文時代晩期の深鉢口縁部。条痕施文後に口唇部の内外面を軽くナデる。786～800は弥生時代前～中期の条痕文系土器。壺792は外面全体に縦位に条痕を施し、内面はナデ調整。壺793～795は同一個体と推定される。口縁部793は受け口状を呈し、口唇部内面に棒状工具による連続刺突と円周状に条痕を施す。外面にも一条の連続刺突が見られる。体部794・795は肩部に一条の横条痕をめぐらし、以下は縦羽状条痕を密に施す。801～850は中期小松式の壺甕類。壺807は口唇部に刻み・直下に綾杉状刺突をめぐらす。同一片で工字状文を持つものも確認している。815・816は櫛描直線文+波状文の組み合わせ。827は甕転用の甕で、底部には焼成後穿孔の蒸気孔が空けられる。口縁部内面には4段の櫛描波状文を施す。824・826・828～830は口唇部に刻みを施す無文の甕。837は口唇部に指頭圧痕を連続して施し、内面には垂下文、外面頸～肩部にかけて櫛描直線文+波状文を4単位施す。838は平坦化した口唇部に波状文をめぐらす。839は胴部に櫛描簾状文+直線文+三角列点文を施す。847は甕転用の甕で、蒸気孔は焼成後穿孔。肩部に櫛描直線文+波状文を2単位施す。851～854は土器片加工の円盤で、851は中央に穿孔する。855・856は緑色凝灰岩製の玉素材。

SD35（第128図、第141図860～147図896） 遺跡を南北に貫流する大型の溝であり、I区SD35-II区SD2-III区SD11と接続する。基本的な流形は旧河道を踏襲しており、I・II区においては旧河道の右岸を再掘削する形で検出され、III区北半で一端調査区外に出、南半で再び姿を現す。III区においては旧河道とほぼオーバーラップして検出されている。最終的にはIII区とIV区の境にある東西溝SD39と合流しT字を成す。溝幅は約2.4m、深さは断面図a-b上で約60cmを測る。埋土は上層が黒色砂質土・下層が褐灰～黄灰色砂質土を基調とする。遺物は860～896を図示した。860～878は弥生時代中期小松式の壺甕類。大型壺862は口唇部外面は刻み、内面にハケによる粗い羽状文を施し、外面には2段の羽状文を施す。壺865は頸部に3条の突帯を貼り付け刻みを施す。甕876は口唇部内面に矢羽根状刻み+棒状工具連続刺突による小波状口縁を作り出す。頸部には櫛描直線文+簾状文+扇状スタンプ文を施す。甕879は口縁部に擬凹線を施す有段口縁甕で、内面はヘラケズリ調整。後期後半の法仏式で、環濠の最終埋没時期を示すものか。鉢882は口唇部及び直下の貼付突帯に刻みを施すもので、西日本系の特徴を持ち搬入品か。886～890は緑色凝灰岩製の玉素材。891・892は石鋸、893～895は砥石で、いずれも玉制作に係る可能性が高い。

SD43（第129図） B15～16グリッドに位置する遺構。調査時は溝として理解していたようだが、延長が確認できず不詳。旧河道SD37を切り込む。遺物は出土しなかった。

I区下層出土の遺物 第147図897～150図920は第1面SD36に攪乱されて残存していた土器で、SD35・37・44の区別がつかないもの。897～902・905～910は中期小松式の壺類。903・904は条痕文系土器片である。903は胎土に長石・石英を豊富に含み、能登産の可能性もある。甕910は屈曲の強い逆L字型の口縁を持ち、内外面にミガキ調整を残すもので西日本からの搬入ないし模倣品か。甕911は櫛描直線文区画内に縄文を充填し、口縁端部や口縁内部にも縄文を施す。金沢市矢木ジワリ遺跡等で類例が確認でき、櫛描文系+条痕文系の中期前葉のものか。甕912は口縁端部に1条の凹線を施すもので、中期後半の凹線文系土器。918は器台の受け部で有段部に擬凹線を施す。後期法仏式。919は把手付甕で西日本の影響を受けたものか。922は口唇部に刻み、外面は縦ハケで口縁内面には太いハケを横位に施す。大和型甕と呼ばれる西日本からの搬入品か。



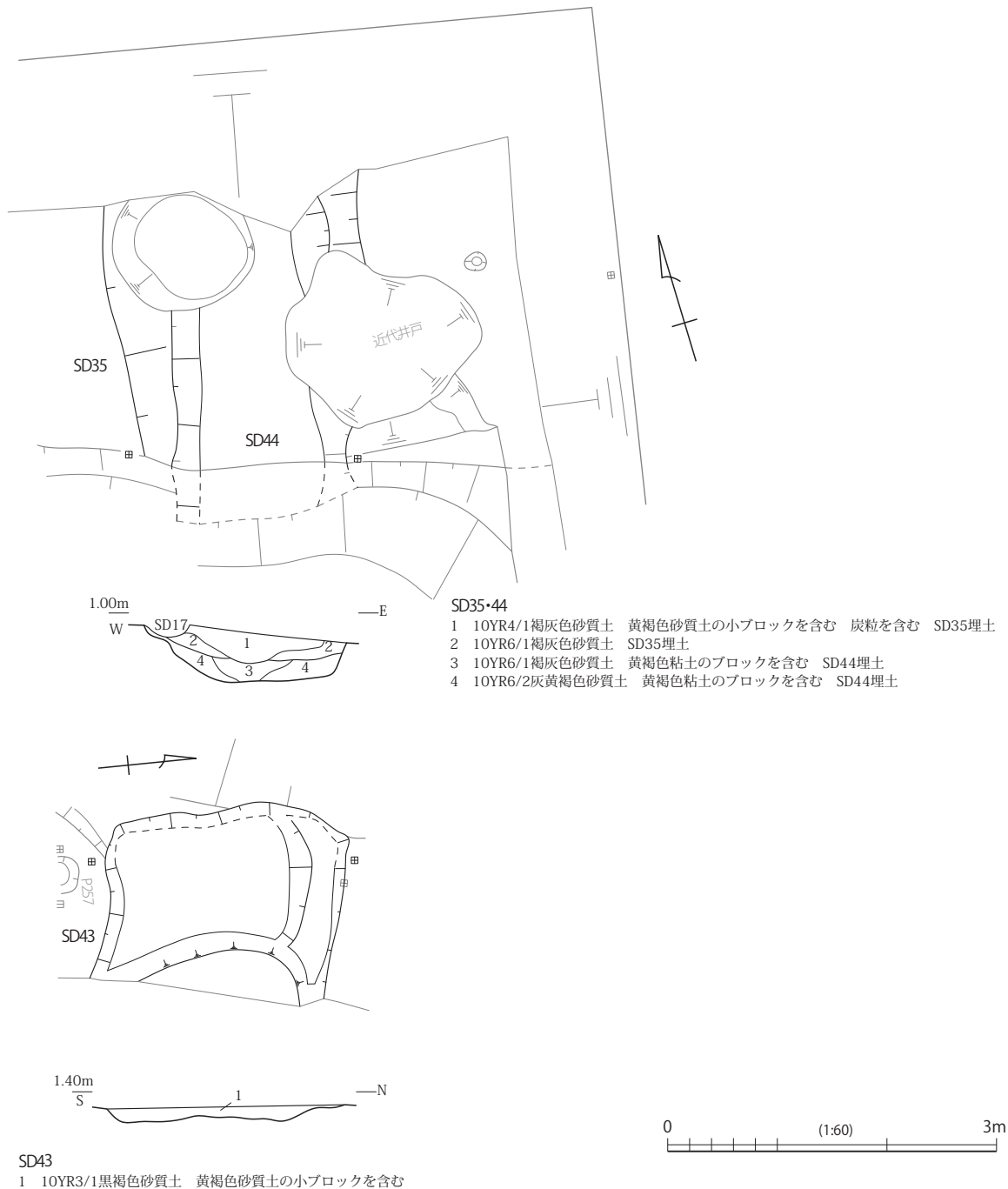
SD35・37・44 a-b 断面

- | | |
|---|---|
| 1 10YR2/1黒色砂質土 褐灰色砂質土のブロックを含む SD35埋土 | 16 10YR6/1褐灰色砂 SD37堆積土 |
| 2 10YR5/1褐灰色砂質土 黒色砂質土のブロックを含む SD35埋土 | 17 10YR6/1褐灰色砂 炭粒を少量含む SD37肩が崩れて堆積 |
| 3 10YR6/1褐灰色砂質土 黒褐色砂質土の小ブロックを少量含む SD35埋土 | 18 10YR6/1褐灰色砂 SD37肩が崩れて堆積 |
| 4 10YR4/1褐灰色砂質土 炭粒を含む SD35埋土 | 19 10YR6/1褐灰色砂質土 浅黄橙色粘土のブロックを含む SD37肩が崩れて堆積 |
| 5 10YR6/1褐灰色砂質土 浅黄橙色粘土のブロックを含む 黒褐色粘土のブロックを少量含む SD35埋土 | 20 10YR3/1黒褐色砂質土 黄褐色砂のブロックを含む SD37肩が崩れて堆積 |
| 6 10YR6/1褐灰色砂質土 黒褐色砂質土の小ブロックを少量含む SD37埋土 | 21 10YR6/1褐灰色砂質土 浅黄橙色粘土のブロックを多く含む 炭粒を含む SX1(SD44)埋土 |
| 7 10YR4/1褐灰色砂質土 炭粒を含む SD37埋土 | 22 10YR6/1褐灰色砂質土 SX1(SD44)埋土 |
| 8 10YR5/1褐灰色砂質土 炭粒を少量含む SD37埋土 | |
| 9 10YR5/1褐灰色砂質土 炭粒を含む SD37埋土 | |
| 10 10YR5/1褐灰色砂質土 黄褐色砂質土の小ブロック・炭粒を含む SD37堆積土 | |
| 11 10YR4/1褐灰色粘土 SD37堆積土 | |
| 12 10YR4/1褐灰色粘土 SD37堆積土 | |
| 13 10YR5/1褐灰色砂質土 炭粒を含む SD37堆積土 | |
| 14 10YR5/1褐灰色砂質土 SD37堆積土 | |
| 15 10YR5/1褐灰色砂質土 黄褐色砂質土のブロックを含む SD37堆積土 | |

第128図 I区第2面 環濠・溝 (S=1/60)

SD2(SD35)・SX1(SD44)・旧河道 (SD37) c-d断面

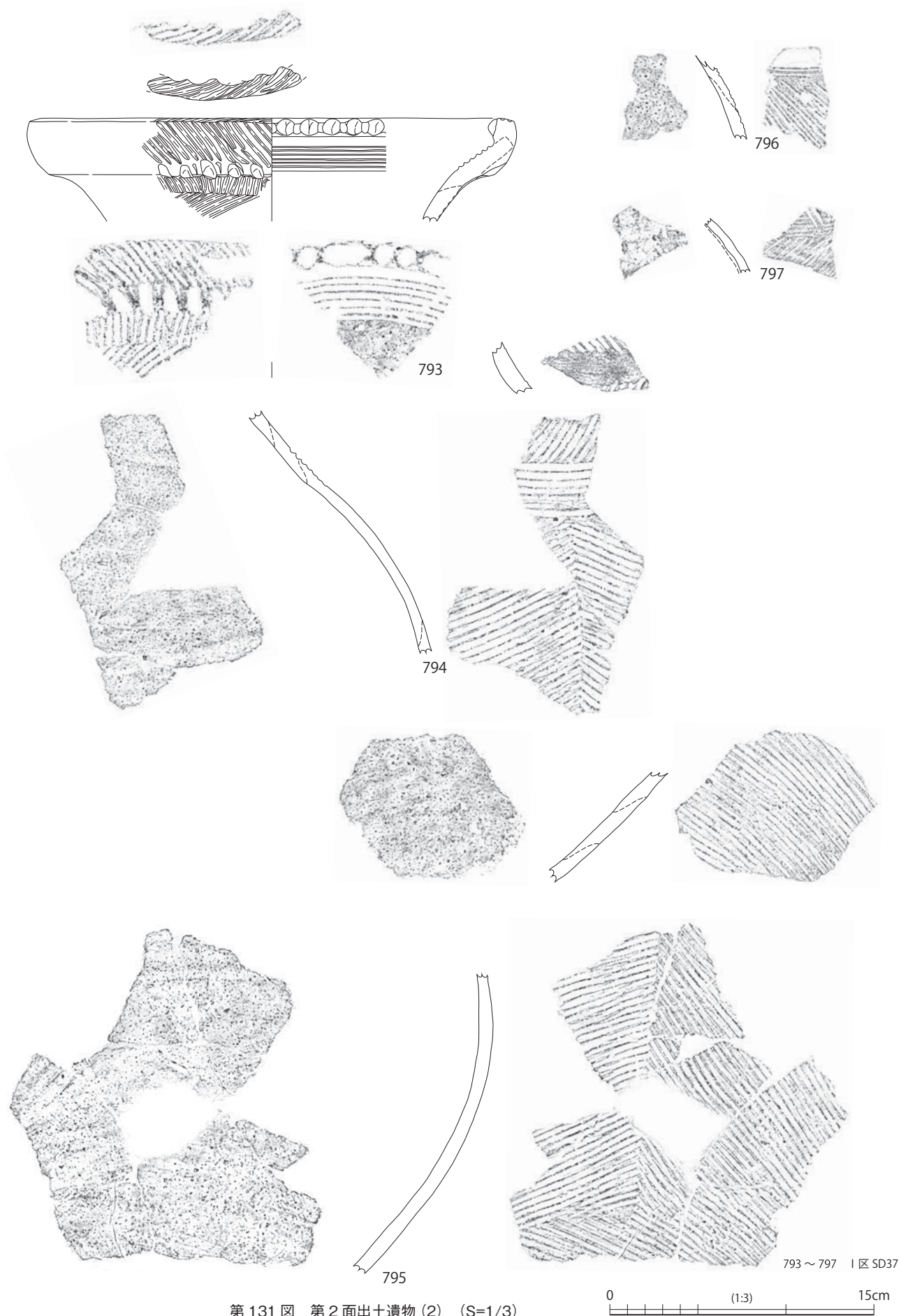
- | | |
|---|------------------------------------|
| 1 2.5Y5/1黄灰色粘質土 灰黄色粘質土のブロックを多く含む 石・砂利を含む 表土 | 12 10YR4/1褐灰色砂質土 黒褐色砂質土のブロックを含む |
| 2 10YR4/1褐灰色粘質土 宅地整地層 | 13 10YR3/1黒褐色砂質土 褐灰色砂質土のブロック・土器を含む |
| 3 10YR4/2灰黄褐色粘質土 褐灰色粘質土の小ブロックを含む 炭を含む 旧耕作土 | 14 10YR3/1黒褐色砂質土 黄褐色砂質土のブロックを含む |
| 4 10YR3/2黒褐色粘質土 灰黄褐色粘質土のブロックを多く含む 炭を含む 包含層 | ※9～14層 旧河道(SD37)埋土 |
| 5 10YR3/1黒褐色砂質土 褐灰色砂質土のブロックを含む 土器を含む 包含層 | 15 10YR4/1褐灰色砂質土 灰黄色砂のブロックを含む |
| 6 10YR2/1黒色砂質土 灰黄褐色砂のブロックを少量含む 土器・炭を含む | 16 10YR5/1褐灰色砂 灰黄色砂の小ブロックを少量含む |
| 7 2.5Y4/1黄灰色砂質土 灰黄色砂の大ブロックを含む 土器を含む SD2 | ※15・16層 SX1(SD44)埋土 |
| 8 2.5Y5/1黄灰色砂質土 土器を含む | 17 10YR3/1黒褐色砂質土 灰黄色砂のブロックを多く含む 地山 |
| ※6～8層 SD2(SD35)埋土 | |
| 9 10YR3/1黒褐色砂質土 灰黄色砂質土のブロックを含む 土器を含む | |
| 10 10YR2/1黒色砂質土 灰黄色砂の大ブロック・炭を多く含む 土器を含む | |
| 11 2.5Y5/1黄灰色砂質土 黒褐色砂質土のブロックを含む | |



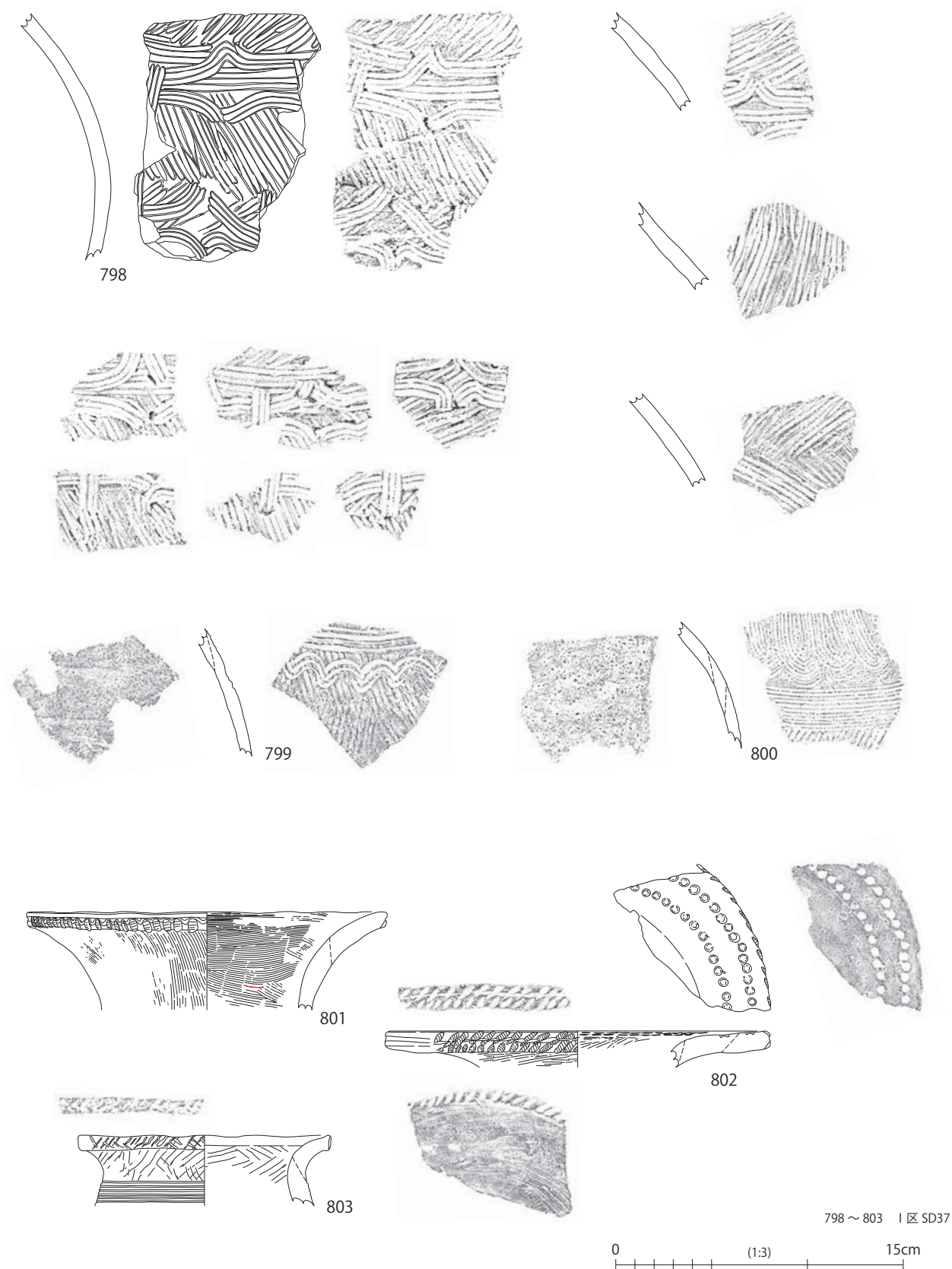
第129図 I区第2面 環濠・溝(2) (S=1/60)



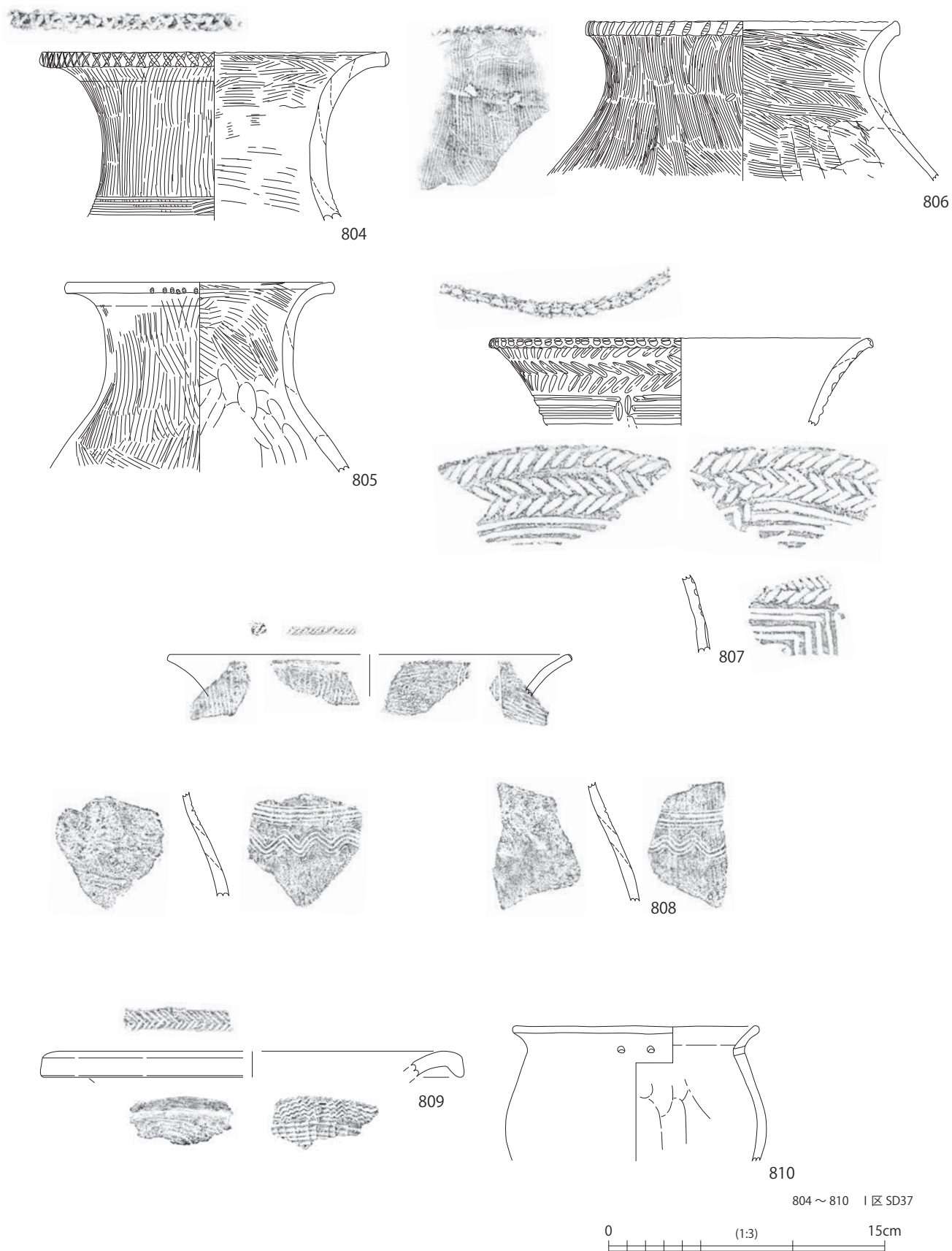
第130図 第2面出土遺物(1) (S=1/3)



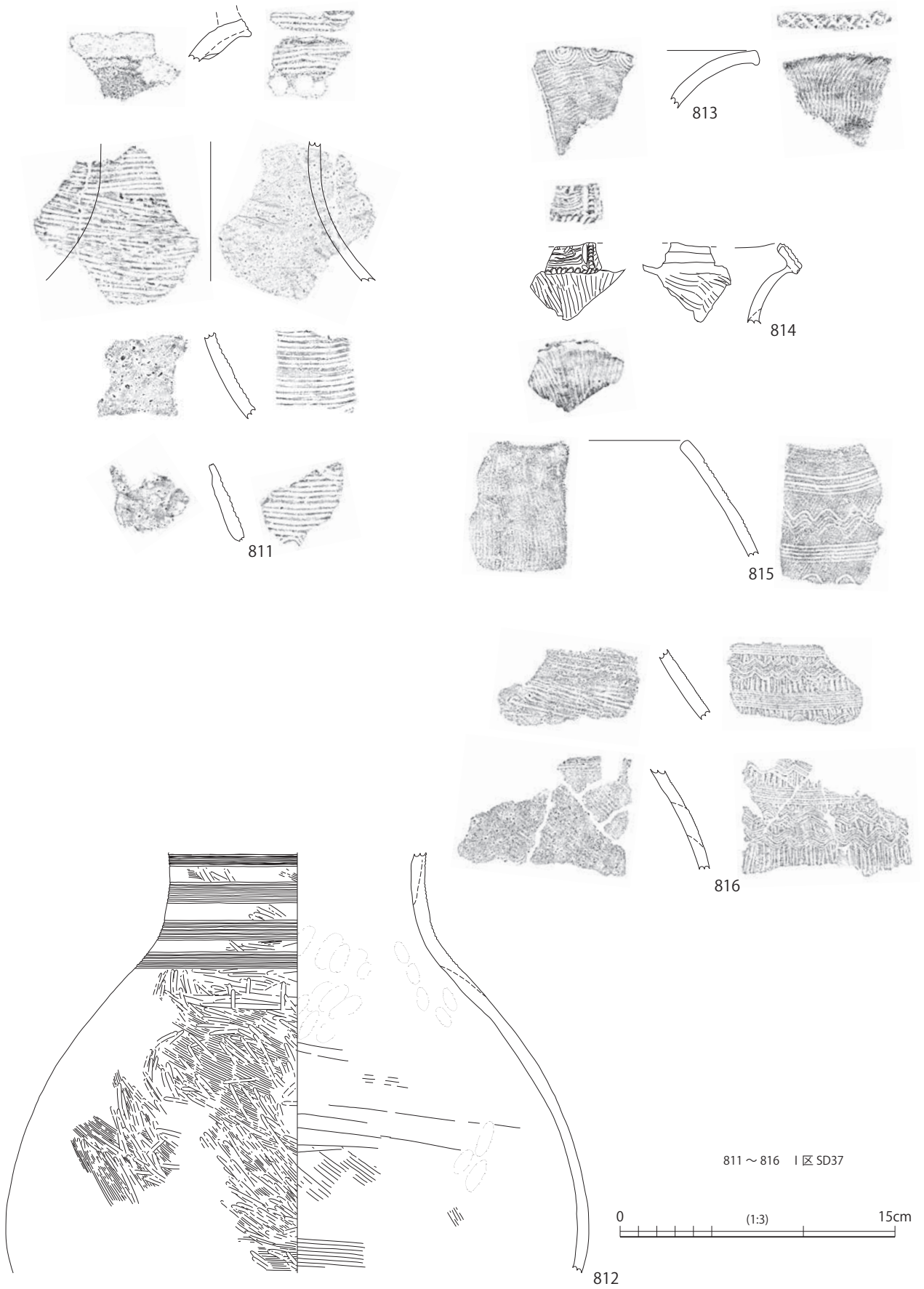
第131図 第2面出土遺物(2) (S=1/3)



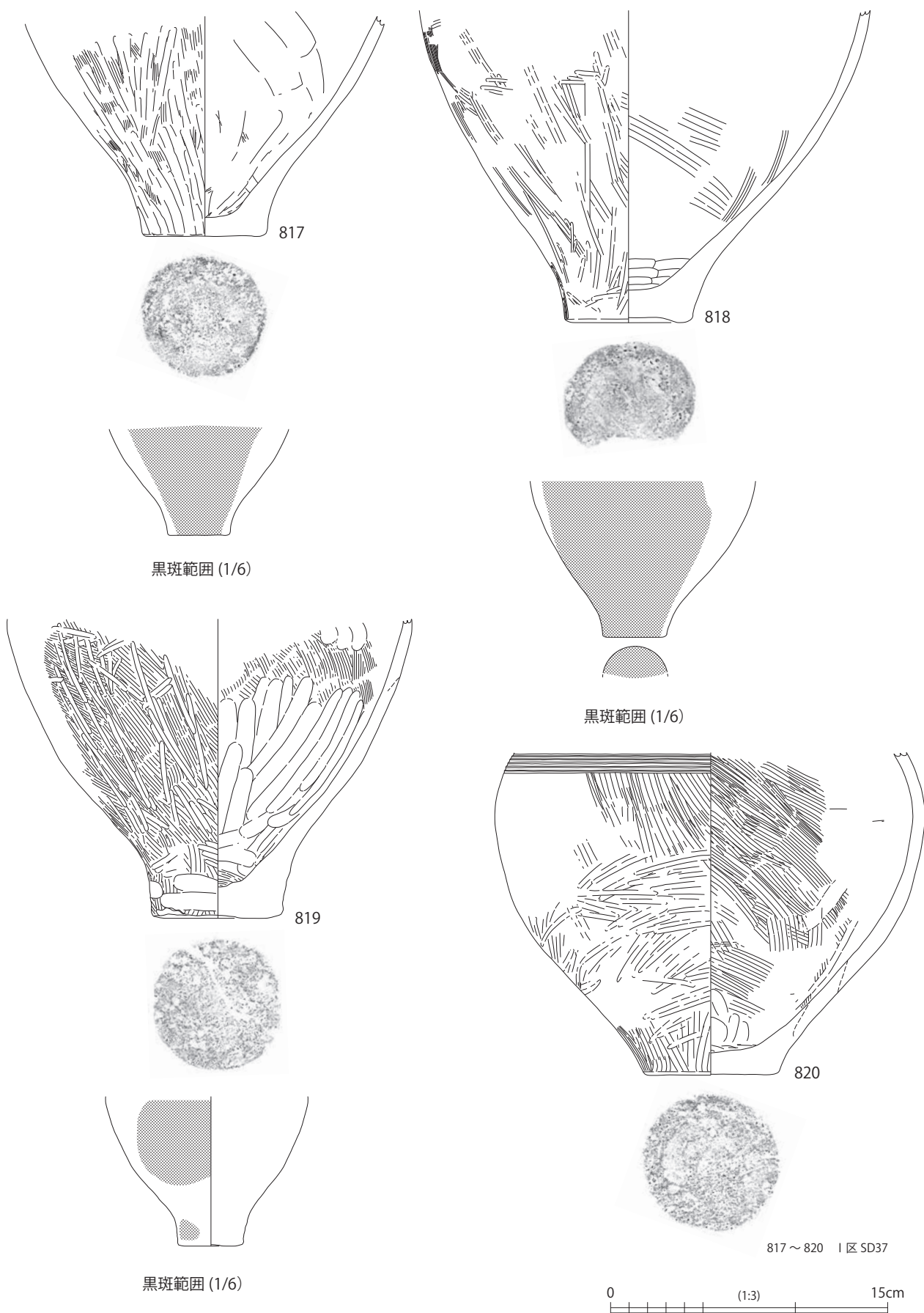
第132図 第2面出土遺物(3) (S=1/3)



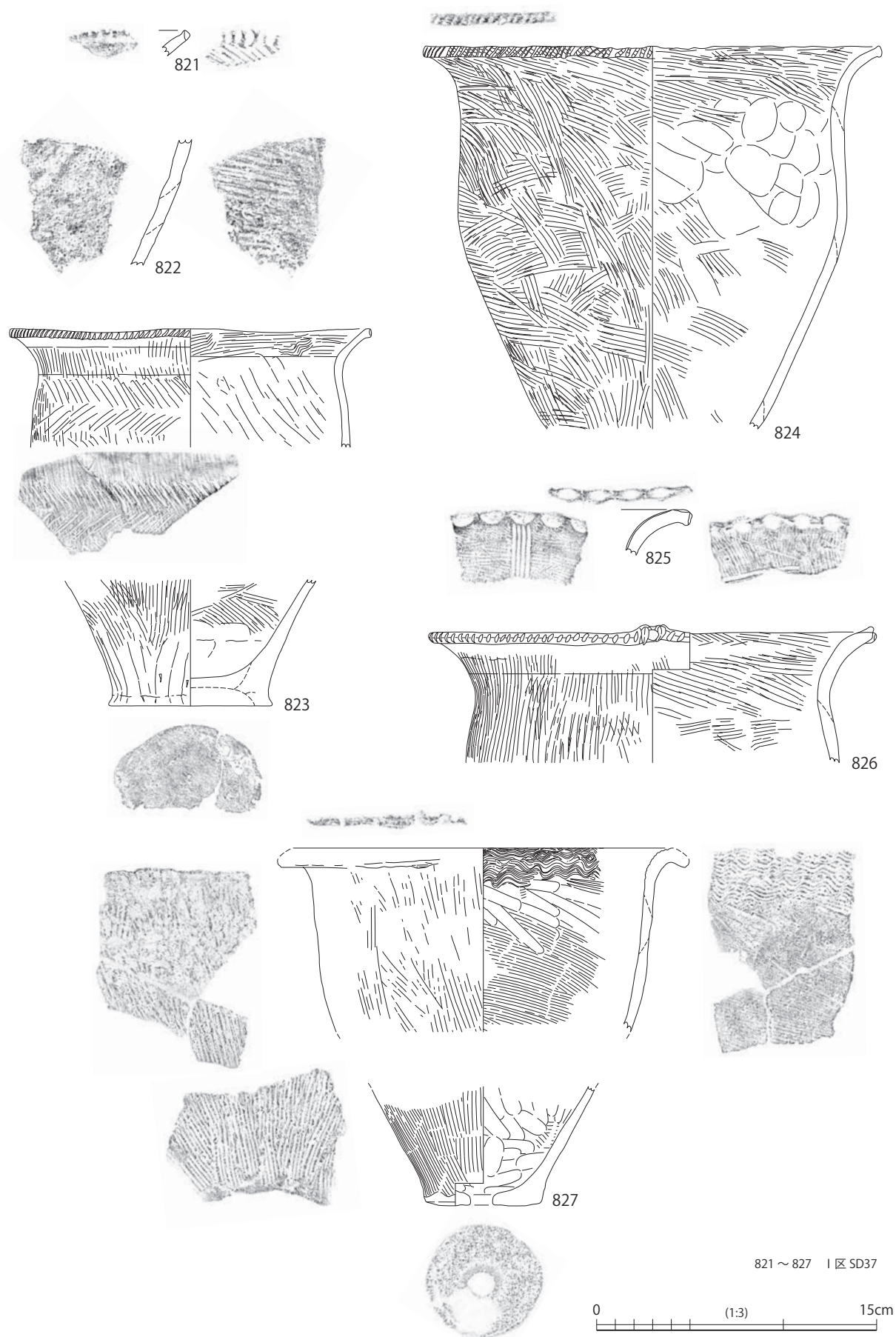
第133図 第2面出土遺物(4) (S=1/3)



第134図 第2面出土遺物(5) (S=1/3)



第135図 第2面出土遺物(6) (S=1/3)



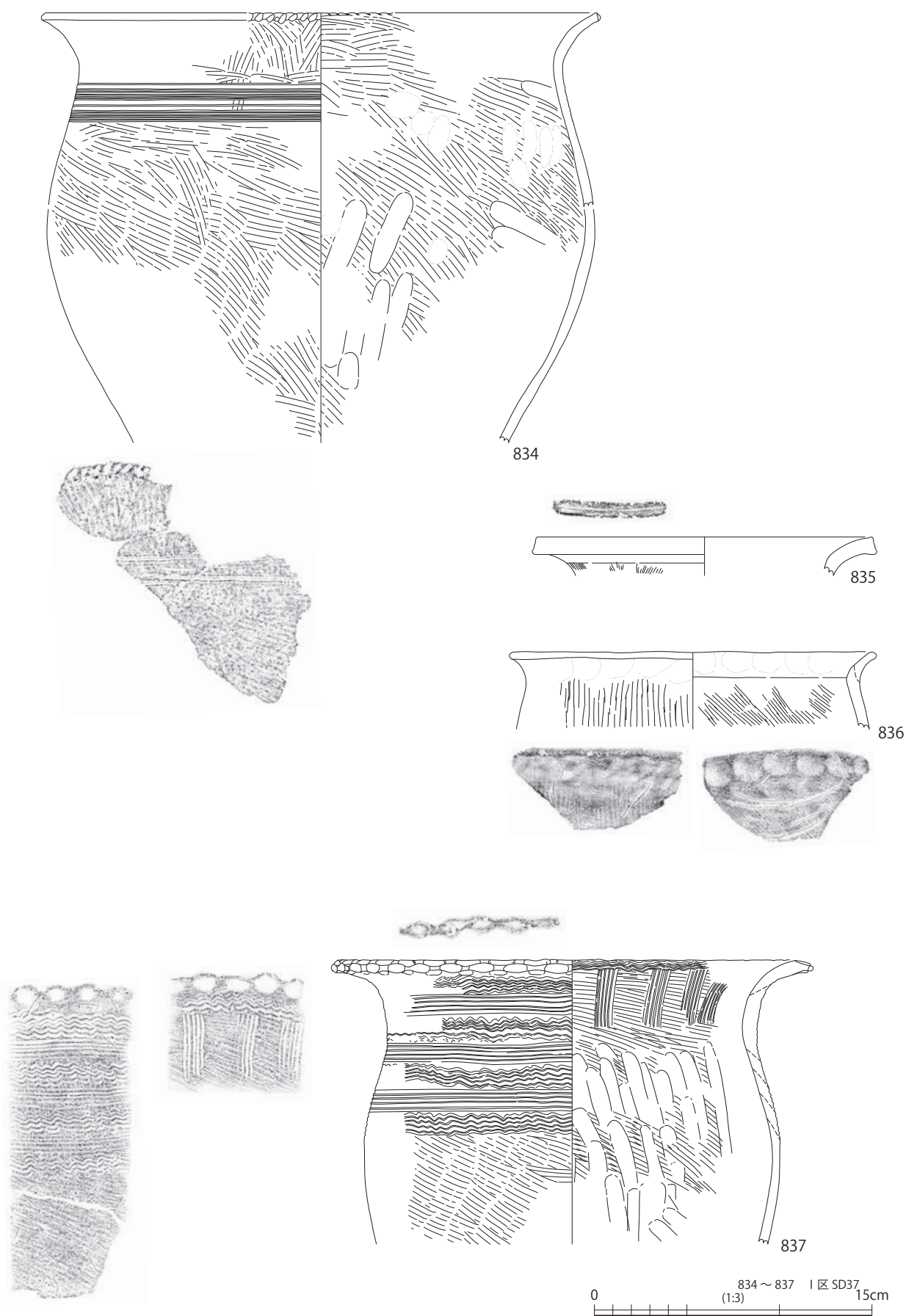
第136図 第2面出土遺物(7) (S=1/3)



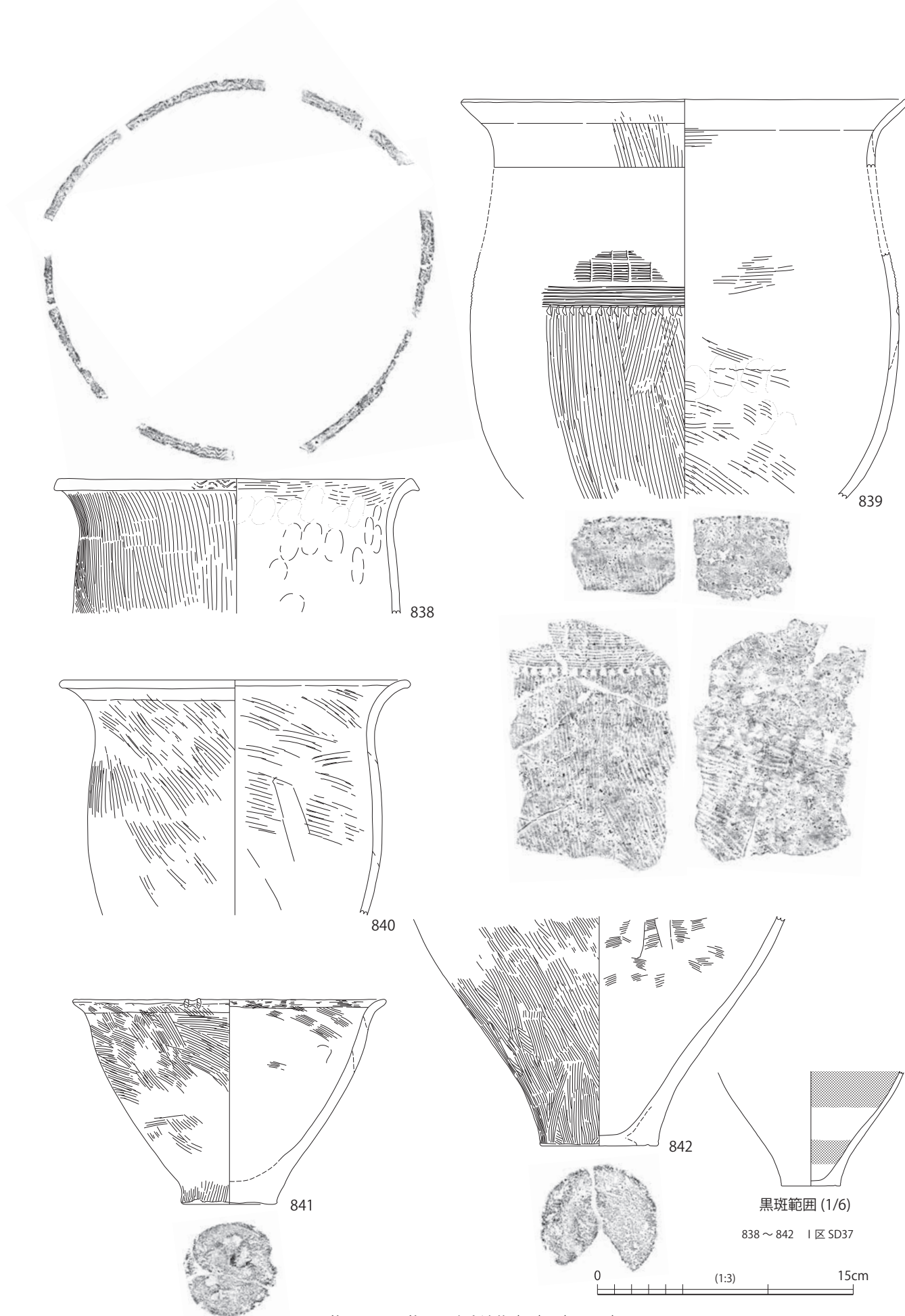
828～833 Ⅰ区SD37

0 (1:3) 15cm

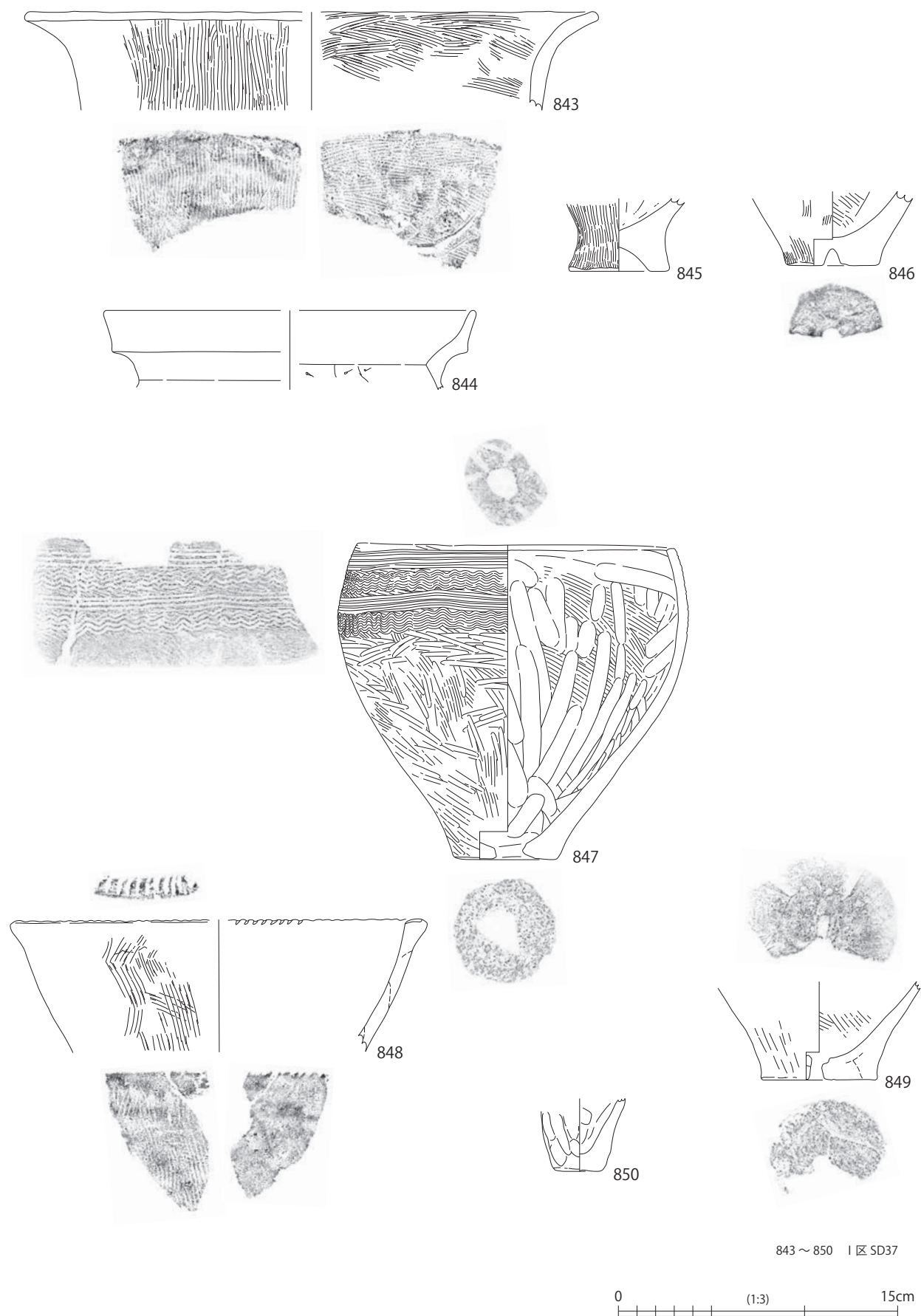
第137図 第2面出土遺物(8) (S=1/3)



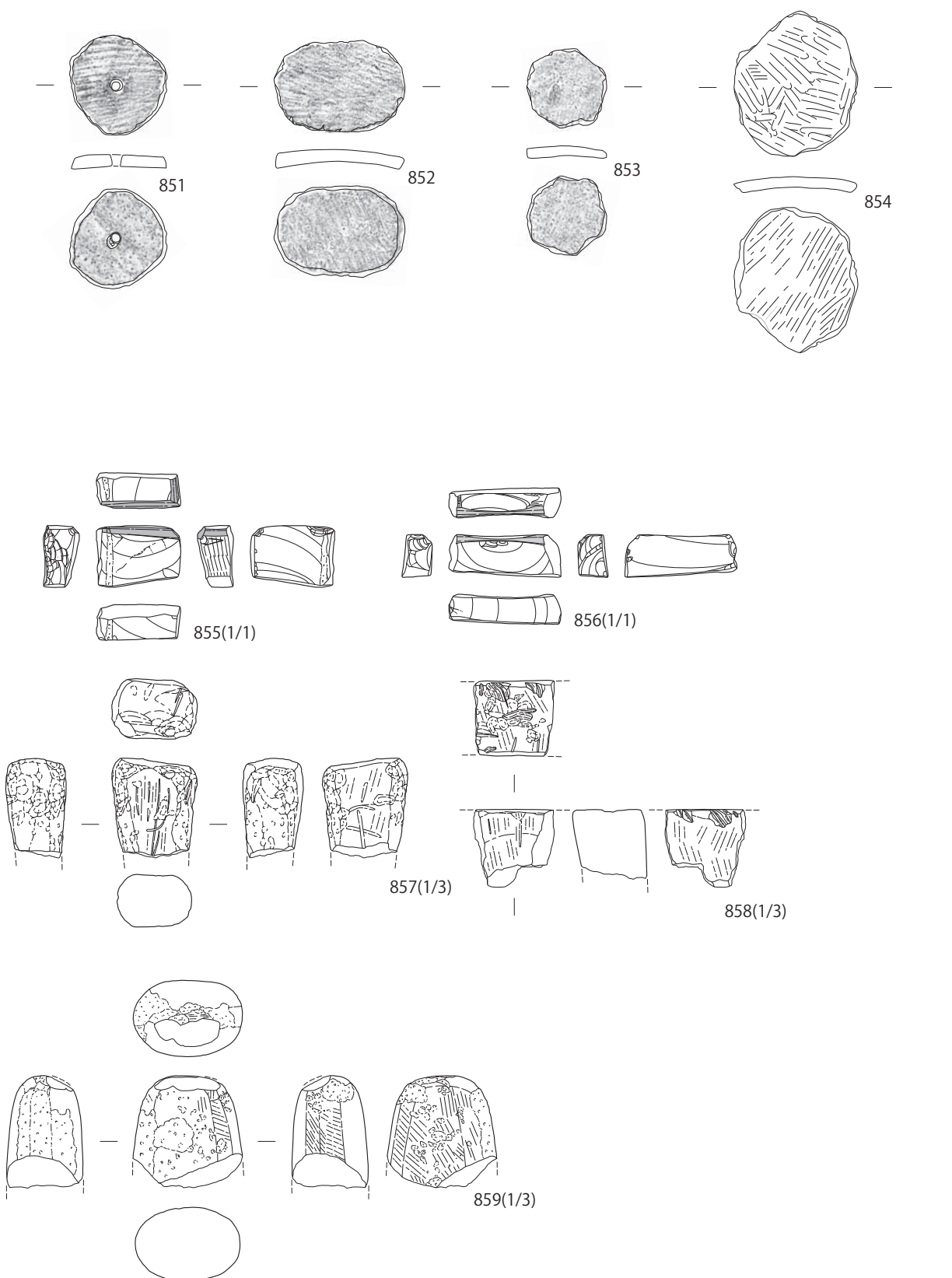
第138図 第2面出土遺物(9) (S=1/3)



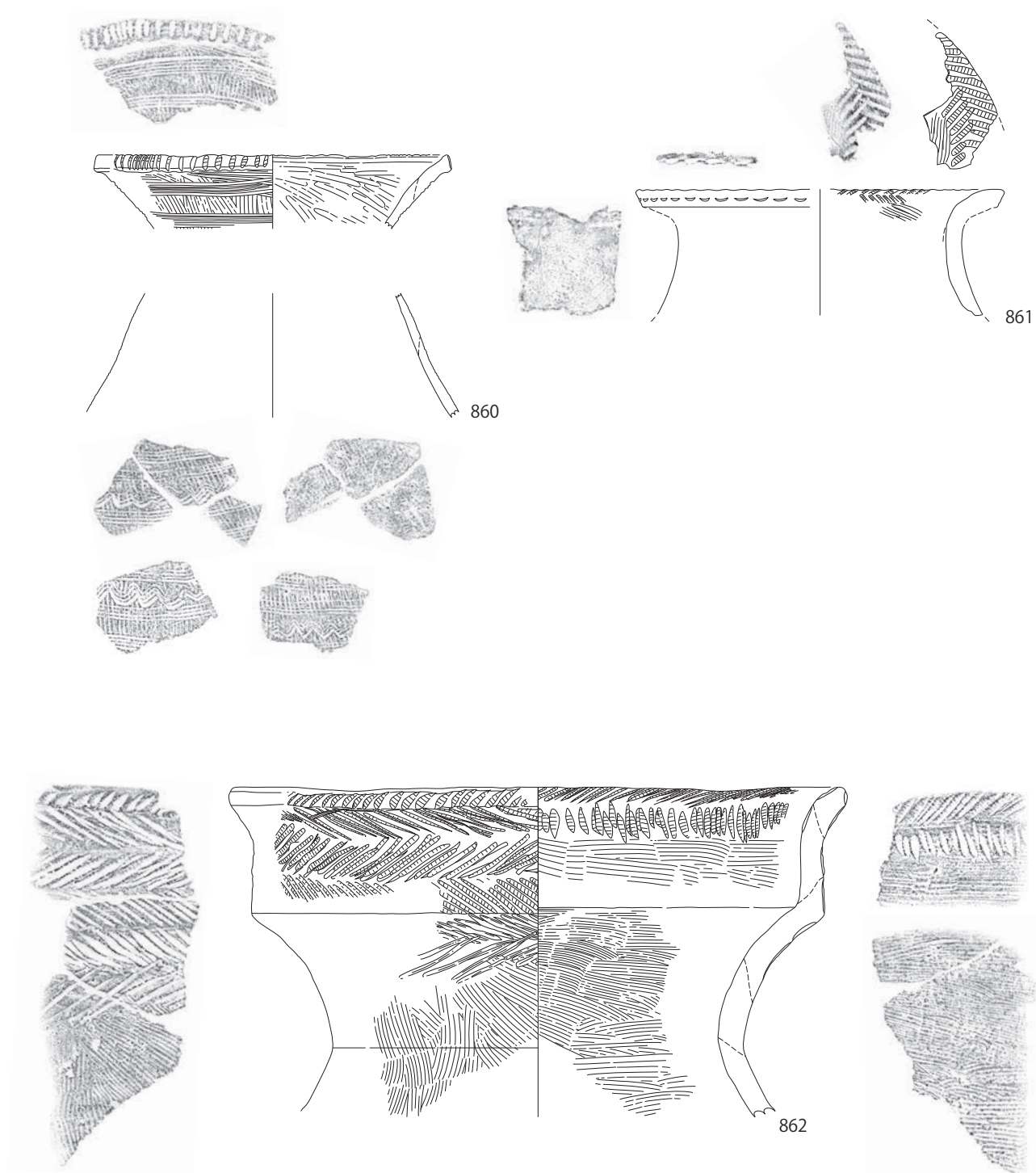
第139図 第2面出土遺物(10) (S=1/3)



第140図 第2面出土遺物(11) (S=1/3)



第141図 第2面出土遺物(12) (S=1/3)



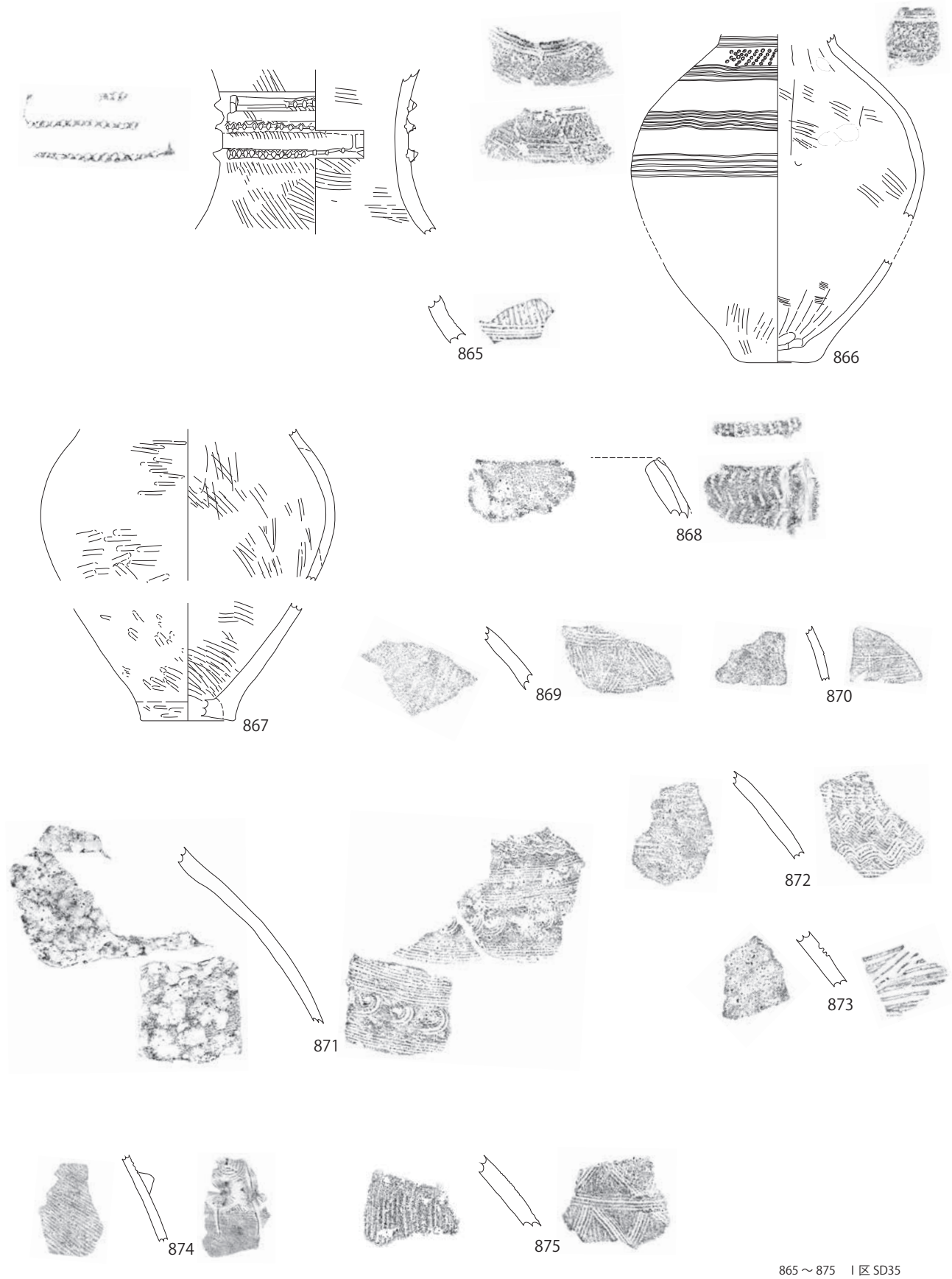
860～862 I 区 SD35

0 (1:3) 15cm

第142図 第2面出土遺物(13) (S=1/3)

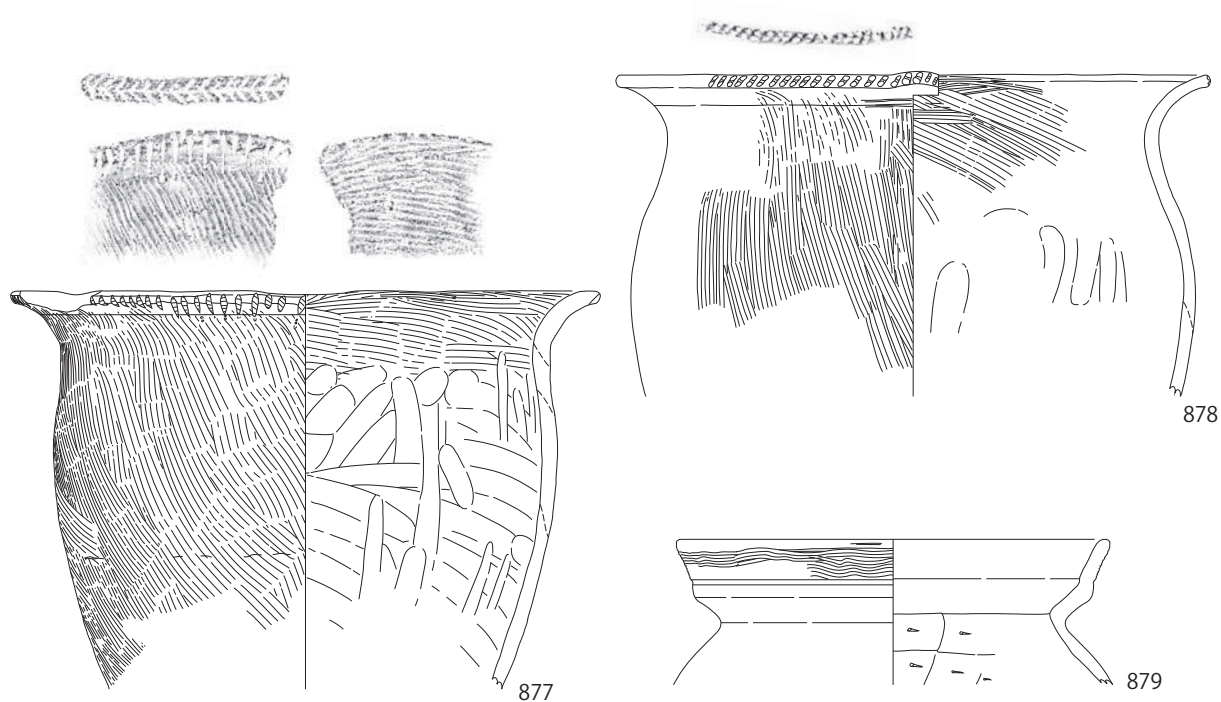
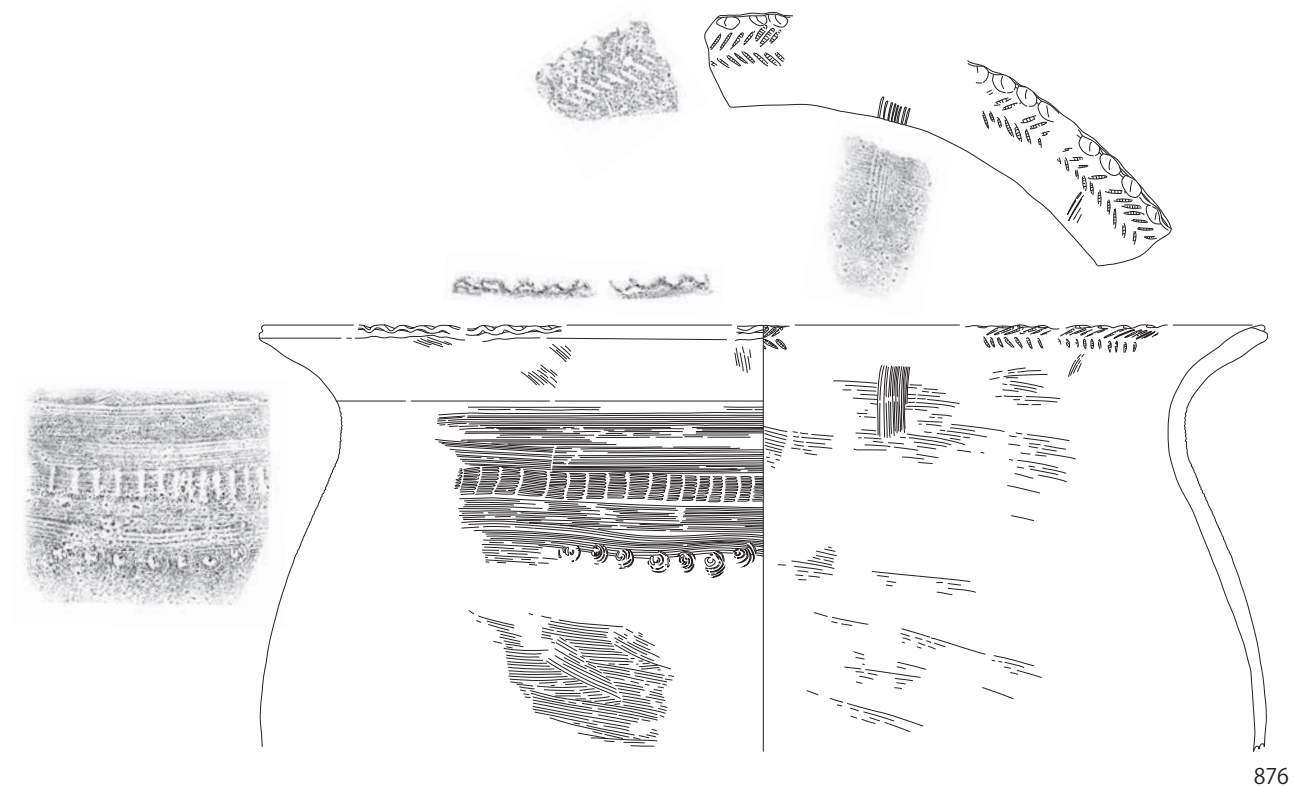


第143図 第2面出土遺物(14) (S=1/3)



0 (1:3) 15cm

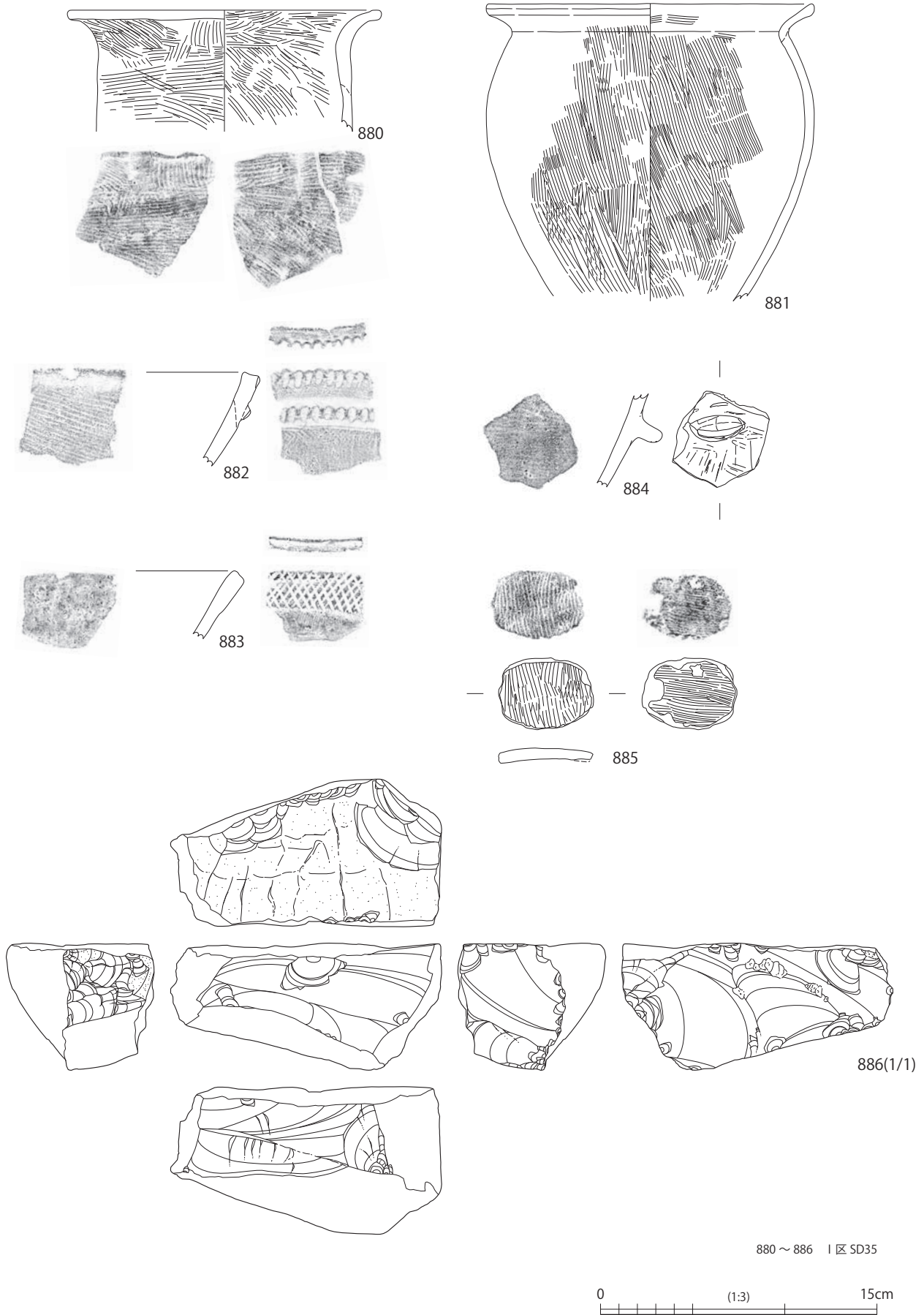
第144図 第2面出土遺物(15) (S=1/3)



876～879 I区SD35

0 (1:3) 15cm

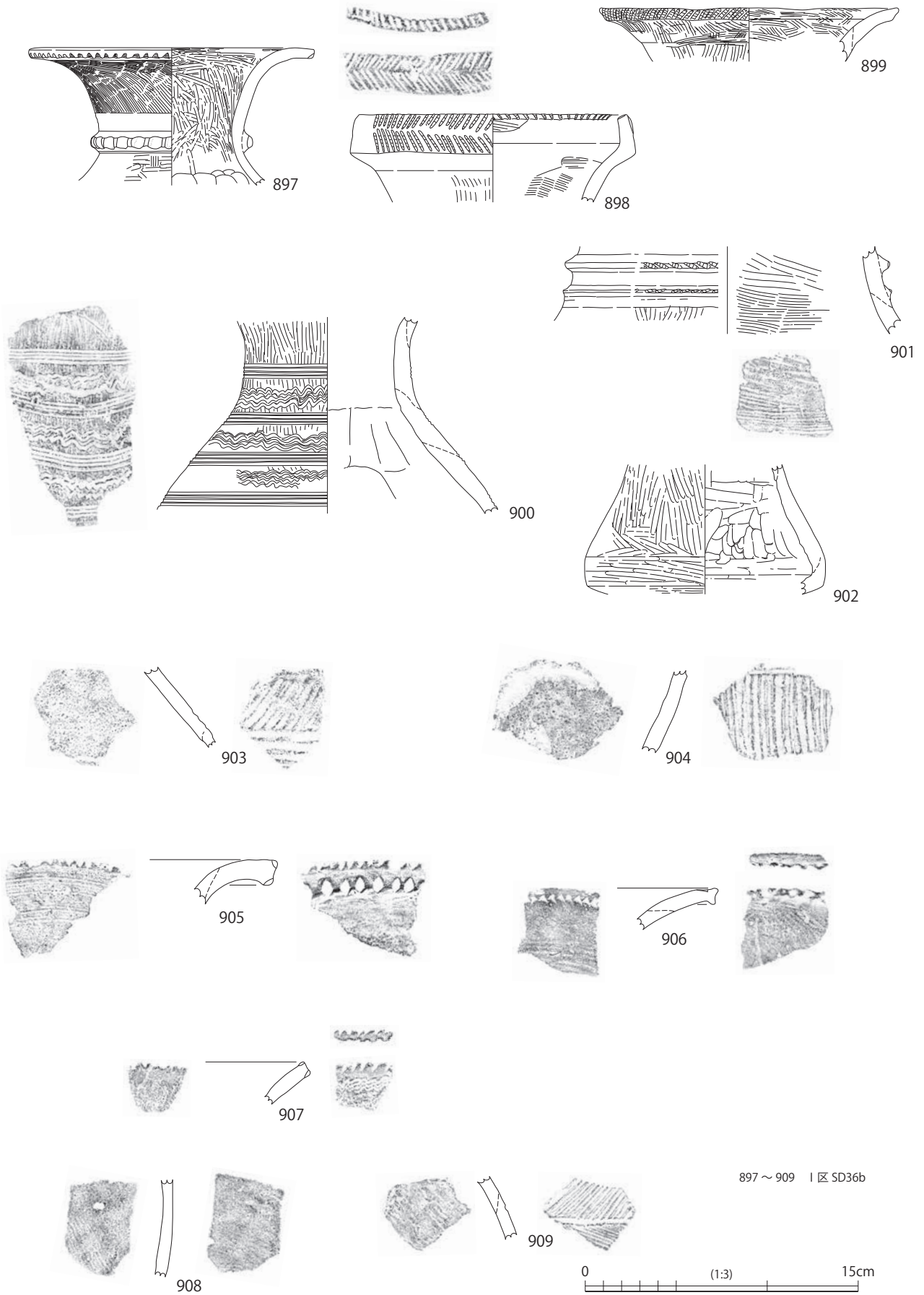
第145図 第2面出土遺物(16) (S=1/3)



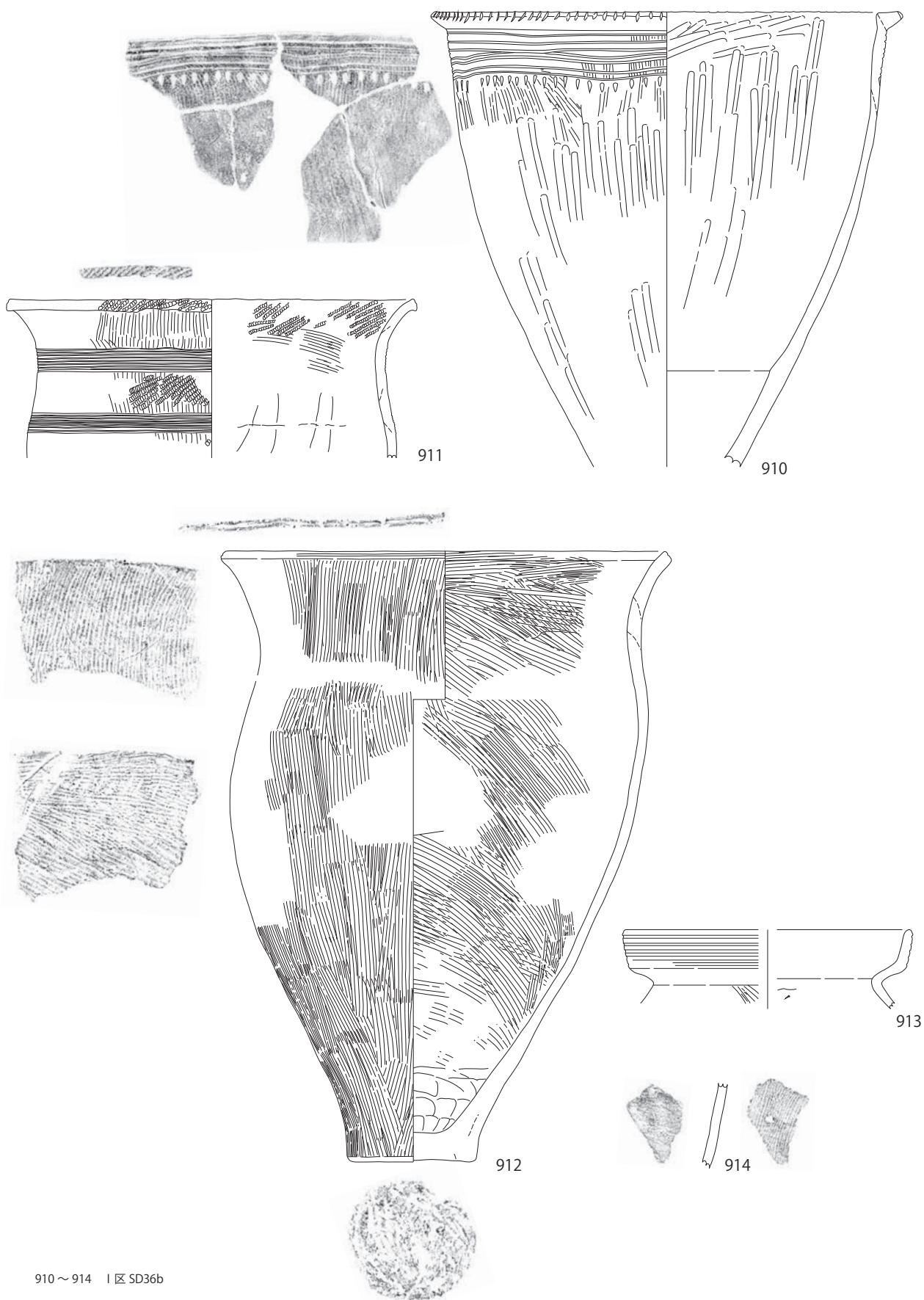
第146図 第2面出土遺物(17) (S=1/1・1/3)



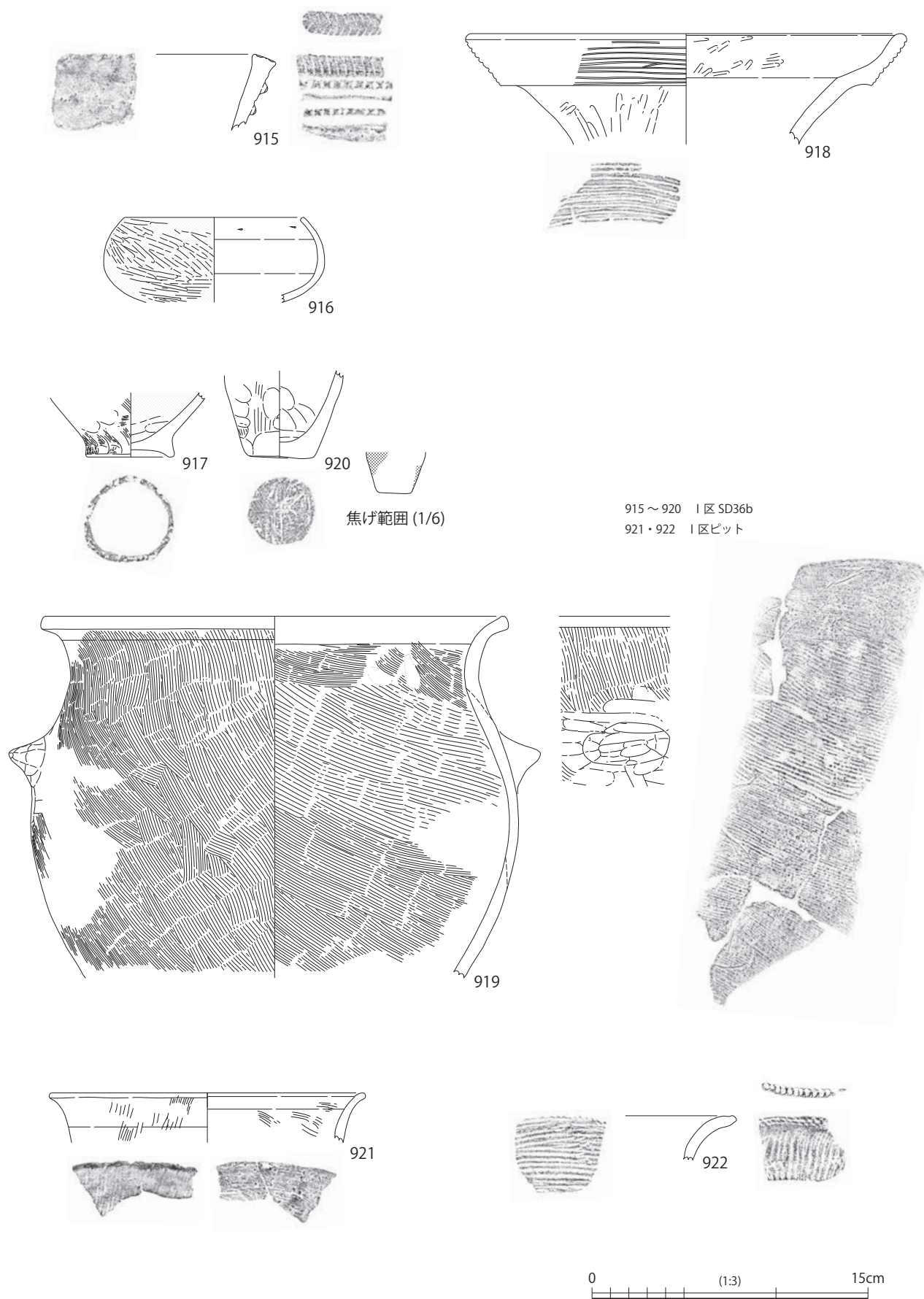
第147図 第2面出土遺物(18) (S=1/1・1/2・1/3)



第148図 第2面出土遺物(19) (S=1/3)



第149図 第2面出土遺物(20) (S=1/3)

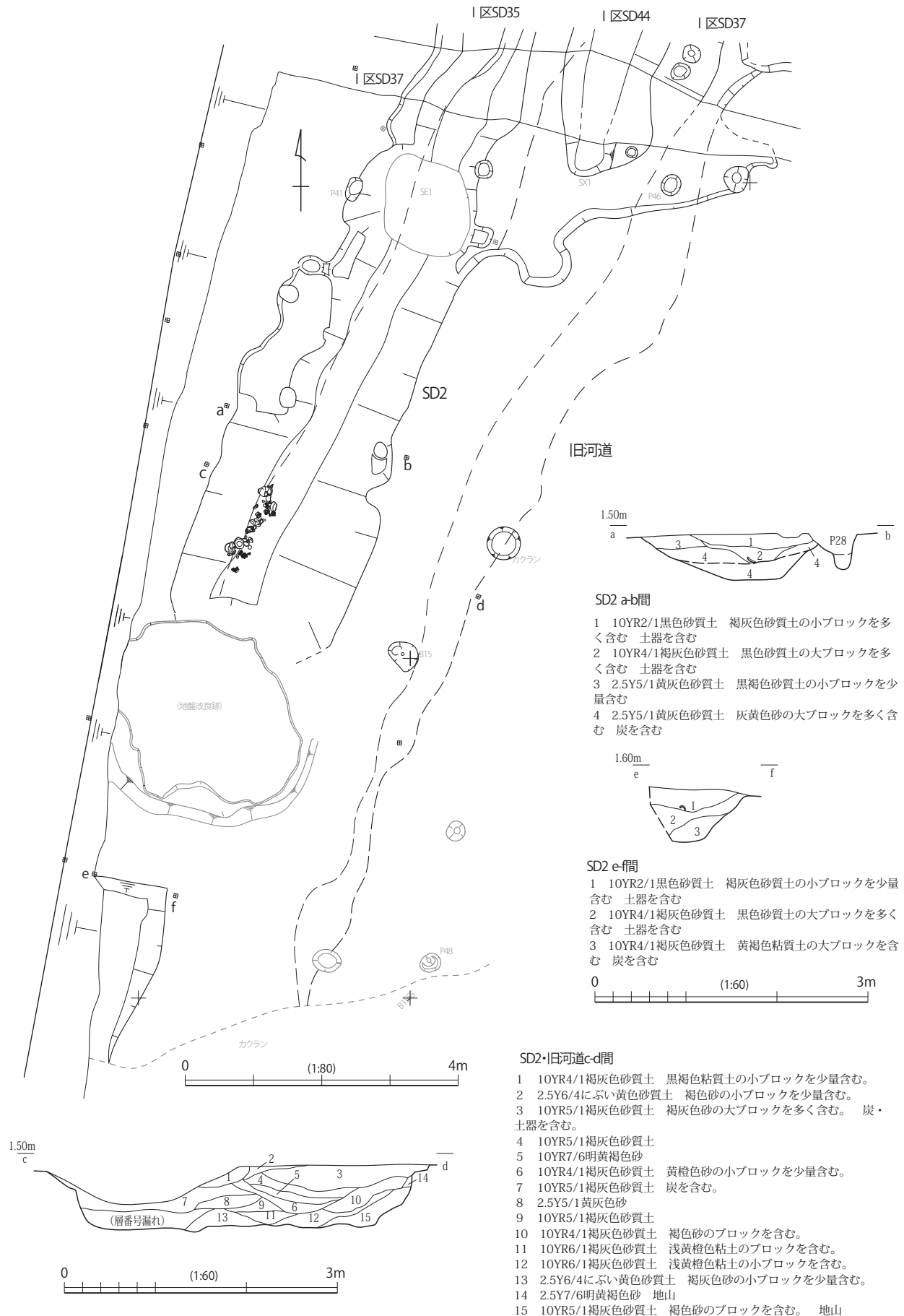


第150図 第2面出土遺物(21) (S=1/3)

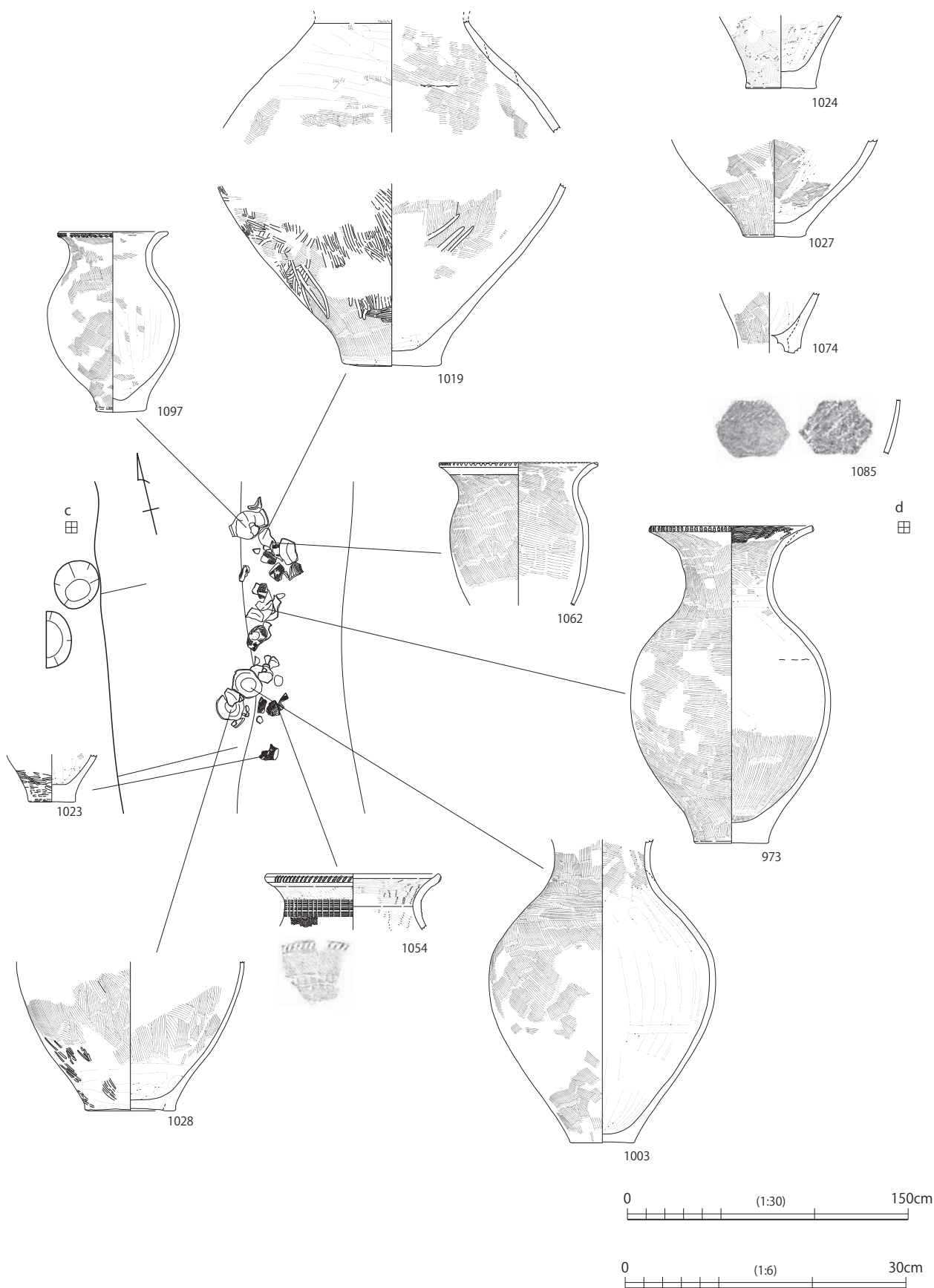
第9節 II区第2面の遺構・遺物

旧河道（第151図、第153図923～157図966） I区旧河道SD37の延長で、II区の中央～南西側を流れる。河幅は4.2～4.8m、深さは断面図c-d上で約70cmを測る。埋土は褐灰色砂質土を基調とする。断面図c-dの分層は一部不整合（1・7・8層）も見られるが、概ね旧河道の右岸側を後述のSD2が切り込む（再掘削）という理解でよいように思われる。遺物は923～966を図示した。923～927は弥生時代前期～中期の条痕文系土器。壺924は受け口状を呈し口縁端部に刻み+口縁部帯に櫛描波状文+指頭押圧による小波状文を施す。口縁端部に赤彩が残る。928～956は中期小松式の壺甕類。壺928は受け口状の口縁端部にハケによるX刻み、外面に矢羽根状刻みを施す。933・934は外面を磨いた後頸部～肩部に櫛描直線文を施し、肩部には櫛描波状文・934は加えて簾状文を充填する精製の壺。943・947は沈線文を施す破片。944は工字状文を施すものか。甕949は口縁端部に沈線を巡らせた後刻み、口縁はゆるやかな波状を呈する。甕951は櫛描直線文+波状文+扇形文を施す。片帆に櫛描直線文と簾状文を交互に施す。957～959は把手付甕・鉢で、破片のため把手の単位は不明。957は口縁部直下に小型の把手を貼り付けるもの。転用甕で、底部蒸気孔は焼成後穿孔である。958・959は比較的大型の把手を貼り付ける。960は焼成後穿孔の転用甕。

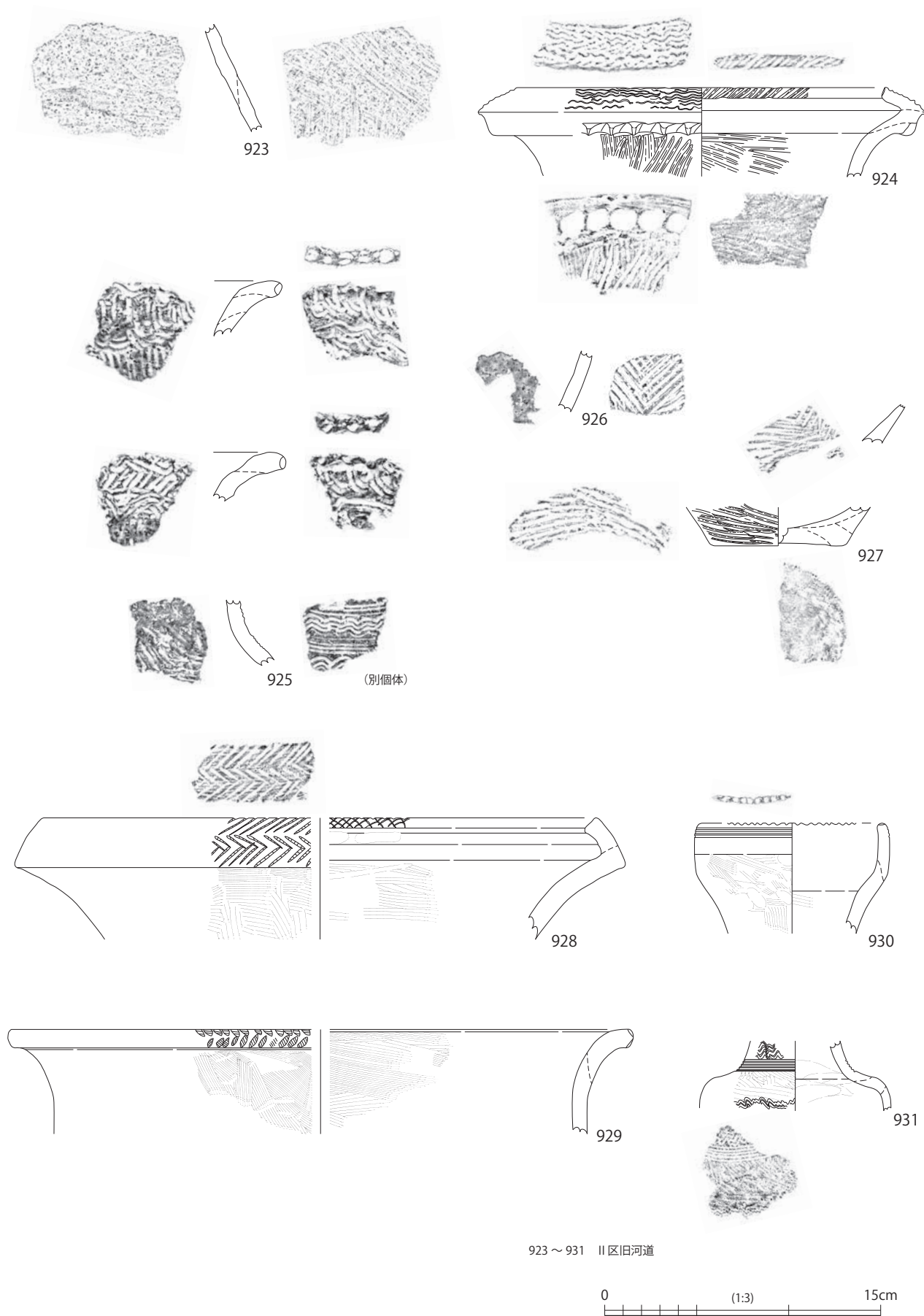
SD2（第151・152図、第158図967～175図1102） I区環濠SD35の延長で、前記旧河道の右岸側を再掘削して作られたものである。溝幅は約1.4～1.9m、深さは断面図a-b上で約30cmを測る。埋土は、上層は黒色砂質土・下層は上層土混じりの褐灰色砂質土を基調とする。同系の砂質土・砂で構成されることから洪水等で短期間に埋まったことが想定できる。遺物は967～1102を図示した。また、断面図a-b第2層で土器の集中出土が見られ、第152図に図示した。図化したものは973・975・1003・1019・1023・1024・1027・1028・1054・1062・1065・1074・1085である。土器はSD2右岸側に集中することから、集落は環濠の西側に展開していたものと考えられる。壺・甕ともに口縁端部に刻みを施す無文のものが主体で、加飾されたものは少ない。壺973はほぼ完形、口縁端部に刻み、口縁内面にハケによる波状文を円周状に施す。1023・28は壺底部付近にミガキを施す。甕1054は口縁端部に刻み、頸部に櫛描簾状文+波状文を施す。甕1065は口縁端部上端を櫛歯状工具で刻み、波状口縁にする。全体として小松式の中で捉えることができる。967～972は条痕文系土器。967・968は壺口縁部で表裏に条痕、口縁端部に刻みを施す。壺976・977は同一個体で、口縁端部に指頭による刻み、口縁内面にはハケによる羽状文を巡らす。頸部には突帯の剥離が見られ、突帯上方と口縁部直下には櫛描波状文が見られる。下方にはハケによる羽状文+櫛描直線文を施す。978は口縁内面にハケによる綾杉文を巡らし、瘤状突起を付けるもの。979は平坦化された口縁端部に斜格子刻みを施す。985は口縁内面に綾杉文を巡らし、2個一対の突帯を貼り付ける。989は壺の肩部に櫛描直線文+三角列点文+簾状文を施す。991・992は櫛描直線文+扇形文を施す。994は櫛描直線文+三角列点文の下に瘤状の突起を付すもの。1005～07は小型壺。1009は細頸壺で、胴部最大径付近で屈曲してすぼまる器形を持ち東海系の影響がうかがえるもの。口縁部～屈曲部付近まで磨き櫛描直線文を施す。1010～12・14は受け口状の口縁を持つ壺。口縁端部に刻み・口縁部には羽状文を巡らし、1010は頸部に擬流水文を充填する。1021は無頸壺で口縁端部に刻み、口縁直下から櫛描直線文+簾状文を施す。1040は沈線文系土器。甕1052はハケによる羽状文を巡らし、櫛描直線文+簾状文+波状文を施す。1056～59は口縁端部に指頭による押圧を施すもので、1057・59は小波状口縁を呈する。1064は面取りした口縁端部に一条の凹線を巡らす凹線文系の土器か。1076は台付甕に復元できるもので、口縁端部に刻み・内面に櫛描波状文を巡らす。1086は水平口縁高坏で内外面をミガキ調整する。1090～94・97は緑色凝灰岩の玉素材。1095・96は石鋸で紅簾片岩製か。



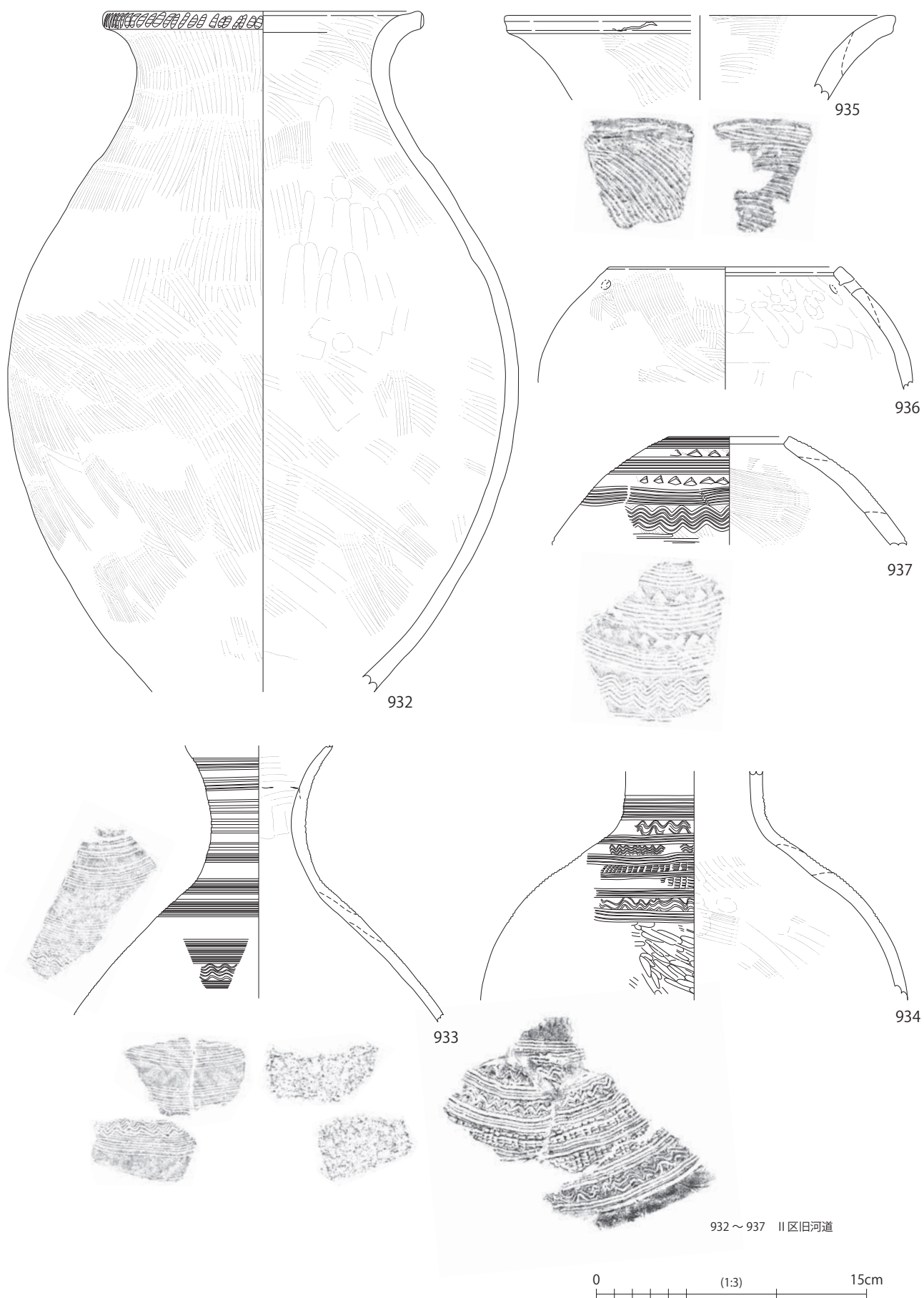
第151図 Ⅱ区第2面 SD2・旧河道 (S=1/60・1/80)



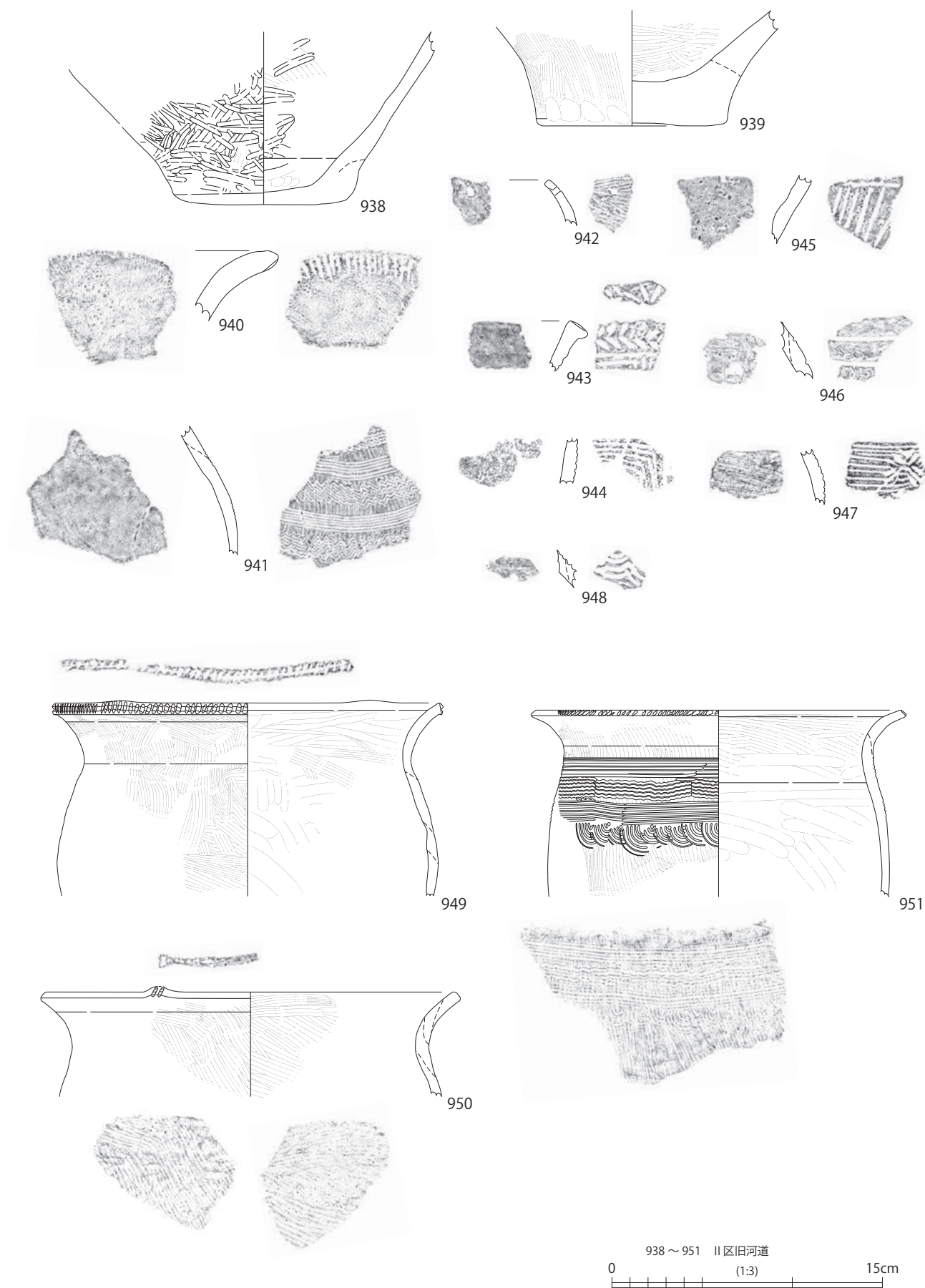
第152図 II区第2面 SD2遺物出土状況 (S=1/6・1/30)



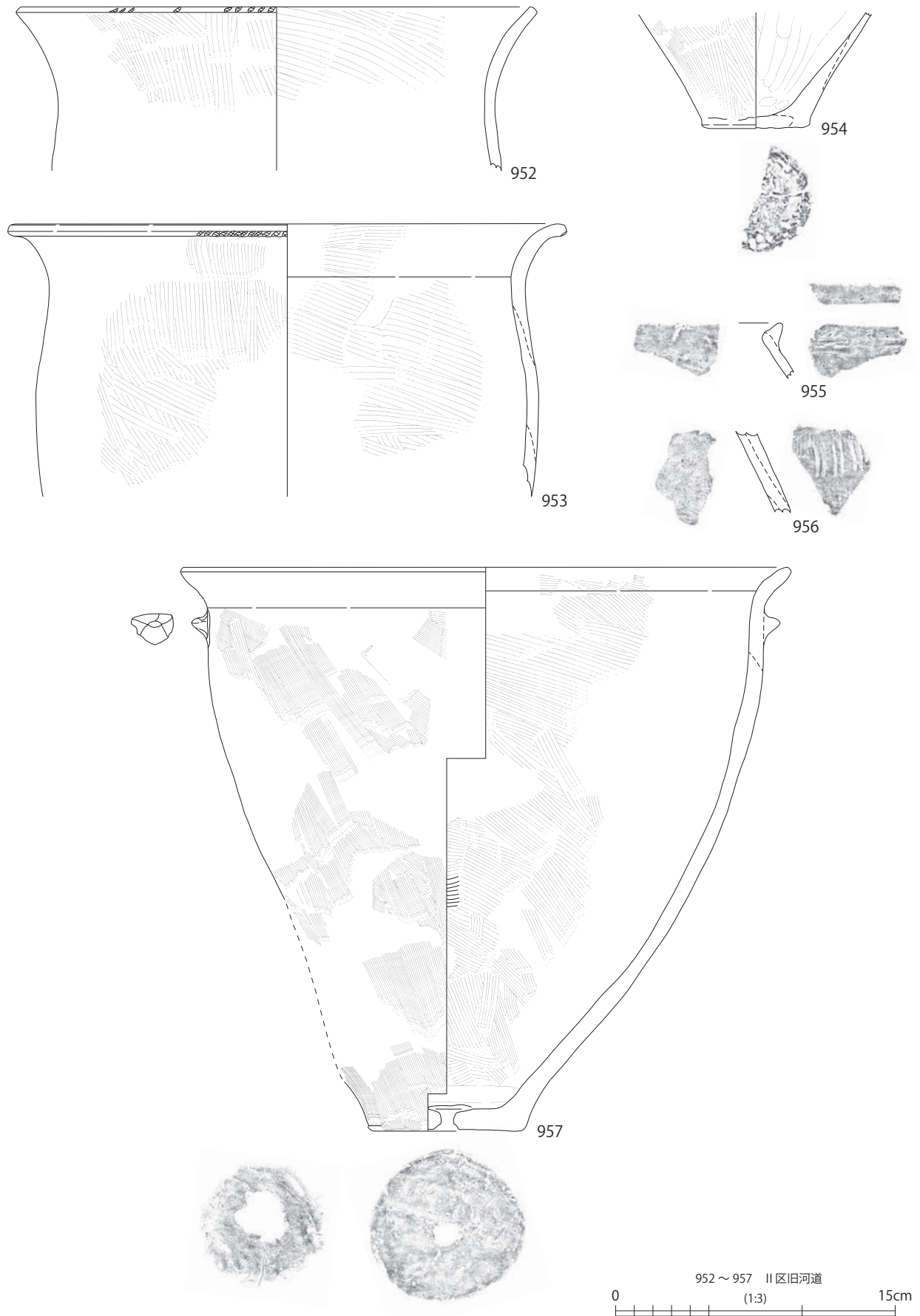
第153図 第2面出土遺物(22) (S=1/3)



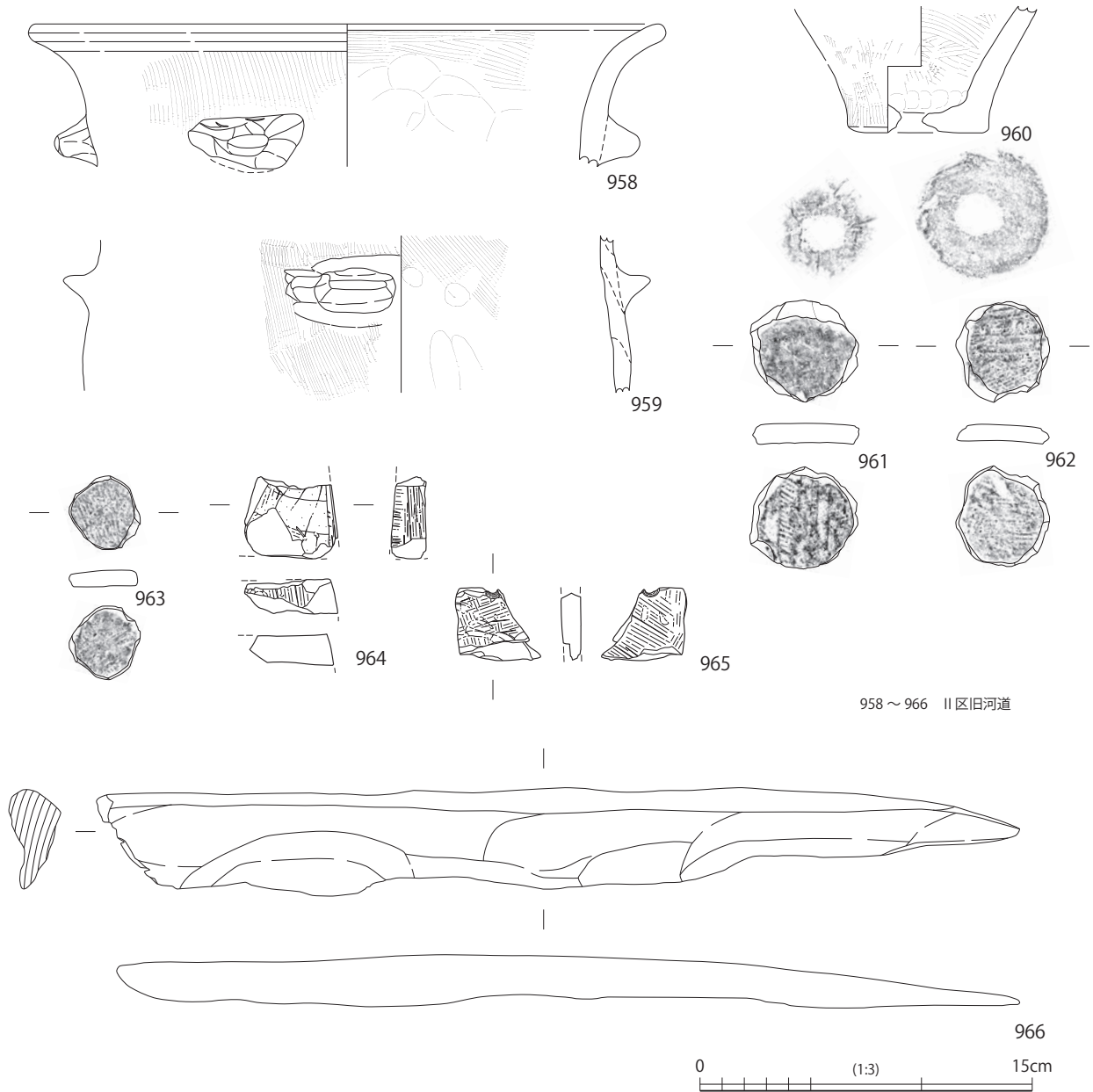
第154図 第2面出土遺物(23) (S=1/3)



第155図 第2面出土遺物(24) (S=1/3)



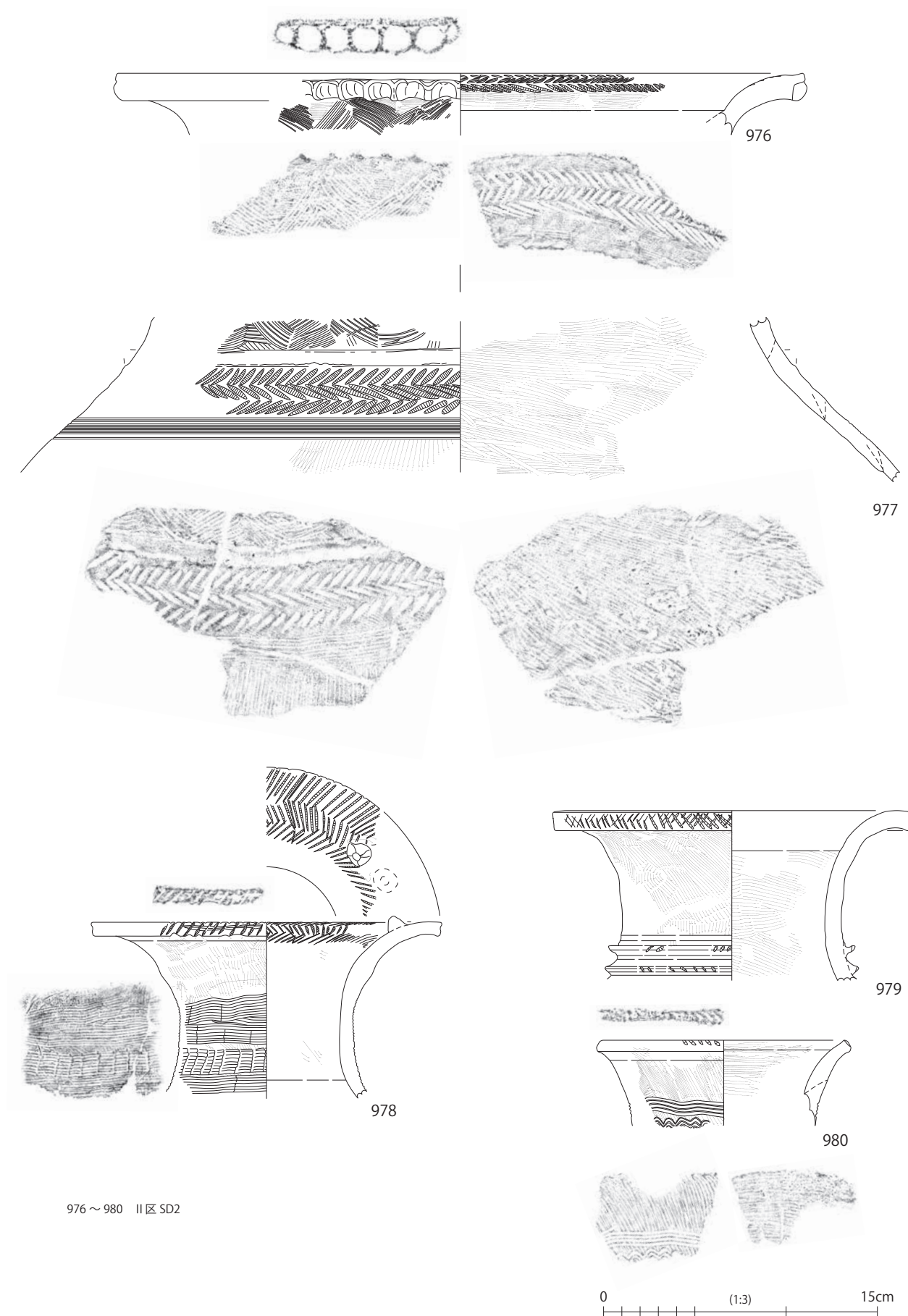
第156図 第2面出土遺物(25) (S=1/3)



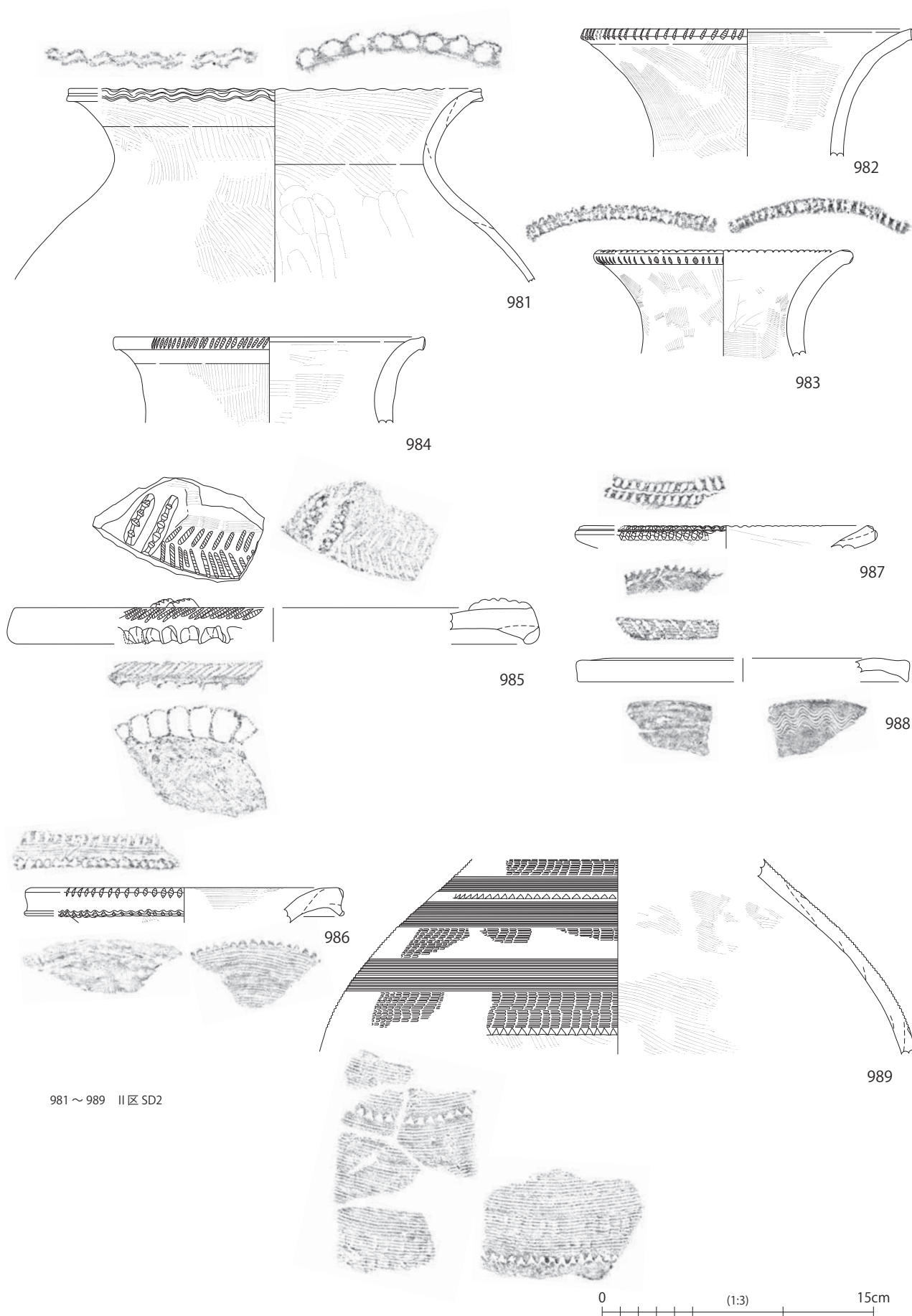
第157図 第2面出土遺物(26) (S=1/3)



第158図 第2面出土遺物(27) (S=1/3)

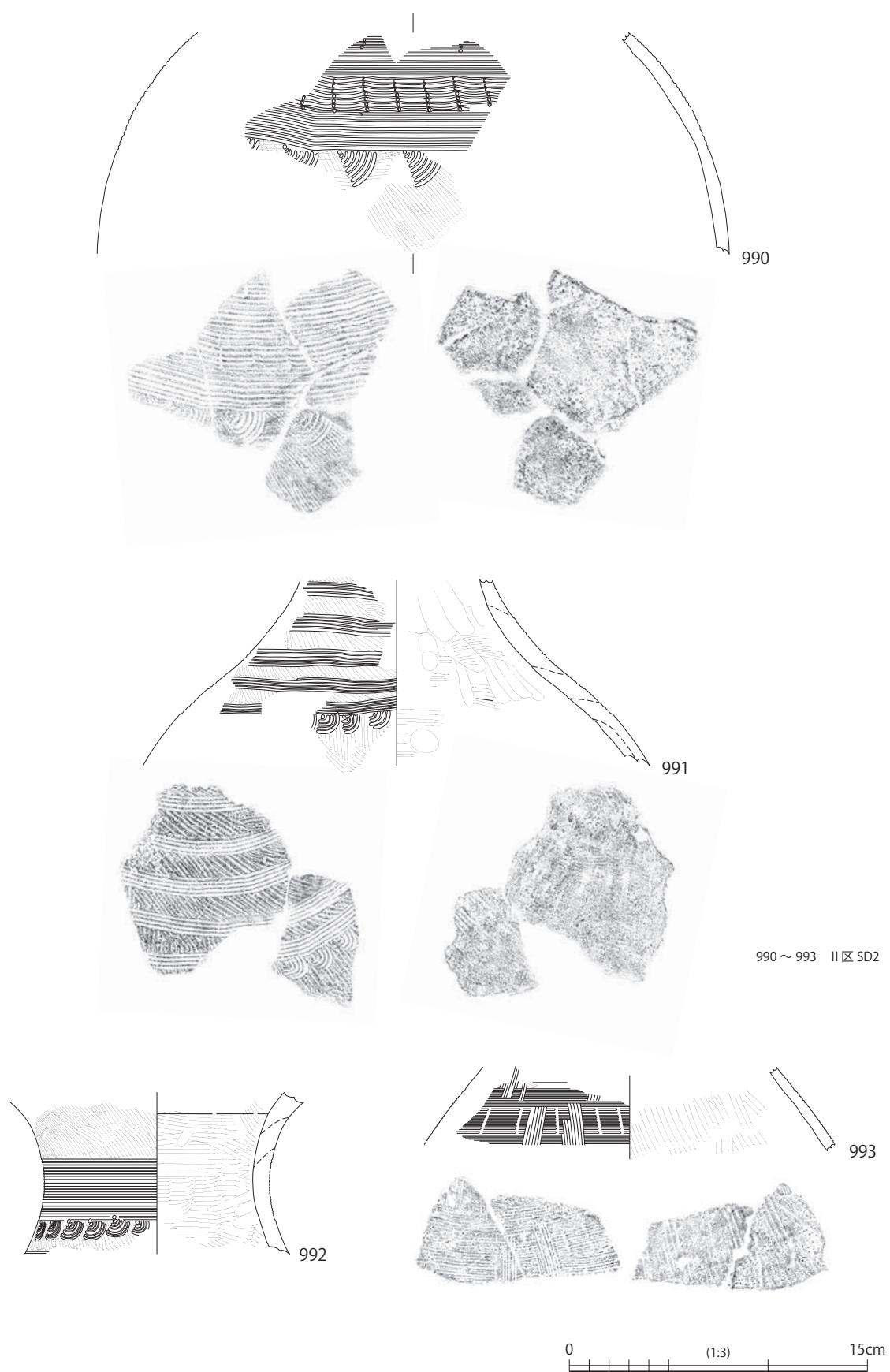


第159図 第2面出土遺物(28) (S=1/3)

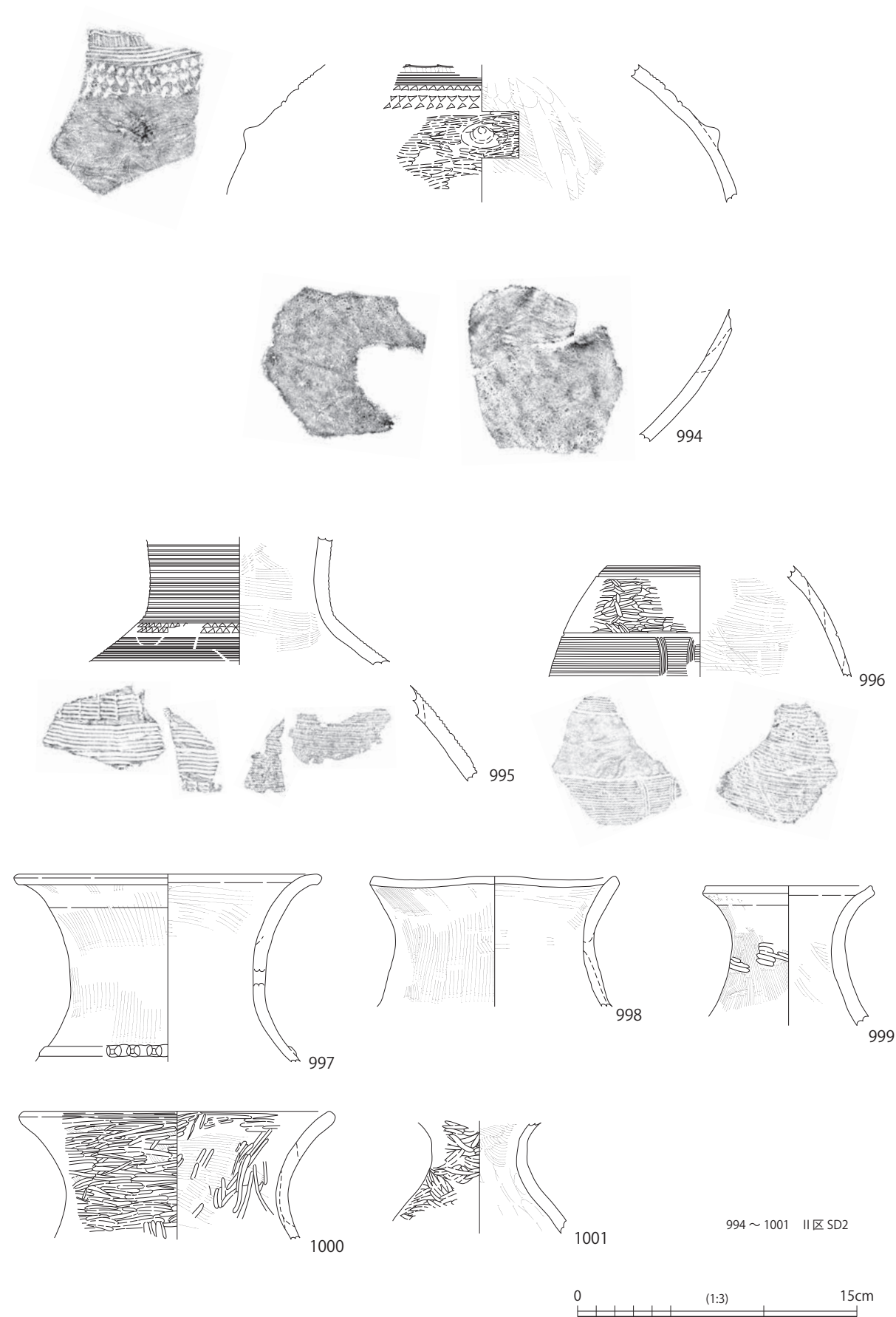


981～989 II区SD2

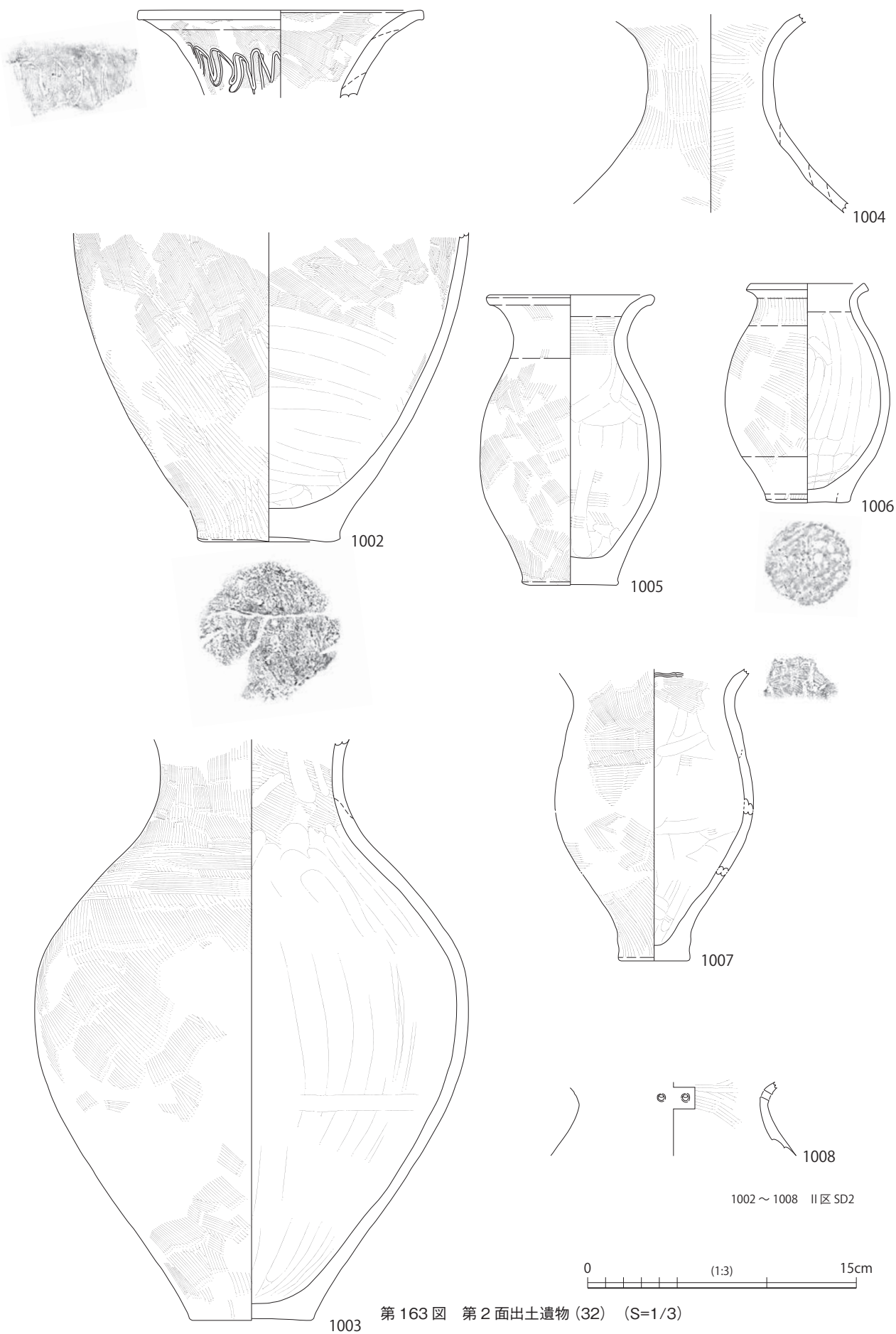
第160図 第2面出土遺物(29) (S=1/3)

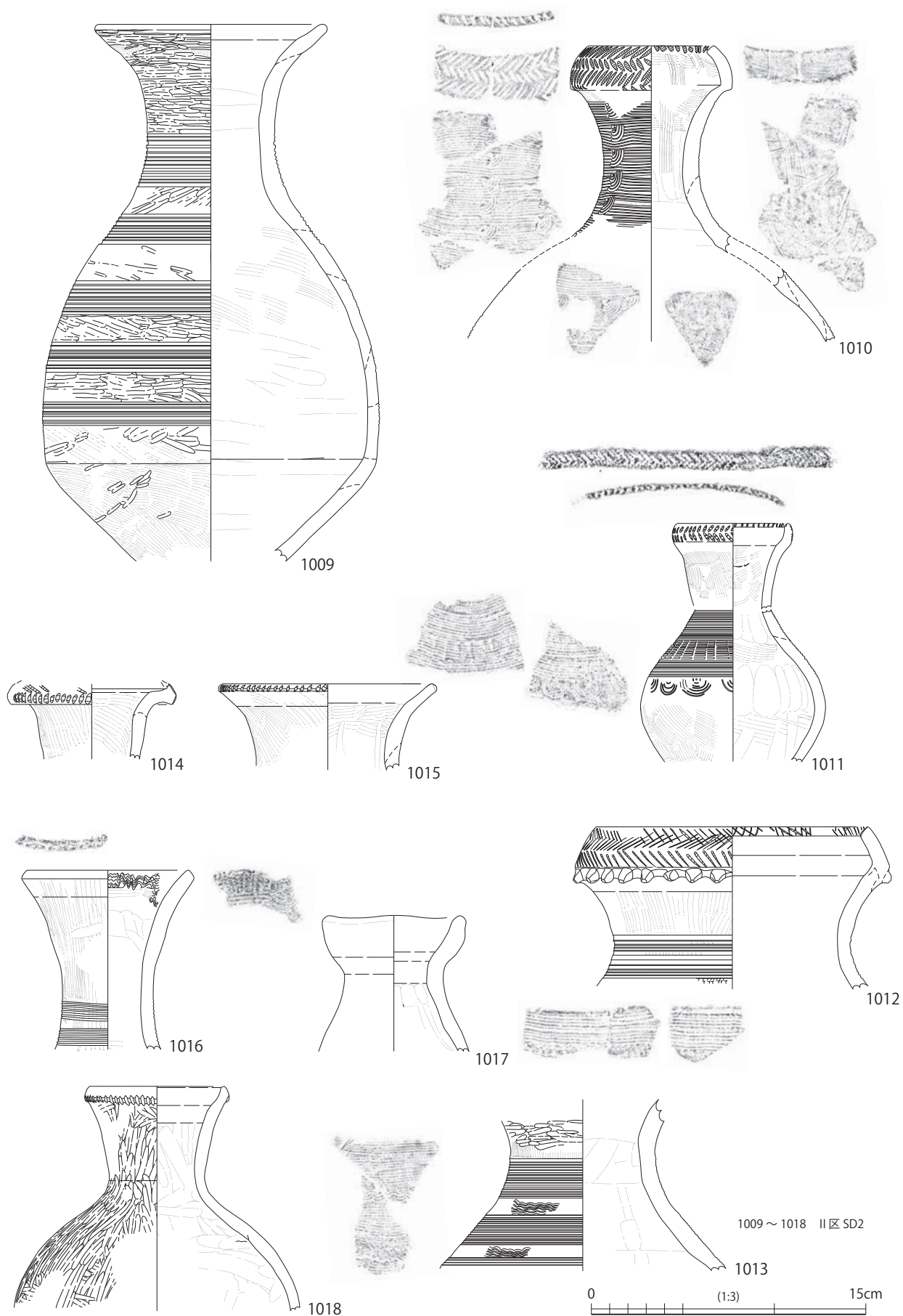


第161図 第2面出土遺物(30) (S=1/3)

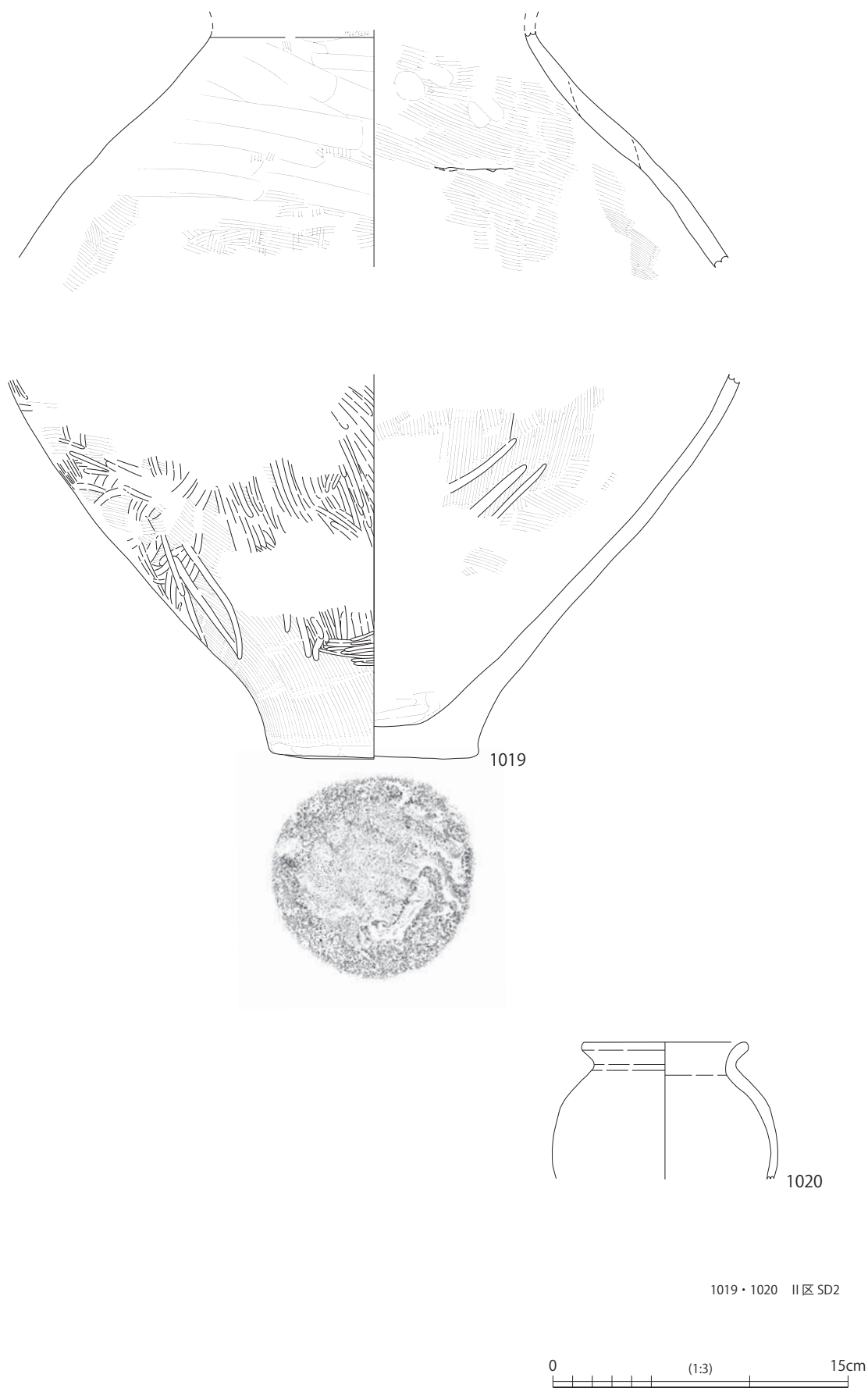


第162図 第2面出土遺物(31) (S=1/3)



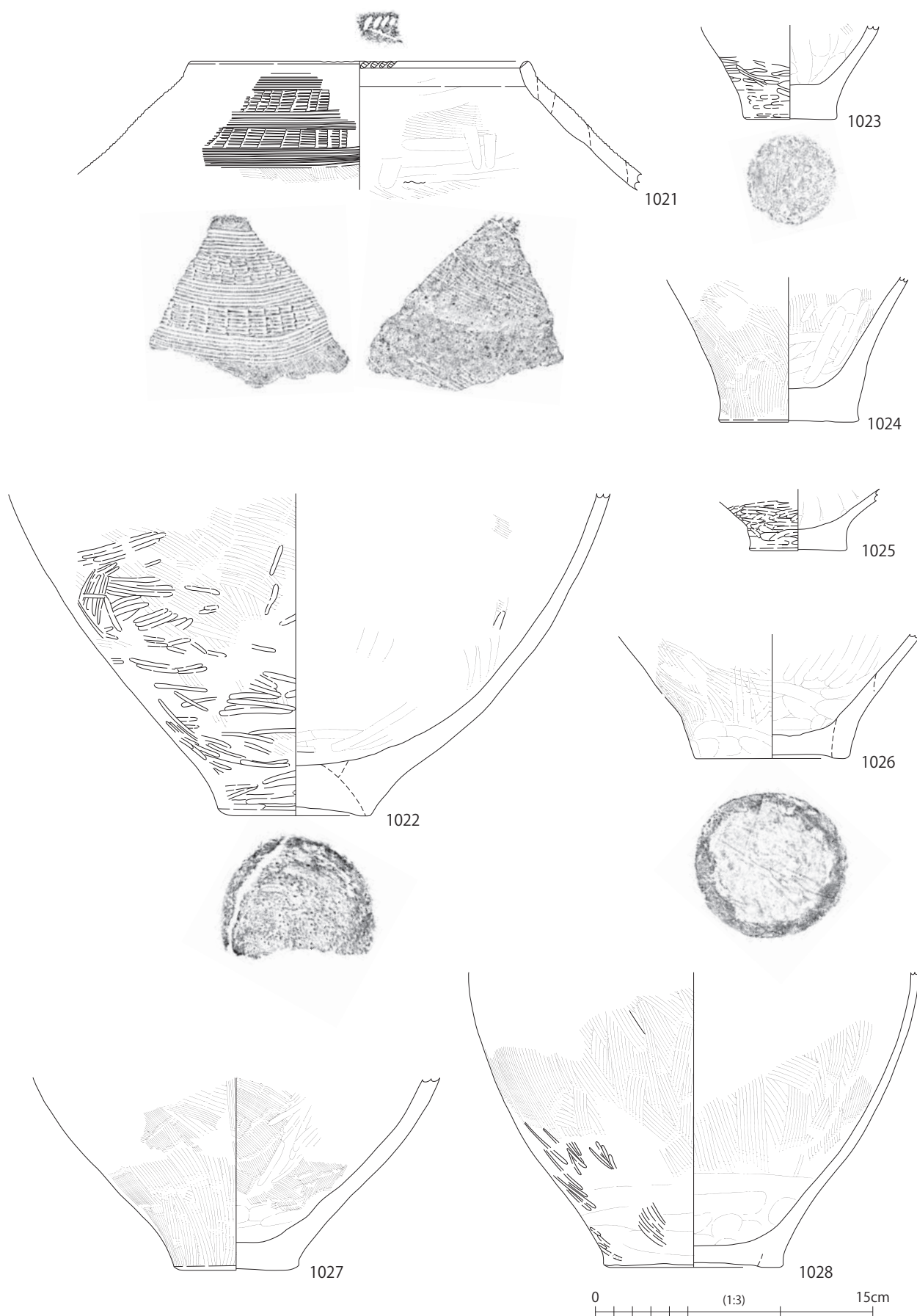


第164図 第2面出土遺物(33) (S=1/3)



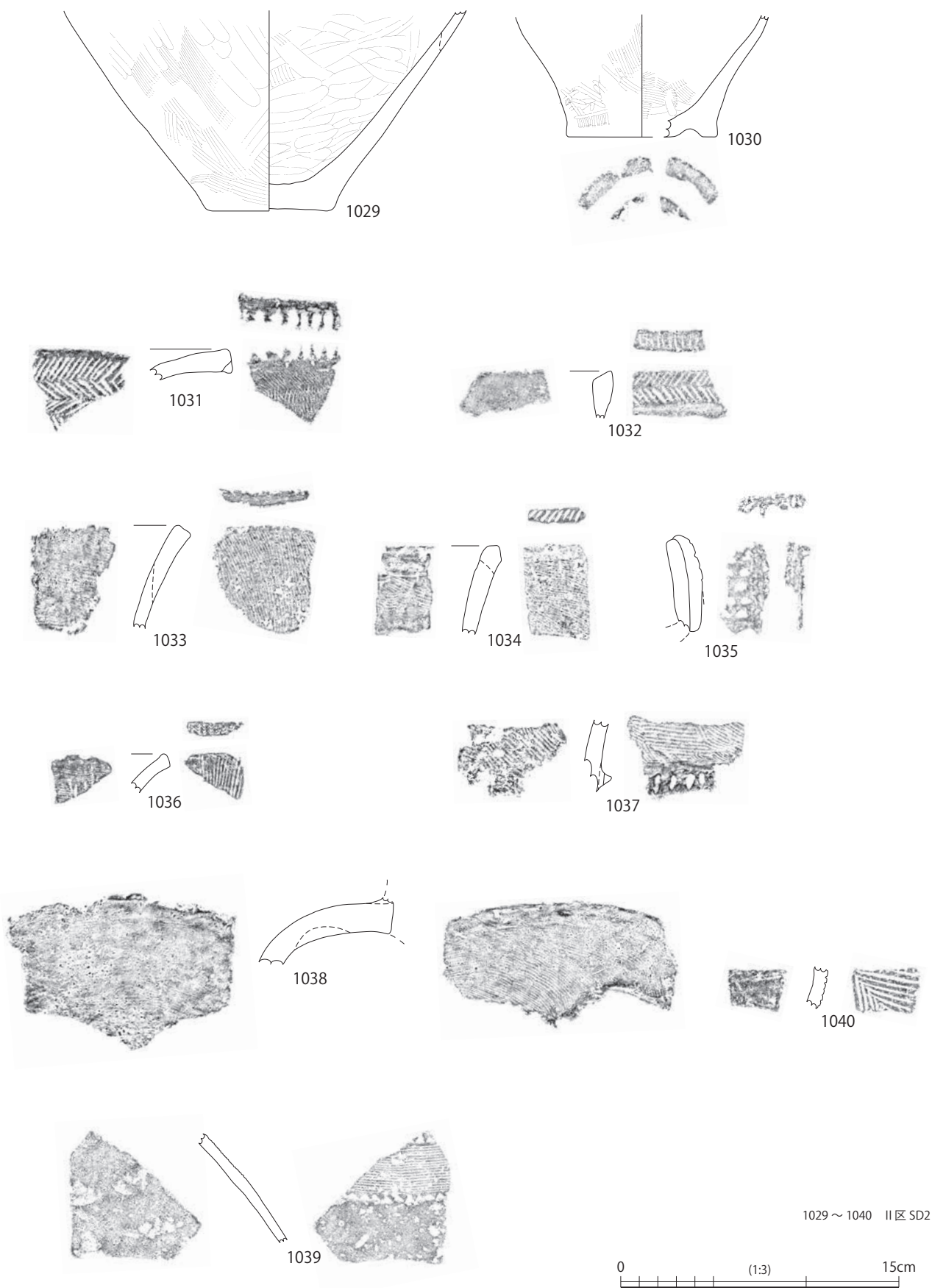
1019・1020 II区SD2

第165図 第2面出土遺物(34) (S=1/3)

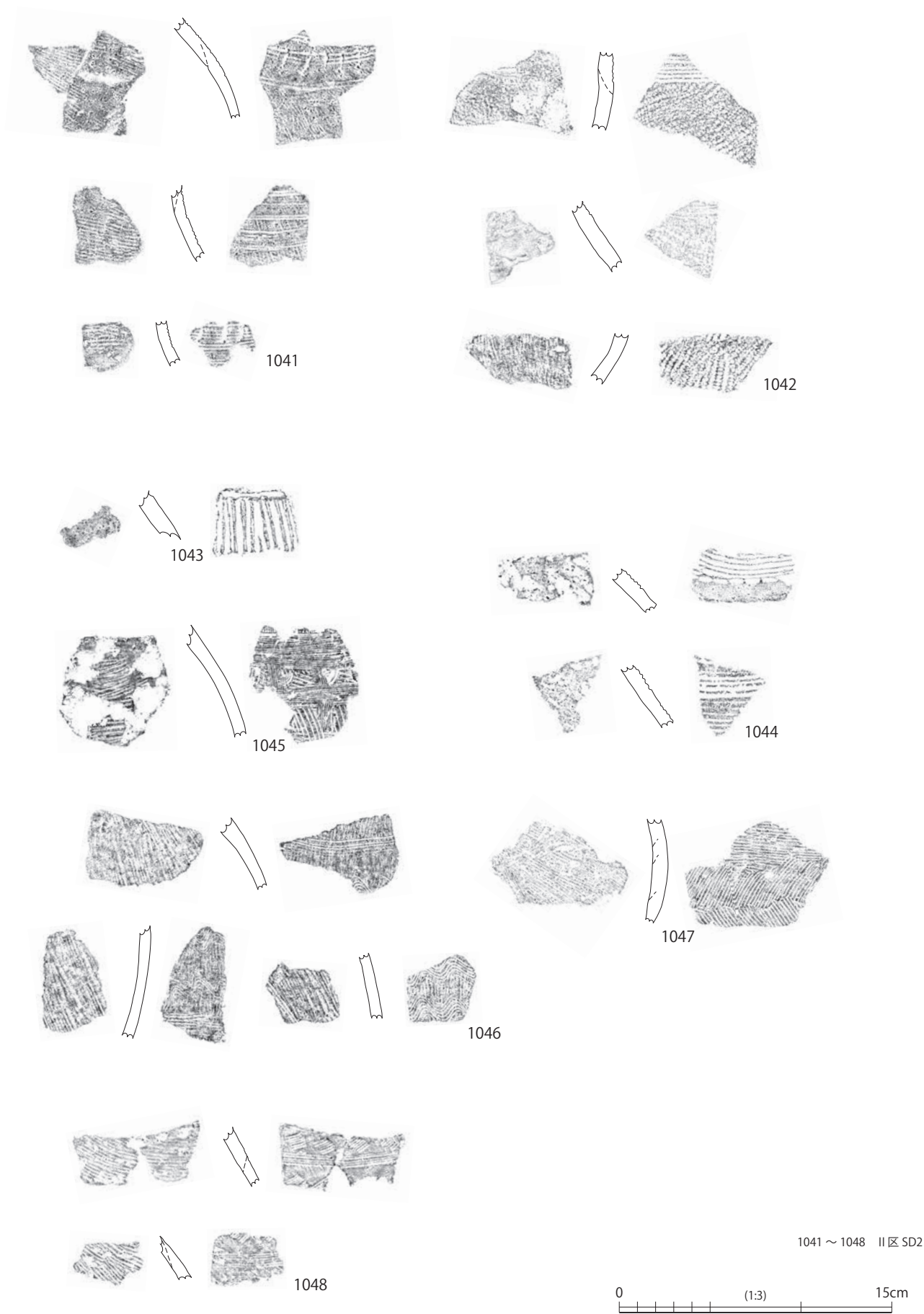


第 166 図 第 2 面出土遺物 (35) (S=1/3)

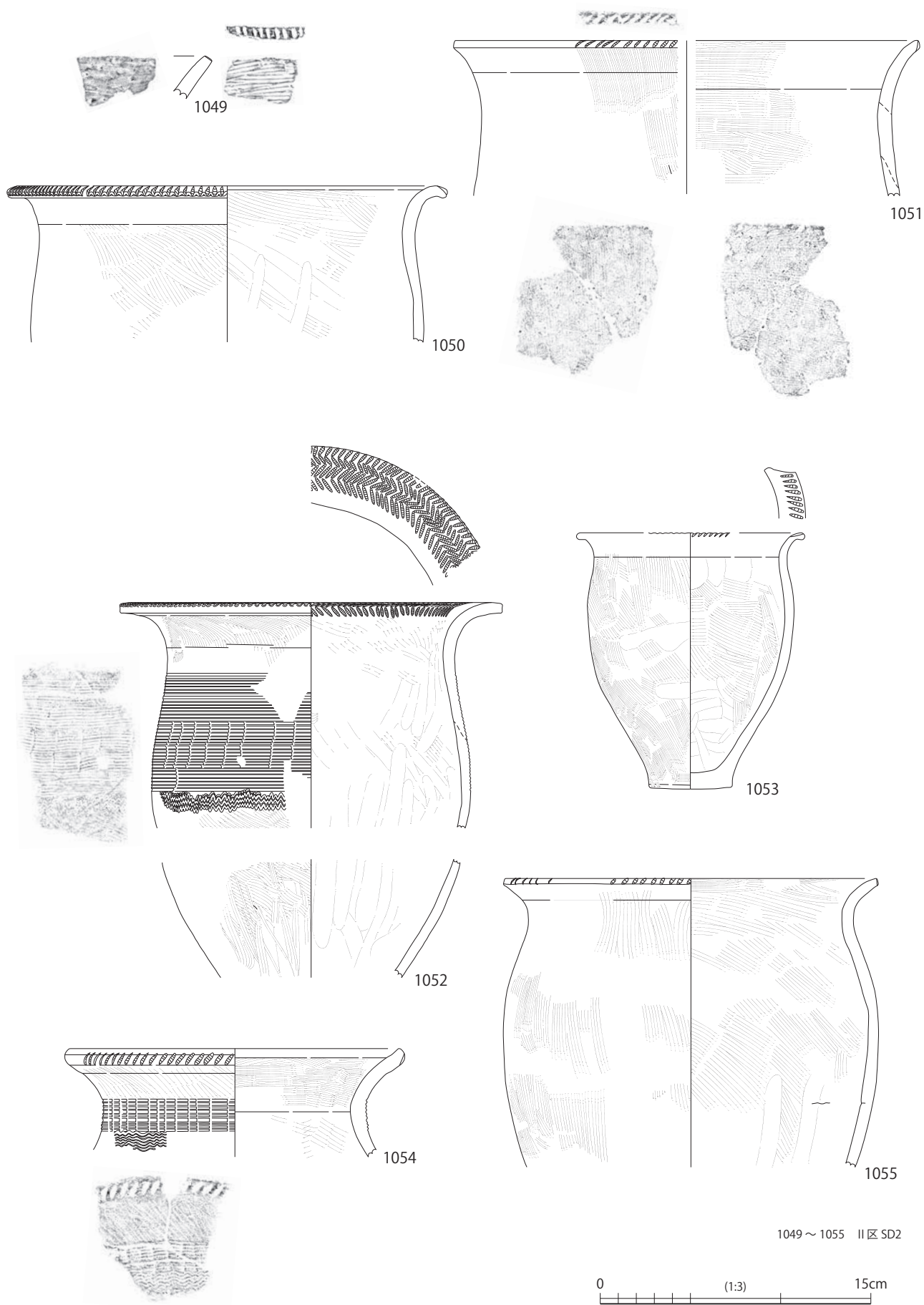
1021 ~ 1028 II区 SD2



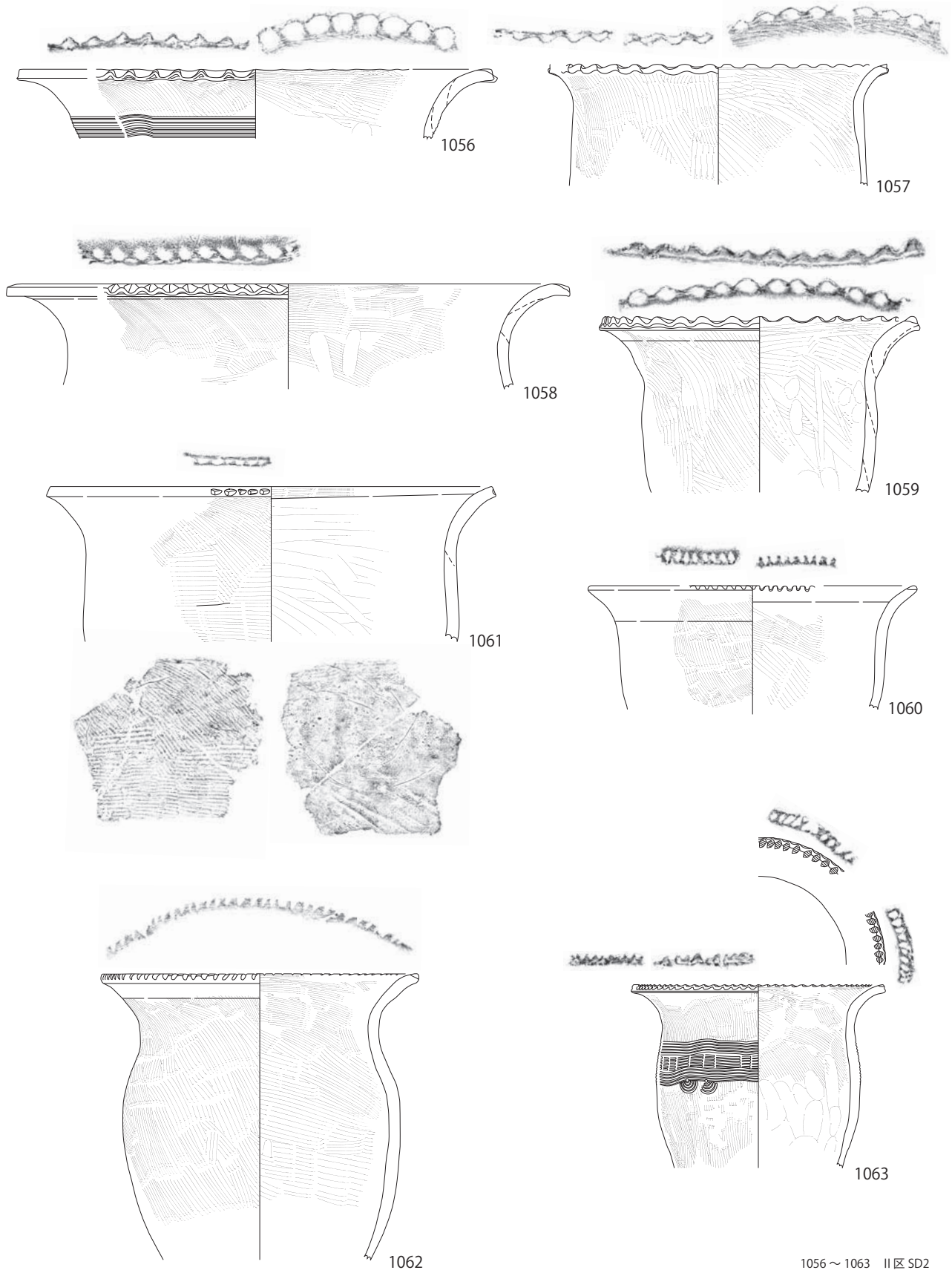
第 167 図 第 2 面出土遺物 (36) (S=1/3)



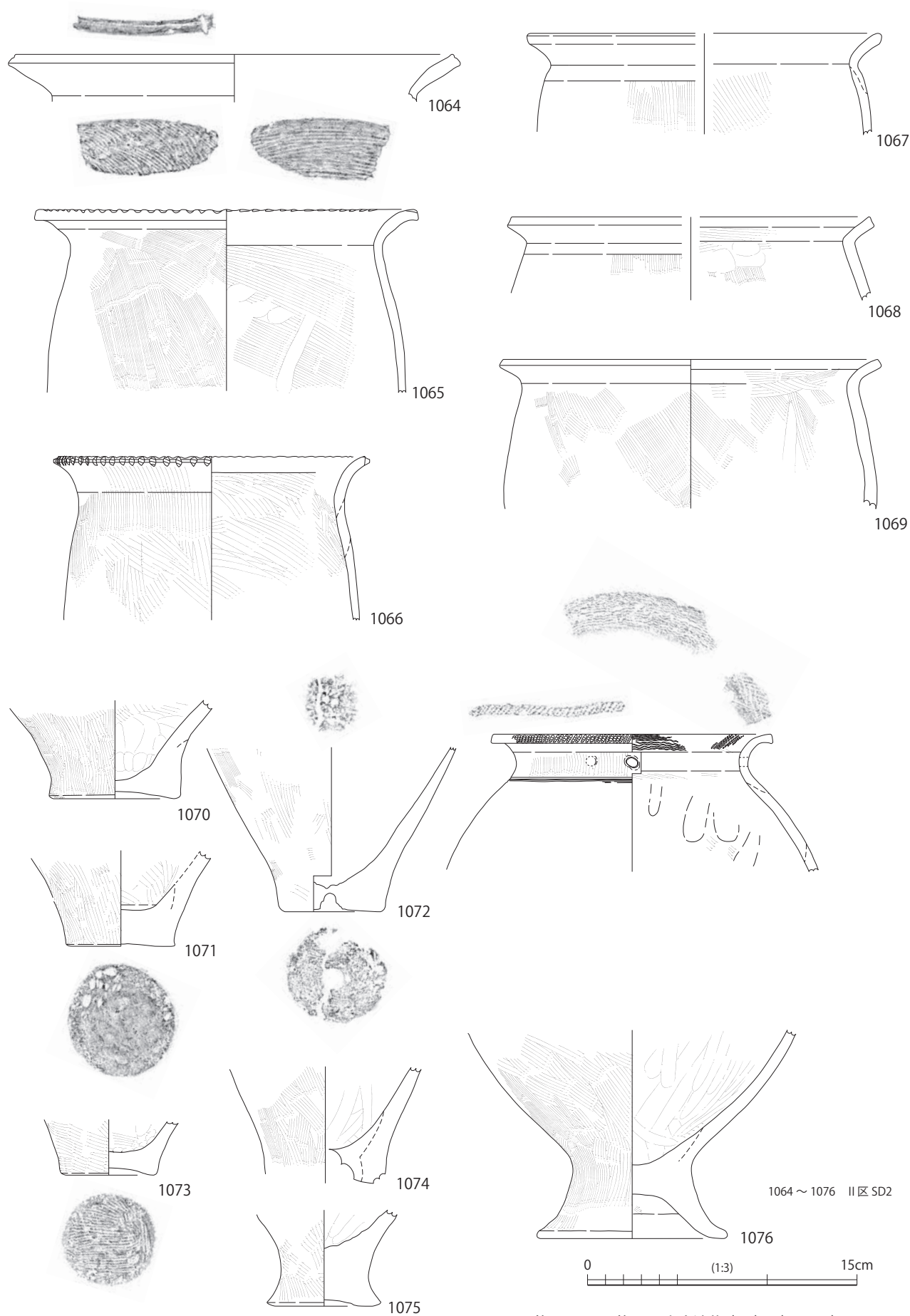
第168図 第2面出土遺物(37) (S=1/3)



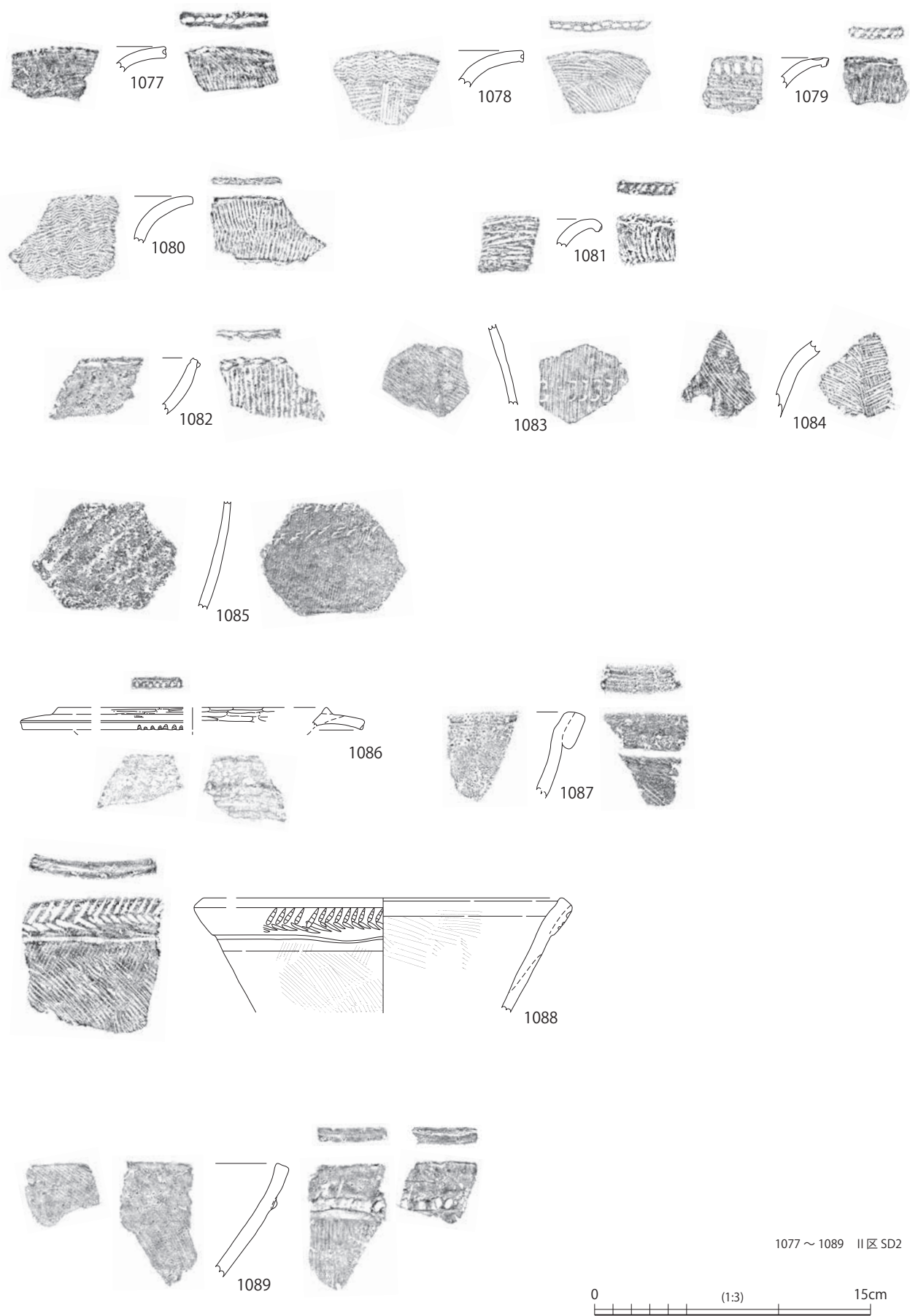
第 169 図 第 2 面出土遺物 (38) (S=1/3)



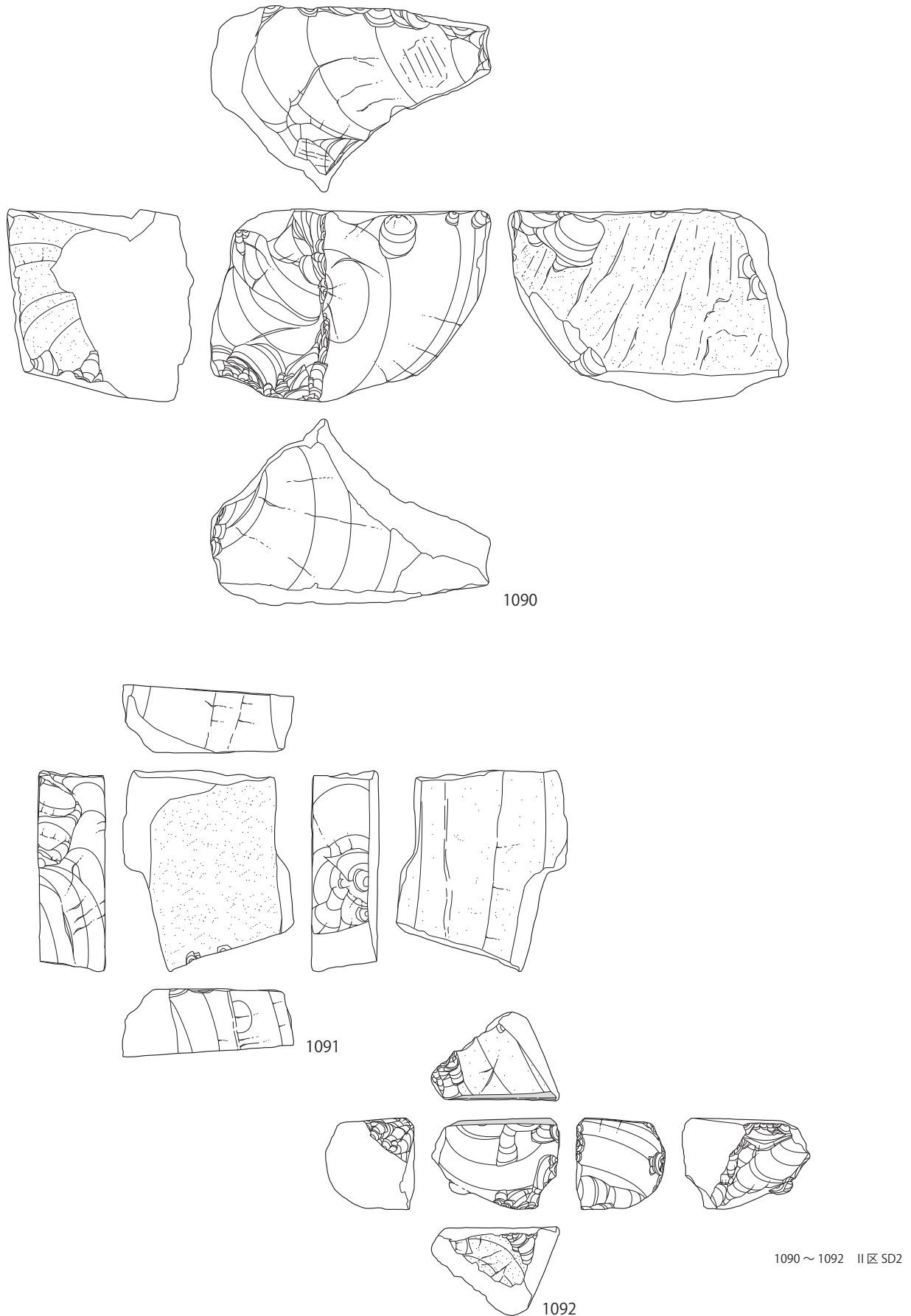
第170図 第2面出土遺物(39) (S=1/3)



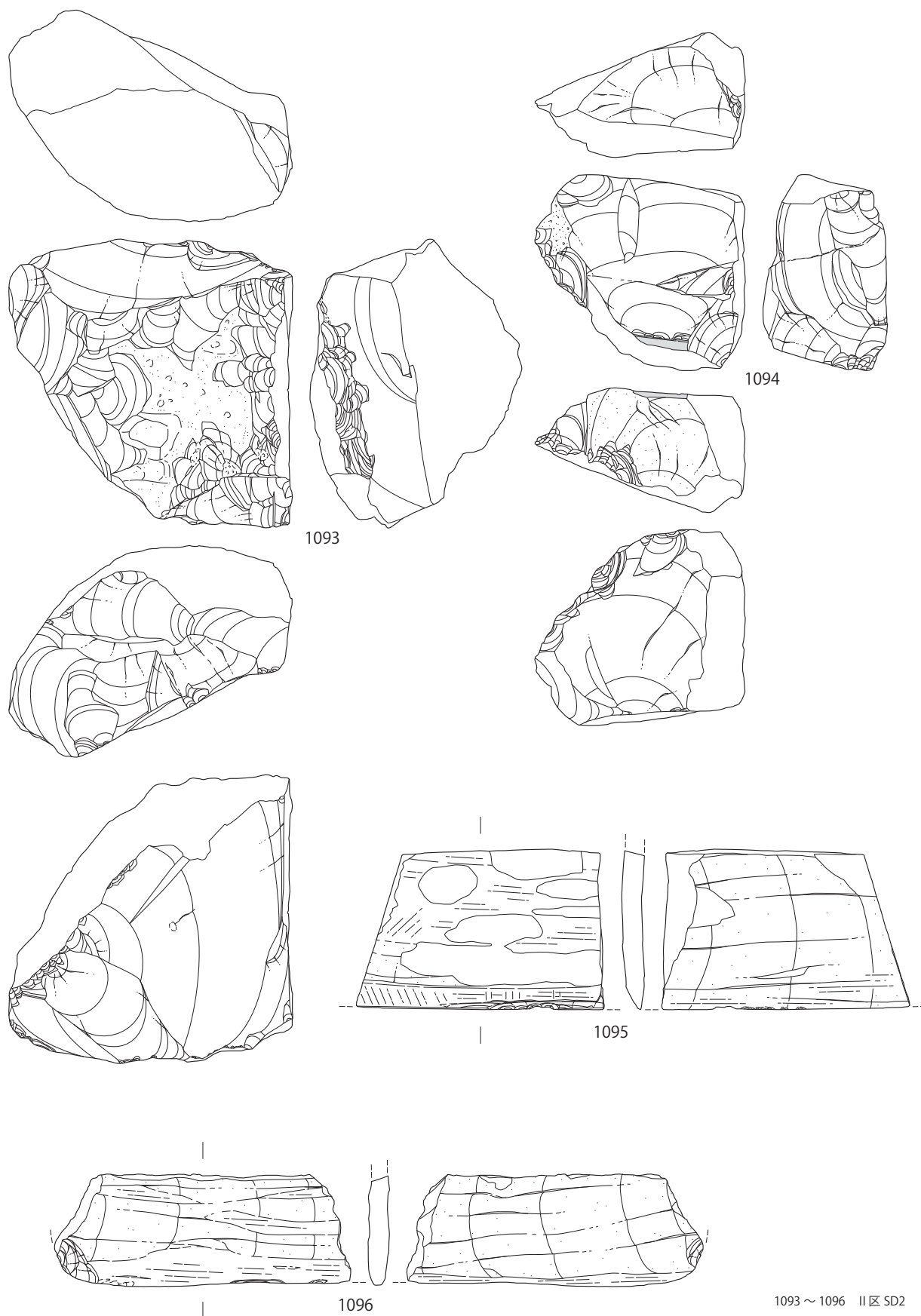
第171図 第2面出土遺物(40) (S=1/3)



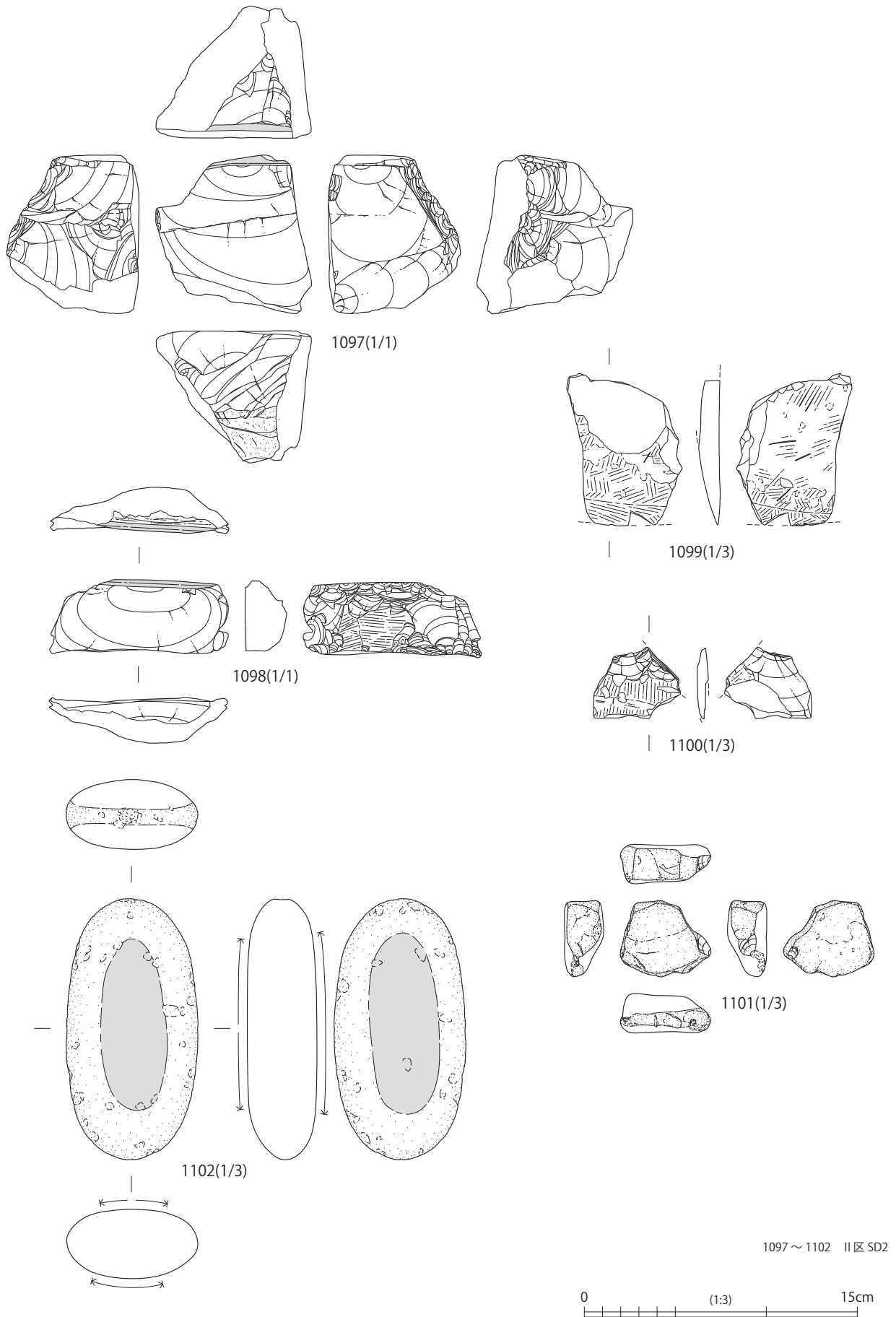
第172図 第2面出土遺物(41) (S=1/3)



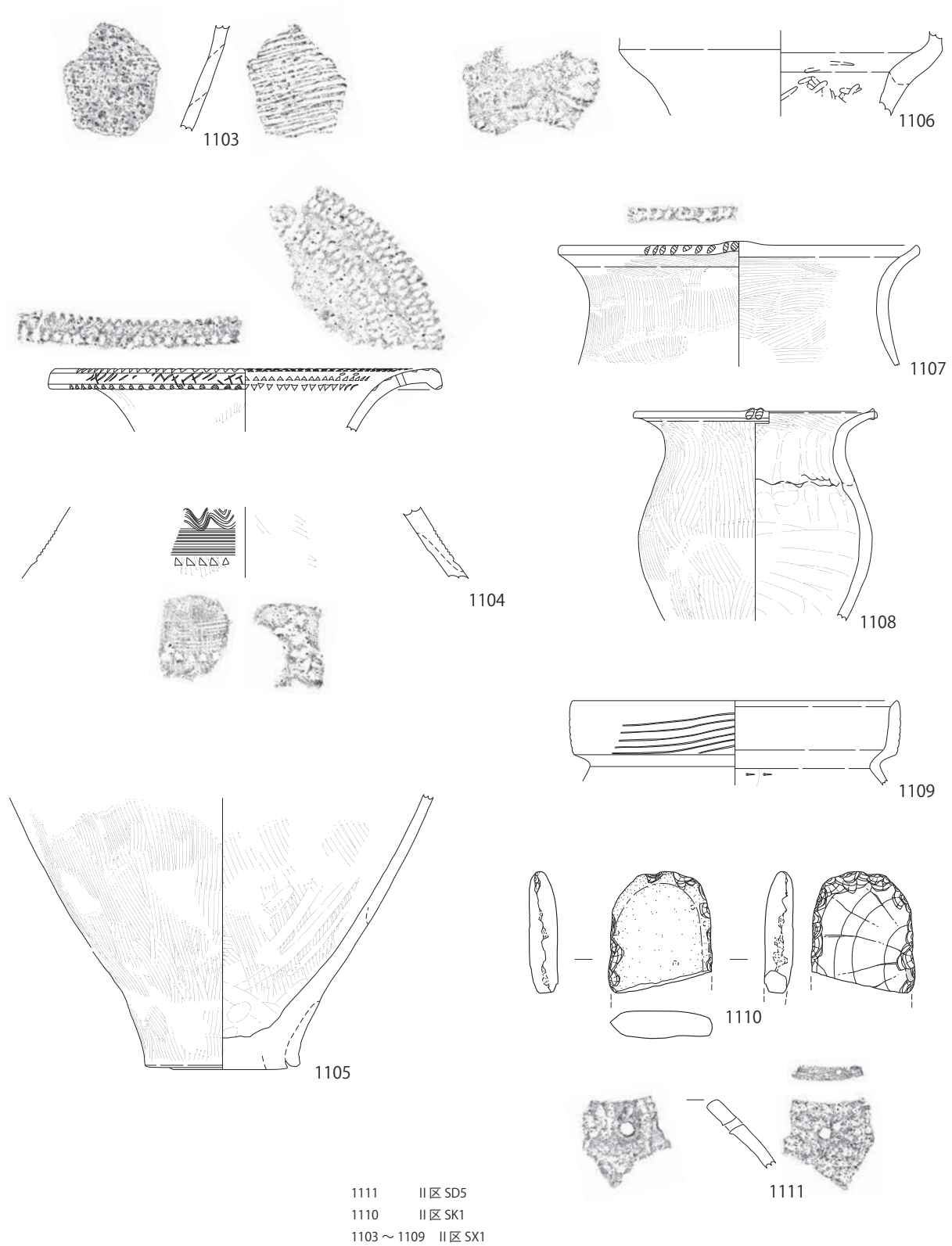
第173図 第2面出土遺物(42) (S=1/1)



第174図 第2面出土遺物(43) (S=1/1)



第175図 第2面出土遺物(44) (S=1/1・1/3)



第 176 図 第 2 面出土遺物 (45) (S=1/3)

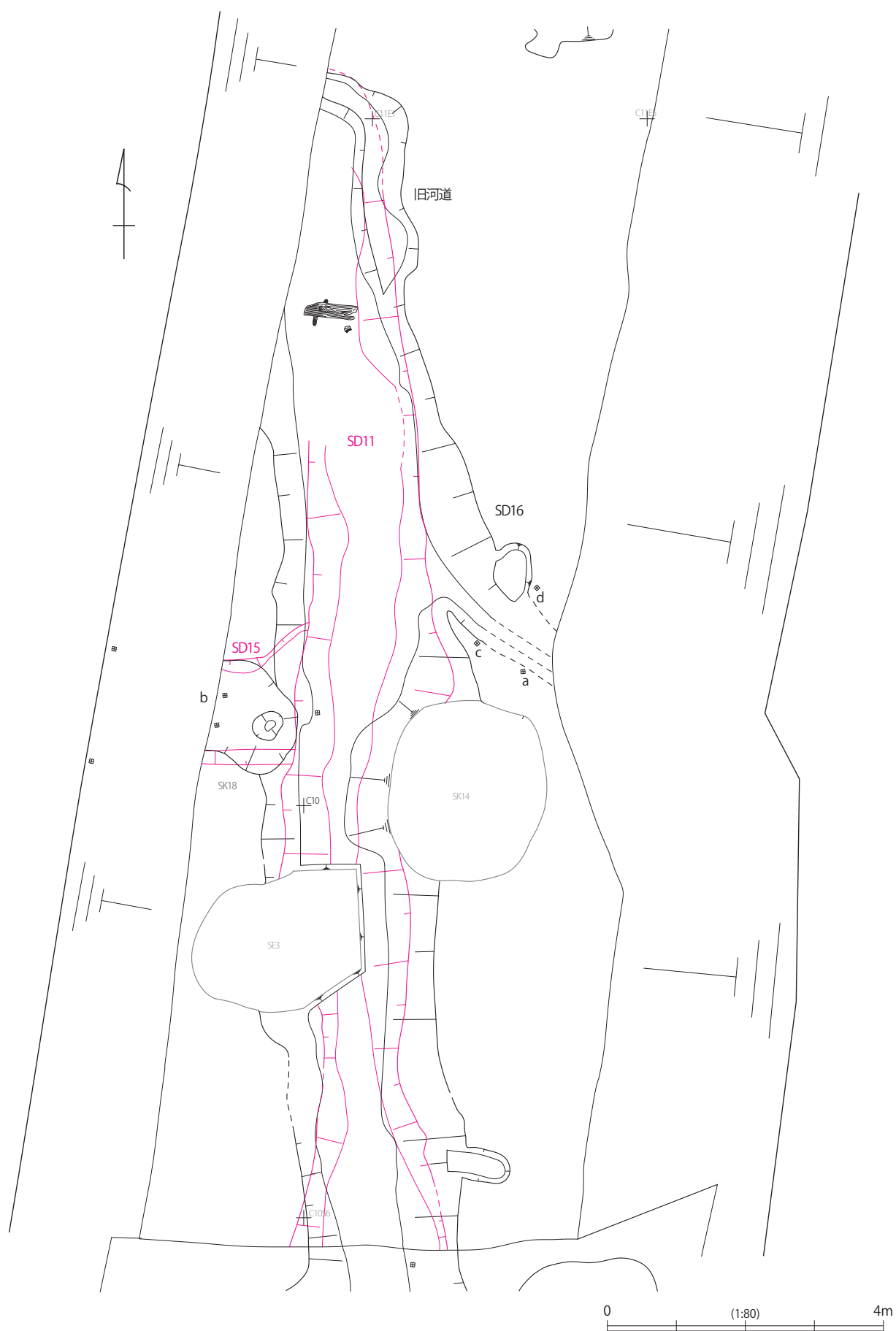
第10節 Ⅲ区第2面の遺構・遺物

旧河道（第177・178図、第179図1112～192図1205） Ⅲ区西壁11グリッドライン付近から出現して南方向に流れる自然河道で、Ⅱ区15グリッドライン付近から西側へ蛇行して調査区外に出た旧河道の延長部分と考える。ほぼそのまま南下し、Ⅲ区とⅣ区の境目を流れる溝 SD39に合流する。ほぼ同経路を流れる溝（環濠）SD11に切り込まれる関係は、Ⅱ区の旧河道・SD2と同様である。河幅は2.3～2.5mとⅡ区の約半分となり、深さは断面図 a-b 上で約80cmを測る。埋土は黄灰～暗黄灰砂質土を基調とし、現場の所見では断面図 a-b の第11層黄灰砂・12層黒褐色砂質土も旧河道埋土とするが、Ⅱ区の状態も勘案すると SD11の埋土と考える方が妥当であろう。遺物は1112～1200を図示した。1112～1115は弥生時代前期～中期の条痕文系土器で、1114は条痕を山形に施文する。1117～1172は弥生時代中期の小松式である。1117～19は口縁端部に斜格子刻みを、1121・23は羽状文を施すもの。1124は口縁端部および内面に縄文を施した後内面に扇形文を施すもので、中期前葉の縄文施文の系譜（沈線文系土器）を残すものか。1125・26は受け口状口縁の壺である。1125は口縁部に扇形文、頸部にハケによる羽状文を施す。1126は口縁部に棒状浮文を貼り付け、ハケ刻みによる羽状文を巡らし、下端には指頭押圧による波状文を施す。1127・28・32は壺の頸部で、突帯にハケ刻みを施すもの。1127は突帯上にハケによる山形文+櫛描直線文、下に直線文+波状文を施す。1129～31は壺の頸部で、櫛描直線文+波状文を施すもの。1133～37は壺の底部で、1136は底面に靱圧痕が確認された。1144～55は口縁端部に刻みを施す甕。1146は小波状口縁を呈する。1149は口縁をつまみ上げて小波頂部を作出し、頸部に櫛描直線文+波状文を施す。1159～1166は甕の底部で、1162は底部充填法を用いる。鉢1170は口縁端部に刻みを施すもの。甗1174の底部穿孔は焼成前の可能性がある。1175～77は土器片転用の加工円盤で、75・76は中央に穿孔される。1178～84・86～88・90・91は緑色凝灰岩製・85はサヌカイト製の玉素材（石核および未製品）である。1189はめのう製の石核で、石針素材の可能性がある。めのう製の石針及びその石核は近縁の八日市地方遺跡で報告されており、本遺跡で出土するめのう製の石核も石針素材として考えることができる。1194～1205は旧河道出土の木製品である。用途不明の板材・棒材が大半を占め、現場の写真等から見る限り、C10グリッド北西側で集中出土した木製品を図化したものである。樹種はすべてスギ材である。1194は建築部材（妻板か）ないしは準構造船の舷側板と推定される部材。L字に切り欠かれた部分に別材が圧着された凹みが残る。凹間の距離は約25cmである。

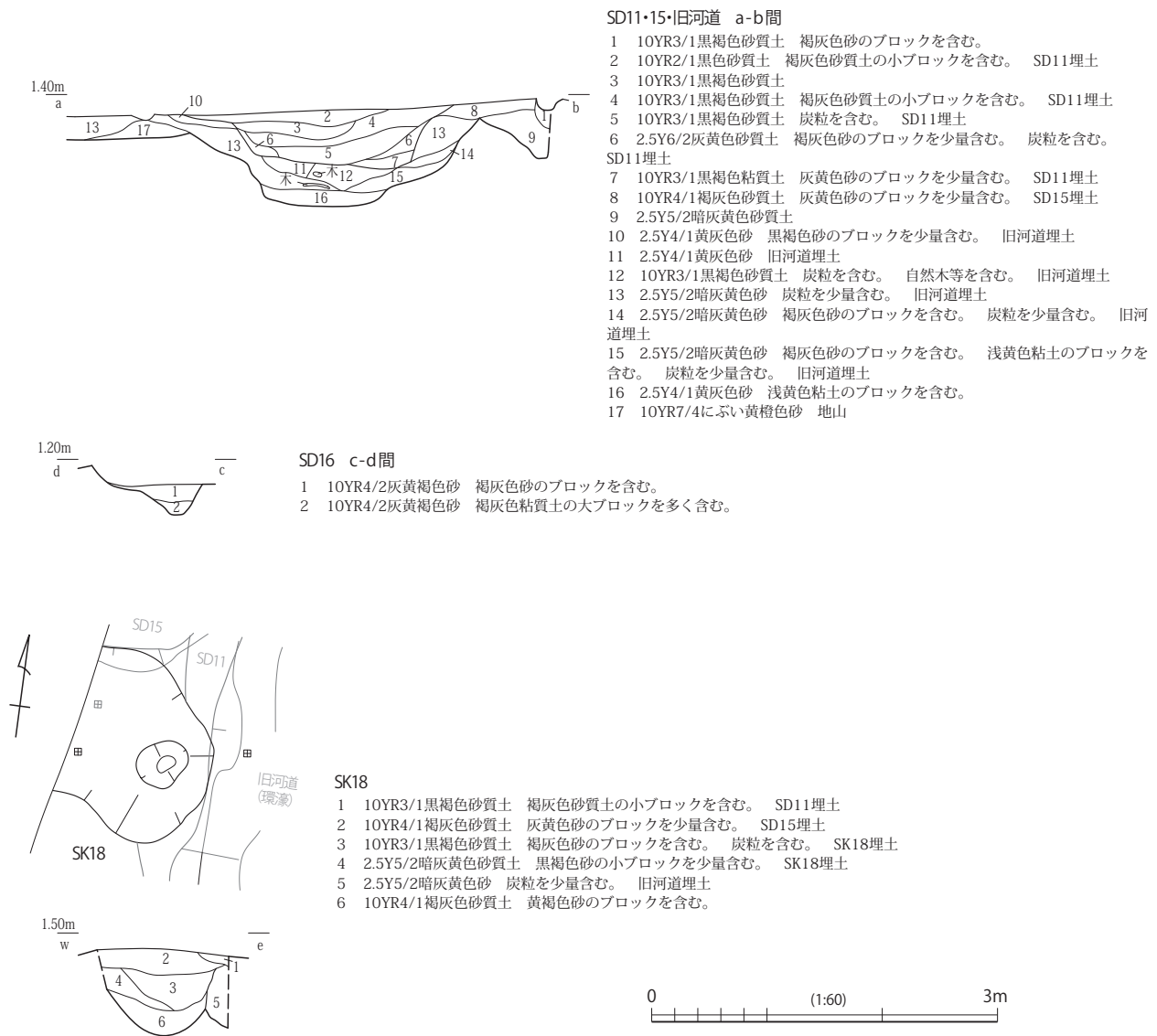
SD11（第177・178図、第192図1206～207図1376） Ⅲ区西壁11グリッドライン付近から出現して南方向に流れる溝で、Ⅱ区 SD2の延長部分と考える。流路はほぼ旧河道をなぞり、Ⅲ区とⅣ区の境目を流れる溝 SD39に合流する。Ⅱ区 SD2同様に旧河道を切り込み、溝幅は1.1～2.1m、深さは断面図 a-b 上で約50cmを測る。埋土は黒褐色砂質土を基調とする。遺物は1207～1376を図示した。出土遺物は現場で上層・下層・層名無しの3通りで取り上げられているが、それぞれがどの土層に対応するかは記録が残っていないため不明である。図の配列も上層（1207～1317・57～66）→下層（1318～22）→層名無し（1323～56・67～76）とした。壺1210は口縁端部に刻み・内面に2段の羽状文を巡らす。頸部には櫛描直線文+簾状文+扇形文を施す。1212・13・21は受け口状口縁の壺で、口縁に羽状文を巡らす。1215は口縁内面に羽状文を巡らし、頸部には2条の刻みを持つ突帯を貼り付ける。1220は受け口状口縁の端面及び下端に刻みを施し、頸部に刻みを有する突帯を貼り付ける。肩部には櫛描直線文を施す。1222・23は小波状口縁を呈するもので、1222は口縁内面に垂下文を5条施す。1224は

口縁端部・内面に斜格子文を施し、内面には突帯ないし瘤状の突起を複数貼り付けるもので西日本系の土器の影響を受けたものか。1226・27・29は頸部に突帯を貼り付けるもの。1231は肩部に櫛描直線文+波状文+簾状文を施し、その下に円形刺突文を3~4段配する。1235は屈曲する胴部形状に、櫛描直線文+弧状文?を配し、無文部分には磨きを施す。東海地方系(貝田町式)の影響を受けたものか。1237は無頸壺で、2個一対の穿孔を2カ所施す。1238・39は中期後半の凹線文系土器で、38は肩部に2段の列点文を巡らし、胴部下半は細かくミガキ調整を施す。39は口縁端部にわずかに赤彩痕を残す。1240は有段口縁の赤彩壺で弥生時代後期後半の法仏式期のものか。数は少ないが、これら弥生時代中期後半以降の土器は環濠の埋没年代を示すものと理解できる。1242~1253は壺の底部。甕1262は口縁に突起を貼り付け刻み、口縁下端に指頭(爪?)押圧による小波状を施す。口縁内面には櫛描波状文のち垂下文、肩部には簾状文+波状文を施す。1263・64・72・74・76は指頭押圧による小波状口縁を呈するもの。1263は頸部に巻き上げるような波状ハケ、その下には羽状ハケを施す。1274は口縁部直下に櫛描縦羽状文、内面に羽状刻みを巡らす。1270は粗い櫛描直線文+山形文+簾状文を施す。1281~84はいわゆる「く」の字甕と呼ばれる一群である。内外面ハケ調整で、口縁をヨコナデする。口縁端部を面取りするもの(1281・82)と丸く収めるもの(1283・84)がある。1285~92・1305は有段口縁甕・鉢で、後期後半の法仏~月影式期。外面ハケ・内面ケズリ調整で、1286は口縁端部に刻みを施す。1289~92は有段部に擬凹線を施すもので、口縁部は直立に近いものとなる。1290は口縁内面に指頭圧痕を残し、月影式期に属する。1292は頸部に貝殻による波状文を施す。1305は内外面をミガキ調整する精製の鉢。1293~1303は甕の底部。1304は鉢で口縁部を肥厚させ端部に刻みを施す。1306~11は高坏。1307は水平口縁の高坏皿部で、内面はケズリ調整をそのまま残し、口縁下端部に刻みを施す。1312・13は法仏式期の器台で、1312は皿部は屈曲し大きく外反する。1318~22は下層出土の土器群。1318は口縁端部および内面に縄文を施すもので、条痕文系土器の系譜を引くものか。1319は口縁端部に棒状工具等で刻みを入れるもので、小波状口縁を呈する。1323~56は出土層位名無しの一群。1323は口縁端部を斜格子ないしX字状に刻みを施すもの。1334は無頸壺で口縁端部に刻み・口縁直下から櫛描直線文+波状文を施すもの。外面にはわずかに赤彩が残る。1342~44・51は後期法仏式期の有段口縁甕である。1343は肩部にハケによる刻みを施す。1352は有段口縁鉢。1357~76は石製品で、大半を玉造関係のものが占める。1357~60・62・63・67~73は緑色凝灰岩製の玉素材(石核・未製品)。1361はめのう製の玉素材。1364は片岩製の石鋸。1365・74・75は凝灰岩製の砥石。

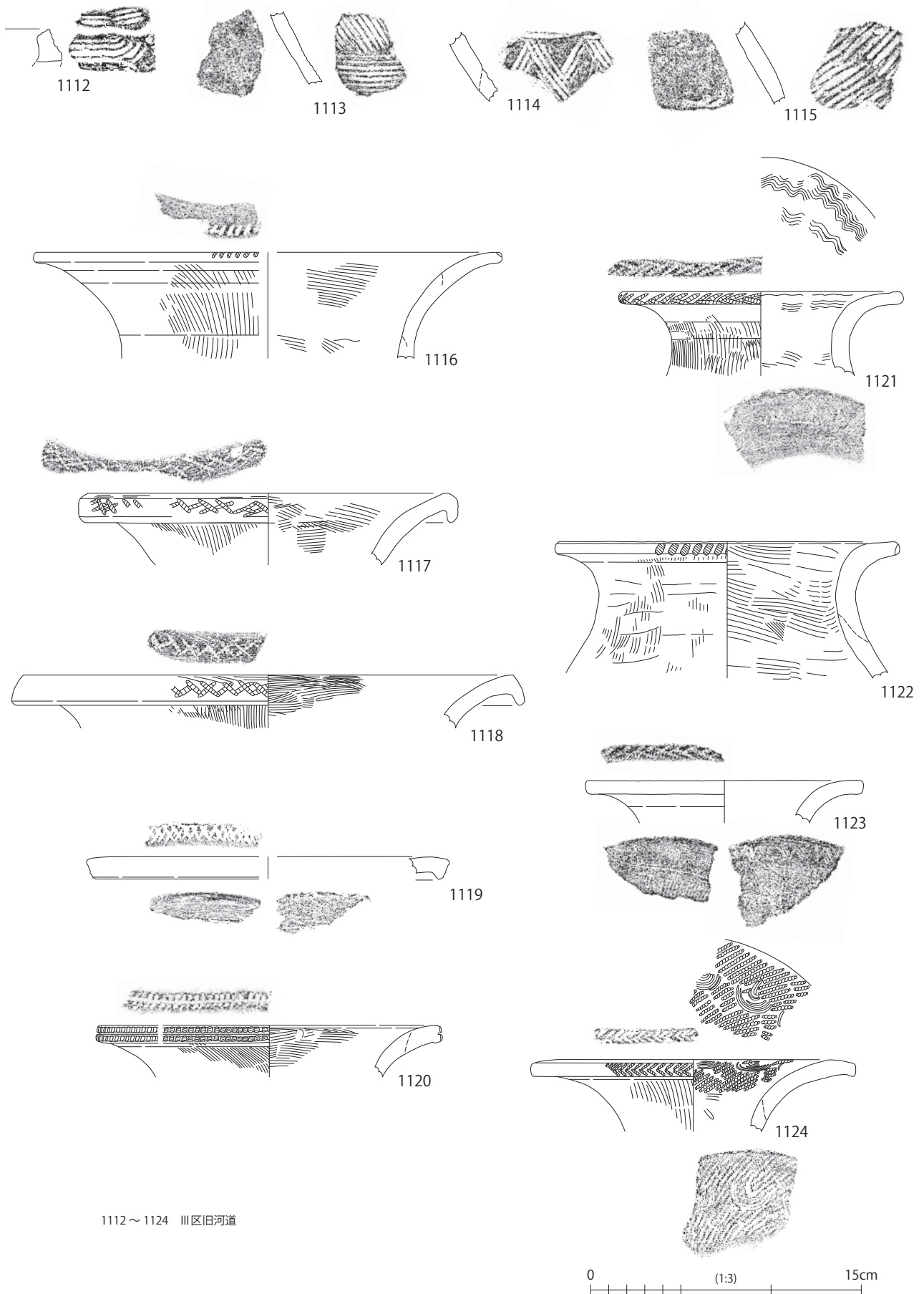
SD16(第178図、第207図1377) 旧河道から分流する溝で、南東方向へ流れる。溝幅は0.9m、深さは断面図c-d上で約40cmを測る。灰黄褐色砂質土を基調とする埋土で、旧河道との前後関係は不明。遺物は弥生中期初頭の条痕文系甕1377を図示した。



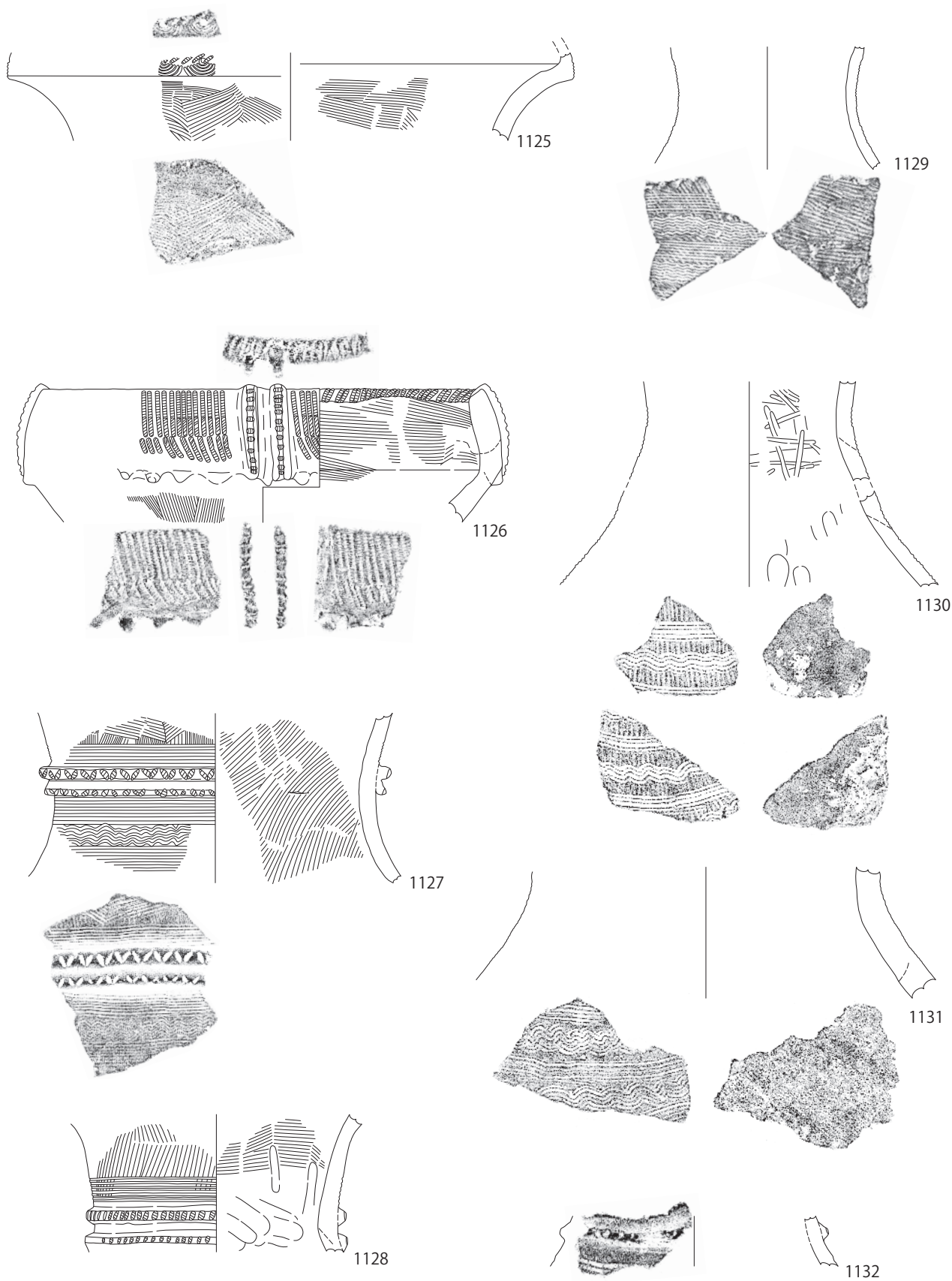
第177図 Ⅲ区第2面 旧河道・溝 (S=1/80)



第178図 Ⅲ区第2面 旧河道・溝・土坑 (S=1/60)

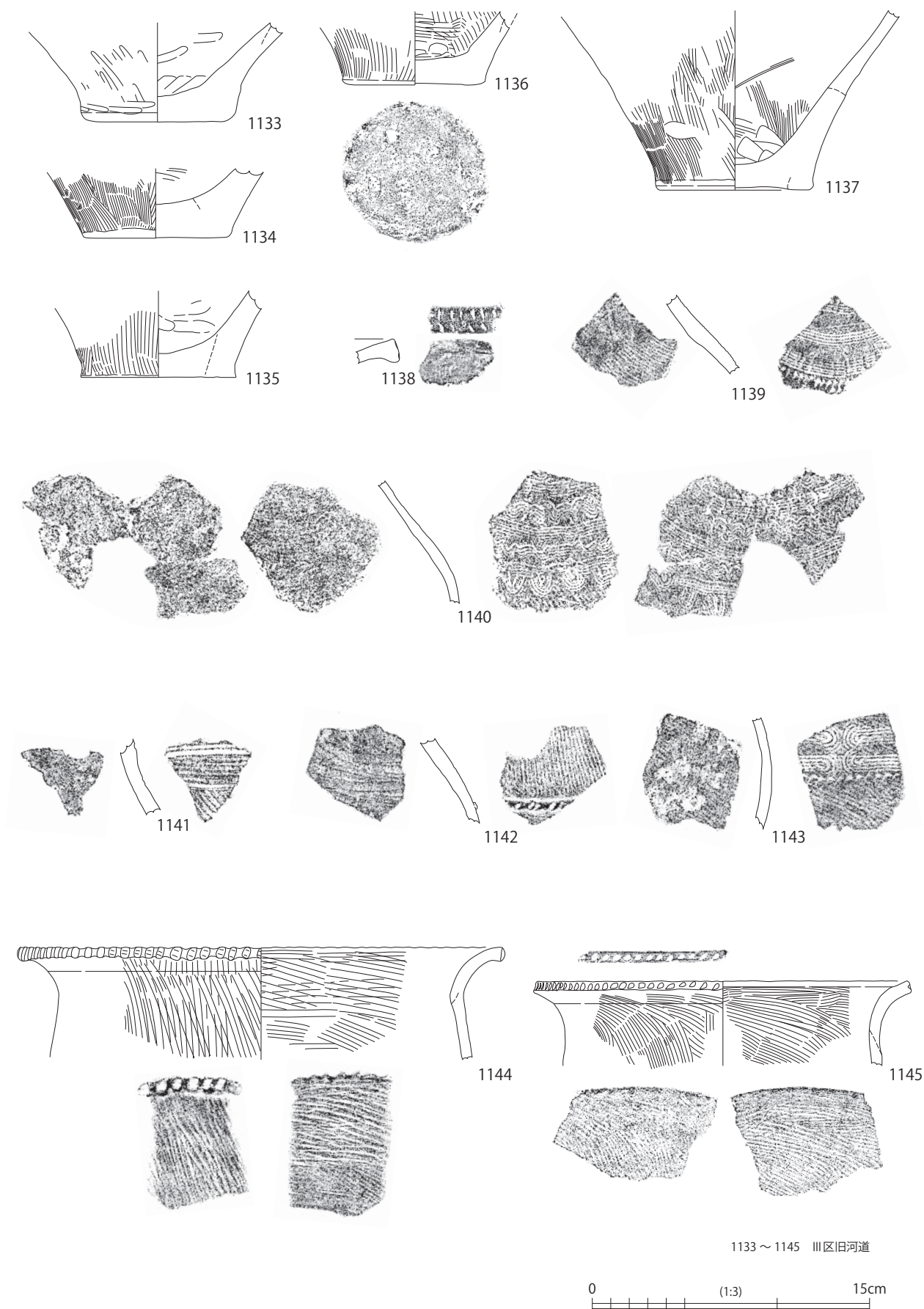


第179図 第2面出土遺物(46) (S=1/3)

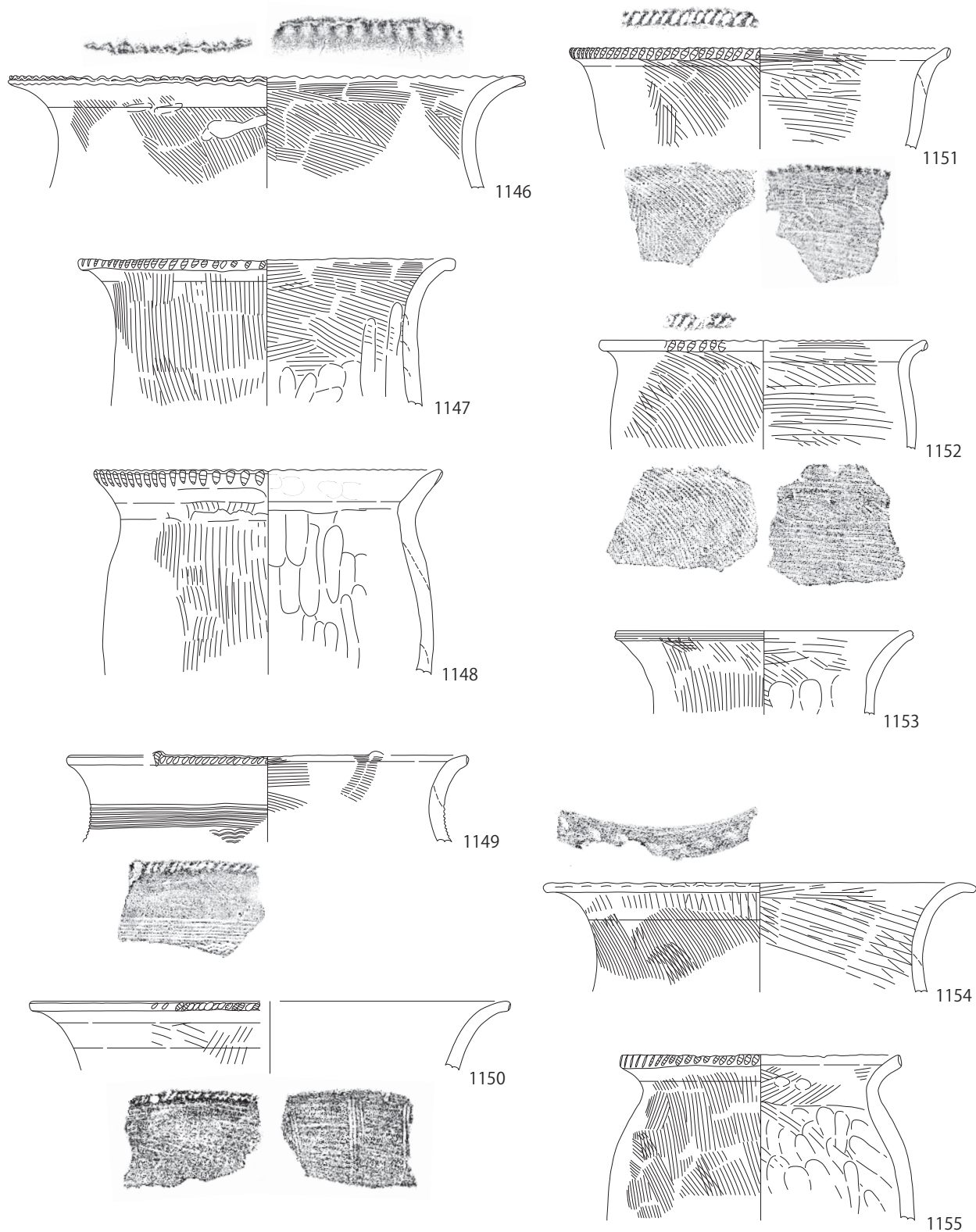


1125 ~ 1132 Ⅲ区旧河道

第180図 第2面出土遺物(47) (S=1/3)



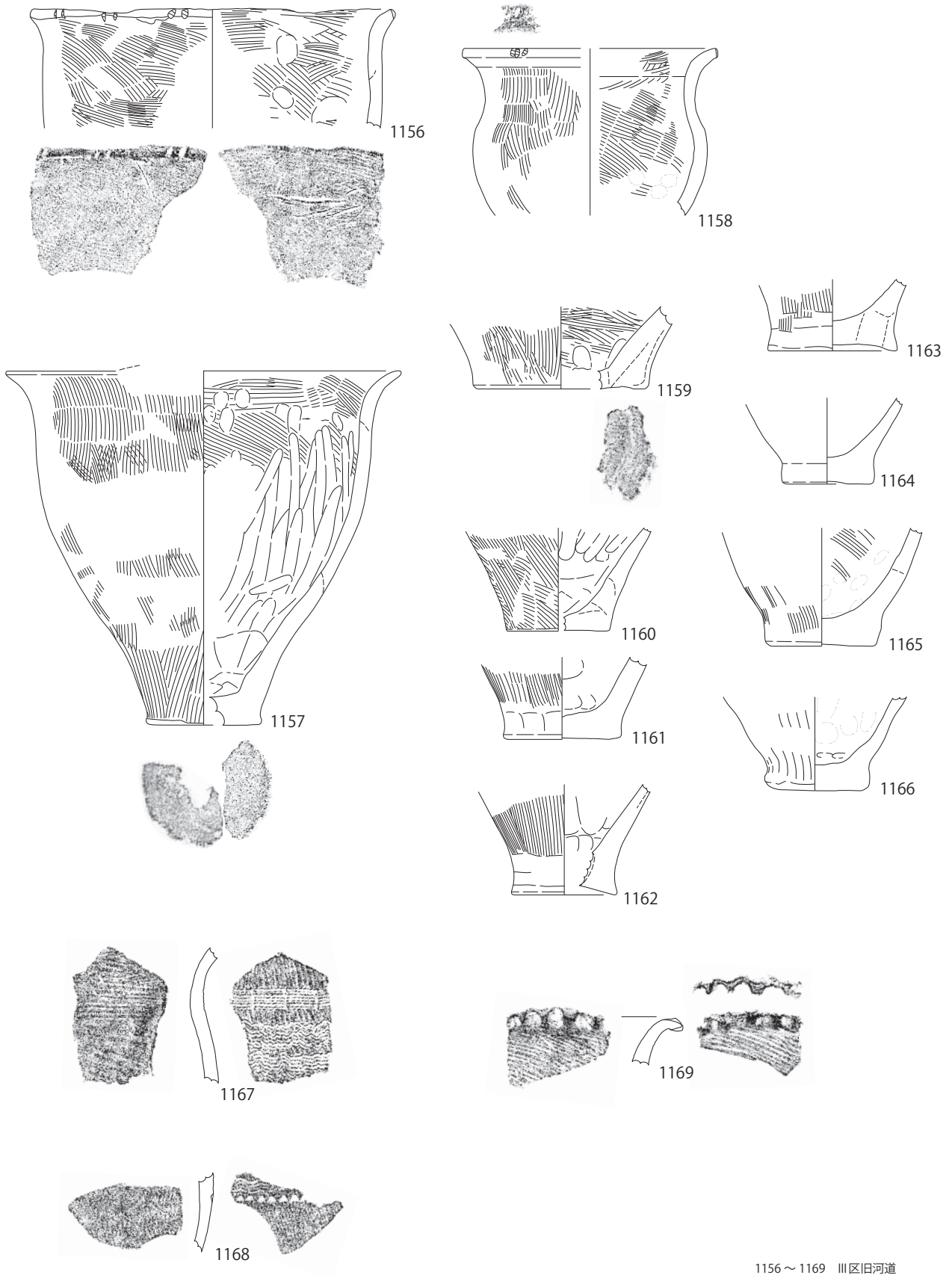
第181図 第2面出土遺物(48) (S=1/3)



1146～1155 Ⅲ区旧河道

0 (1:3) 15cm

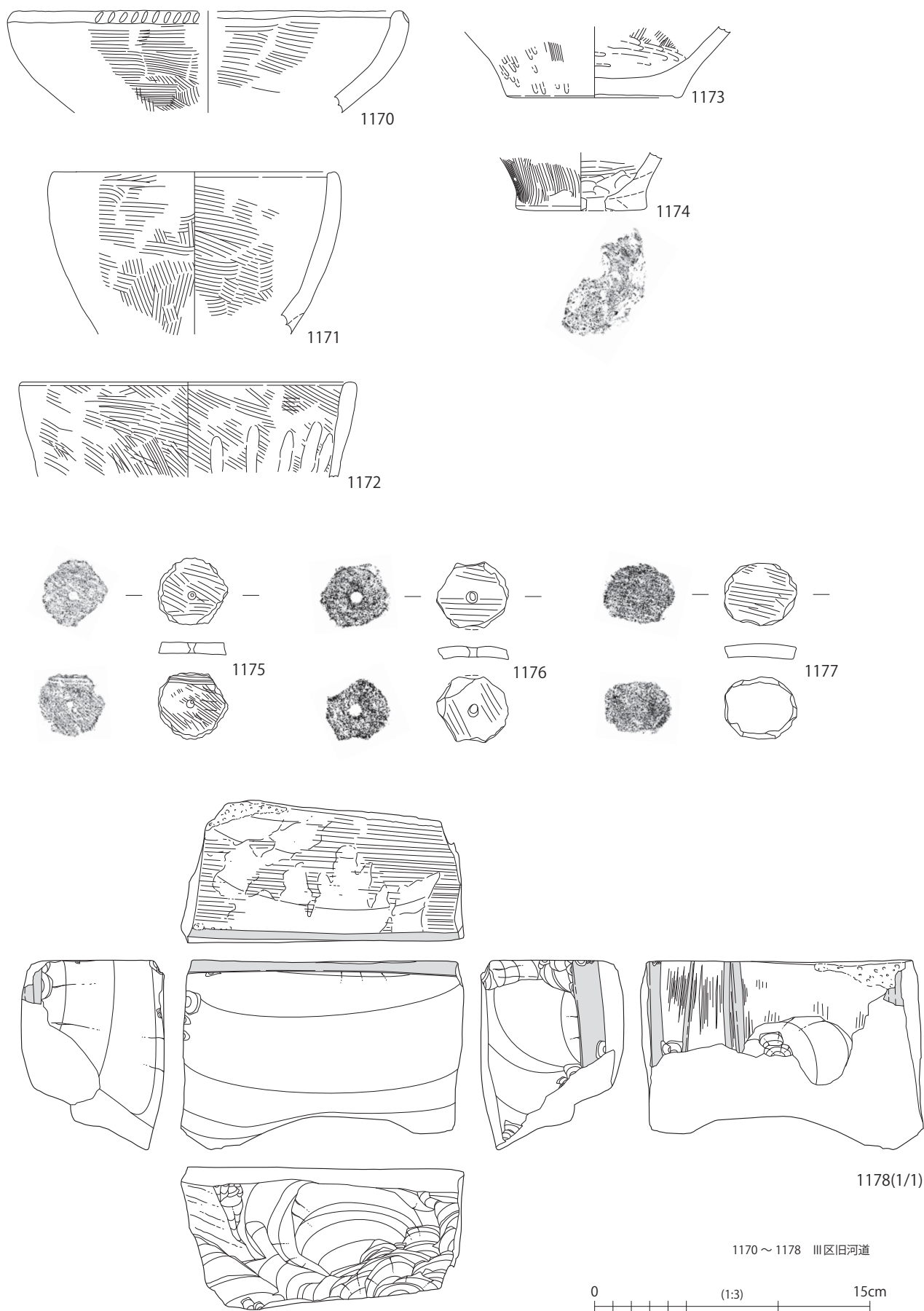
第182図 第2面出土遺物(49) (S=1/3)



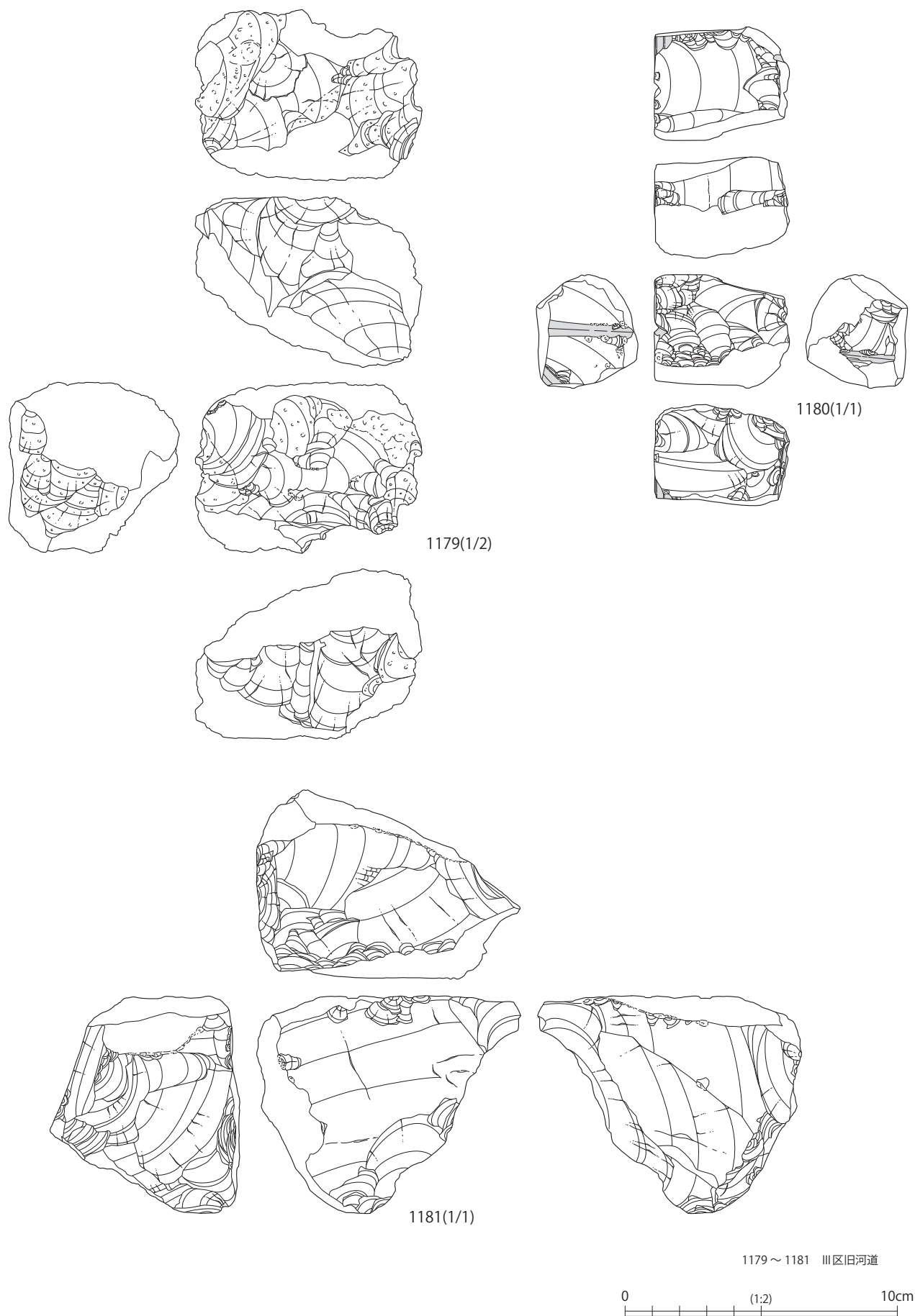
1156 ~ 1169 III区旧河道

0 (1:3) 15cm

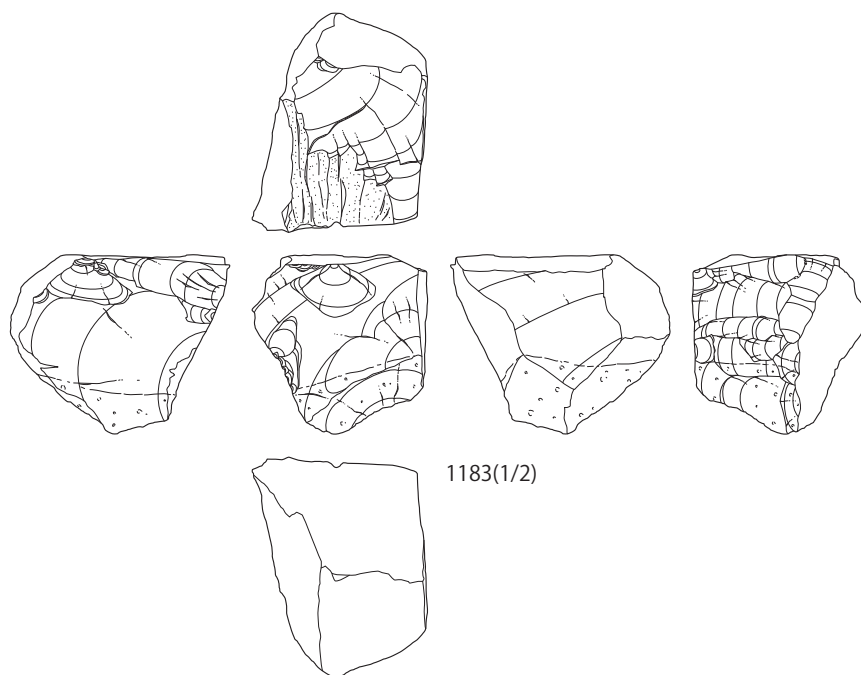
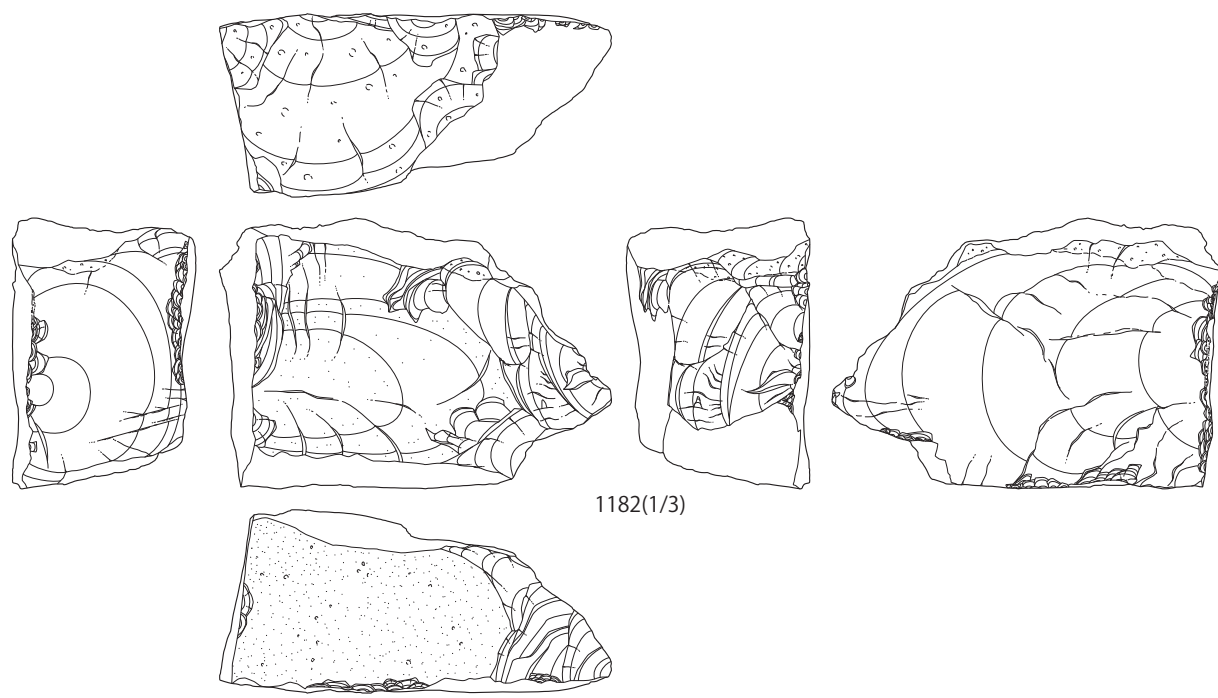
第183図 第2面出土遺物(50) (S=1/3)



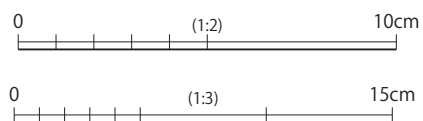
第184図 第2面出土遺物(51) (S=1/1・1/3)



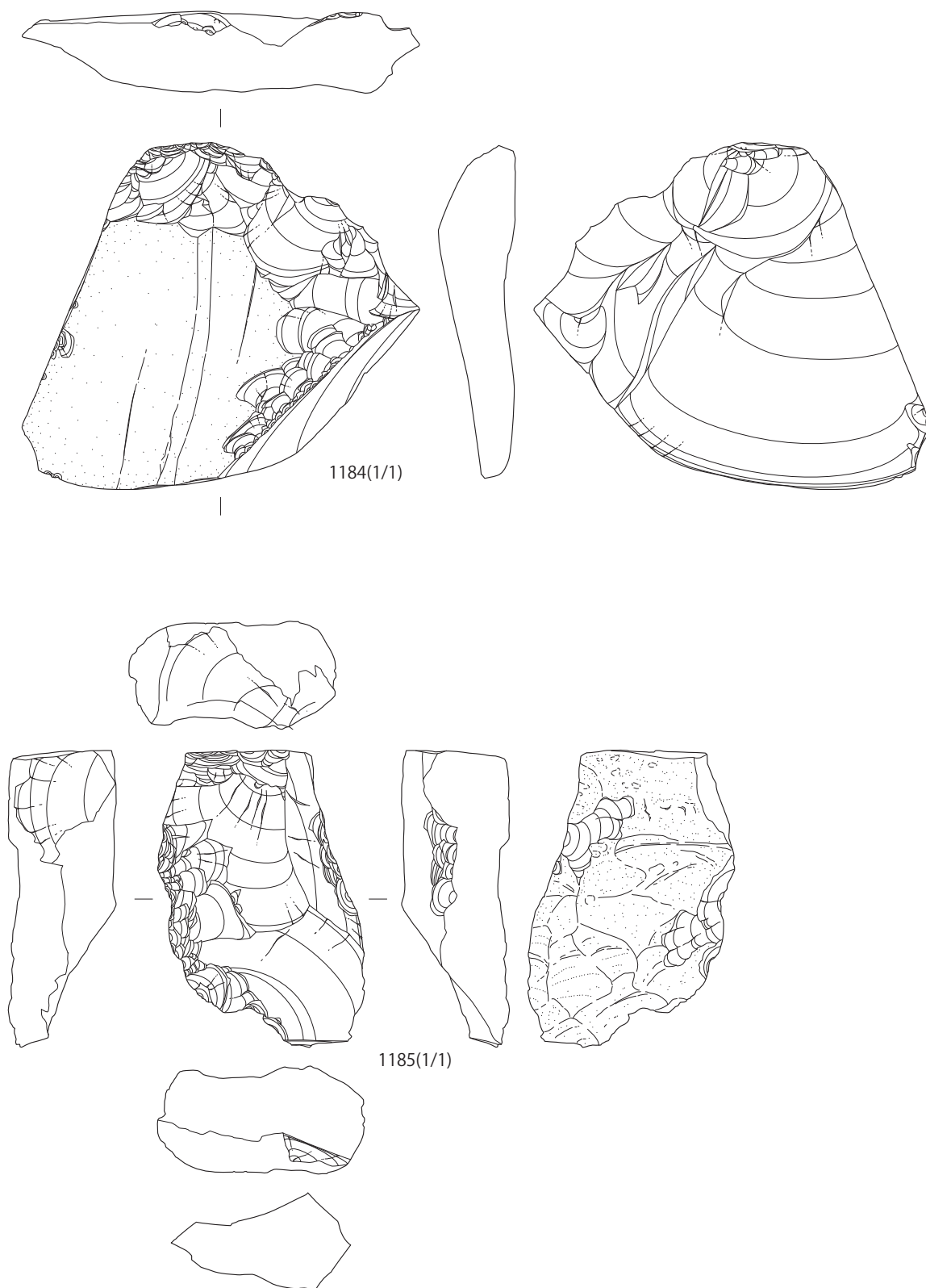
第185図 第2面出土遺物(52) (S=1/1・1/2)



1182・1183 Ⅲ区旧河道

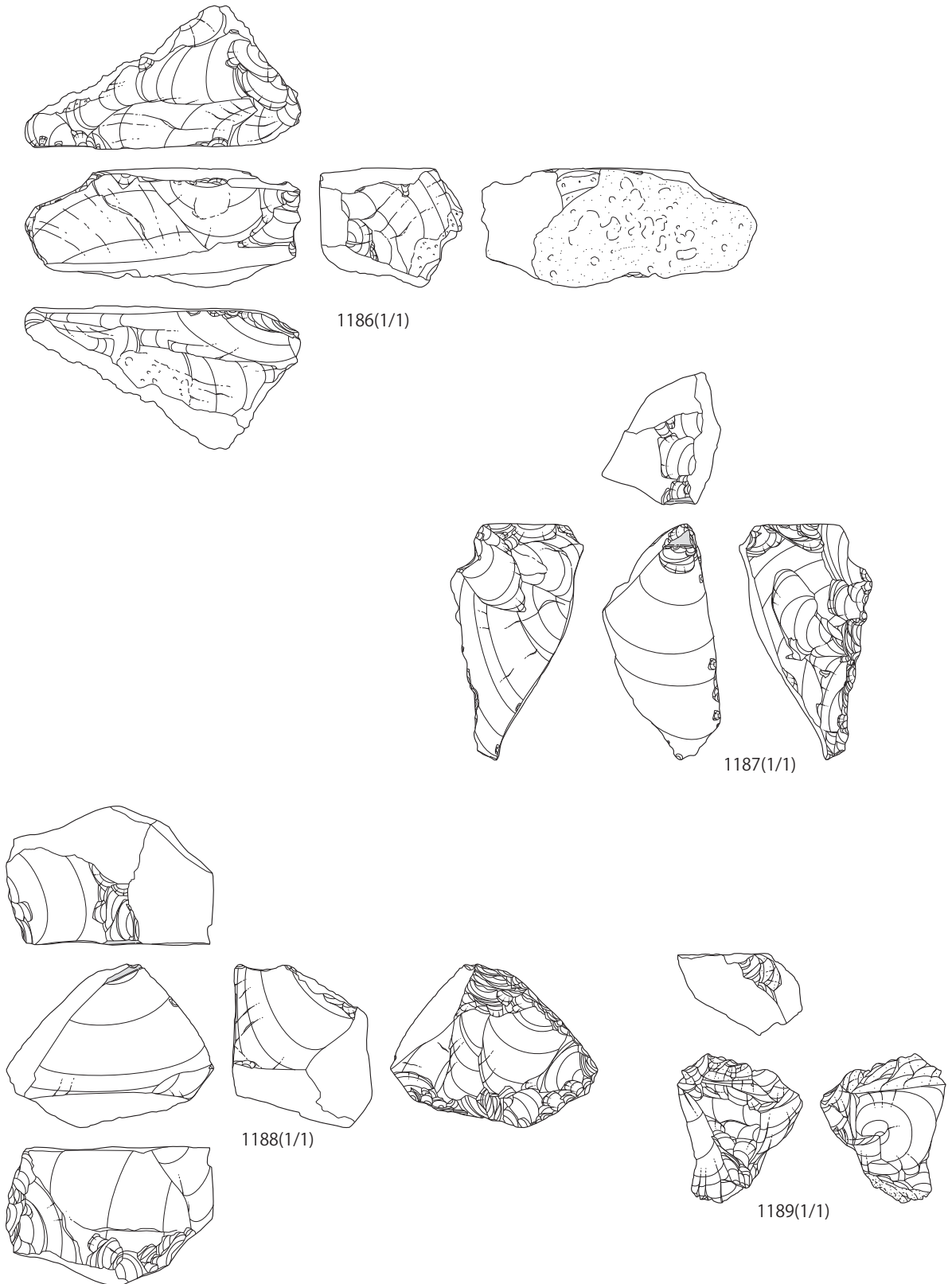


第186図 第2面出土遺物(53) (S=1/2・1/3)



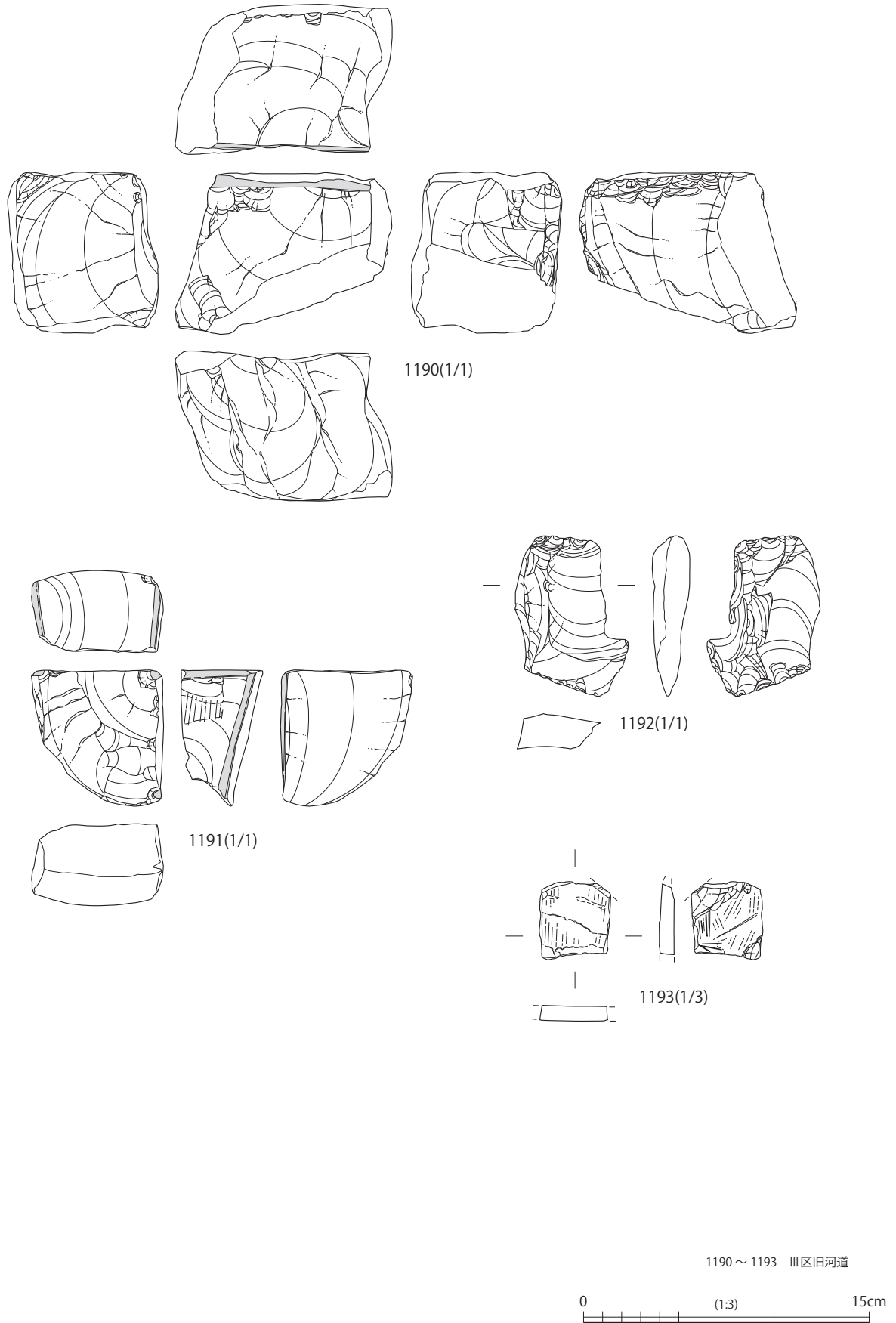
1184・1185 Ⅲ区旧河道

第187図 第2面出土遺物(54) (S=1/1)

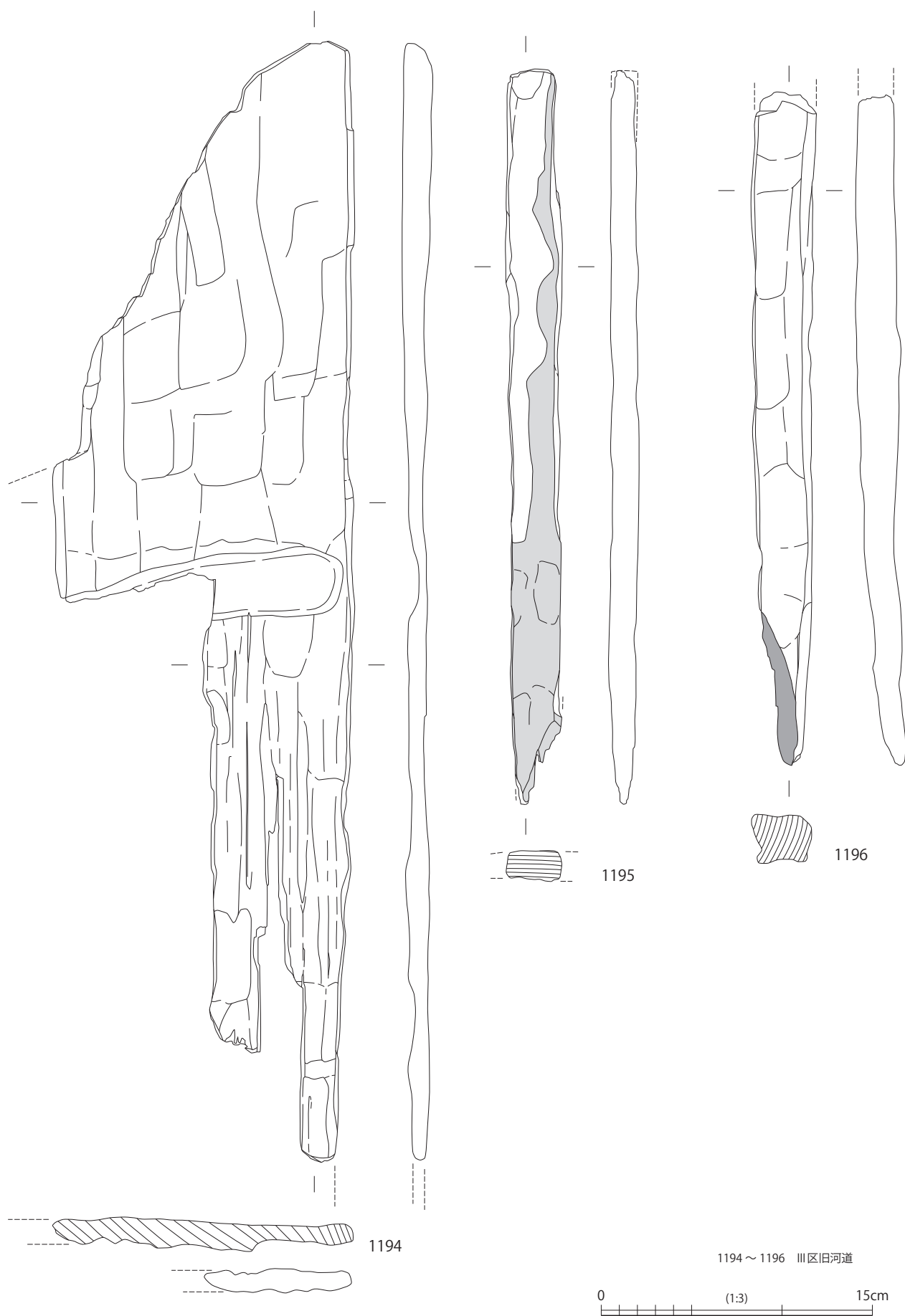


1186～1189 Ⅲ区旧河道

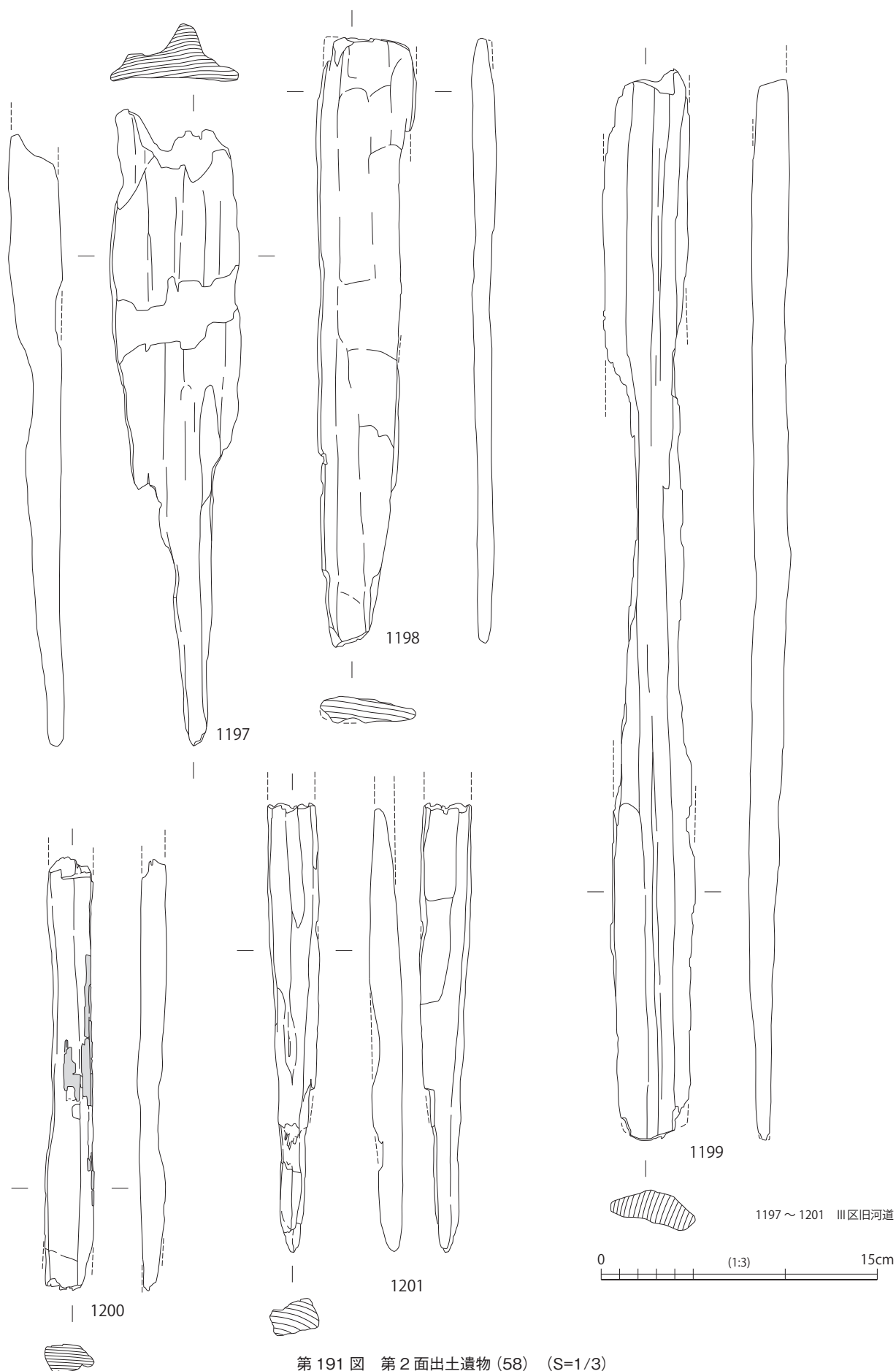
第188図 第2面出土遺物(55) (S=1/1)

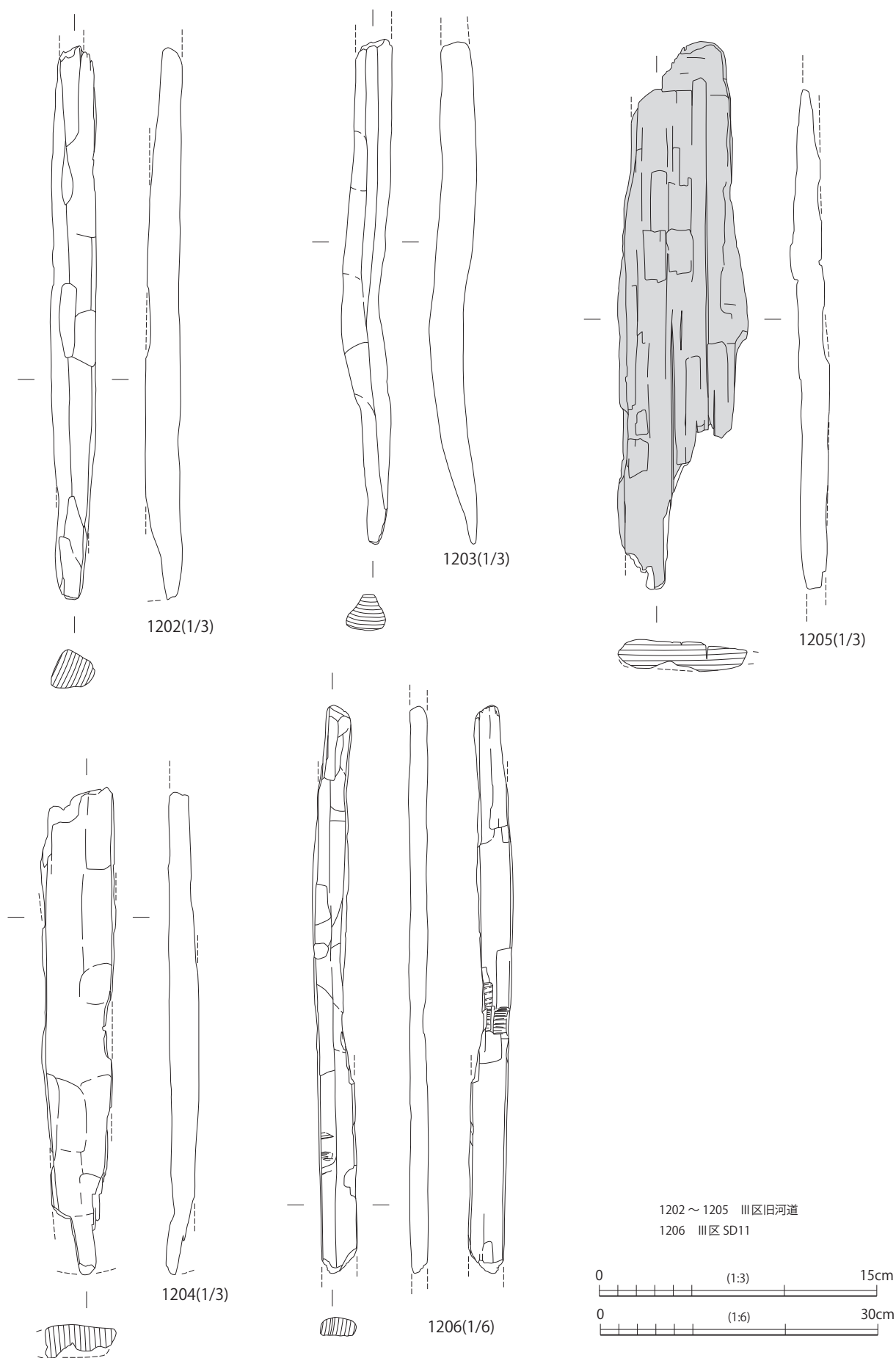


第189図 第2面出土遺物(56) (S=1/1・1/3)

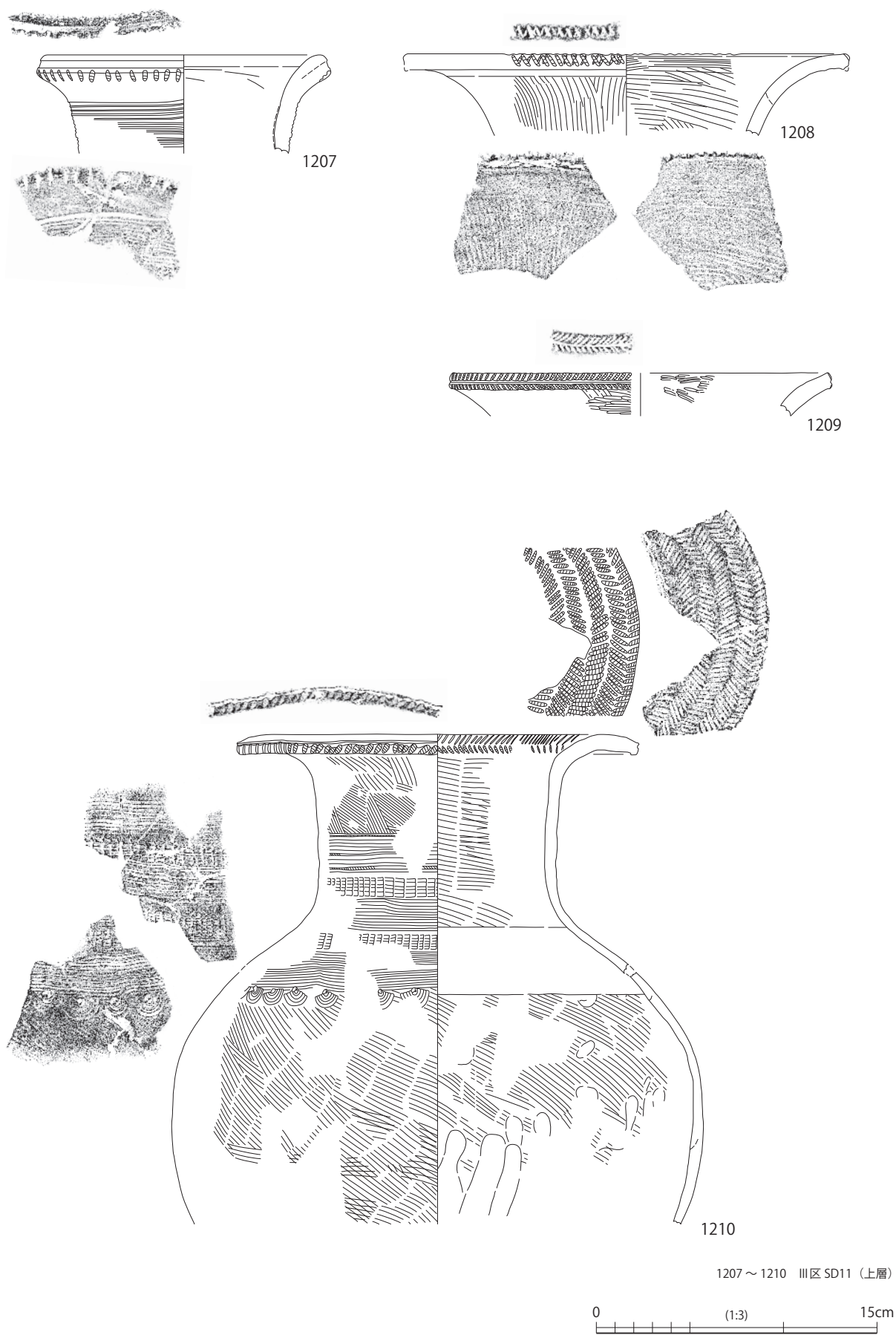


第190図 第2面出土遺物(57) (S=1/3)

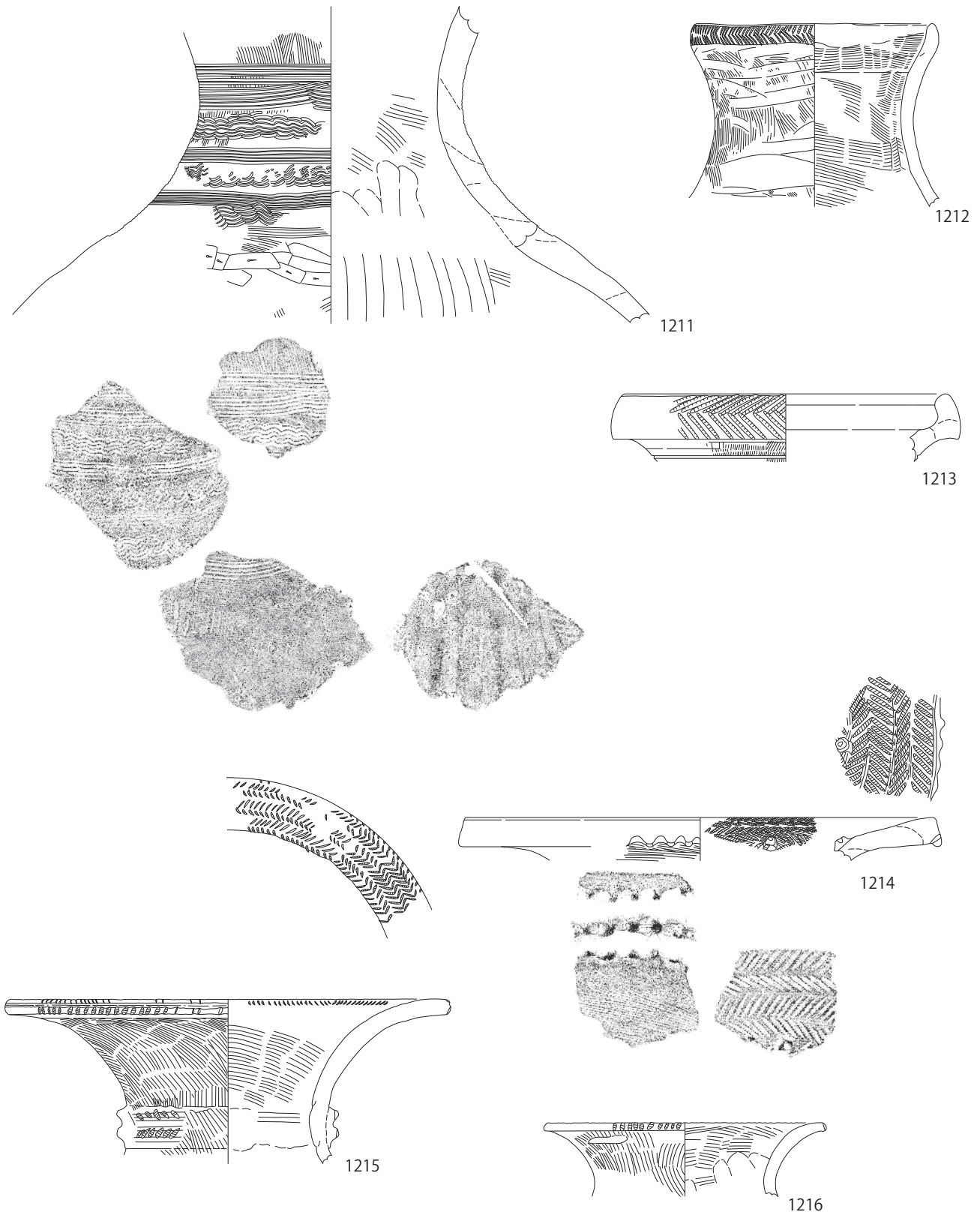




第192図 第2面出土遺物(59) (S=1/3・1/6)

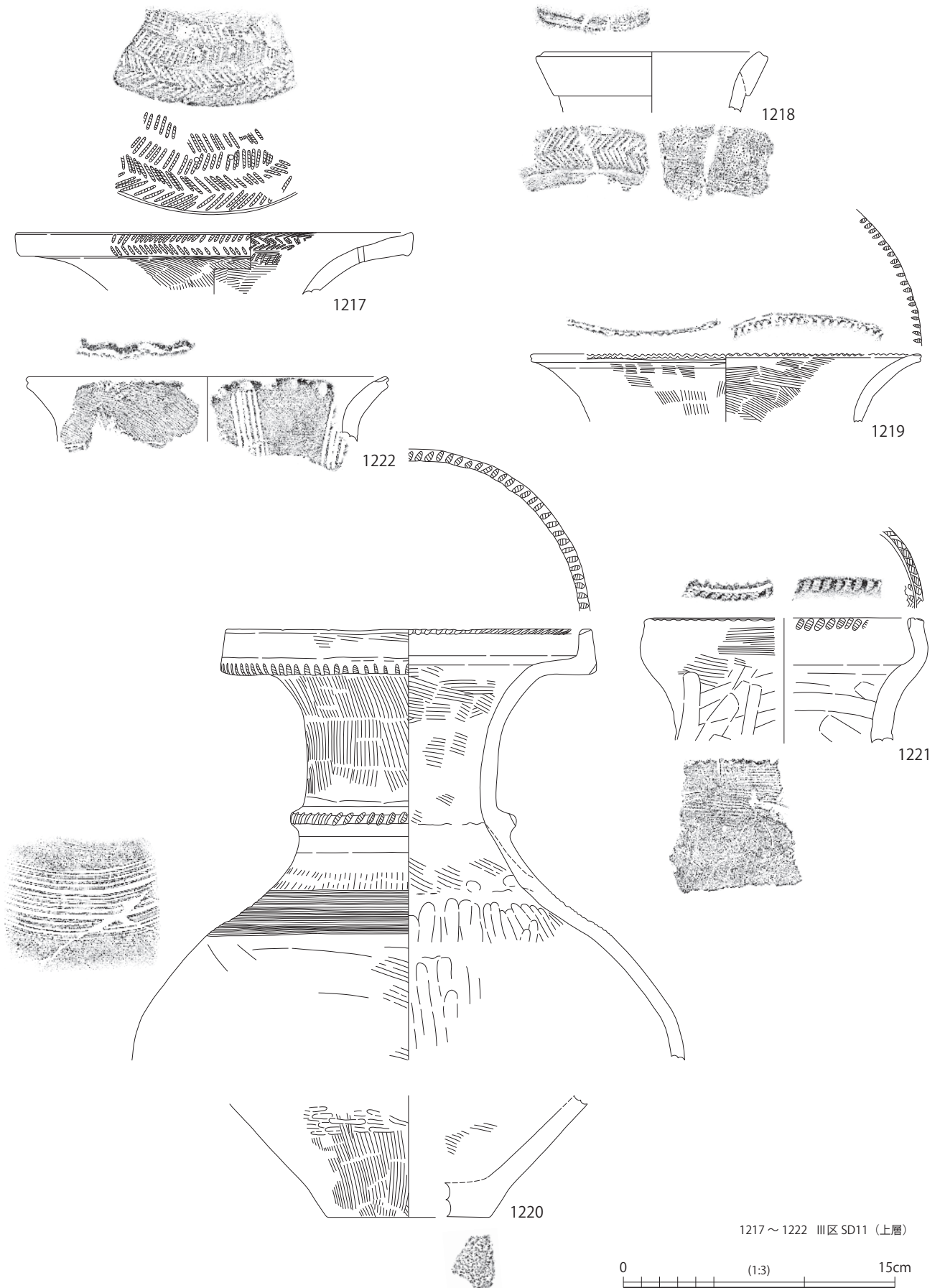


第193図 第2面出土遺物(60) (S=1/3)

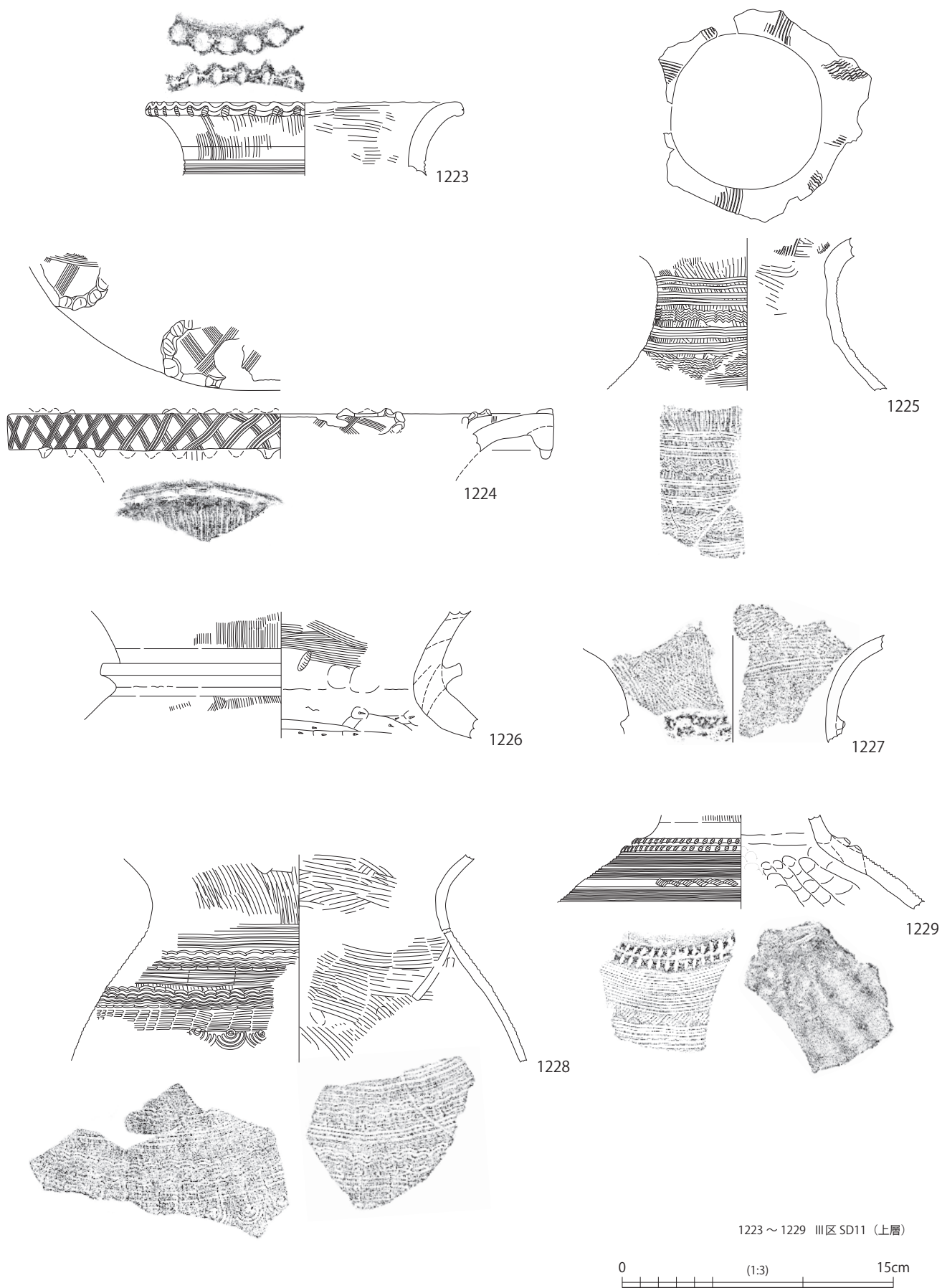


1211 ~ 1216 Ⅲ区SD11 (上層)

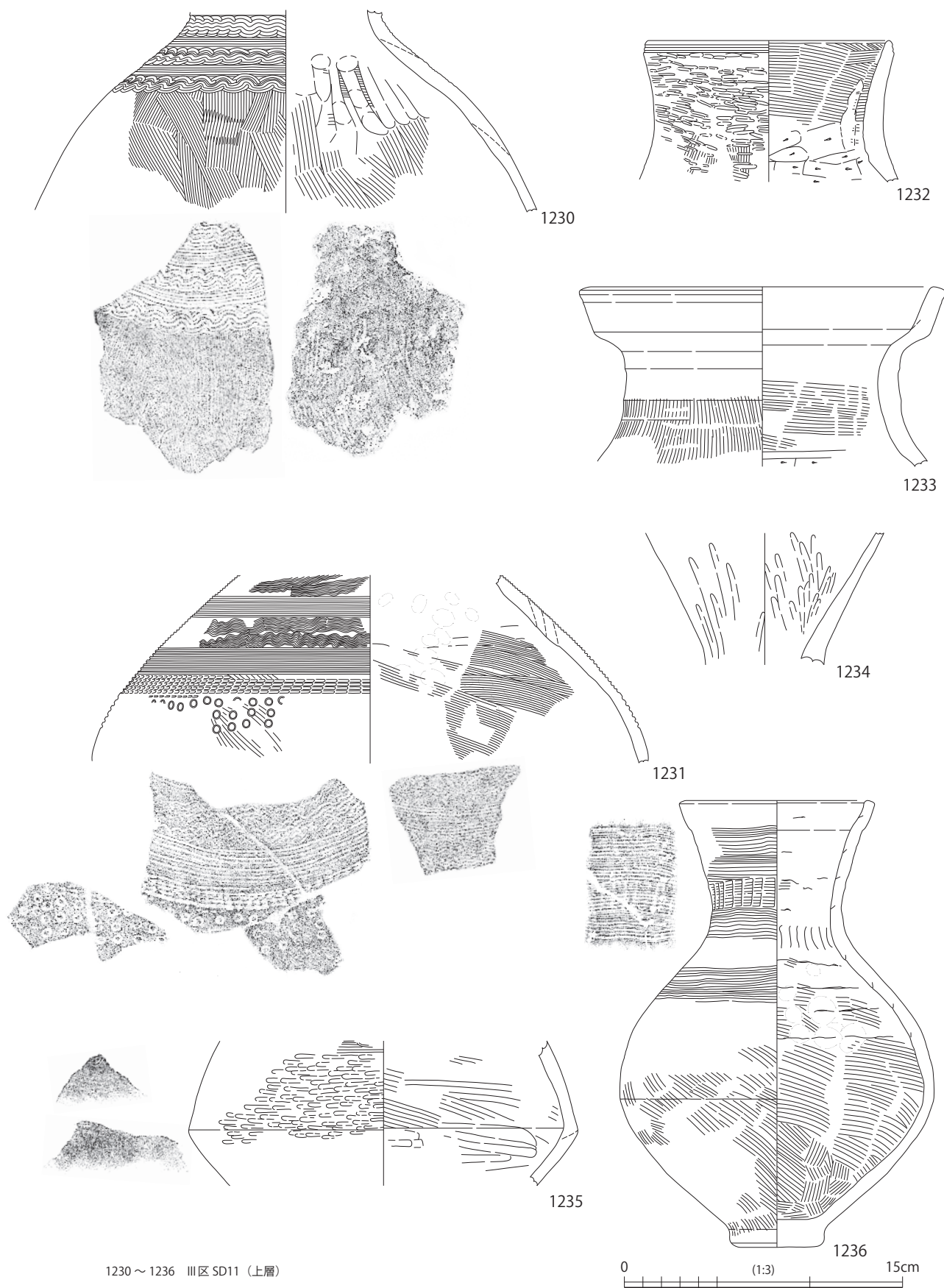
第194図 第2面出土遺物(61) (S=1/3)



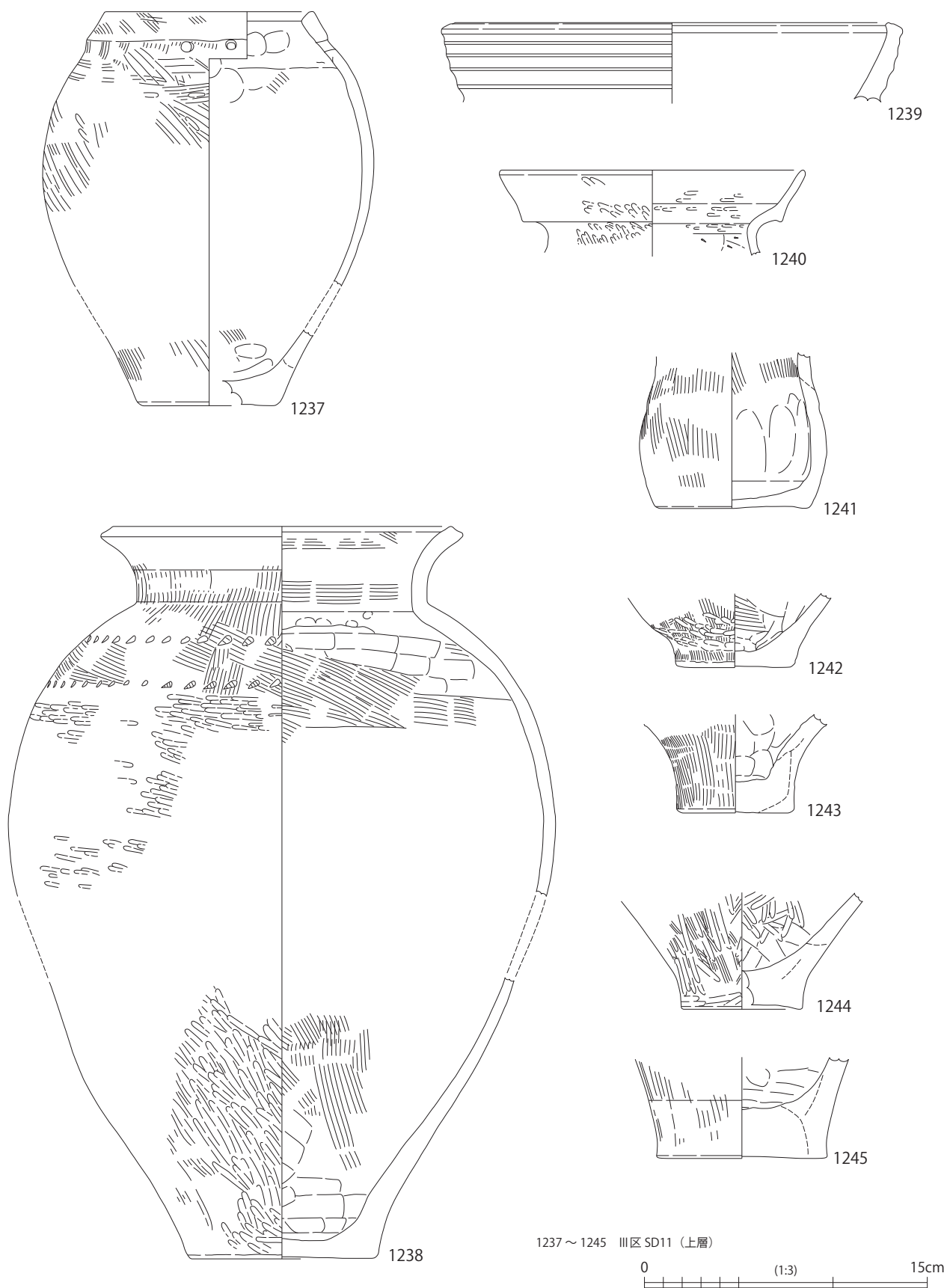
第195図 第2面出土遺物(62) (S=1/3)



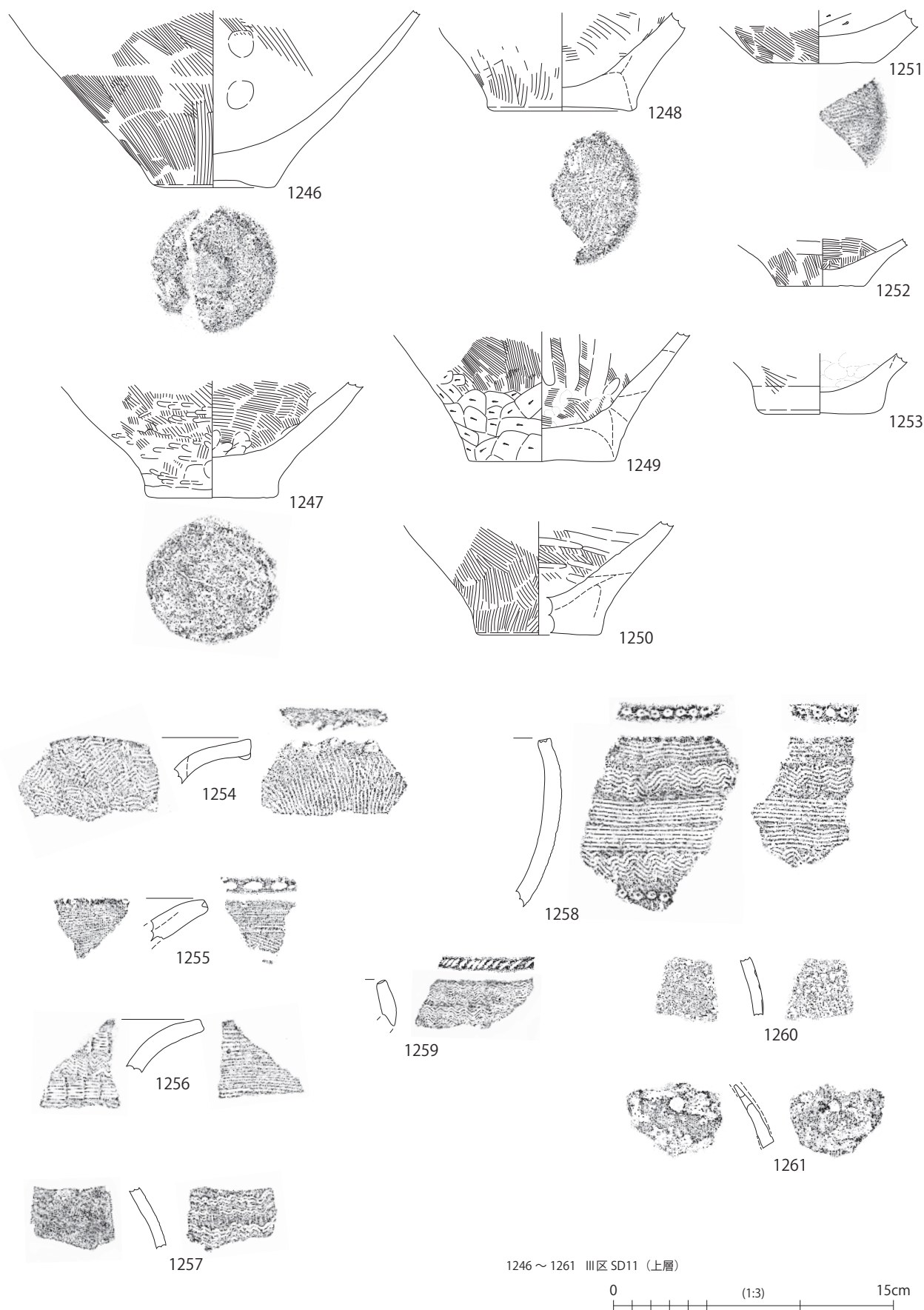
第196図 第2面出土遺物(63) (S=1/3)



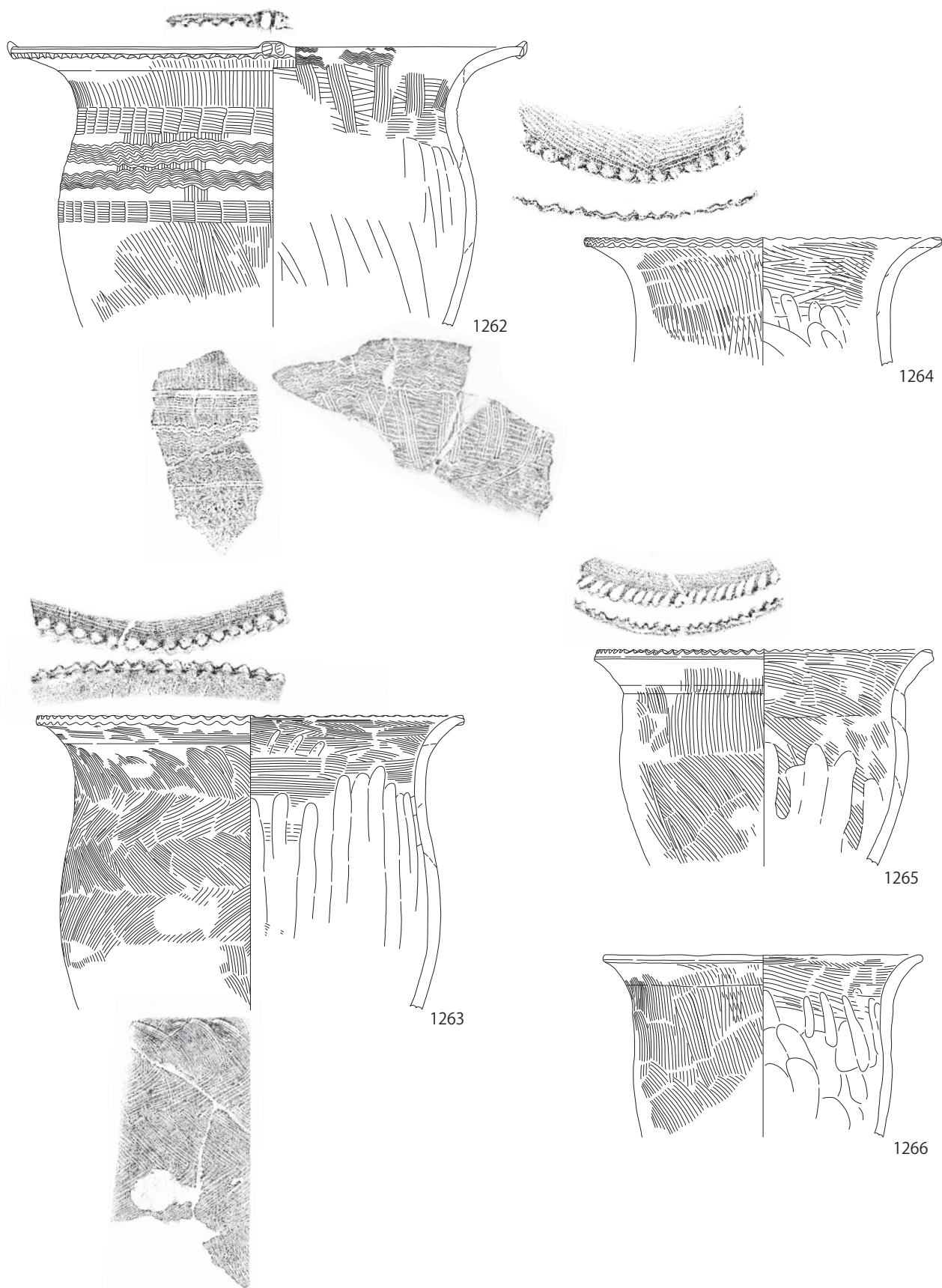
第197図 第2面出土遺物(64) (S=1/3)



第198図 第2面出土遺物(65) (S=1/3)



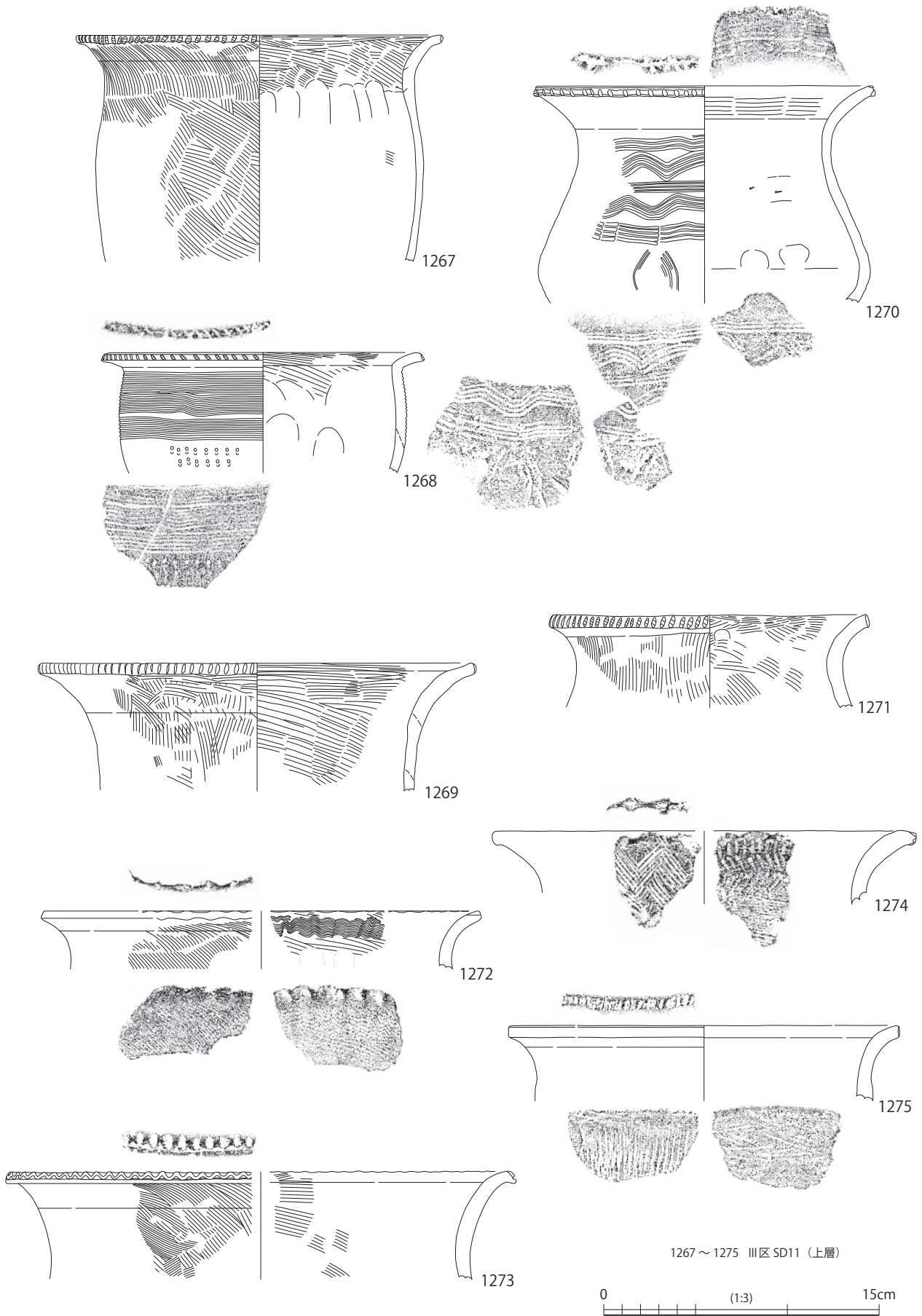
第199図 第2面出土遺物(66) (S=1/3)



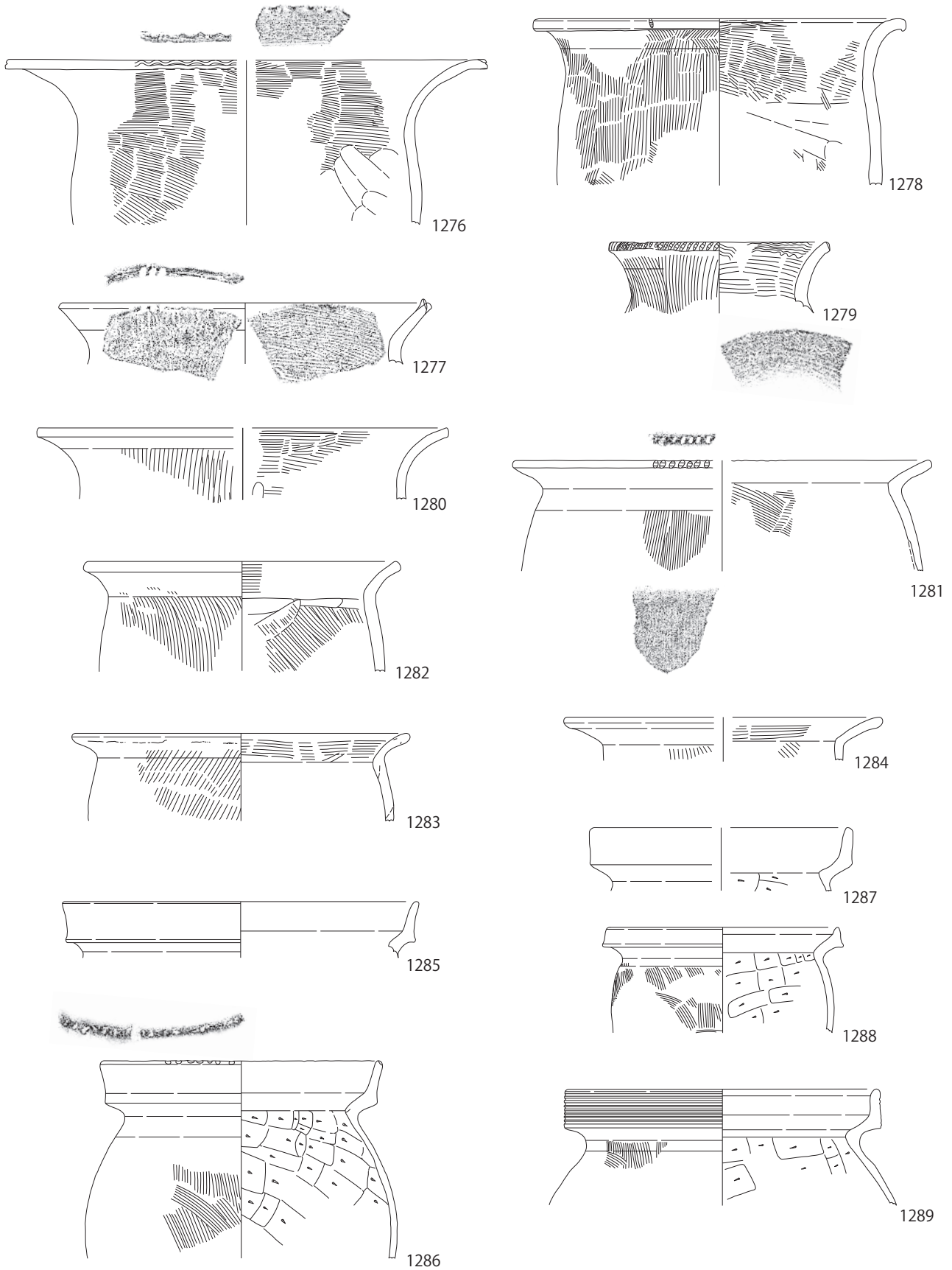
1262 ~ 1266 III区SD11 (上層)

0 (1:3) 15cm

第200図 第2面出土遺物(67) (S=1/3)



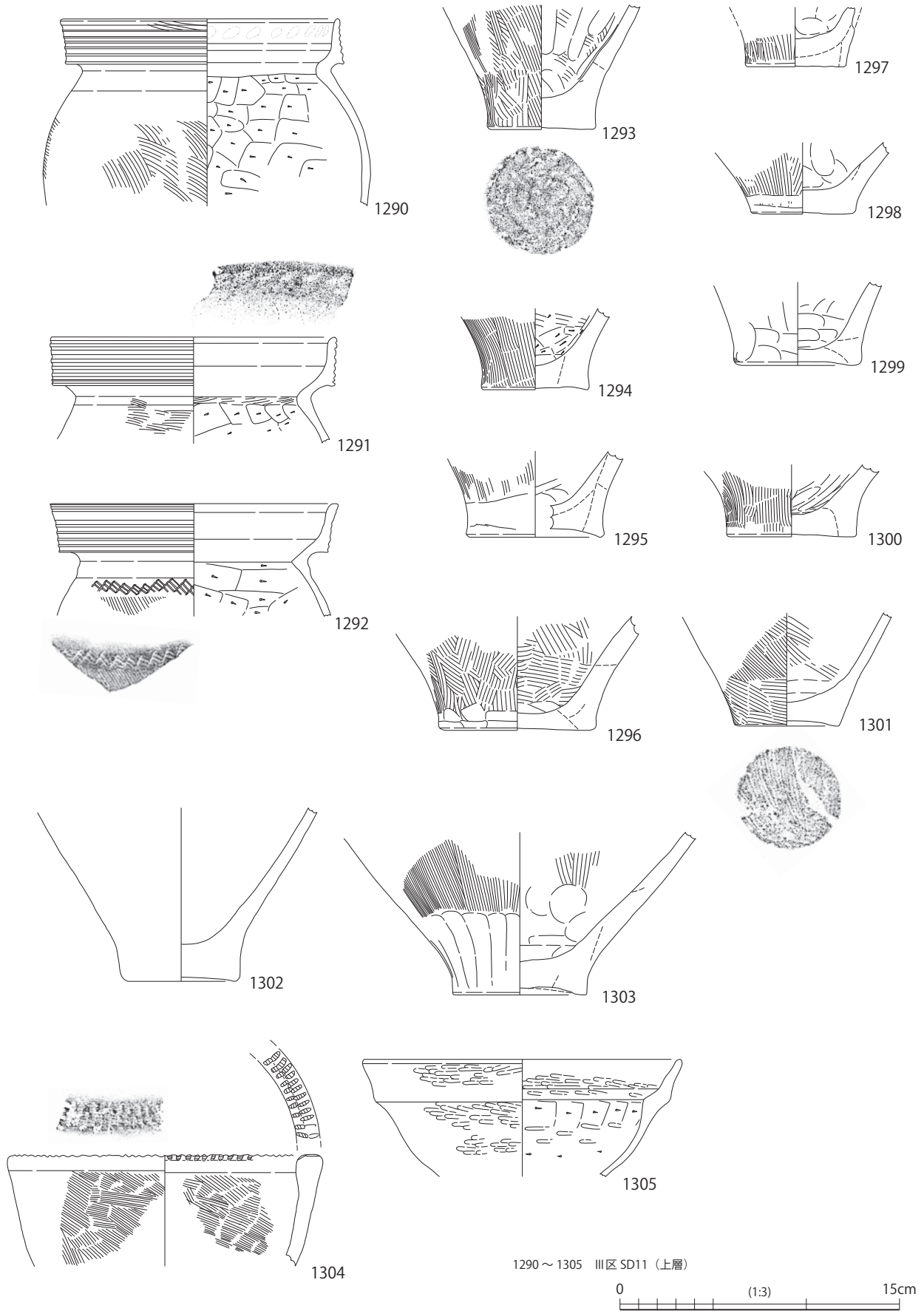
第201図 第2面出土遺物(68) (S=1/3)



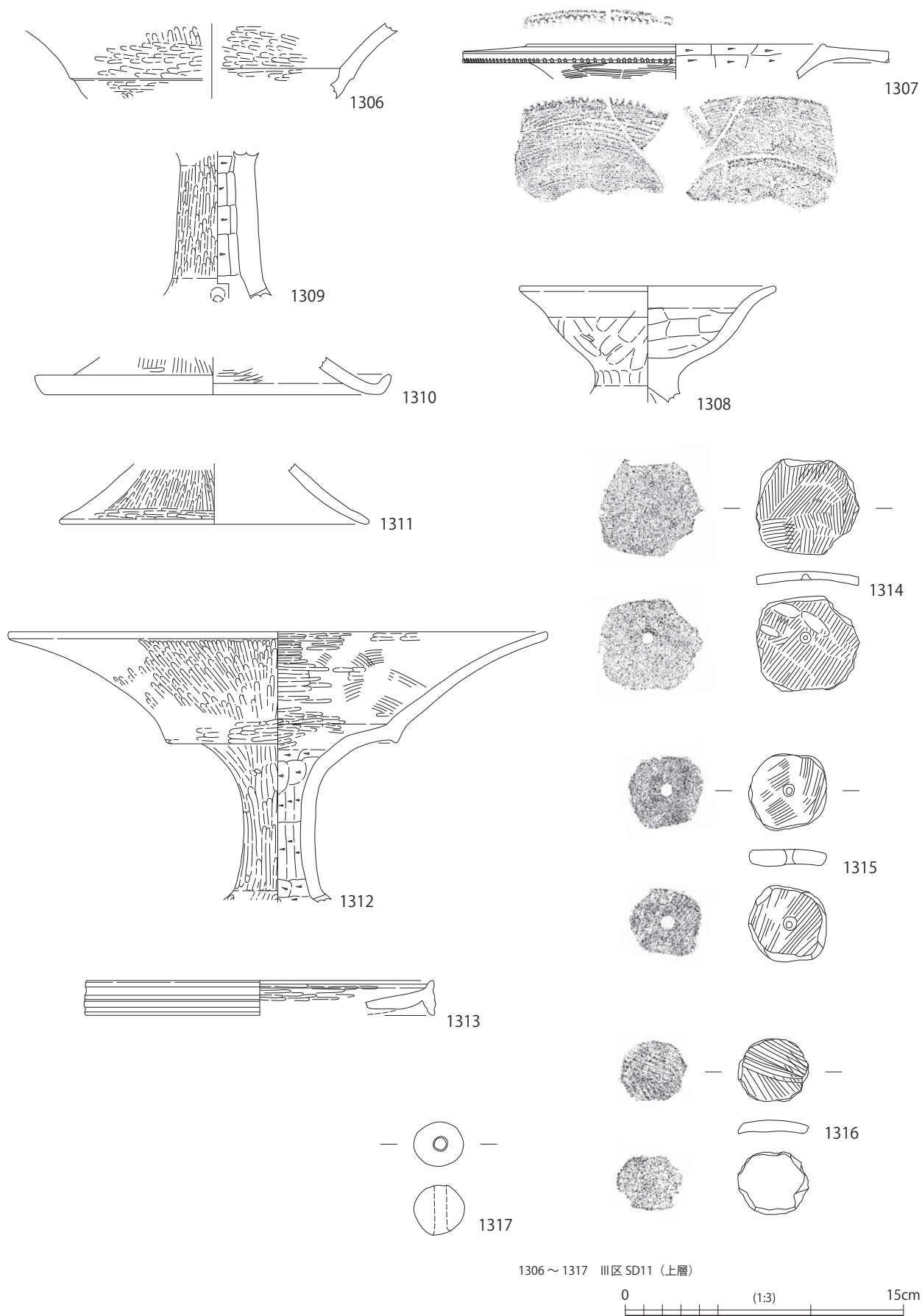
1276～1289 Ⅲ区SD11（上層）

0 (1:3) 15cm

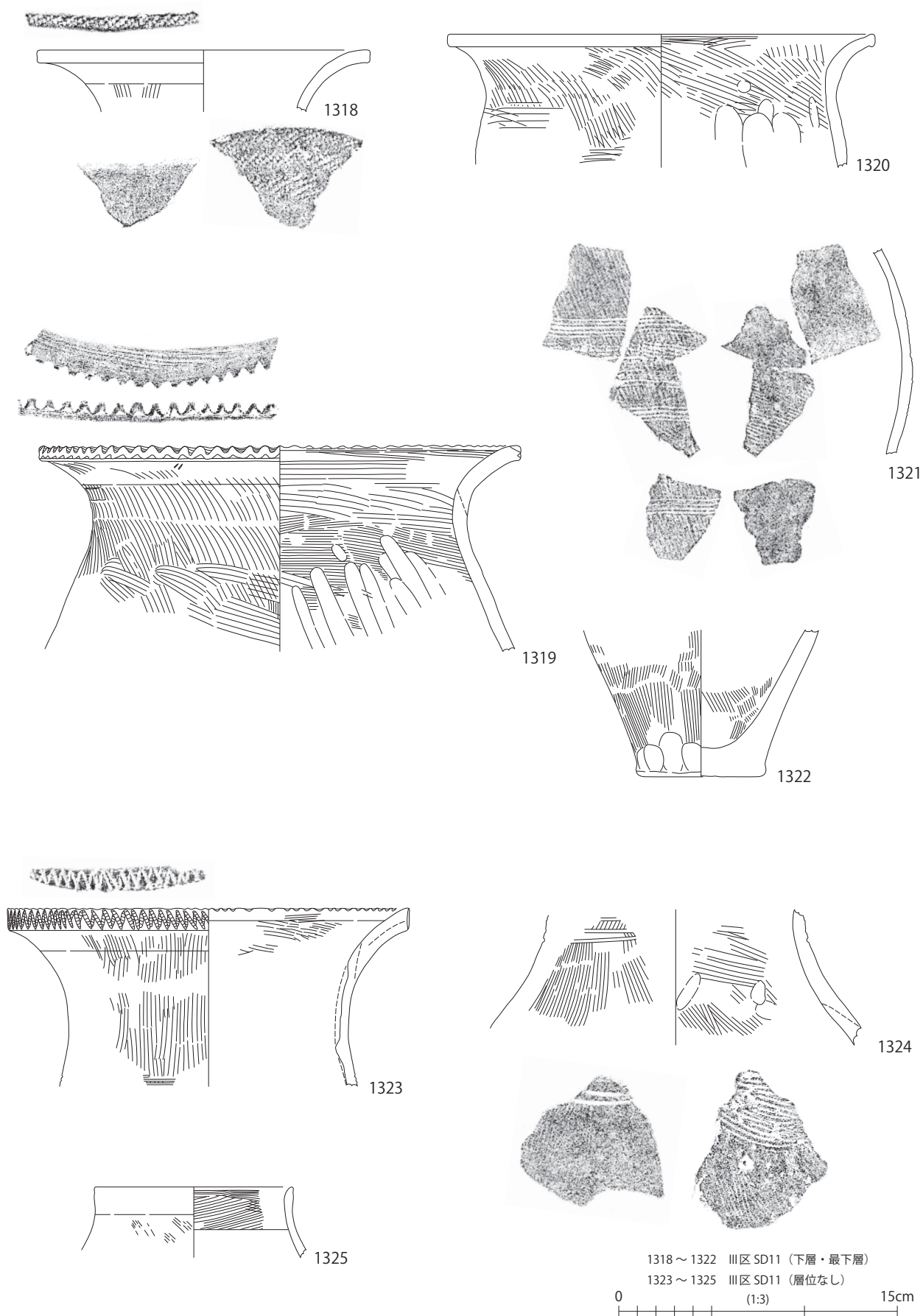
第202図 第2面出土遺物(69) (S=1/3)



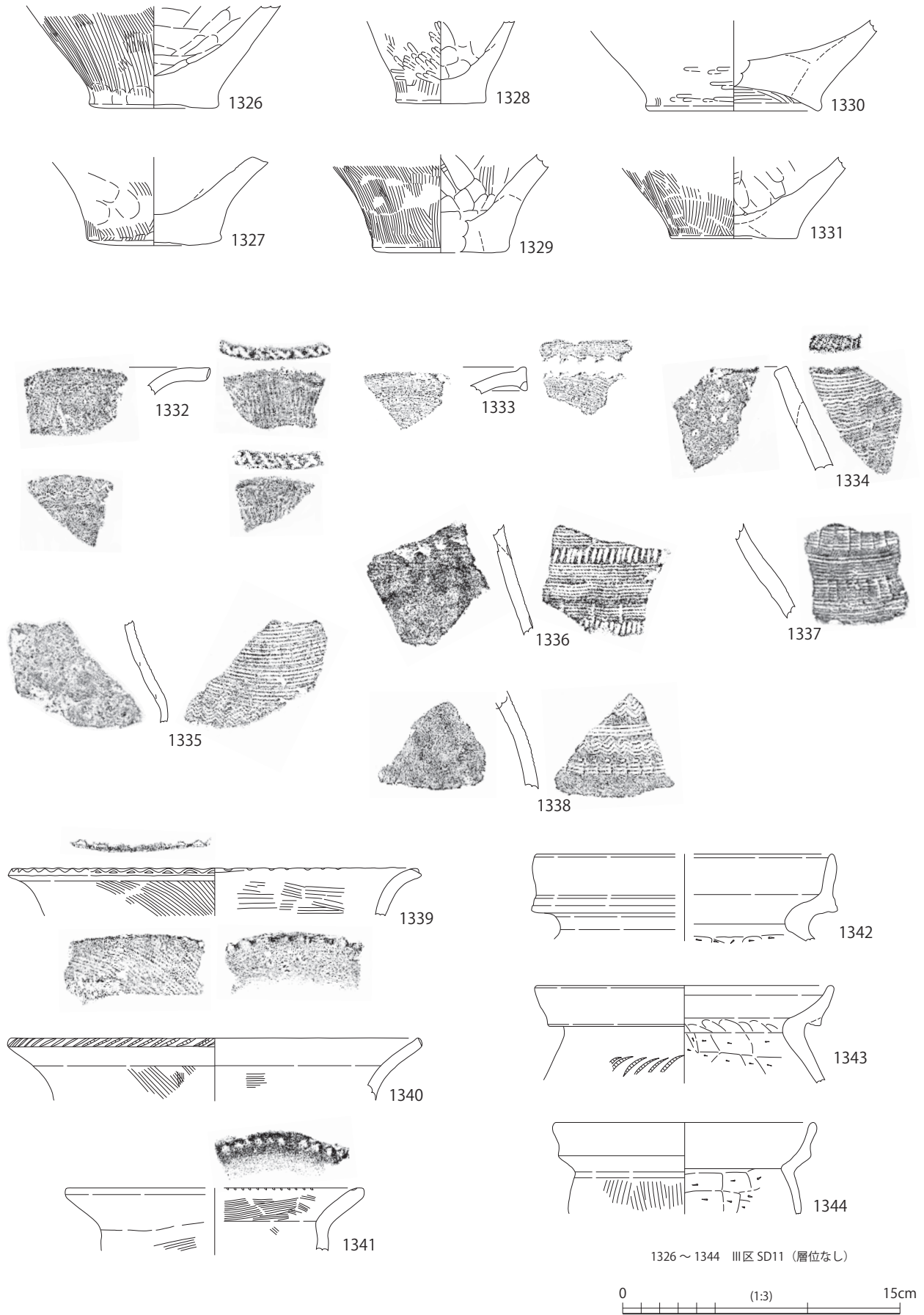
第203図 第2面出土遺物(70) (S=1/3)



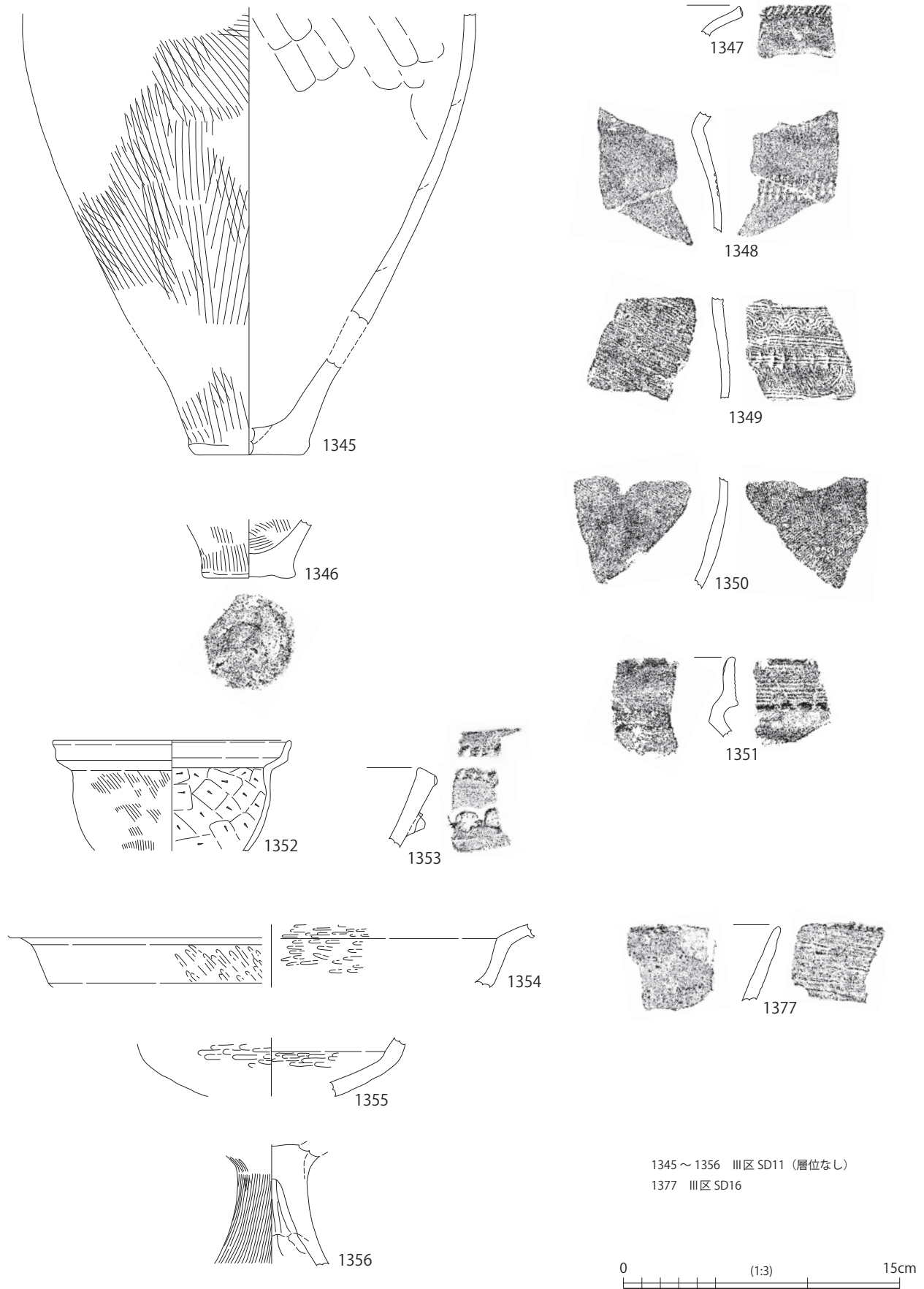
第204図 第2面出土遺物(71) (S=1/3)



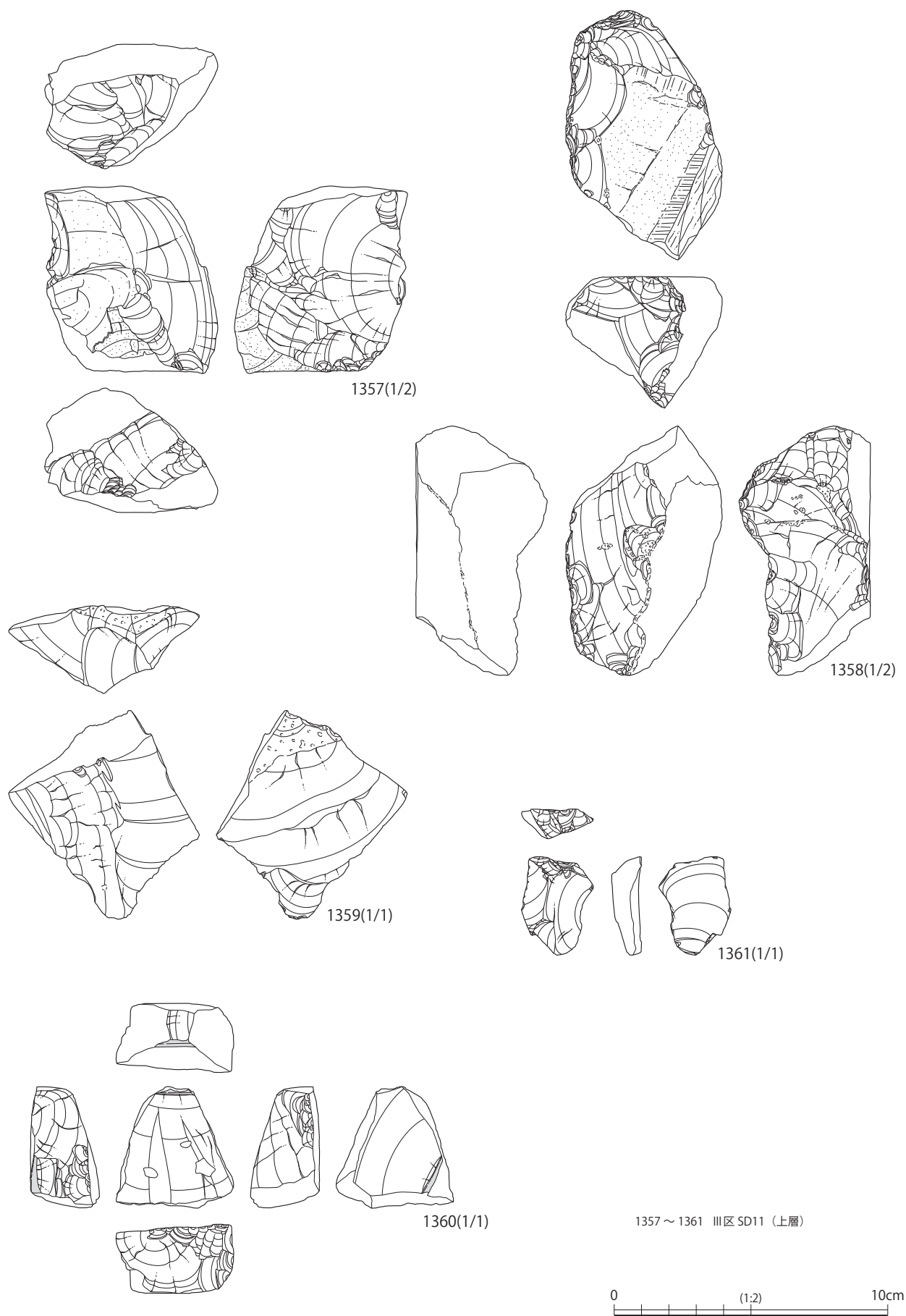
第 205 図 第 2 面出土遺物 (72) (S=1/3)



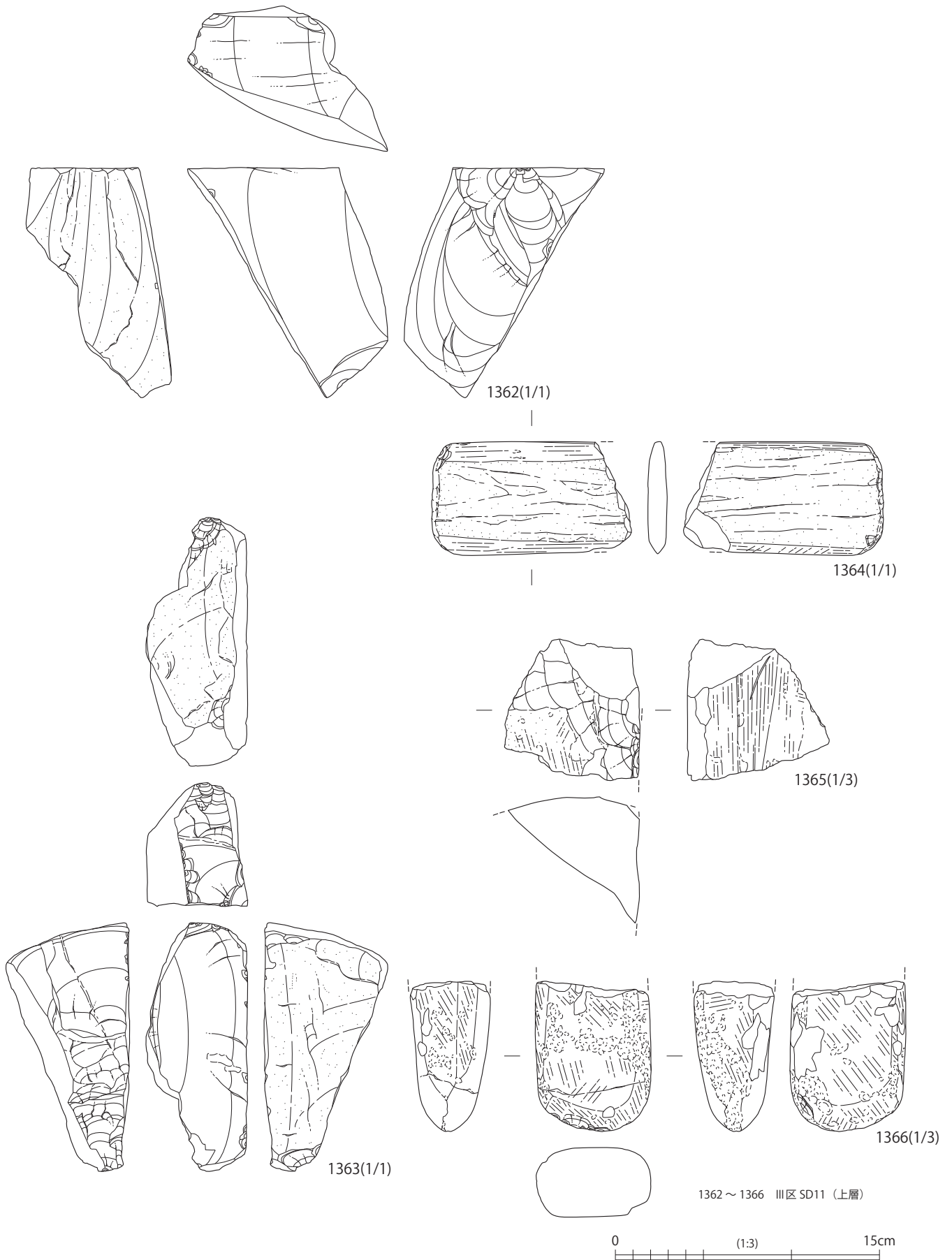
第206図 第2面出土遺物(73) (S=1/3)



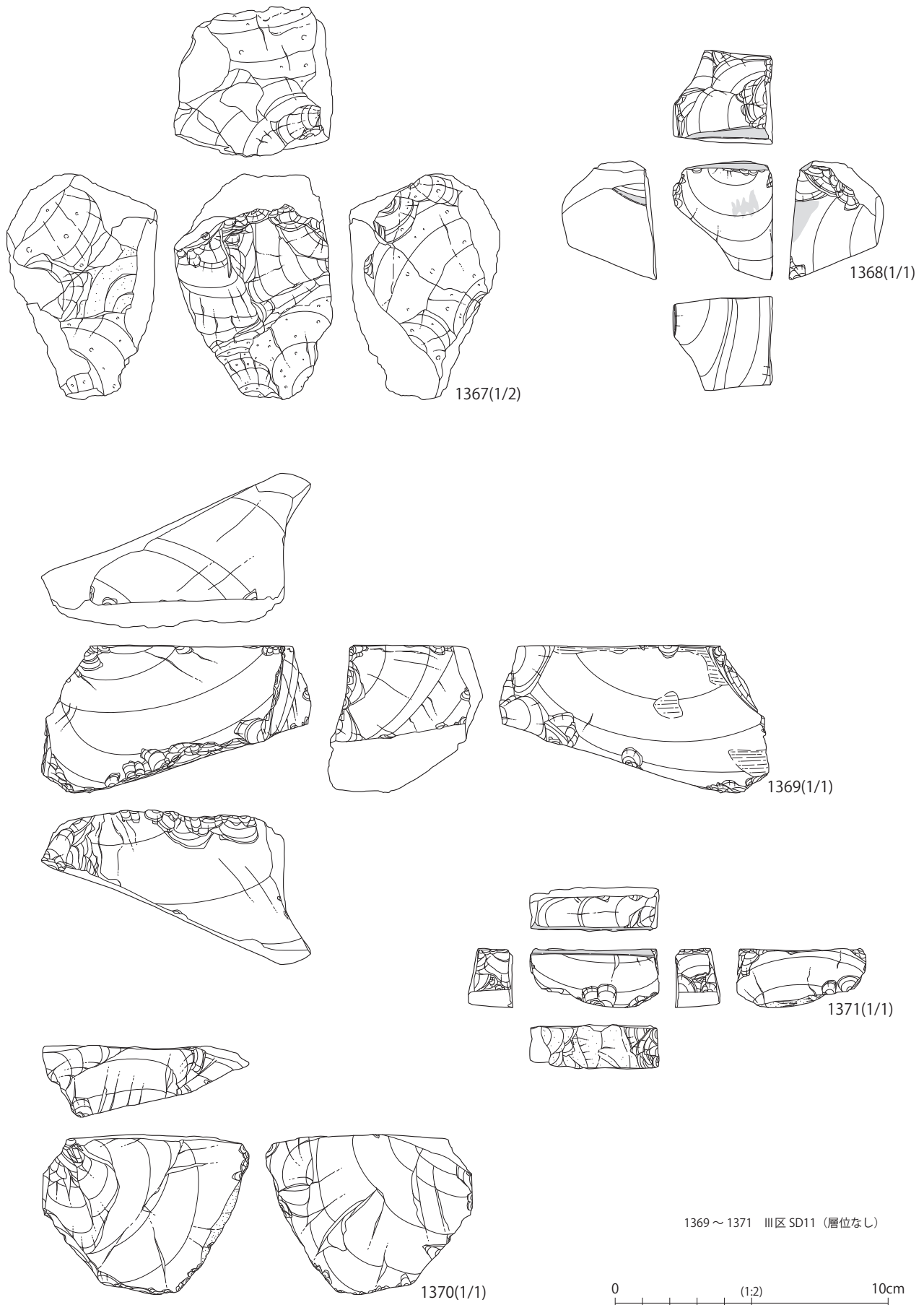
第 207 図 第 2 面出土遺物 (74) (S=1/3)



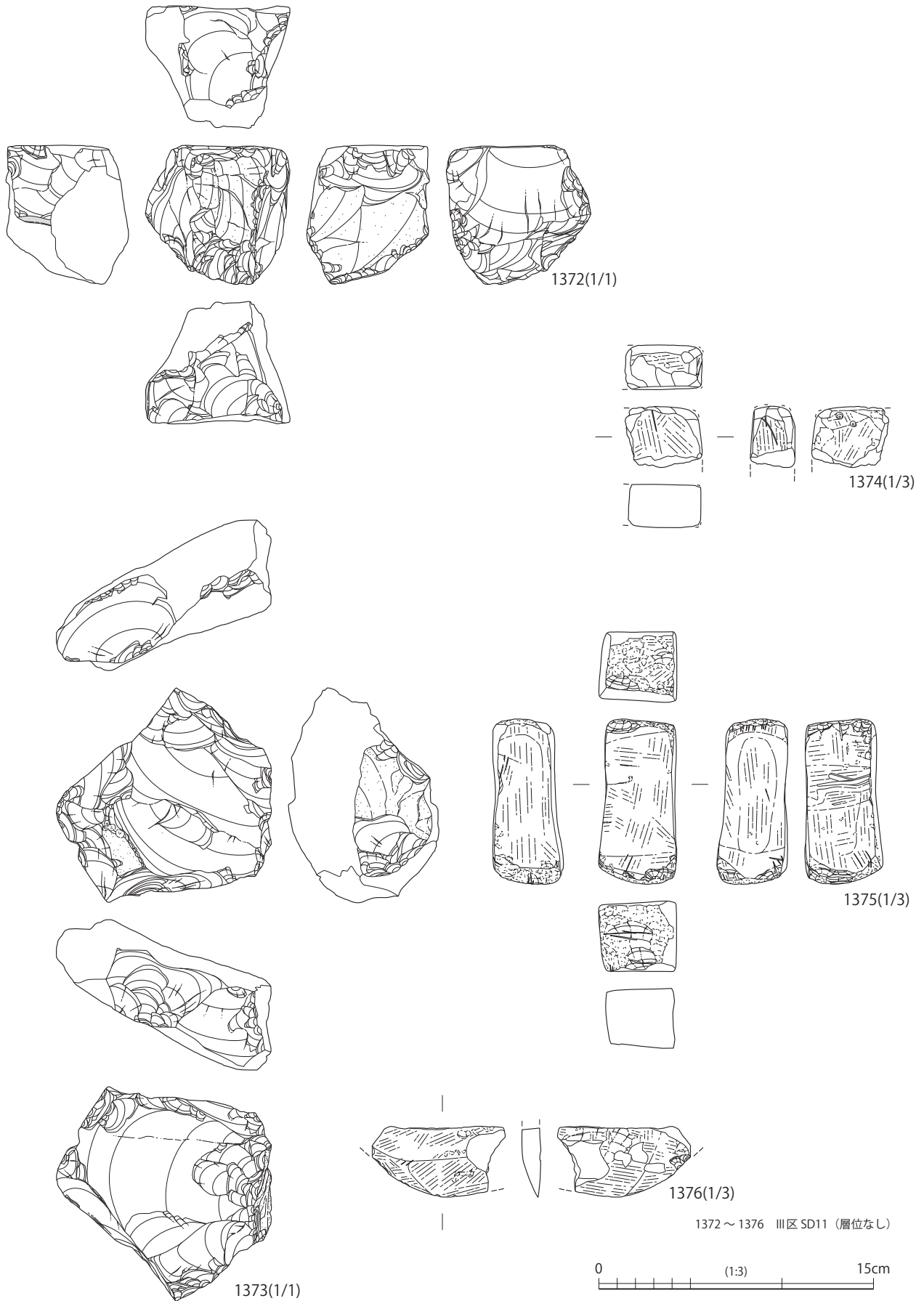
第208図 第2面出土遺物(75) (S=1/1・1/2)



第209図 第2面出土遺物(76) (S=1/1・1/3)



第210図 第2面出土遺物(77) (S=1/1・1/2)



第211図 第2面出土遺物(78) (S=1/1・1/3)